

博 士 論 文

趙 孟 頫 の 書 法 に お け る 時
期 区 分 の 研 究

平 成 25 年 度

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士後期課程芸術専攻 陳 建志

筑 波 大 学

目 次

序 章	1
序	1
第一節 先行研究の成果	2
第二節 主な問題点の提起	15
第三節 研究の目的及び方法	24
第四節 予測される研究成果	33
小 結	36
図 表	38
第一章 趙孟頫の碑文書法	55
序	55
第一節 伝存する趙孟頫の碑文書法	57
第二節 碑文書法の成立とその時代背景	60
第三節 碑文書法の分期と画期	62
第四節 研究成果の発展	72
付 節 《二稿》に関する文献学的調査	73
小 結	88
図 表	103
第二章 趙孟頫の小楷書法	107
序	107
第一節 作品の真偽鑑定に用いる基準作と準基準作	109
第二節 小楷書法の真偽鑑定	116
第三節 偽作の背景とその手法	136
第四節 小楷書法の分期と画期	142

小 結	146
図 表	148
第三章 趙孟頫における行草書への章草体混用	181
序	181
第一節 伝存する趙孟頫の草書書法	183
第二節 趙孟頫と「今・章草混用」	185
第三節 趙孟頫と「雜体書」	191
第四節 行草書への章草体混用の分期と画期	196
第五節 行草書への章草体混用の特質	200
第六節 元時代及び後世の受容	203
小 結	209
図 表	211
第四章 趙孟頫書法に見られる四書体混用	227
序	227
第一節 四書体混用の分期	230
第二節 四書体混用の画期	234
第三節 四書体混用の再展開の裏づけ	244
第四節 研究成果の発展	247
小 結	250
図 表	253
第五章 《宝雪斎趙帖》考	269
序	269
第一節 《宝雪斎趙帖》と所収法帖、墨跡本の現況	270
第二節 《宝雪斎趙帖》所収法帖の研究史	272
第三節 《宝雪斎趙帖》所収法帖の真偽と編年	278

第四節	《宝雪齋趙帖》の法帖史的位置	283
小 結		287
図 表		289
終 章		299
序		299
第一節	各章の研究成果の整理	299
第二節	今後の課題	308
小 結		311
図 表		313
参考文献		315
謝 辞		339

凡 例

- 一、本論では、新仮名遣いを用いている。
- 一、本論では、漢文原文の引用はそのまま引用し、常用漢字体を優先して用いている。異体字についても、常用漢字体もしくは本字に改めた。
- 一、漢文引用文の標点は、原文のままか底本を参考にし筆者が付したものである。傍線は、筆者が論を進める上で必要な箇所に施したものである。
- 一、人名、生卒年、作品名などの名称は、主に『中国書道辞典』、『中国書人名鑑』、『中国書道文化字典』が収録したものに依拠した。
- 一、書物の名前には『』、書画の作品名には《 》を付した。論考名や引用は「 」を付した。
- 一、図版・表は、各章末に一括して掲載した。
- 一、本論では筆者が作製した図表は、全て図版出典を明記した。

序 章

序

趙孟頫（南宋・宝祐二年～元・至治二年、1254～1322）、字は子昂、号は松雪道人、水精宮道人など。書室を松雪斎、大都寓舎と称した。呉興（現在の浙江省湖州市）の人。元仁宗の時、翰林学士承旨に至り、魏国公に封ぜられた。諡は文敏¹。『元史』には、「前史官楊載称孟頫之才頗為書画所掩、知其書画者、不知其文章、知其文章者、不知其經濟之学。人以為知言云。」²、「榮際五朝、名滿四海。書法二王、画法晋唐、俱入神品。」³と記されており、書画だけではなく、執筆活動、經濟及び政治的手腕についてもこの時代から高く評価されていたことがわかる。趙孟頫に関しては、現在も各分野で盛んに研究されているのは周知のとおりで、作家論や書論のほか、書画作品に関する論説も多数発表されている。近年、注目すべきなのは、中国の上海市(1994)と浙江省湖州市（2007）で国際シンポジウムが二回開催され、作品の展示に合わせて図録と論文集⁴も刊行されたことである。これによって趙孟頫に関する専門的な研究に今までにない大きな成果がもたらされた。

¹趙孟頫の生い立ちや経歴に関する基本資料は任道斌『趙孟頫系年』（河南美術出版社、1984）が詳しい。

²『元史』第13冊卷172列伝第59（中華書局、2005）、頁4023を参照。

³夏文彦『図絵宝鑑』卷5（文史哲出版社、1974）、頁797を参照（底本は『津逮秘書本』より印影）。

⁴同社主編『趙孟頫画集』（上海書画出版社、1995）。柴培良、趙燕君主編『帰去来兮：趙孟頫書画珍品回家展特輯』（西泠印社出版社、2007）。浙江省書法家協会編『趙孟頫国際書学研究会論文集』（所収論文数は31本）（上海書店、1994）。同社編『趙孟頫研究論文集』（所収論文数は35本）（上海書画出版社、1995）。許江、馬以主編『書画為寄—趙孟頫国際学術研究会論文集』（所収論文数は19本）（中国美術学院出版社、2007）。

趙孟頫に関連した研究は多岐に渡っているが、これは趙孟頫作品の芸術性、完成度の高さを考えれば当然のことであると言え、研究課題の多さを示してもいる⁵。本章では、伝存する趙孟頫の書法遺品に焦点をあて、先学の研究成果を整理・回顧しながら、そこから派生する問題点を提起しつつ、本研究の意義を見出したい。

第一節 先行研究の成果

本節では、1956 年以降⁶に発表された趙孟頫書法の研究史を中心に振り返ってみたい。そこで、先行研究を一、年譜・年表の作成、二、法帖の研究、三、字典の編纂、四、伝存する遺品の研究、この 4 種類に大別し、近代の趙孟頫書法研においては、どのような点に重心が置かれてきたのかを順にたどっていきたいと思う。

一、年譜・年表の作成

年譜・年表の作成に関しては主に、(ア) 外山軍治の「趙孟頫年譜」(1956)⁷、(イ) 任道斌氏の『趙孟頫系年』(1984)⁸、(ウ) 施佳氏の「趙孟頫芸術年

⁵李錡晋氏は、「在中国的文化芸術史上、趙孟頫無疑是一位最複雜且最難了解、但却是成就最高的中心人物。」と評している。これには筆者も同感である。詳細は李錡晋『鵲華秋色—趙孟頫的生平與画芸』（石頭出版股份有限公司、2003）、作者序を参照。

⁶管見の限りでは、下中邦彦編『書道全集 元・明 I』第 17 卷（平凡社、1956）は、現代において趙孟頫に関する学術的な研究を先導するものと思われる。以下、時系列に沿って、特に重要だと思われる趙孟頫書法に関する研究発表を振り返ってゆきたいと思う。

⁷同前掲注 6、下中邦彦編『書道全集 元・明 I』第 17 卷、頁 16～18 を参照。

⁸同前掲注 1、任道斌『趙孟頫系年』、頁 18～220 を参照。

表」(1994)⁹、(エ) 王似峰氏・黄惇氏の「趙孟頫年表」(2002)¹⁰、(オ)『帰去来兮：趙孟頫書画珍品回家展特輯』の「趙孟頫年表」(2007)¹¹、(カ) 張光賓氏の『元四大家年表』(2010)¹²の6種類を取り上げる。これらの年譜・年表は、趙孟頫に関する文献資料と伝世する遺品を基にして作成されたものであり、趙孟頫の作家論或いは書画の作品論においても、その基礎とするにふさわしい重要な資料だと言えよう。

年代順に見ると、(ア)は趙孟頫研究史上初めて趙孟頫の全体像を描き出した偉業であったと言っても過言ではないと思う。外山軍治は「趙孟頫は、元代随一というだけでなく、歴代を通じて有数の書画人であったにもかかわらず、年譜というものがつくられていない。」と述べていることから、それまでは趙孟頫に関する年譜や年表作成に研究の重心が置かれることはなかったようである¹³。外山氏の年譜は、基本的に『松雪斎文集』や『元史』列伝の巻、『新元史』列伝の巻などを基に考定・作成されたものであるが、書画関係の記事は『清河書画舫』や『石渠宝笈』、『佩文齋書画譜』などの書画著録も引用されている。年譜作成に用いる史料の選別も十分に考慮されており、系統的かつ専門性の高い年譜だと言えよう。

日本で(ア)が出版されてから29年後、中国で(イ)が出版された。(イ)について特筆すべきは次の2点である。まずは、使用されている文献資料数の多さが挙げられる。(イ)の文献資料数は(ア)のそれを大幅に上回り、全

⁹施佳編製「趙孟頫芸術年表」『趙孟頫画集』(上海書画出版社、1995)、頁122～130を参照。

¹⁰黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44(榮宝齋出版社、2002)、頁501～513を参照。

¹¹同前掲注4、柴培良、趙燕君主編『帰去来兮：趙孟頫書画珍品回家展特輯』、頁284～293を参照。

¹²張光賓撰『元四大家年表』(国立台湾大学芸術史研究所、2010)。

¹³同前掲注6、外山軍治「趙孟頫の研究」『書道全集 元・明Ⅰ』第17巻、頁11を参照。

166種の文献資料を基に作成されている¹⁴。次に、趙孟頫の書画作品の真贋鑑定を行っていることである。豊富な資料の出自については、任道斌氏自身が当時恵まれた研究環境にあったと述べている¹⁵。詩文集から県府志、書画著録、金石訪碑録、年譜など、ありとあらゆる貴重な文献資料を参考にし、引用することができたという。任道斌氏の研究に対する情熱と集中力には感服せざるを得ない。第二点の真贋鑑定は、当時としては画期的な試みだったのではないだろうか。一般に書画作品の鑑定は、作品の所有者や専門の鑑定家などでなければ真贋の見極めが非常に難しい。にもかかわらず、博物館の学芸員でもなく、書法や絵画鑑定の専門家でもない任道斌氏が、文献学的資料に基づいての鑑定を試みたのである。このような鑑定方法の一部は後に批判されることもあったが¹⁶、真贋両作が混在する中で、それらを見極めようとした任道斌氏の研究方法とその姿勢には大きな意義があろう。(イ)が出版されてから今年でちょうど30年となるが、本書は現在も趙孟頫研究において非常に有用なものだと言える。本書の出版後、いくつかの誤りが指摘されたが、現在はそうした誤りも正され、内容の補足が行われたことによって、より充実したものになっている。そもそもこの偉業がなければ、趙孟頫研究において後に見られる新たな展開もなかったのではないだろうか。

次に、『趙孟頫画集』に所収された(ウ)の「趙孟頫芸術年表」についてであるが、(ウ)は形式的には(イ)と大差なく、各年代の記事は書法(墨蹟、法帖)と絵画作品を中心に整理されている。また、一部作品は所蔵先が明記されており、内容も簡潔にまとめられている。このほか、現存する遺品(墨

¹⁴同前掲注1、任道斌『趙孟頫系年』、頁235～241より統計したデータ。

¹⁵これは2007年湖州市で開催された国際シンポジウムの質疑応答で任道斌氏が参加者の質問に返答した言を筆者が筆記したものである。

¹⁶趙志成「《趙孟頫系年》辨証」『趙孟頫研究論文集』(上海書画出版社、1995)、頁465～495を参照。

蹟、法帖、絵画)の掲載が増えており、図版の後にそれぞれ簡単な研究概要が付されている。題跋や落款・落款印の抜粋もあり、所蔵先も個々に明示されている点は評価できる。趙孟頫書画特別展の開催と合わせて出版された『趙孟頫画集』は、この特別展に携わった研究者とスタッフたちの努力の結晶だと言えよう¹⁷。

同じく中国の黄惇氏主編の『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44 所収の(エ)「趙孟頫年表」であるが、本書は厳選された趙孟頫の書法作品それぞれに解題がつけてあり、巻末に(エ)が掲載されている。前記三つの年譜・年表と異なるのは、(エ)は伝存の書法の遺品に対する考察がより深く、文献と作品両方の分析に取り組んでいる点で、年表作成が一步大きく進んだ感がある。年表作成にあたって黄惇氏は、元代に趙孟頫が杭州から大都へ移住したことを視野に入れたが、この南方から北方への縦方向の移動は、今日でも趙孟頫研究の上では重要な意味を持つものである。また、本書には単国強氏が整理した、趙孟頫の手による尺牘(書簡)64 通に対する考察も収録されている。北京故宫博物院の学芸員だった単国強氏が、現存する尺牘の書風と内容を考察し、年代順に整理した意義は大きい。これによって、おおよそではあるが、趙孟頫の交友関係も明らかになりつつある。単国強氏による趙孟頫の尺牘研究は、趙孟頫書法研究において非常に重要なものである。この後にも同じく尺牘に焦点をあてた論文が見られるが、単国強氏の研究成果を超える知見は少ない¹⁸。このほか、本書には王連起氏による趙孟頫書画作品の鑑定法「趙孟頫的名号款印與鑑定問題」も収録されている。趙孟頫研究を専門とする三氏の研究を集めた本書の出版は、21 世紀初頭における趙孟頫の書法研究の偉

¹⁷同前掲注 9、上海書画出版社編『趙孟頫画集』、盧輔聖序を参照。

¹⁸例えば、王浚湧氏の論文『趙孟頫尺牘及其書法研究』(台北市立教育大学修士論文、2008)は、趙孟頫の尺牘を中心に考察されている。各作品の解説は単国強氏の論文を超える知見が見られない。

業だと言えよう。

(エ) が出版されてから 5 年後の 2007 年に、中国の浙江省湖州市で趙孟頫研究に関する国際シンポジウムが開催された。1994 年に開催されたシンポジウムの成果が生かされたようで、国際シンポジウムの開催と同時に、論文集と絵画・書法作品全 39 点を収録した図録も出版された。図録の巻末には作品解説や年表 (オ) もあり、これまで取り上げられることのなかった作品も収録されている。例えば、筆者の知る限りでは、《洞玄靈寶自然九天生神章經》(67 歳、北京故宮博物院蔵) は、これまで展示されることがなかった、最晩年の非常に重要な作品の一つである¹⁹。ただし、無紀年の作品の編年は新たに提示されておらず、年表 (オ) も (エ) をそのまま孫引きしたものでしかなく、全体的に趙孟頫の書画作品の研究自体が行き詰まっている感がある。

この 3 年後、台湾で (カ) が上梓された。張光賓氏は元代書画史研究の専門家として知られ、元代書法に関する論考を多数発表している²⁰。(カ) の刊行は、張光賓氏による研究の集大成だとも言えよう。本書は趙孟頫を中心に作成された年譜や年表ではないが、趙孟頫の活動についても詳細に記されている。(カ) について特筆すべき点は、本書によって元代の著名な書人や画家などを含む、文化人の交友を表した相関図が作成されたことである。この年表は前述した趙孟頫のみの年譜・年表とは作成意図が異なり、文献と書法・

¹⁹例えば、白文の「水精宮道人」印は孤印だと思われる。詳細は拙文「趙孟頫書《太上老君說常清靜經》の真偽について」『書芸術研究』第 1 号 (筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2008)、頁 37 を参照。近年、《宋黃庭堅書筆陣圖說》(無紀年、国立故宮博物院蔵) に白文の「水精宮道人」印が発見されたが、両印の印文は異なっており、真偽については更なる考察を要する。これは今後の課題としたい。

²⁰ここでは 2 例を挙げておく。張光賓「俞和書樂毅論与趙孟頫書漢汲黯伝」『国立歴史博物館館刊』第 2 巻 4 期 (国立歴史博物館、1986)、頁 51～62。同氏「元代山西両李学士李侗、李溥光生平及書画」『故宮學術季刊』(国立故宮博物院、1987)、頁 1～32 を参照。

絵画作品両方に依拠している上、趙孟頫と同時代の文人・書画家たちとの関連も図表化されている。元代書画史研究を代表するほどの偉大な功績だと言え、年表資料としても視野が広く、大きく前進した感がある。

ほかにも趙孟頫に関する年表は多々あるが²¹、膨大な数に上るため、ここでの説明は割愛する。新資料を交えながら作成された年譜・年表によって、趙孟頫の生涯が明らかになりつつあり、趙孟頫研究に大きく貢献していると言えよう。便宜的だが、上記の年譜・年表資料に記載されている趙孟頫と趙孟頫の親族、交流のあった書人などに関連した事跡の抜粋と、本論で主に検討した趙孟頫の書法活動を加筆した簡略的な年表を作成した【表1】。

二、法帖の研究

趙孟頫書法に関する法帖資料は、集帖と専帖を含む約108種563点が整理されている²²。張伯英『法帖提要』や容庚『叢帖目』など、趙孟頫の法帖に関する基礎研究は複数あるが、主要な研究成果として挙げられるのは、『樂善堂法帖』（集帖）、『秋碧堂法帖』（集帖）、『三希堂法帖』（集帖）三つのみで、作品数全体の10%にすら達していない。特に趙孟頫書法の専帖の研究が一つもないのは、ほかの書画作品の研究に比べると、停滞感は否めない。

上述した法帖研究の中では、王連起氏による『樂善堂法帖』、『三希堂法帖』に見られる趙孟頫の法帖に関する研究が、これまでなかった新たな視野を開

²¹例えば、李廷華「年表簡編」『中国名画家全集 趙孟頫』（河北教育出版社、2004）、頁170～183。岑其編著「芸術年表」『趙孟頫研究』（西泠印社出版社、2006）、頁100～119。陳云琴著「趙孟頫大事年表」『松雪齋主—趙孟頫伝』（浙江人民出版社、2006）、頁334～351などが挙げられる。

²²拙文「法帖所収の趙孟頫書法の編年研究：『宝雪齋趙帖』を中心に」『芸術学研究』第17号（筑波大学大学院人間総合科学研究科、2012）、頁79を参照。

拓した、画期的な研究だと言えよう。例えば、《楽善堂法帖》所収の趙孟頫書《太上老君説常清静經》帖は無紀年だが、大徳末年から至大初年までに揮毫された作品ではないかと推測されている²³。拓本とはいえ、信憑性の高い伝世作品が一点増え、趙孟頫と道教經典の關係が明らかになったことは、重要な知見の一つとして考えられる。《三希堂法帖》所収の趙孟頫書法に関する研究では、肉筆の遺品と対照しながら各法帖の真贋を鑑定しており、研究の手順や研究方法、それによる成果が後に続く研究の基盤となりつつある。

許国平氏が発表した《秋碧堂法帖》の研究成果を見てみると²⁴、論文には、《秋碧堂法帖》所収の法帖が個々に説明されているが、ただ単に前人の研究成果をまとめただけのように思われる²⁵。他の作品もそうだが、《秋碧堂法帖》所収の趙孟頫書作の真贋²⁶、梁清標（明・泰昌元年～清・康熙三十年、1620～1691）がどのような基準に基づいて作品を選出したのか一切説明がない。この点は今後更なる考察が必要であろう。

三、趙孟頫字典の編纂

²³王連起「元〈楽善堂帖〉考略」『故宮博物院院刊』第5期（北京故宮博物院、2001）、頁33を参照。

²⁴許国平「《秋碧堂帖》考略」『書法叢刊』第2期（文物出版社、2007）、頁62～72を参照。他に宮坂直樹「法帖と秋碧堂法書」『季刊書道ジャーナル』61号（季刊書道ジャーナル研究所、2000）、頁33～38を参照。

²⁵例えば、《太上老君説常清静經》の解説の大部分が、傅申氏（「趙孟頫書小楷常清静經及其早期書風」『趙孟頫国際研究会論文集』（上海書店、1994）、頁51～55）と黄惇氏（「趙書法研究二題」『書法研究』総第124期（上海書画出版社、2005）、頁40～45）の研究成果をまとめたものでしかない。また、《太上老君説常清静經》の真偽に関しては、筆者とは見解の相違がある。詳細は拙文「趙孟頫書《太上老君説常清静經》の真偽について」『書芸術研究』第1号（筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2008）、頁29～44を参照。

²⁶《秋碧堂法帖》所収の趙孟頫法帖の真偽については、王連起氏の研究成果を踏まえ、本論の第五章でも論じている。

趙孟頫の遺品をまとめた字典類は2006年に初めて上梓され、現在は3種の字典が出版されている²⁷。この中では、鄭聰明氏が編纂した『趙孟頫書法字典』が最も充実した内容となっている。全1941頁あり、241点（墨跡本・拓本含み）もの参考作品が掲載されており、引用した図版の出典も明記されている。また、『再和楊公濟梅花十絶』帖や『題先天觀』帖は、作品の真偽は要検討だが、一般では目にすることが難しい貴重な資料であり、膨大な時間を費やした、編者渾身の大作だと言えよう。もちろん、本字典所掲の『急就章』や『洛神賦』などは真贋二説あるわけだが、『趙孟頫書法字典』が本格的な趙孟頫字典の創始であることは間違いなく、趙孟頫の書法を世に広めるための礎石が築かれたとも言えよう。一般的に広く知られている字典ではないが、今後は徐々に浸透し、後世へ影響を及ぼすことになるだろう。

四、伝存する遺品の研究

趙孟頫の書法作品の真贋、編年、分期は盛んに研究されているテーマである。こうした研究の進展に従って、真贋が明らかになった作品も一部存在するが、現在も真贋不明の作品が多く残されている。趙孟頫作とされる伝世作品が多数存在するため、鑑定作業が非常に複雑になってしまうことも理由の一つとして考えられる。

次に、筆者が重要だと思う先行研究を踏まえつつ、日本、中国、台湾を中心に、研究者個々の知見を年代順に見てゆきたいと思う²⁸。

²⁷鄭聰明『趙孟頫書法字典』（蕙風堂、2006）。湖北美術出版社編『趙孟頫書法字典』（湖北美術出版社、2006）。嵯劭鋒『趙孟頫書法字典』（吉林文史出版社、2013）。

²⁸趙孟頫に関する通史的な概説は多数あるため、本論では、書法作品を中心にした研究（作品論）についてのみ検討することにした。

まず、『書道全集』第17巻所収の外山軍治の論文を取り上げたい。この論文で外山氏は、呉栄光による趙孟頫書風の三期変遷説²⁹について私見を述べている。その中で、「孟頫がはじめ宋の高宗を学んだということは、かれの出自から考えて、きわめて自然のことである。」と言い、「初め高宗の書の影響は、ずっと後年までみとめられるようである。」という異論を提起した³⁰。ただし、書風の変遷を3期に分けたのが妥当か否かについては触れていない。また、現在は偽作の可能性が高いとされている《漢汲黯伝》(67歳、永青文庫蔵)や《道德経》(58歳頃～60歳、黒川古文化研究所蔵)を図版として取り上げているが、おそらく当時は趙孟頫書法作品の真贋についてそれほど深く考えられていなかったのだろう³¹。

続いて西川寧の論文について触れたい。西川寧が『書品』で発表した趙孟頫書法作品に関する論文は、後に『西川寧著作集』に収められた³²。特に「趙子昂の二群の尺牘」一文は、趙孟頫の尺牘を中心に考察する中で、《清華齋趙帖》の法帖資料にも言及しており、西川氏の研究範囲の広さ、大きさを感じさせる。特筆すべきなのは、無紀年の尺牘の寸法から、登場する人物、書風まで詳細に考察した上で、それぞれに編年を付けた点である。当時はまだ見られなかった研究方法であり、最も評価されるべき点であろう。また、趙孟頫早年の落款「孟」字の「子」の横画が他に比べると若干長いことに着目し、「こうした特色は完成した趙書に比べると大へん味わいの違ったものであ

²⁹趙孟頫《杭州福神觀記》(67歳、北京故宮博物院蔵)巻末の呉栄光の跋文、「松雪書凡三変。元貞以前、猶未脱宋高宗窠臼。大徳年間、専師定武稷(禊)序。延祐以後、変入李邕、柳誠懸法。而碑版多用之。」による。呉栄光『辛丑消夏記』巻3(漢華文化事業股份有限公司、1971)、頁324を参照。

³⁰同前掲注6、下中邦彦編『書道全集 元・明I』第17巻、頁12を参照。

³¹この2点の研究史や書法の真偽について、本論第二章第二節で考察を行っている。

³²西川寧「唐臨趙補・右軍二帖巻」、「趙子昂の二群の尺牘」『西川寧著作集』第二巻(二玄社、1991)、頁150～172、238～278を参照。

る。」とする西川氏の指摘は、後の趙孟頫書法における真偽と編年、時期区分研究に大きな影響を与えた。劉九庵³³、筆者³⁴の研究もまた西川寧の研究成果に追従したものである。

桜井智美氏は趙孟頫の碑文書法を素材にし、元代における趙孟頫書法の流行について考察した³⁵。同論文で桜井氏は、一部作品の真偽について疑問を呈している³⁶。日本では、趙孟頫作品の真偽を疑う姿勢がここ 20 世紀末にきて一般的になった感がある。

中国の趙孟頫書画作品鑑定の第一人者と言え、徐邦達の名が真っ先に挙げられるだろう。徐氏は『古書画偽訛考辨』下巻で、趙孟頫の書法・絵画作品全 15 点について考察し、これまで管道昇の書法と言われてきた《秋深帖》は、趙孟頫の代筆であるという鑑定結果を示した³⁷。徐氏は引き続き、「趙孟頫書画偽訛考辨続編」を著して、趙孟頫の書画作品 7 点の鑑定結果も追加した³⁸。このように大量の作品を鑑定しようとする動きは、基礎研究とはいえ、作品論研究では重要な研究要素の一つであり、後に巻き起こった鑑定ブームの一因になったのではないだろうか。徐氏が行った、歴代の書画著録を基にした文献学の研究方法を用いつつ、各作品の書風に着目する鑑定は、現在も基本的な鑑定法の一つとされている。徐氏は上述の手法のほか、作品の落款

³³劉九庵「趙孟頫書法叢考」『劉九庵書画鑑定集』（河南美術出版社、1999）、頁 83～89 を参照。

³⁴拙文「元趙孟頫書〈禊帖源流〉卷賞析」『故宮文物月刊』第 329 期（国立故宮博物院、2010）、頁 83 を参照。

³⁵桜井智美「趙孟頫の活動とその背景」『東洋史研究』第 56 巻第 4 号（東洋史研究会、1998）、頁 33～84 を参照。

³⁶同前掲注 35、桜井智美「趙孟頫の活動とその背景」『東洋史研究』第 56 巻第 4 号、頁 45 を参照。

³⁷徐邦達『古書画偽訛考辨 下巻：文字部分』（江蘇古籍出版社、1984）、頁 54 を参照。

³⁸同前掲注 4、徐邦達「趙孟頫書画偽訛考辨続編」『趙孟頫研究論文集』、頁 737～747 を参照。

から収蔵印記、題跋についても考察している。注目に値するのは、長年の経験による高い「目鑑」能力である。経験豊かで博識な徐氏は、制作年代や偽作の可能性についても書風から判断している。自身の鑑定経験によって真贋を見極めるやり方は、見当違いや主観に偏りすぎる恐れもあるが、近年はこうした努力によって趙孟頫の偽作が明らかにされる例も少なくない。

徐氏とほぼ同時期に、劉九庵も趙孟頫の書画作品を鑑定している³⁹。劉氏はこの論文で鑑定のポイントを「墨跡的署款和鈐印」、「趙孟頫書偽作簡析」、「趙孟頫書法的繼承者和仿効者」の3点に分け、簡潔にまとめている。劉氏は徐氏とは異なる作品を鑑定し、偽作者を俞和（元・大徳十一年～明・洪武十五年、1307～1382）、金琮（明・正統十四年～弘治十四年、1449～1501）、陸深（明・成化十三年～嘉靖二十三年、1477～1544）、陳謙（生卒年不詳）、詹僖（生卒年不詳）の5人にまで絞っている。これによって趙孟頫書法の鑑定研究が大きく前進したと言え、高く評価すべき点であろう。

王連起氏は徐邦達に次ぐ趙孟頫の書画作品論の権威だと言えよう。王氏が発表した趙孟頫の書法と直接関連する研究は約15本が確認できる⁴⁰。王氏に

³⁹同前掲注33、劉九庵「趙孟頫書法叢考」『劉九庵書画鑑定集』、頁83～89を参照。

⁴⁰王連起「伝世趙孟頫書道教碑真偽考」『文物』第6期（文物出版社、1983）、頁76～86。同氏「趙孟頫為妻代筆」『紫禁城』第1期（紫禁城出版社、1984）、頁42～43。同氏「趙孟頫臨跋〈蘭亭序〉考」『故宮博物院院刊』第1期（文物出版社、1985）、頁36～47。同氏「趙孟頫臨跋〈蘭亭序〉考（続）」『故宮博物院院刊』第2期（文物出版社、1985）、頁60～70。同氏「趙孟頫天冠山帖考辨」『文物』（文物出版社、1991）、頁91～95。同氏「趙孟頫偽書叢考」『書法叢刊』第4期（文物出版社、1992）、頁～。同氏「王連起談趙孟頫与《酒德頌》」『紫禁城』第4期（紫禁城出版社、2007）、頁79～82。同氏「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』（上海書画出版社、1995）頁777～806。同氏「趙孟頫書画真偽的鑑考問題」『中国歴代書画鑑別文集』（紫禁城出版社、2000）、頁87～119。同氏「趙孟頫〈與季宗源札〉考」『書法叢刊』第3期（文物出版社、1995）、頁40～46。同氏「趙孟頫〈國賓山長帖〉」『書法』第4期（上海書画出版社、1995）、頁7～8。同氏「再談趙孟頫書法的真偽問題」『書法』第4期（上海書画出版社、1996）、頁2～4、6。同氏「趙孟頫行書〈洛神

よれば、現存する趙孟頫書法の真跡は約 150 点余り、絵画は 30 点余りあり⁴¹、その書風は大きく 4 段階に分けることができるとしている⁴²。また、無紀年の作品についてもおおよその制作年代を推定しており、《洛神賦》（プリンストン大学附属美術館蔵）はその一例である⁴³。これは当時においても、そして現在においても大きな突破であり、意義深い試みであると思う。こうした研究は、書法の様式論及び書風研究は信用できる学問だという証明になるだけでなく、昔ながらの鑑定法の必要性和有用性を実証するものだと言えよう。

上述の文章以外にも趙孟頫作品の鑑定をテーマとした研究が多々見られる⁴⁴。これらは皆、伝世の趙孟頫作品の真贋について関心を寄せ、自身の見解を披露しつつ、趙孟頫研究に一石を投じている。このように歴史の真相に迫ってゆく姿勢は研究者にとって大切なものと言えよう。

前述の台湾の研究者張光賓氏は、かなり早い時期から伝存する趙孟頫書《漢汲黯伝》を疑い、真偽について論考している⁴⁵。俞和の書を研究した張氏は、

賦》真偽鑒考」『文物』第 8 期（上海書画出版社、2002）、頁 78～90。同氏「趙孟頫の名號款印與鑒定問題」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮宝齋出版社、2002）、頁 64～68。同氏「從〈方外交疏〉看趙孟頫晚年書法藝術」『書法叢刊』第 1 期（文物出版社、1989）、頁 20～33。

⁴¹同前掲注 40、王連起「趙孟頫書画真偽的鑒考問題」『中国歴代書画鑑別文集』、頁 87 を参照。

⁴²王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』（上海科学技術出版社、商務印書館（香港）、2001）、頁 17 を参照。

⁴³王連起氏は《洛神賦》を前期と中期の過渡期に位置する作品だとしている。詳細は『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（読売新聞社、2002）、頁 294 を参照。

⁴⁴例えば沈白氏は《前赤壁賦》、《行書五七言詩》、《楷書太上無極經》、《行書蜀山図歌》を鑑定している。これらの貴重な作品を詳細に分析した点は評価するべきであろう。詳細は、沈白「從風格和筆法中去認定—趙孟頫書法作品的真偽」『文物天地』第 10 期（文物天地雜誌社、2007）、頁 102～110 を参照。

⁴⁵同前掲注 20、張光賓「俞和書樂毅論与趙孟頫書漢汲黯伝」『国立歴史博物

《漢汲黯伝》の書風が龔和の書法に近似していることから、龔和による偽作ではないかと推察している。張氏は1986年に旧説とは全く異なる知見を提出し、その後、この作品については真偽二説となった。これについては、本論も張氏の論文に追従し、第二章で触れたいと思う。

傅申氏は米国のフリーア・ギャラリー任職中の1989年に趙孟頫の小楷書法に関する研究成果を発表した⁴⁶。この論文では趙孟頫書法が3期に分けられている。注目すべきなのは、傅氏がフリーア・ギャラリーのために購入した《太上老君説常清静経》（無紀年）の真偽を確定し、編年をした点であろう。傅氏は、書法の風格をもとに無紀年だった《太上老君説常清静経》を趙孟頫39歳頃の作品だと鑑定しているが、この見立ては今日まで多くの支持を得ており⁴⁷、同氏による鑑定を経て購入された本作は、今日でも真跡とみなされている。傅氏はプリンストン大学で芸術考古学の博士号を取得し、その後、博物館・美術館でキュレーターを務めた、著名な中国書法史学者である。また、日本人の中田勇次郎と『中国法書名蹟集：欧米収蔵』全6巻を共同編纂したのも注目すべき偉業である。このとき、傅氏は徐邦達や劉九庵と同じく中国の書画を専門的に考察・鑑定した。このような書画作品の鑑定は当時の学界では非常に新しい、衝撃的な研究発表だったに違いない。

台湾では、趙孟頫研究に関する学位論文8本が確認できた。その中の一つ、蕭毓謙氏の修士論文は、趙孟頫が中峰明本に送った11通の尺牘（共に国立故宫博物院蔵）に焦点を絞り、その真贋を考察している。蕭毓謙氏の論文は、

館刊』第2巻4期、頁51～62を参照。

⁴⁶傅申「趙孟頫書小楷常清静経及其早期書風」『趙孟頫国際研討会論文集』（上海書店、1994）、頁51～55を参照。後に、傅申著『書史與書蹟—傅申書法論文集』（一）（国立歴史博物館、1996）、頁183～189に収められた。

⁴⁷例えば、前述した許国平氏や、黄惇氏が挙げられる。これは本作が黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁95～97にも収録されていることから窺える。

参考文献の信頼度のみならず、これまでの真贋鑑定の方法にも疑問を投げかけている。その観点は新しく、大いに議論の余地があるだろう。ただし、蕭毓謙氏が導き出した結論「並發現這《十一札》可能来自九個不同的作者」⁴⁸11 通の尺牘が9人の人物による偽作であるとする説には首肯しがたい。そもそもその「9人」とは一体何者であるのか。仮に《十一札》を偽作とするならば、なぜ尺牘の内容から趙孟頫と中峰明本の関係を明らかにできたのか。そして、なぜ趙孟頫書法にこれほど似せることができたかについては一切説明がない。いずれにせよ、蕭氏の論文からは、趙孟頫書法に関する真偽鑑定研究が、現在の学界で全面的な支持を得ているわけではないことを示す意図が窺える。

以上の研究はいずれも伝世する趙孟頫の書法作品を中心に論じられており、論文中に新たな論点と研究成果が示されている。また、趙孟頫書法の特徴や影響を明らかにした上で、歴史の真相を詳らかにするための提示も多いように思う。しかし、どの研究も課題の一部に結論が得られているのみで、各作品の真偽、優劣、編年、分期の判断基準は論文発表当時の研究環境や資料の制限があることから、それらの妥当性が新資料出現後に改めて問われることになり、再度議論が行われる傾向も見られる。

第二節 主な問題点の提起

ここまで先行研究を振り返ってみてきたが、次に以下の問題点（一）～問題点（三）に焦点を当て問題解決を試みたい。まずは、問題点（一）：趙孟頫書法の年代的变化は、どのように時期区分できるのか。また、その変化はど

⁴⁸蕭毓謙『書法鑑定方法研究—以趙孟頫作品為例』（国立台南芸術学院芸術史與芸術評論研究所修士論文、2003）、論文提要を参照。

のような背景のもとに起こったのか。この問いに答えるために、趙孟頫書法の分期説に関する研究史を振り返って考えたい。

一、現代人による趙孟頫書法の分期説

書人の書法を分期する際、伝存する作品の真偽や編年に注意を払うべきなのは周知の通りである。また、このような基礎研究は、問題点（一）~~の課題~~にも通じるものである。例えば、《漢汲黯伝》はなぜ真偽二説あるのか。《陋室銘》（無紀年、広東省博物館蔵）は早年期の作でよいのか。中年期の作とは考えられないのか。これらの諸問題は問題点（一）に関連するが、この点について先行研究はほとんど触れていない。続いて、趙孟頫書法の分期説に関する先行研究の内容を確認したい。

本論文では各分期説を以下（ア）～（カ）のように整理した。

（ア）外山軍治：3期（40歳頃以前、40歳代～50歳代、60歳以後）⁴⁹

（イ）傅申：3期（44歳以前、44歳～61歳まで、61歳以降）⁵⁰

（ウ）塚本宏：3期（40歳以前、40歳末～60歳まで、晩年）⁵¹

（エ）劉九庵：2期（48歳以前、48歳以降）⁵²

（オ）王連起：4期（45歳以前、45歳～55歳、55歳～60歳、60歳～）⁵³

⁴⁹外山軍治氏は「元貞以前といえば、孟頫が四十歳を少しこえたころまでのことであり、大徳年間は四十歳台から五十歳台に至る約十年間にあたる。また延祐以後とは、六十歳以後のことである。この見方は一おう当たっていると思うから、この説を中心にして考察していくことにしたい。」と述べている。詳細は前掲6、頁12を参照。

⁵⁰同前掲注41、傅申「趙孟頫書小楷常清静經及其早期書風」『中国歴代書画鑑別文集』、頁184～185を参照。

⁵¹塚本宏「古法の復活者」『中国書道史の10人』墨スペシャル28（芸術新聞社、1996）、頁134を参照。

⁵²同前掲注33、劉九庵「趙孟頫的書法」『劉九庵書画鑑定集』、頁80～81を参照。

(カ) 解小青：4 期（48 歳以前、48 歳～57 歳、57 歳～63 歳、63 歳～）⁵⁴

しかし、趙孟頫の作品の真偽、編年を全体的に考察・分析してから時期区分をした論考は王連起氏以外には見られず、どの分期説も唐突な感がある。どの分期も時間が若干異なるのみで、明人の宋濂（元・至大三年～明・洪武十四年、1310～1381）「趙魏公之書凡三変。初臨思陵（宋高宗）、中学鍾繇及羲献諸家、晚乃学李北海。」⁵⁵や清人の呉栄光（清・乾隆 38～道光 23、1773～1843）「松雪書凡三変。元貞（～1295）以前、猶未脱宋高宗窠臼。大徳年間（1297～1307）、専師定武稊（禊）序。延祐以後（1314～）、変入李邕柳誠懸法。而碑版多用之。」⁵⁶などの私説⁵⁷よりかなり前進したように見えるが、実はまだその枠から脱しきれていない感がある。分類の手法と根拠が抽象的かつ恣意的で、単純に時間を区切ってあるだけで、一定の結論が得られていないのが現状である。

分期は書人の書法を理解する手段の一つとして、従来より多用されてきたことから、それなりの意味を持つかと思われる。趙孟頫書法の時期区分は、先達が常に関心を抱いてきた、研究の焦点のようも見えるが、実はこれまでさほど重要視されておらず、各説の是非についても十分な検証がされないまま、宋濂の説に追従しているだけにすぎない。宋濂による趙孟頫書法の 3 分期説はしばしば引用される重要な説ではあるが、何を根拠に分期したのか判

⁵³同前掲注 37、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁 17～18 を参照。

⁵⁴解小青『趙孟頫法書品珍：趙孟頫書法芸術』（上海書画出版社、2007）、頁 8～14 を参照。

⁵⁵羅月霞主編『鑾坡後集』卷之九『宋濂全集』（浙江古籍出版社、1999）、頁 759 を参照。

⁵⁶同前掲注 29、呉栄光『辛丑消夏記』卷 3、頁 324 を参照。

⁵⁷宋濂や呉栄光のように趙孟頫の書法を分期する明、清人の論説も見られるが、特別重要な示唆がないため、個々の検討は割愛する。参考資料として、前掲注 54、解小青『趙孟頫法書品珍：趙孟頫書法芸術』、頁 4～6 が挙げられる。

然としない。そこで、改めて宋濂による3分期説の出自を考察し、これによって今後の書人に対する時期区分の研究に一石を投じたい。

二、宋濂「趙魏公之書凡三變」説の出自及び検討

まず、疑問に思うのは、先行研究が宋濂による趙孟頫の書法の分期説を引用する場合、一節のみの引用がほとんどで、引用する内容もそれぞれ異なる点である。例えば、王連起氏は「宋濂在跋趙書《浮山遠公伝》時説：“趙魏公之書凡三變。初臨思陵（宋高宗）、中学鍾繇及羲献諸家、晚乃学李邕”」とし⁵⁸、黄惇氏は「初臨思陵、後取則鍾繇及羲献、末復留意李邕。」とする⁵⁹。これは本考察を始めるきっかけにもなった疑問点である。『宋濂全集』を全般的に確認したところ、趙孟頫書法の時期区分について述べている箇所は、1項目だけではなく、少なくとも5項目（2、3、4、6、7、）あった。内容は大同小異だが、重要な情報を秘めていると思われる部分もある。これによって、先行研究は1箇所のみを恣意的に取り上げて解釈した傾向があることがわかった。このような恣意的な引用と解釈では、宋濂の分期説本来の考え方を誤って理解する恐れがあるので、ここでは宋濂の趙孟頫書法に関する論述計9箇所を『宋濂全集』から抜粋し、宋濂の趙孟頫書法の受容及び3分期説の変遷について検討していきたいと思う。

① 「題子昂書招隱卷後」

右趙魏公所書《招隱士》一篇。公自大德三年八月改集賢直学士、行江浙处儒学提举、至七年十月、已閱五載、而公年亦五十矣。鄉先生方君

⁵⁸王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』（上海書画出版社、1995）、頁777を参照。

⁵⁹黄惇「從杭州到大都—趙孟頫書法評伝」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（荣宝齋出版社、2002）、頁16を参照。

寿甫、從其父巖南翁遊杭、提舉官署時寓於杭府、故先生得見公而請書此卷也。卷左有翰林待制柳公、長蘆山長吳公題識。二公皆濂所嘗師事者、九京不可作矣。披玩數四、不覺淚落紙上⁶⁰。

② 「跋子昂書《浮山遠公傳》」

趙魏公之書凡三變。初臨思陵（宋高宗）、中學鍾繇及羲獻諸家、晚乃學李邕。此卷視北海最為逼真、誠絕代之寶也⁶¹。

③ 「題趙魏公書《大洞真經》」

此卷乃趙魏公六十三歲所書、至精至妙、非言辭贊美可盡。蓋公之字法凡屢變。初臨思陵、後取則鍾繇及羲獻、末復留意李邕。此正所謂學羲、獻者也⁶²。

④ 「題子昂書《高上大洞玉經》後」

右玉晨上文三十九章、趙魏公六十四歲時所書、多取法於《黃庭內景經》、故韻度極可觀。或者謂公晚年專倣李邕、其言過矣。予見公書此經凡四數、而此卷尤為精絕、誠可寶也⁶³。

⑤ 「題松雪翁《觀音經》後」

右趙魏公中年所書、雖若散緩、而神趣油然充足、必索於驪黃牝牡之外者方能知之。凡夫肉眼、要不足以識此也⁶⁴。

⑥ 「題子昂書《度人經》後」

公自承旨翰林、以延祐己未五月謁告南歸、舟次臨清鎮、而夫人薨。明年庚申、公為書是經、年已六十有七。越二年、當至治壬戌六月辛巳、

⁶⁰同前揭注 55、羅月霞主編『芝園後集』卷第三『宋濂全集』、頁 1376 を参照。

⁶¹同前揭注 55、羅月霞主編『黃譽刻輯補』『宋濂全集』、頁 2098 を参照。

⁶²同前揭注 55、羅月霞主編『鑾坡後集』卷之九『宋濂全集』、頁 759 を参照。

⁶³同前揭注 55、羅月霞主編『芝園前集』卷第五『宋濂全集』、頁 1255 を参照。

⁶⁴同前揭注 55、羅月霞主編『鑾坡後集』卷之九『宋濂全集』、頁 761 を参照。

而公亦薨矣。觀其天機逸發、出入右軍、大令間、實為晚年妙筆。區區小夫、唯見蚤歲書、概以插花美女為病、使其睹此、必將吐舌而走矣⁶⁵。

⑦ 「跋子昂真蹟後」

右蘇子瞻寄吳德仁兼簡陳季常詩一首、趙魏公子昂所書。……。公書之伝世者、真贋相半、非有識未易辨。蓋真者猝難入目、筆意流動而神藏不露、愈玩愈覺其妍。贋則其氣索然、不待終覽而厭之矣。此帖實公晚年妙筆、老氣翩翩逼人。黃口小兒日百臨模、雖近終不近也。公自題為月江學士書。月江、乃昭文館大學士張克明云⁶⁶。

⑧ 「題趙子昂臨大令四帖」

趙魏公留心字學甚勤、義、獻帖凡臨數百過、所以盛名充塞四海者、豈無其故哉。後生小子、朝學操觚、暮輒欲擅書名者、可以一笑矣。今觀張唯編修所藏臨大令四帖、聊書其末、以示解事者⁶⁷。

⑨ 「題徐浩書」

徐季海之書、本於其父嶠之。所謂四十一幅屏者、諸體皆備、而草書尤工、余頗獲見之。……。近代趙魏公筆法多効之、誠可寶玩也⁶⁸。

上記①～⑨は遺品と対照しながら検討する必要があるが、現時点では遺品も揮毫年代も確認できないため、ここではまず文献の検討から着手したい。数量的には多いとは言えないが、以上の論述を見ると、少なくとも宋濂は趙孟頫の書法9点をその目で鑑賞し、検分したことがあると知れる。①の記述

⁶⁵同前掲注 55、羅月霞主編『鄭濟刻輯補』『宋濂全集』（浙江古籍出版社、1999）、頁 1902 を参照。

⁶⁶同前掲注 55、羅月霞主編『翰苑別集』卷第八『宋濂全集』（浙江古籍出版社、1999）、頁 1108 を参照。

⁶⁷同前掲注 55、羅月霞主編『翰苑別集』卷第二『宋濂全集』（浙江古籍出版社、1999）、頁 994 を参照。

⁶⁸同前掲注 55、羅月霞主編『鑾坡後集』卷之九『宋濂全集』（浙江古籍出版社、1999）、頁 760 を参照。

を見れば、かつて方寿甫（？～至正十二年？、？～1352？）が趙孟頫に直接揮毫を依頼した《招隱士》巻末に、柳氏と呉氏の二人が題識を残したことがわかる。上記9点を全て検討してから、この点についてももう一度考えてみたい。次の②～④は趙孟頫の分期説についての記述である。その内容を一見するとさほど違いは感じられないが、重要な情報も入っている。ただし、どの文が先に著されたものなのか判断できないため、②から④の順に見ていくこととする。まず、②の内容を見ると、宋濂も最初はかなり断定的に、趙孟頫の書法を宋高宗の趙構（北宋・大觀元年～南宋・淳熙十四年、1107～1187）から鍾繇（後漢・和平元年～魏・太和四年、151～230）及王羲之（晋・太安二年～升平五年、303～361）、王献之（晋・建元二年～太元十三年、344～388）諸家、李邕（唐・儀鳳三年～天宝六年、678～747）へと、3期に時期区分したことがわかる。しかし、③を見ると、②の内容が変更されており、筆調も若干柔らかくなったように思える。例えば、②の「三変」（三度の変化）は「屢変」（しばしば変化した）に変えられ、「晩乃学李邕」（晩年になってから李邕を学ぶ）は「末復留意李邕」（晩年に再び李邕に留意する）と書き改めている。これは一体何を意味するのだろうか。次に④を見ると、「或者謂公晩年専倣李邕、其言過矣。」とあり、「晩年、趙孟頫は専ら李邕を学んだというのは言いすぎだろう」と否定的な見方をしている。②、③、④、を通して読むと、宋濂は年齢を重ねるうちに徐々に趙孟頫書法の複雑さと多様性を知り、やむを得ず旧説を訂正したとしか考えられない。換言すれば、宋濂の見解は誤りとは言えないが、イメージに近い概観をまとめた推測に過ぎず、確かな根拠に基づいて書いたようには見えない。

⑤は中年時代の趙孟頫書法の特徴について「雖若散緩、而神趣油然充足。」と抽象的に述べている。また、「凡夫肉眼、要不足以識此也。」ともあり、「一般人には趙孟頫書法の巧みさはわからないだろう」と、自身の鑑識眼の高さ

を誇っている。⑥は「趙孟頫晩年の書法は李邕ではなく、二王の書に近似しており、妙筆である」と褒め称えている。つまり、趙孟頫の書は中年以降、晩年になっても二王書法の受容が見られ、生涯を通して二王の書風を貫いたということで、④の説を補っているように見える。⑦には二つの情報が記されている。一つは、宋濂の時代はすでに趙孟頫の偽作が氾濫していたこと。もう一つは、晩年の書法が「老氣翩翩逼人」だったことである。残念ながらこれ以上の情報はなく、詳細は不明である。⑧は趙孟頫が国内外に名を馳せたのは、二王を猛勉強した結果であるとしている。⑨は趙孟頫書法の用筆法は唐人の徐浩（唐・嗣聖二十年～建中三年、703～782）から来ているとしているが、これについても詳細な記述はない。ここまで見ても李邕の影響については一切触れておらず、なぜ「趙魏公之書凡三変」説を立てるとき、徐浩を入れずに李北海を入れたのか不思議に思う。そもそもこの3分期説は本当に宋濂自身の考えだったのかという疑問が浮かび上がる。①の題跋の内容は前述したとおり、柳氏と呉氏の二人は宋濂の師であったことが確認でき、宋濂は両先生から趙孟頫の生涯や書法の分期に関する見解を間接的に聞いていたとも考えられるのではないか。この点は今後更なる検討を要する。

このように曖昧で確たる根拠もない論述は、本来ならば特別視する必要もないが、清人の呉栄光から現在まで、いまだにしばしば引用されている。しかし、その引用方法には若干の違いが見られ、3分期説に反対する意見も散見されるが、それに関しても具体的な説明は見られない。書家の分期説は、現代においても有用な研究手段の一つなのか否か、膨大な資料を目の前にしてこれらをどう用いるべきなのかは、慎重に取り組むべき課題である。分期というものは、書人の書跡を時系列に分けて見ることによって、作品一点一点の来歴、展開、独自性を知ることができる手段の一つとはいえ、研究者もしくは解釈者が持つ資料（文献、遺品）と、書法史に関する専門知識の多寡

によって結論が異なることも考えられ、解釈が偏る可能性もある。重要なのは、それらの結論がその書人の作品の真偽鑑定や優劣の判断、当時の書環境など、書法史への理解に有用か否かである。この点において、先人の研究は必ずしも役立つとは言えまい。よって、趙孟頫書法の時期区分を如何にすべきかを考える時、本論ではやはり根本に立ち返って趙孟頫書跡の遺品の整理から着手し、再考するしかない。

問題点（一）を整理した後に自ずと生じる疑問は、問題点（二）：趙孟頫書法は、遺品の書体や形式、文書の性格にかかわらず、共通した年代的变化は認められるのか、なぜそのような変化が生じたのかということである。この疑問を明らかにするには、作品間の横の繋がりを対照しながら、作品の異同を調べるほかない。これは従来の研究があまり触れていない部分でもある。

最後に、問題点（三）：趙孟頫書法の年代的变化には、いくつかの分期が認められるが、そのうちに最も大きな画期⁶⁹を見出すことを本論最終的な目的とする。問題点（一）と問題点（二）を踏まえ、問題点（三）の結論を得ることは本論の研究意義に大きく関わる。ここまで触れた論説は先行研究には一つもないからである。このように根本的かつ重要度の高い課題についての考察は、従来の分期説にはない姿勢である。研究方法は大差ないが、ここか

⁶⁹分期とは、「期間を分ける」ことである。（北京・商務印書館、小学館共同編集『中日辞典』（小学館、1996）、頁 404 を参考。一方、画期とは、「今までなかったことを始めて、その分野で新しい時代がはっきり区切られるような時期」のことを指す。（尚学図書・言語研究所編集『国語大辞典』新装版（小学館、1995）、頁 510 を参考。従来の分期説は主に趙孟頫の生涯における書法的変遷をもとに、古典との近似性や学書の来歴、書法的特徴を根拠として大まかに分けたものである。この方法も誤りだとは言えないが、分期という言葉に囚われてしまい、趙孟頫書法の独自性、つまり画期的な表現は評価されてこなかった点は問題である。本論の「趙孟頫の書法における時期区分の研究」というテーマは、単に趙孟頫の書法を改めて分期することを目的としているだけでなく、趙孟頫自身の書法人生においても、中国書法史においても、どれほどの革新がもたらされ、どれほどの画期的な書表現が生み出されたのかの提示が本論の主要な目的である。

ら新たな結論が得られることを期待し、終論にてまとめたいと思う。

第三節 研究の目的及び方法

一、墨跡、法帖、文献三者並進

趙孟頫の書法を理解するためには、現存する多種多様な墨跡の書法を確認した上で、法帖並びに文献（詩文集や歴代著録など）も参考に考察を進めなければならない。こうした作業によって趙孟頫書法の全体像が明らかになり、断片的なものではなく、包括的な研究が可能となり、抽象的な解釈に陥ることもない。よって、本論は墨跡、法帖、文献三者並進で全体的な検証に取り組むこととし、趙孟頫書法の分期とその画期を中心に考察していく。

（一）、墨跡

肉筆の遺品は多数存在する。筆者は約 340 点【表 2】を把握しており、これらは主に三方面より収集した。一つは、国立故宮博物院の蔵品約 168 点である。この中には未公開資料もあり、偽作も含まれているが、真跡が 50 点ほどある。《宋高宗書孝經馬和之絵図 冊》後の趙孟頫題跋などは、市販の図録には未収録の資料で、本論だけでなく、今後の趙孟頫書法の研究素材となりうる。同様に、各美術館と博物館に収蔵されている趙孟頫の書画作品を一斉に展示して議論できるならば、必ずや趙孟頫書法研究とその受容に関してより一層の前進が期待できるに違いない。

二つ目は、オークションの図録である。本論ではオークションの図録から

作品 6 点を抜粋している⁷⁰。かつて王連起氏が触れた《四体千字文》(66 歳、個人蔵)から、新資料の《勉学賦并序》(墨跡本)、《重輯尚書集注序》(65 歳、個人蔵)3 点を本論文中で検討したい。これらの図版は画質にやや難があり、偽作も多いが、他の趙孟頫書跡の比較対象としては非常によい素材であり、現在の遺品研究の不足を補うこともできよう。例えば、本論第五章で扱う、オークションに出品された《勉学賦并序》(墨跡本)は偽作だと鑑定されているが、《宝雪斎趙帖》(專帖)所収する《勉学賦并序》帖によれば、墨跡本も法帖も同じ系譜下の産物だということが明らかになっている。偽物とはいえ、このように墨跡本と法帖を対照すれば、真跡本来の姿がより鮮明になるのではないだろうか。

三つ目は、法帖に押された趙孟頫の収蔵印とその後の題跋である。例えば、上海博物館所蔵の《淳化閣帖最善本》卷六⁷¹、三井記念美術館所蔵の《慶曆本化度寺碑》(宋拓)【図 1】⁷²には、趙孟頫の「趙氏子昂」印が押されているが、趙孟頫がこの二つの法帖を収蔵した証明になるとは言いがたい。後人による偽印の可能性も考えられるのではないか。また、《石鼓文》の後にある趙孟頫の題跋【図 2】を真跡とみなし、趙孟頫が《石鼓文》を学んでいたと解釈するのは可能だろうか。このような例は多く、これらも含めて検討す

⁷⁰ 《遠顧帖》(番号 627)『宋元翰墨』中国嘉德 2011 秋季拍卖会、中国嘉德拍卖有限公司、2011。《常清浄経》(大徳八年本、番号 613)。《重尚書集註序言》(番号 660)『中国古代書画』南京經典二零一一春季拍卖会、南京經典拍卖有限公司、2011。《勉学賦并序》(番号 1088)『中国書画』2009 広州冬季拍卖会、中国嘉德広州国際拍卖有限公司、2009。《続書譜》(番号 412)。《行書冊》(番号 440)『中国古代書画』首届芸術品拍卖会、北京海士徳国際拍卖有限公司、2010。

⁷¹ 単国霖「趙孟頫的《閣帖》情結」『上海文博論叢』5 (上海辞書出版社、2003)、頁 87 を参照。

⁷² 同美術館編『聴水閣旧蔵碑拓名帖撰—新町三井家—』第二刷 (財団法人三井文庫、三井記念美術館、2005)、頁 53、122 を参照。このような例は《黄庭経心太平本》(趙孟頫旧蔵本)も確認できる。詳細は伊藤滋「魏晋小楷の名品『黄庭経心太平本』考」『特別展「書聖 王羲之」』、頁 260 を参照。

ば、趙孟頫書法と後世の受容が、今後はより明確になるのではないだろうか。

(二)、法帖

高価な法帖資料は、良い版本の多くが美術館や個人の収蔵品となっており、入手が困難なため、一研究者が研究対象とするのは難しい。しかし、良質な研究素材であるこれらの資料を疎かにはできない。先述したとおり、趙孟頫法帖の研究に進展が見られない現状においては、新たな研究も展開しやすいと言える。『叢帖目』⁷³に収録された趙孟頫と関わりのある法帖は、その全てが流伝しているわけではないが、趙孟頫の書跡研究に大きく役立つことは間違いない。例えば、西川寧は《清華齋趙帖》を取り上げ、非常に興味深い例について語っている⁷⁴。現存する趙孟頫の遺品だけでなく、元代書法史に関する書籍の紹介でも、書簡の封筒【図3】が見当たらないのである。これを真跡とするか、後人によるものなのか、真贋については更なる考察を要するが、法帖資料の出現が新たな視野を開いてくれたことは否定できないのではないか⁷⁵。よって、本論の第一章では《鮮于府君墓誌銘》帖を紹介し、これが現存する趙孟頫墓誌銘の遺品であることを証明したい。そして、第五章では、現下の学界では触れられていない《宝雪齋趙帖》を紹介する。《宝雪齋趙帖》は現存しない真跡より拓されたものであることと、現存する一部の墨跡が偽作である可能性を示す役割を担うに足る作品であることを証明したい。管見の限りでは、《大雨賦》帖（韓国国立中央図書館蔵）【図4】、《豳風七月賛》帖は「集趙孟頫字」の五文字（韓国国立中央図書館蔵）【図5】はこれま

⁷³容庚編『叢帖目』1～4（中華書局香港分局、1980～1986）を参照。

⁷⁴同前掲注32、西川寧「趙子昂の二群の尺牘」『西川寧著作集』第二巻、頁244を参照。

⁷⁵西川寧氏の論文を確認したところ、元代には《清華齋趙帖》が示した封筒は見られない。詳細は西川寧「趙子昂の二群の尺牘」『西川寧著作集』第二巻（二玄社、1991）、頁238を参照。

で研究されたことのない新資料である⁷⁶。これらは法帖でありながら、趙孟頫の交友関係と後世の受容を示す重要な作品であるため、本論中にも加えて論述し、その価値を見出したい。

（三）、文献資料

『歴代著録法書目』に収録された、趙孟頫と関わりのある書法作品は約1193点ある（重複あり）⁷⁷。これらの文献資料は、その背景にある収蔵史、書史上各時代の鑑賞家の見方を提供しただけではなく、趙孟頫の真筆か後人の偽筆かを比較検討できる極めて重要な研究素材である。例えば、筆者が過去に趙孟頫書《禊帖源流》巻を考察した際、中国の南京図書館に所蔵されている、清人の李振裕（明・崇禎十五年～清・康熙四十九年、1642～1710）『燹餘所見録』を見つけた。それには何義門（明・永曆十五年～清・乾隆三十七年、1661～1772）がかつて趙孟頫書《禊帖源流》巻の模写を目にしたとする記録がある⁷⁸。この様な経験から推察するに、現存する小楷書法の名跡《妙法蓮華經》第三巻と第五巻は、作品としての質は非常に良いが、文献の記録から見れば単なる偽作の可能性もある（第二章で検討）。また、多数存在する趙孟頫書《洛神賦》、《黃庭經》などの真贋についても、もう一度慎重に考えなければならない（第二章で検討）。しかし、現状では十分に検討されているとは言えず、疎かにされている感がある。

本論は墨跡、法帖、文献三者並行を前提とし、改めて趙孟頫書跡を考察していきたい。全ての遺品に法帖と文献が揃っているわけではなく、参考例が

⁷⁶この2作は2012年の5月、筆者が韓国国立中央図書館でフィールド調査を行った際に確認した新資料である。

⁷⁷朱家潛主編『歴代著録法書目』（紫禁城出版社、1997）、頁332～355より統計したデータである。

⁷⁸拙文「元趙孟頫書〈禊帖源流〉巻賞析」『故宮文物月刊』第329期（国立故宮博物院、2010年）、頁79～80を参照。

見出せるわけでもないが、これは本研究を進める上での基本的な信念であり、法則でもある。続いて、本論の研究方法を述べたいと思う。

二、書体別の検証

まず、趙孟頫の遺品を確認してみたが、真筆と確信できる隸書作品はなく、分析する余地がない⁷⁹。また、篆書の遺品（10 点以下）も検証できる文字数は少なく、すでに元人の楊載が《石鼓文》、《詛楚文》を元にしたものと断定していることから、新知見の提出は難しい⁸⁰。

そこで、先行研究を踏まえて、大量の楷書、行書、草書の変遷を分析したいと思う。筆者がリストアップした肉筆の遺品は 340 点、碑文書法は 188 点（拓本、文献、遺品）、法帖資料は 563 点ある⁸¹。遺品の性格により、楷書は碑文書法と小楷書法に分け、草書は 6 種類（①純然たる章草、②独草体、行書、楷書が交じる作品、③今草、行書が交じる行草作品、④今草、章草体が交じる作品、⑤行草書と章草体が交じる作品、⑥行草書と章草体、楷書が交じる作品に分類するが、本論は趙孟頫書跡の中では特筆に値する行草書と章草体、楷書を混用する表現に着眼し、考察していきたいと思う。第五章に趙孟頫の法帖研究を置いたのは、肉筆だけではなく、《宝雪斋赵帖》に所収された 5 点の法帖が、趙孟頫書法における「最も大きな画期」を探するという本論

⁷⁹例えば、《六体千字文》や《上善池碑》帖などは真偽二説あるが、本論ではこれらの隸書の検討は割愛する。

⁸⁰楊載が「公性善書，專以古人為法。篆則法《石鼓》、《詛楚》。隸則法梁鵠、鍾繇。行草則法逸少、獻之、不雜以近体。」と趙孟頫の篆書、隸書の来歴を要約している。詳細は楊載「翰林學士趙公行狀」、趙孟頫著、黃天美点校『松雪齋集』（西泠印社、2010）、頁 335 を参照。

⁸¹紙幅の都合上、本論では必要な資料だけを作品リストに加えている。現在確認できる全ての資料をリストアップしたものではない。

の狙いに極めて重要な補足効果があるためであり、趙孟頫書法研究の一環としても有益だと思い、一章を付け加えた。

三、構成の順番

書体別の検証のほか、本論文の構成に関して、もう一つ考えなければならぬのは検証の順番である。本論文では碑文書法から小楷書法、行草書書法へと順に進めたいと思う。理由は二つある。一つは遺品の数量の多寡と検証の複雑さによるもので、もう一つは書法的風格の共通点である。

趙孟頫の遺品は中・大字の碑文書法が少なく、リストアップした際に確認できたのは約 12 点のみだった。先達の研究によって碑文書法の制作時期はほぼ確定できているので、各作品の書風の変遷や分期も比較しやすく、考察も容易である。小楷書法作品は碑文書法より多いが、筆者は過去に趙孟頫早期の小楷書法に関する研究を発表したこともあり、比較的その法則が掴みやすい。検証困難なのは 40 代から最晩年までの作品で、特に複雑な行草書作品が問題となる。この一群の遺品は数量も多く、真偽も混在しており、法則が掴みにくいので、この時期の作品は最後に検討したい。一部の遺品、特に 50 代以降の尺牘書法の多くは、側筆で揮毫されているのが見て取れる。このような用筆法は碑文書法のそれに近いため、両者の関連性は極めて高いと判断できる。よって、先に碑文書法の風格の来歴を考察すれば、行草書書法の書風の変遷を考察する際に有益であろう。

四、研究の手順：真偽から編年、分期、画期へ

(一)、真偽

作品を鑑賞する際、鑑賞者自身の書法史も違えば、書人、書跡に対する認識や理解も異なるため、作品の見方にもそれぞれ違った考えがあり、真偽鑑定の結果もおのずと異なる。そこでまず、作品の真偽を鑑定する際の基準を定めるべきである。以下の三つの面から考えたい。

1、本幅と本幅後の本人による題跋が同じ紙上にある作品：このような作品は真跡の可能性が高い。例えば、趙孟頫書《杜甫秋興詩》（29 歳頃/69 歳、上海博物館蔵）の本幅と巻末の題跋、韓滉（唐・開元十年～貞元三年、722～787）《五牛図》後の趙孟頫による三つの題跋（40 歳/無紀年/61 歳、北京故宮博物院蔵）、趙孟頫書《雜詩三段帖》（52 歳/53 歳/66 歳、北京故宮博物院蔵）が挙げられる。

2、本幅の前か後ろに同時代人の款識があり、しかもそれが同じ紙上にある作品：例えば、王庭筠（金・天徳三年～泰和二年、1151～1202）《幽竹枯槎図巻題辭》の巻末には、鮮于樞（南宋・淳祐六年～元・大徳六年、1246～1302）と趙孟頫の題跋（47 歳、京都財団法人藤井齊成会有隣館蔵）があり、王羲之《快雪時晴帖》冊の後に趙孟頫（65 歳、国立故宮博物院蔵）と劉廣（宋・淳祐八年～致和元年、1248～1328）、護都沓児（生卒年不詳、延祐二年首科状元）の題跋が揃って並んでいる。この類は真跡の可能性が比較的高いと言える。

3、約定成俗の作品（従来より真跡だとされているもの）：この類は古くから真跡とされている作品を指す。例えば、《蘭亭十三跋》（57 歳、東京国立博物館蔵）、《三門記》（無紀年、東京国立博物館蔵）が挙げられる。1、と 2、は真跡の可能性がかなり高い、3、は新資料の出現によって真偽二説にわかれることもしばしばだが⁸²、先人の鑑定を経たものなので、総じて真跡である

⁸²例えば、現在でも先述した《漢汲黯伝》を真跡だとする研究がある。張光賓氏が鑑定を行う前は真跡だとされていたが、近年は兪和説が有力となっ

可能性も高い。本論では、この3点を基準として、厳選した趙孟頫書跡について考察を行う予定である。

（二）、編年

作品の真偽が明らかになれば、伝世遺品を時系列に沿って整理することができる。この作業を編年という。編年作業では、その作品と書風の特徴が近い作品があれば、その作品はそれと同じ年代に帰納される。また、書風に違和感のある作品に遭遇した際は、その違和感がどこから来るものなのか検討しなければならない。真偽鑑定に何らかの誤りがあるのか、何か特別な理由があって書風に変化が生じたのかなど、その背景を再考する必要がある。

編年の作業にはもう一つ重要な意義がある。それは歴史の真相を詳らかにすることである。例えば、趙孟頫書《道德經》（63歳、北京故宫博物院蔵）の落款は「為進之高士書于松雪斎」とあるが、これが真跡だとすれば、当時大都にいたはずの趙孟頫が何らかの理由で南方の「松雪斎」に戻り、《道德經》を制作したことになる。文人の書斎名は居場所によって変わるはずだと筆者は考える。ところが、63歳に趙孟頫が南方に帰ったという記録は文献には見当たらず、その可能性は極めて低いことから、後人による偽作の可能性は否定できない（第二章で検討する）。一方、無紀年の作品の分類は最も難しいが、書風研究を信頼できる判断材料とする前提の下、線質、結体、章法から作品同士を比較対照すれば、おおよその制作年代が推定できる。第一章で検討する《陋室銘》はその一例である。

（三）、分期

以上二つの研究基礎があって始めて分期が可能となる。分期は編年の意味

ている（詳細は本論の第二章の第二節を参照）。

に近いが、ある理由に基づいて時期を区切り、早・中・晩期や早・中・中晩・晩期のように分ける。分期は非常に大雑把で恣意的でもあるが、そもそも分期によって何かを具体的に示すこと自体が難しい。例えば、中国書法史では、殷、周、春秋戦国から清代、民国という風に、時代（歴史的時間）ごとに区切られているが、同時代の書法表現に必ずしも共通性が見出せるわけではない。この難問を解決するために、角井博氏は新たな法則を示唆した。角井氏いわく、「中国書道史上最大の事件は、光緒二十五（1899）年に確認された甲骨文の存在である。それから百余年、とりわけ近 50 年における夥しい考古学上の発掘の成果は、書道史研究に大きな広がりをもたらしている。」と述べている⁸³。このような論述は角井氏が中国各時代の書法の特徴（分期）を理解した上で、その中で最も重要な事件は何か、そしてそれを最も重要とする理由は何かという呼びかけでもある。このような示唆は、今後の書法、絵画などの芸術表現の分期研究において重要な課題の一つになるのではないと思う。

先述した通り、宋濂や呉栄光、そして現代の研究者がどれほどの趙孟頫書跡を見て、どういった基準で 2 期から 4 期に分期したのか、詳細はわからない。しかし、本研究は【表 1】で示した遺品から、まず書体を基準として、同様の性質を有する書跡を時間で区切りたいと思う。このような分期法は書法的特徴（用筆、結体、章法）の分析から得られるものであり、これまでの抽象的な研究結果よりも信頼性が高いと思われる。当然、例外も考えられるが、一定の基準（法則）に従って、それを意識しながら検証していきたい。更に、いくつかの分期の中で、最も大きな画期（画期的な表現）に属する作品とその背景について考え、作品が明確に分類できる理由と、趙孟頫個人の

⁸³角井博「書道史を学ぶにあたって」『決定版中国書道史』（芸術新聞社、2009）、頁 5 を参照。

書家としての生涯が書史上で持つ意味の大きさも合わせて説明したい。こうした作業によって本論の研究意義も自ずと引き出されることになる。

上述した本論の研究方法を要約すれば、墨跡の遺品と法帖資料、文献資料3者の相互関係に配慮しつつ、1: 楷書（碑文書法、小楷書法）→行書への今・章草混用→四書体混用、2: 真偽→編年→分期→画期（画期的な表現）の提示の順に検証していきたいと思う。

第四節 予測される研究成果

上述した研究課題と研究方法を整理して論点を明確にし、考察していく際に、新たな視点に加えて新たな資料を提出するとともに、本論により期待されるいくつかの研究成果について考えたい。

一、伝存作品（数量、真偽、編年）の再確認

まずは伝存作品を網羅し、真偽及び無紀年書跡の編年の再確認を研究目的の一つとしたい。これについては本論文の各章で検討するつもりである。第一章では、現存する趙孟頫の碑文書法の真偽と《陋室銘》の編年を具体的に示したい。付節では、文献学的調査から従来より制作年代が定まらない《玄妙觀重修三門記》稿の揮毫年代を更に絞り込み、書法的特徴と文献考察を中心に制作年代を明らかにしたい。第二章では、趙孟頫の小楷書法に焦点を当て、真跡とされる《高上大洞玉經》、《大乘妙法蓮華經卷》第三卷と第五卷、《道德經》、《洛神賦》、《漢汲黯伝》、《六体千字文》、《臨黃庭經》全7点の小楷書法を再検討したい。第三章では、趙孟頫の行草書への章草体混用に着眼し、検討書跡の真偽を明らかにした上で、その表現の分期と独自性を探りたい。

い。第四章では、趙孟頫の四書体混用について考察する。~~この章節は、~~これまでの研究ではあまり注意されてこなかったテーマであるため、最晩年における四書体混用の再展開という問題設定から論を進めたい。併せて、趙孟頫書といわれる現存する7種類の作品、《山巨源与嵇叔夜絶交書》（《北京故宫本》と《台北故宫本》を中心に論じる）の真偽や《高峰和尚行状》（無紀年、北京故宫博物院蔵）の編年も明らかにしたい。第五章では、趙孟頫書法の専帖—《宝雪斋趙帖》を中心に、これまで考察されることのなかった《禊帖源流》、《襄陽歌》、《勉学賦并序》、《閑居賦》、《嵇叔夜与山巨源絶交書》5点の法帖の真偽と編年、そして《宝雪斋趙帖》の重要性と書史上の位置を明らかにしたい。

二、作品の分期及びその背景

ここまで、趙孟頫書法の研究を総合的に振り返り、第一節では、先行研究で2～4期に分期された趙孟頫書法の各分期説について述べた。第一章から第四章までは、性格の異なる現存の遺品を書体別（碑文書法、小楷書法、行草書への章草体混用、四書体混用）に考察し、先人とは異なる分期説を提起したい。また、これらの分期が発生した理由、その背景についても考えたい。趙孟頫の書法は、従来重要視されてきた宋高宗と二王（王羲之と王献之）、李北海（唐・儀鳳三年～天宝六年、678～747）によるものだけなのか、それとも、鍾繇（後漢・和平元年～魏・太和四年、151～230）から南宋人の書法、元時代の友人である鮮于枢や中峰明本（南宋・景定五年～元・至治三年、1263～1323）との墨縁も深い関わりがあるのか、更には元王朝の版図において、或いは中国書法史においても、趙孟頫個人による独創の可能性はないのかなど、研究仮説を立てつつ考察を進めていきたい。

三、伝存墨跡に対する法帖の補足効果

これまで筆者は貴重な文献資料と法帖の新資料を論文中に積極的に活用してきたが、こうした手法によって一定の研究成果が得られたと考えている。資料の積極的な活用は筆者の一貫した姿勢であり、非常に有効な研究方法であるため、本論でもこの精神を貫きたいと思う。第一章では、まず趙孟頫の法帖作品を改めて整理し、拓本資料の《鮮于府君墓誌銘》帖、《空相寺殘碑》帖、《頭陀寺碑》帖も参考に考察を進める。これによって趙孟頫書跡の系譜や学書の来歴が一層明確になるだろう。また、先述した韓国国立中央図書館でのフィールド調査で見つけた《翺風七月賛》帖は、元代以降の後人による「集趙字碑」である可能性があり、それを解明したいと思う。第四章では、《宝雪斎趙帖》所収の《勉学賦并序》帖を元に論を進める。これは趙孟頫最晩年における四書体混用再展開説の裏付けになると思われる。第五章では、趙孟頫の専帖に焦点を当てて論を展開したい。《宝雪斎趙帖》は民間による偽法帖ではなく、存世孤本（帖）の可能性が極めて高いこと、所収する法帖5点の資料的な価値の高さなども明らかにしたい。

四、異なる性格を有する遺品の相互関係

これまでの趙孟頫書法研究では、作品群の横の繋がりについてはあまり述べられていない。本論は、それぞれ性格の異なる遺品にも一定の関連性があることを意識し、各遺品間の関連を明確に示したい。一例を挙げると、第一章で検討する碑文書法の筆法は、楷書（碑文書法、小楷書法）だけに用いられたのではなく、第三章で検討する行草書、特に50歳頃以降、尺牘にも応用

されていることは、現存遺品からも看取できることを証明したい。このように、遺品の筆法や結体の特徴を捉えての検討は、現存する書跡の真偽だけでなく、無紀年作品の編年を判断するにも有益だと思われ、それぞれを結論に導きたい。

五、画期の提示

ここまでは、遺品の真偽、編年、分期などの解明を目的として考察を進めてきた。本論は、趙孟頫独自の書法とは何か、そして、中国書法史において大きな革新をもたらした画期的な表現とその背景を確認したい。本論の研究テーマや素材、研究方法は先行研究とさほど変わりはないが、趙孟頫書法の画期の提示という発想と予測される研究成果は、従来の趙孟頫書法の分期研究から一步前進することができる上、過去の抽象的かつ恣意的な研究成果と比較した場合、これまでになかった全く新しい説が提起できるはずであり、それによって本論の研究意義を証明したい。

小結

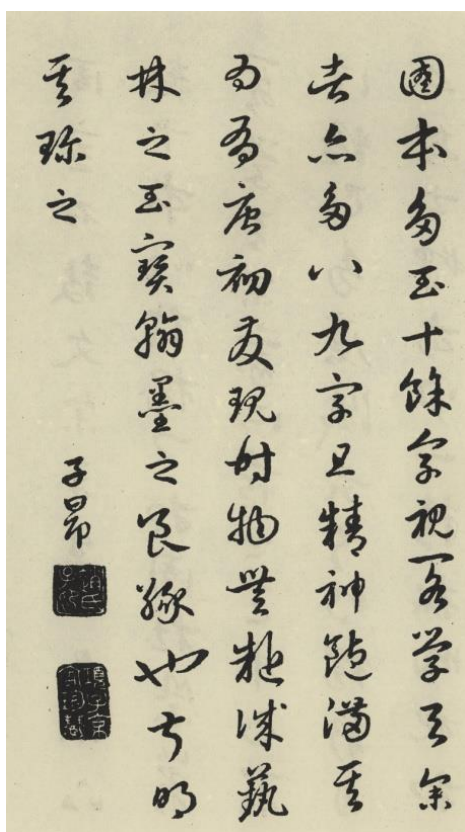
本章では主に 1956 年の外山軍治以降の趙孟頫書法に関する研究史を回顧した。先行研究の正確性と合理性を踏まえたうえで、根本的かつ重要な問題点を抽出して三つの課題を設定しており、そこから五つの研究成果が期待できる。遺品の性格を考えながら、書体別に検証を行うことで考察を進めたいと思う。書体の検証では、趙孟頫の書法それぞれの真偽を踏まえた上で、学書背景、書風の変遷から書体別の分期、無紀年書法の編年の可能性を中心に考察したい。最後に、各書体の表現手法や特徴を元にして各作品間に横の繋

がりが見られるかどうかを確認したい。また、作品を全般的に見た際に、趙孟頫書法の中に明確な画期が存在するかどうか、その理由と背景に対する説明と合わせて結論に導きたい。

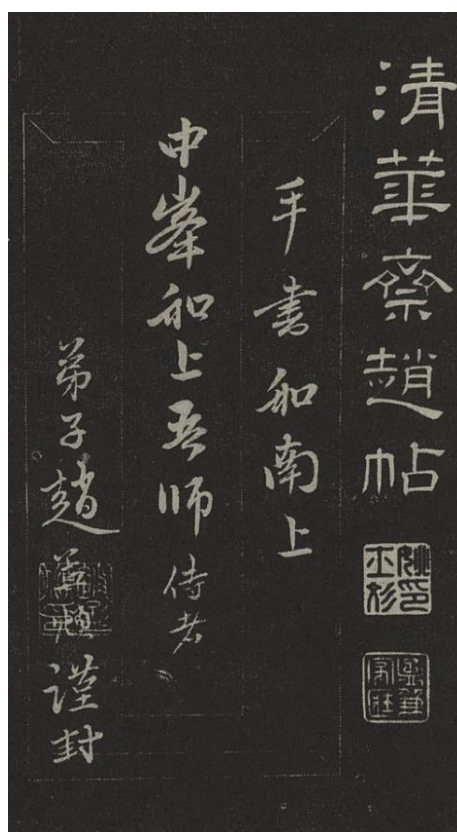
【図1】《慶曆本化度寺碑》上の「趙氏子昂」印



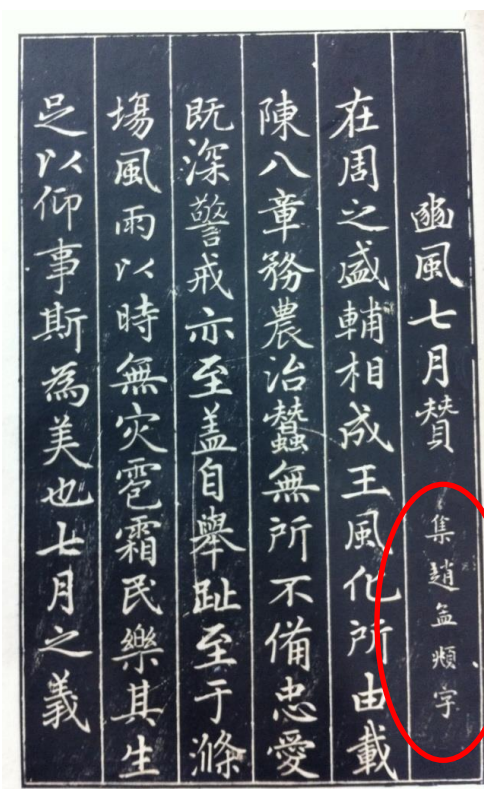
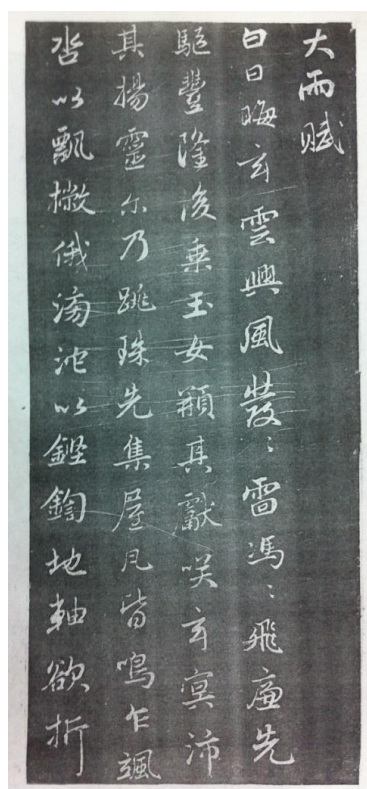
【図2】趙孟頫跋《石鼓文》



【図3】《清華齋趙帖》（部分）



【图4】赵孟頫《大雨赋》帖（部分）【图5】赵孟頫《豳風七月贊》帖（部分）



【表1】趙孟頫年表

西紀	年号	干支	年齢	事跡	書画関係記事	備考
1254	宋・宝佑二年 (蒙古・憲宗4)	甲寅	1	呉興で與峇の第7子として生まれる。		
1258	宝佑六年	戊午	5	呉興の小学校入学。書法はすでに地方の人々に重んじられるほどの腕前だったという。		
1262	景定三年 (蒙古・中統3)	壬戌	9	呉興で管道昇（仲姫）誕生。		
1263	景定四年 (蒙古・中統4)	癸亥	10	中峰明本誕生。		
1265	宋・咸淳元年 (蒙古・至元2)	乙丑	12	父の與峇死去（1213年生）。母の丘夫人の言い付けを聞き、勉強に専念。		
1267	宋・咸淳三年	丁卯	14	父の逝去を受けて出仕。後に吏都の試験に合格して真州の司戸参軍となる。		
1276	宋・徳祐二年 (蒙古・至元13)	丙子	23	3月、元軍が臨安に入り、宋の恭帝と太后、皇族らを捕らえて大都に送る。		
1279	宋・祥興二年 (元・至元十六年) (世祖)	己卯	26	南宋滅亡。呉興在住。独学しながら敖繼公に師事。		
1282	元・至元十九年	壬午	29	程鉅夫が初めて江南に下り、趙孟頫に出会い出仕を薦める。趙孟頫が断ると、程鉅夫はその忠義に感動する。	《杜甫秋興詩》を揮毫。	現存する最も早い時期の真跡。
1284	元・至元二十一年	甲申	31	呉興在住。	書店で《淳化閣帖》祖本の巻二、五、八を入手。	
1285	元・至元二十二年	乙酉	32	呉興在住。	5月、《淳化閣帖》祖本の巻一、三、四、六、七、八、十、計七巻を入手。 6月、杭州にて第九巻を入手し、全十巻がそろふ。	
1286	元・至元二十三年	丙戌	33	11月、行台治事侍御史程鉅夫が世祖の詔を奉じて江南に人材を求め、20餘人を得る。趙孟頫はその筆頭として推薦される。 12月、大都に赴く。	大都へ向かう途中、甥の張景亮に行書と草書千字文を書いて与える。	
1287	元・至元二十四年	丁亥	34	世祖に拝謁し、政治に関する諮問に答える。 6月、奉訓大夫・兵部郎中に任ぜられる。	6月、鮮于樞の依頼で《鮮于府君墓誌銘》を揮毫。 8月、杭州で周密に会い、王献之《保母碑》の跋文を書く。 9月、王羲之《曹娥碑墨跡》、《大道帖》の跋文を書く。	
1288	元・至元二十五年	戊子	35	春、呉興に戻り、管道昇と結婚。	夫人に頼まれ、王羲之《黄庭經》を模写。	《黄庭經》模本は偽作である。本論の第二章で明らかにした。
1290	元・至元二十七年	庚寅	37□	5月、集賢直学士・奉議大夫となる。		

1291	元・至元二十八年	辛卯	38□	趙雍（仲穆）誕生。	8月、小楷《過秦論》を書いて石民瞻に与える。 冬、石民瞻が《過秦論》を杭州に持ち帰って鮮于樞、郭天錫に見せ、賞賛される。鮮于樞は「子昂篆、隸、正、行、草、顛草、皆為当代第一。小楷はまた諸書の第一。」と題を入れる。	
1292	元・至元二十九年	壬辰	39□	1月、朝列大夫・同知済南路總管府事兼管本路諸軍奥魯に任ぜられ、済南へ転居。		
1294	元・至元三十一年	甲午	41	済南在住。		
1295	元・元貞元年（成宗）	乙未	42□	成宗は『世祖実録』の編集に際し、趙孟頫を済南から大都へ召出し、史館に籍を置かせて編集に参加させる。 6月、世祖実録完成。 病を得て退官し、夫人とともに呉興へ帰り、先祖の墳墓を修めた。	8月、《空相寺》碑を揮毫。 大都から戻った趙孟頫は入手した書画を故郷の友人に披露。	
1296	元・元貞二年	丙申	43	病のため、江南にて療養。		
1297	元・大徳元年	丁酉	44□	太原路汾州知州兼管本州諸軍奥魯勸農事に任ぜられたが、赴任前に大都に召出されて藏経を金書。 鄧文原、金寿之、邱子正等20餘人を推薦し大都に赴く。 8月、江浙等处儒学提舉・集賢直学士となる。任期満了まで杭州に留まる。	12月、《先侍郎趙與峕阡表》を作成。	
1299	元・大徳三年	己亥	46□	8月、集賢直学士・行江浙等處儒学提舉となる。		
1300	元・大徳四年	庚子	47□	杭州在住。	6月、密印寺力法師のために《頭陀寺碑》を書いて与える。	
1303	元・大徳七年	癸卯	50□	杭州在住。	牟巖撰文の《玄妙觀重修三清殿記》を揮毫。	50～52歳までが一つの画期にあたる。
1305	元・大徳九年	乙巳	52□	杭州在住。	甥に代わって亡くなった五兄のために《五兄壙志》を揮毫。	《玄妙觀重修三門記》の揮毫年代はこの年を下限とできる。第一章付節で明らかにした。
1307	元・大徳十一年	丁未	54□	杭州在住。		鮮于樞の五周忌に詩《哀鮮于伯幾》を詠み、友の死を悼む。
1308	元・至大元年（武宗）	戊申	55□	杭州在住。 集賢直学士・朝列大夫・前行江浙等處儒学提舉となる。		
1309	元・至大二年	己酉	56□	7月、中順大夫・揚州路泰州尹兼勸農事となる。		

1310	元・至大三年	庚戌	57□	泰州（江蘇）赴任前に皇太子（のちの仁宗）から召出される。8月、夫人とともに郷里を出発、大都へ赴く。10月、大都到着。翰林侍讀学士・知制誥・同脩国史に任ぜられる。	《定武蘭亭》を独孤長老より入手。9～10月、大都へ向かう舟中で《蘭亭十三跋》を揮毫。	
1311	元・至大四年（仁宗）	辛亥	58□	大都在住。3月、仁宗即位。5月、集賢侍講学士・中奉大夫となる。従二品の例をもって二代に推恩され、夫人は呉興夫人に封ぜられる。	2月、長男の由亮逝去。その冥福を祈って《金剛般若波羅蜜經》を揮毫。	
1312	元・皇慶元年	壬子	59□	大都在住。春、皇慶に改元。趙孟頫の父と祖父に封贈。5月、管夫人とともに帰郷。先人のために碑を建立。夫人は管公樓孝思道院を建立し、道士に父母を祀らせる。		
1313	元・皇慶二年	癸丑	60□	大都在住。召出されて、管夫人とともに大都に赴く。6月、翰林侍講学士・知制誥・同脩国史となる。11月、集賢侍讀学士・正奉大夫となる。	元旦、仁宗のために杭州にて《万年歡》を制する。	
1314	元・延佑元年	甲寅	61□	大都在住。12月、集賢学士・資徳大夫となる。		
1315	元・延佑二年	乙卯	62□	大都在住。	3月、《重陽宮勅藏御服碑》を書く。9月、《法華經》七巻を書く。	《法華經》は偽作である。第二章で明らかにした。
1316	元・延佑三年	丙辰	63□	大都在住。7月、翰林学士承旨・榮祿大夫・知制誥・兼脩国史となる。一品の例をもって三代に推恩され、夫人は魏国夫人の位を贈られる。	《某院記》残稿、《帝師胆巴碑》稿を書く。	
1318	元・延佑五年	戊午	65□	大都在住。冬、管夫人の足の持病が悪化。程文海（鉅夫）卒（1249—）。	王羲之《快雪時晴帖》の跋文を書く。	
1319	元・延佑六年	己未	66□	大都在住。4月、許可を得て管夫人とともに大都を離れ、帰郷の途につく。5月10日、臨清（山東）で夫人死去（1262—）。次子由雍とともに柩を守って呉興に帰る。冬、仁宗は趙孟頫を大都に召出そうとしたが、病のためかなわず。		66～68歳は二つ目の画期にあたる。
1320	元・延佑七年（英宗）	庚申	67	呉興在住。宋高宗、賈似道が収蔵していた《洛神賦》を入手。	1月、《杭州福神觀記》稿を書く。2月、《絶交書》を書く。	《絶交書》は偽作。第四章で明らかにした。

1321	元・至治元年	辛酉	68	<p>呉興在住。</p> <p>春、英宗が使を遣って旨を伝え、《孝経》を書かせる。その後、致仕を乞うたが認められず。</p>	<p>3月22日、中峰明本《勉學賦並序》を書く。</p> <p>12月、自作杜甫《秋興四詩》の跋文を書く。</p>	
1322	元・至治二年	壬戌	69	<p>呉興在住。</p> <p>6月15日、趙孟頫死去。</p> <p>江浙行省平章事を贈られ、魏国公に封ぜられる。諡号は文敏。</p> <p>8月、揚載が趙孟頫の事跡を著す。</p> <p>9月、次子由雍が柩を奉じ、管夫人とともに徳清県千秋郷東衡山原に合葬する。</p>	<p>5月、王献之《洛神賦》を臨模。</p>	

【表2】伝存する趙孟頫遺品

備考欄に作品の真偽が疑われる理由：

- ・書物や展覧図録に所収されているが、真跡と判断するに足る根拠、または研究発表が見られない作品。
- ・款識印記のみ趙孟頫と関わりのある作品。
- ・拓本のみで、肉筆の遺品が確認できない作品。
- ・本論で帰納した各書体の時期区分に当てはまらず、書風に違和感があり、更なる研究が必要だと思われる作品。

廟号紀年 (西暦)	干支	年齢	真跡数	作品名	種類	図版出典	収蔵先	真偽	備考
至元十六年 (1279)	己卯	26		明肅樓記	碑文書法	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至元十七年 (1280)	庚辰	27		自書詩帖	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至元十九年 (1282)	壬午	29	1	杜甫秋興詩	詩翰	中国書法全集 43	上海博物館	真	
至元二十三年 (1286)	丙戌	33	2	草書千字文	古典臨書	中国書法全集 43	上海博物館	真	意臨
至元二十三年 (1286)	丙戌	33	3	無名氏曹娥碑	題跋款識	中国歴代書画鑑別文集	遼寧省博物館	真	
至元二十四年 (1287)	丁亥	34	4	王献之保母碑	題跋款識	中国書法全集 43	北京故宫博物院	真	
至元二十四年 (1287)	丁亥	34	5	王羲之大道帖	題跋款識	中国書法全集 43	国立故宫博物院	真	
至元二十五年 (1288)	戊子	35	6	与右之二札之一	尺牘	西川寧著作集 三	日本個人蔵	真	西川寧鑑定
至元二十五年 (1288)	戊子	35	7	与鲜于樞札	尺牘	中国書法全集 43	国立故宫博物院	真	黄惇、石風：約35歳
至元二十五年 (1288)	戊子	35		趙孟頫模黄庭經並写羲之換鵝図	模書	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：偽	
至元二十六年 (1289)	己丑	36	8	錢選八花図	題跋款識	墨跡大観 上	北京故宫博物院	真	
至元二十六年 (1289)	己丑	36	9	虞帖源流	詩翰	中国書法全集 43	国立故宫博物院	真	私見：約34～37歳
至元二十六年 (1289)	己丑	36	10	致野翁書蘭亭考帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宫博物院	真	私見：約34～37歳
至元二十八年 (1291)	辛卯	38		臨褚模蘭亭序	古典臨書	中国書法全集 43	個人蔵	真：黄惇 私見：偽	
至元二十八年 (1291)	辛卯	38	11	致丈人節幹除援未定帖	尺牘	吳派画九十年展	国立故宫博物院	真	単国強：至元二十八年
至元二十八年 (1291)	辛卯	38	12	致希魏判簿條爾兩歲帖	尺牘	吳派画九十年展	国立故宫博物院	真	単国強：至元二十八年
至元二十九年 (1292)	壬辰	39		達摩像	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院 (後人倣本)	
至元二十九年 (1292)	壬辰	39	13	伝歐陽詢夢奠帖	題跋款識	中国書法全集 43	遼寧省博物館	真	
至元二十九年 (1292)	壬辰	39		太上老君說常清静經	仏道經典	中国書法全集 43	フリーア・ギャラリー	真：傳申 私見：偽	
至元三十年 (1293)	癸巳	40	14	韓混五牛図（前段）	題跋款識	墨跡大観 上	北京故宫博物院	真	
元貞元年 (1295)	乙未	42		惜蒼蠅文	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	
元貞元年 (1295)	乙未	42	15	釣突泉詩	詩翰	中国書法全集 43	国立故宫博物院	真	
元貞元年 (1295)	乙未	42	16	致民瞻宰公許惠碧盞札	尺牘	上海博物館蔵書法積文選	上海博物館	真	単国強：元貞年間
元貞元年 (1295)	乙未	42	17	致晋之足下数日帖	尺牘	故宮歴代法書全集 14	国立故宫博物院	真	単国強：元貞年間
元貞元年 (1295)	乙未	42	18	致野堂提舉不望風采帖	尺牘	故宮歴代法書全集 14	国立故宫博物院	真	単国強：元貞年間
元貞元年 (1295)	乙未	42	19	蘭亭帖	題跋款識	墨跡大観 上	北京故宫博物院	真	

元貞元年 (1295)	乙未	42		鵲華秋色図	題跋款識	墨跡大観 上	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 偽：丁羲元	
元貞二年 (1296)	丙申	43		鮮于樞趙孟頫千字文 合卷	題跋款識	中国書法全集45	不詳	真：楚默 私見：存疑	
元貞二年 (1296)	丙申	43		劉松年樂志論図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
元貞二年 (1296)	丙申	43	20	致民瞻宰公不聞動靜 札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	21	致民瞻宰公雨中悶坐 札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	22	致民瞻宰公雨中札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	23	致民瞻宰公令弟文書 札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	24	致仁卿學士翡翠石札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	25	致民瞻宰公厚貺札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	26	致民瞻宰公煬発於餐 札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	27	致季統山長付至紙素 帖	尺牘	故宮歴代法書全集 14	国立故宫博物院	真	単国強：元貞二年
元貞二年 (1296)	丙申	43	28	人馬図	題跋款識	趙孟頫画集	メトロポリタン 美術館	真	
大徳元年 (1297)	丁酉	44	29	二賛二図詩帖	詩翰	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳元年 (1297)	丁酉	44	30	与右之二札之二	尺牘	西川寧著作集 三	日本個人蔵	真	
大徳元年 (1297)	丁酉	44		元趙孟頫留犢図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	
大徳元年 (1297)	丁酉	44	31	婦去來辞	詩翰	中国書法全集 43	上海博物館	真	
大徳元年 (1297)	丁酉	44	32	致民瞻宰公遠寄鹿肉 札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：大徳元年
大徳元年 (1297)	丁酉	44	33	致民瞻宰公便過徳清 札	尺牘	上海博物館藏書法積文 選	上海博物館	真	単国強：大徳元年
大徳二年 (1298)	戊戌	45		金剛經	仏道經典	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳二年 (1298)	戊戌	45	34	致徳輔教授奉答帖	尺牘	故宮歴代法書全集 14	国立故宫博物院	真	単国強：大徳二年
大徳二年 (1298)	戊戌	45	35	致徳輔教授李長帖	尺牘	故宮歴代法書全集 14	国立故宫博物院	真	単国強：大徳二年
大徳二年 (1298)	戊戌	45	36	致吉卿郎中前歳到杭 帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	単国強：大徳二年
大徳二年 (1298)	戊戌	45	37	致進之提挙病来月餘 帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	単国強：大徳二年
大徳二年 (1298)	戊戌	45	38	陸東之文賦	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	真	
大徳二年 (1298)	戊戌	45		陶淵明事跡	詩翰	羅家倫夫人張維楨女史 捐贈書画目錄	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳二年 (1298)	戊戌	45		前後赤壁賦図	詩翰	赤壁賦書画特展	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	
大徳二年 (1298)	戊戌	45		雙鉤水仙	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳二年 (1298)	戊戌	45		春山図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳二年 (1298)	戊戌	45		唐閻立本十八学士于 志寧書賛	題跋款識	故宮書画図録 21	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳二年 (1298)	戊戌	45	39	雪賦	詩翰	墨跡大観 上	山東省博物館	真	
大徳二年 (1298)	戊戌	45		春山間眺図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
約大徳二年 (1298)	戊戌	45	40	洛神賦	古典臨書	墨跡大観 上	プリンストン大 学付属美術館	真	為清夫書
大徳三年 (1299)	己亥	46		自画像頁	題跋款識	趙孟頫書画珍品回家展 特集	北京故宫博物院	私見：存疑	
大徳三年 (1299)	己亥	46	41	自題人騎図	題跋款識	趙孟頫画集	不詳	真	
大徳三年 (1299)	己亥	46	42	重題人騎図	題跋款識	趙孟頫画集	不詳	真	
大徳三年 (1299)	己亥	46		枯樹賦並図	古典臨書	趙孟頫画集	個人蔵	私見：存疑	
大徳三年 (1299)	己亥	46	43	致廉訪監司鄉人帖	尺牘	故宮歴代法書全集 14	国立故宫博物院	真	単国強：大徳三年 前
大徳三年 (1299)	己亥	46	44	前後赤壁賦口	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	真	
大徳三年 (1299)	己亥	46		疏林秀石図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 偽：王連起	

大徳三年 (1299)	己亥	46	45	宋高宗書孝經馬和之 絵図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	真	
大徳三年 (1299)	己亥	46		双驕図	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳三年 (1299)	己亥	46		篆書千文	古典臨書	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
江浙任上		46-56	46	致宗源總管度日札	尺牘	趙孟頫書画珍品回家展 特集	北京故宫博物院	真	
江浙任上		46-56	47	致宗源近見札	尺牘	趙孟頫書画珍品回家展 特集	北京故宫博物院	真	
江浙任上		46-56	48	致進之足下午涼帖	尺牘	修士論文	不詳	真	
江浙任上		46-56	49	致静心相干輕率帖	尺牘	修士論文	不詳	真	
江浙任上		46-56	50	致明遠提舉惠竹帖	尺牘	修士論文	不詳	真	
大徳四年 (1300)	庚子	47	51	洛神賦	古典臨書	中国書法全集 43	天津博物館	真	
大徳四年 (1300)	庚子	47		雪賦	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳四年 (1300)	庚子	47		蘭亭図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳四年 (1300)	庚子	47	52	古木散馬図	題跋款識	故宫書画図録 17	国立故宫博物院	真	
大徳四年 (1300)	庚子	47		唐狄梁公碑	碑文書法	書道芸術 7	不詳	真：中田勇次郎 私見：存疑	
大徳五年 (1301)	辛丑	48		五代南唐巨然秋山漁 艇図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳五年 (1301)	辛丑	48	53	前後赤壁賦	詩翰	故宫法書選	国立故宫博物院	真	
大徳五年 (1301)	辛丑	48		晴巒翠霏図	題跋款識	故宫書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳六年 (1302)	壬寅	49	54	蘭竹石図	題跋款識	趙孟頫書画珍品回家展 特集	不詳	真	
大徳六年 (1302)	壬寅	49	55	吳興賦	詩翰	中国書法全集 43	浙江省博物館	真	
大徳六年 (1302)	壬寅	49	56	水村図	題跋款識	趙孟頫書画珍品回家展 特集	北京故宫博物院	真	
大徳七年 (1303)	癸卯	50	57	玄妙觀重修三清殿記	碑文書法	書道芸術 7	台北個人蔵	真	
大徳七年 (1303)	癸卯	50	58	重江疊嶂	詩翰	故宫書画図録 17	国立故宫博物院	真	
大徳七年 (1303)	癸卯	50		急就章	古典臨書	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	
大徳七～九年 (1303～1305)		50～ 52	59	玄妙觀重修三門記	碑文書法	墨跡大観 下	東京国立博物館	真	
大徳七～九年 (1303～1305)		50～ 52	60	陋室銘	詩翰	文物天地 10	広東省博物館	真	
大徳八年 (1304)	甲辰	51		紅衣西域僧図	題跋款識	趙孟頫書画珍品回家展 特集	遼寧省博物館	私見：存疑	
大徳八年 (1304)	甲辰	51	61	周文矩子建採神図	題跋款識	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳八年 (1304)	甲辰	51		高上大洞玉経	仏道經典	オークション図録	個人蔵	私見：存疑	
大徳八年 (1304)	甲辰	51	62	致彦明郎中宗陽宮帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳九年 (1305)	乙巳	52		王羲之書事帖	詩翰	中国書法全集 43	個人蔵か	真：傅申、黄惇 私見：存疑	傅申：大徳年間後 期
大徳九年 (1305)	乙巳	52	63	雜書三段帖（前段）	詩翰	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳九年 (1305)	乙巳	52		高士大洞玉経	仏道經典	中国書法全集 43	天津博物館	真：黄惇 私見：存疑	
大徳九年 (1305)	乙巳	52	64	致兄長教授遠達帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳九年 (1305)	乙巳	52		九歌書画冊	詩翰	趙孟頫画集	紐約市美術館か	偽：徐邦達	
大徳十年 (1306)	丙午	53		蘇軾古詩	詩翰	墨跡大観 上	国立故宫博物院	私見：存疑	
大徳十年 (1306)	丙午	53	65	雜書三段帖（中段）	詩翰	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳十年 (1306)	丙午	53		唐人九老図	題跋款識	趙孟頫画集	不詳	私見：存疑	
大徳十年 (1306)	丙午	53	66	致德輔教諭近來吳門 帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳十年 (1306)	丙午	53	67	致總管相公過蒙帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳十年 (1306)	丙午	53	68	与国賓山長入城帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
大徳十年 (1306)	丙午	53	69	致達觀長老惠書帖	尺牘	修士論文	北京故宫博物院	真	

大徳十年 (1306)	丙午	53	70	致明遠提举柔毛帖	尺牘	墨跡大観 下	国立故宫博物院	真	
大徳十一年 (1307)	丁未	54	71	松江宝雲寺記	碑文書法	墨跡大観 上	不詳	真	
至大元年 (1308)	戊申	55	72	故總管張公墓誌銘	碑文書法	中国書法全集 43	北京故宫博物院	真	
至大元年 (1308)	戊申	55	73	李衍墨竹図	題跋款識	欧米收藏中国法書名蹟集 3	ネルソン・ギャラリー	真	
至大元年 (1308)	己酉	55	74	歐陽詢化度寺碑	題跋款識	墨跡大観 上	北京故宫博物院	真	
至大元年 (1308)	己酉	55	75	止齋記	詩翰	墨跡大観 上	上海博物館	真	
至大二年 (1309)	己酉	56	76	望江南淨土詞十二首	詩翰	墨跡大観 上	不詳	真	
至大二年 (1309)	己酉	56	77	王獻之保母志	題跋款識	墨跡大観 下	北京故宫博物院	真	
至大二年 (1309)	己酉	56	78	硯帖源流	題跋款識	中国書法全集 43	国立故宫博物院	真	
至大二年 (1309)	己酉	56		急就章	古典臨書	墨跡大観 上	遼寧省博物館	偽：王連起	
至大二年 (1309)	己酉	56		急就章	古典臨書	墨跡大観 上	上海博物館	偽：王連起	
至大二年 (1309)	己酉	56	79	湖州妙嚴寺記	碑文書法	中国書法全集 43	プリンストン大学付属美術館	真	
至大二年 (1309)	己酉	56		桑寄生伝	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		山水図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		観泉図	題跋款識	青緑山水画特別展図録	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	
至大二年 (1309)	己酉	56		酔菊図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	
至大二年 (1309)	己酉	56		號国夫人夜遊図	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		竹院鳴泉図	題跋款識	故宮書画図録 4	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院（清人）	
至大二年 (1309)	己酉	56		人馬図	題跋款識	故宮書画図録 28	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		字跡口	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		百祿図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院（清人）	
至大二年 (1309)	己酉	56		山水図	題跋款識	故宮書画図録 28	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		山水図	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		牧馬図	題跋款識	故宮書画図録 4	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56	80	定武蘭亭帖	題跋款識	墨跡大観 上	国立故宫博物院	真	
至大二年 (1309)	己酉	56		燕文貴長江萬里図	題跋款識	故宮書画図録 15	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		蘇軾中山松醪賦	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56		湯王徵尹図	題跋款識	故宮書画図録 4	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院（明人）	
至大二年 (1309)	己酉	56		劉永年花陰玉兔図	題跋款識	故宮書画図録 15	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56	81	致中峰和尚承教帖	尺牘	静嘉堂文庫宋元版図録	静嘉堂文庫美術館	真	
至大二年 (1309)	己酉	56	82	管道昇致燾燾秋深帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
至大三年 (1310)	庚戌	57		趙伯駒滕王閣宴會図	題跋款識	故宮書画図録 16	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	
至大三年 (1310)	庚戌	57		汀草文鶯図	題跋款識	故宮書画図録 4	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大三年 (1310)	庚戌	57		画馬図	題跋款識	故宮書画図録 4	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大三年 (1310)	庚戌	57		夏木垂陰図	題跋款識	故宮書画図録 4	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大三年 (1310)	庚戌	57		貢瓘図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大三年 (1310)	庚戌	57		双駿図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大三年 (1310)	己酉	57	83	蘭亭十三跋	題跋款識	中国書法全集 43	東京国立博物館	真	
至大三年 (1310)	庚戌	57	84	臨静心本蘭亭序	古典臨書	中国書法全集 43	北京故宫博物院	真	
至大三年 (1310)	庚戌	57	85	崑山淮云院記	碑文書法	元代書法	北京故宫博物院	真	

至大四年 (1311)	辛亥	58		金剛般若波羅蜜經	仏道經典	書道芸術 7	宮内庁書陵部	真：神田喜一郎 私見：存疑	
皇慶元年 (1312)	壬子	59		国語晋文請隆	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
至大二年 (1309)	己酉	56	84	致中峰和尚承教帖	尺牘	静嘉堂文庫宋元版図録	静嘉堂文庫美術館	真	
至大二年 (1309)	己酉	56	85	管道昇致嬌嬌秋深帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
至大三年 (1310)	庚戌	57	86	管道昇致尊親家太夫人二兄久出帖	尺牘	墨跡大観 下	プリンス頓大 学付属美術館	真	
至大三年 (1310)	庚戌	57	87	管道昇致尊親家太夫人久疎上状帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
至大四年 (1311)	辛亥	58	88	致中峰和尚長兄帖	尺牘	静嘉堂文庫宋元版図録	静嘉堂文庫美術館	真	
至大四年 (1311)	辛亥	58	89	致季博提举草率帖	尺牘	修士論文	不詳	真	
皇慶元年 (1312)	壬子	59	90	致中峰和尚吳門帖	尺牘	中国法書選	北京故宫博物院	真	
皇慶二年 (1313)	癸丑	60		趙孟頫管道昇合作	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
皇慶三年 (1314)	甲寅	61	91	万寿曲	詩翰	中国書法全集 43	北京故宫博物院	真	
皇慶三年 (1314)	甲寅	61	92	唐国銓善見律	題跋款識	墨跡大観 上	北京故宫博物院	真	
延祐元年 (1314)	甲寅	61	93	韓滉五牛図（後段）	題跋款識	墨跡大観 上	北京故宫博物院	真	
延祐二年 (1315)	乙卯	62		名人書画貳冊（下）	題跋款識	故宮書画図録 29	国立故宫博物院	私見：存疑	
延祐二年 (1315)	乙卯	62		宋人耆英会図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
延祐二年 (1315)	乙卯	62	94	何澄帰莊図	題跋款識	趙孟頫画集	吉林省博物院	真	
延祐二年 (1315)	乙卯	62	95	続千字文	古典臨書	元代書法	北京故宫博物院	真	
延祐二年 (1315)	乙卯	62		妙法蓮華経卷三	仏道經典	悦目：中国晚期書画 下冊	個人蔵	真：王連起 私見：存疑	
延祐二年 (1315)	乙卯	62		妙法蓮華経卷五	仏道經典	小楷大乘妙法蓮華経	首都博物館	真：王連起 私見：存疑	
延祐三年 (1316)	丙辰	63		道德経	仏道經典	中国書法全集 44	北京故宫博物院	真：王連起 私見：存疑	
延祐三年 (1316)	丙辰	63		臨十七帖	古典臨書	中国書法全集 44	国立故宫博物院	真：傅申、黄惇 私見：存疑	
延祐三年 (1316)	丙辰	63	96	帝師胆巴碑	碑文書法	中国書法全集 43	北京故宫博物院	真	
延祐三年 (1316)	丙辰	63	97	酒徳頌	詩翰	中国書法全集 43	北京故宫博物院	真	
延祐三年以降 (1316)	丙辰	63	98	某院記残稿	碑文書法	書道芸術 7	不詳	真	
延祐三年 (1316)	丙辰	63		僧明本懷靜土詩	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
延祐三年 (1316)	丙辰	63	99	楊凝式夏熟帖	題跋款識	墨跡大観 上	北京故宫博物院	真	
延祐五年 (1318)	戊午	65		金剛般若波羅蜜經	仏道經典	趙孟頫書法全集	不詳	私見：存疑	
延祐五年 (1318)	戊午	65	100	王羲之快雪時晴帖	題跋款識	中国書法全集 43	国立故宫博物院	真	
皇慶元年 (1312)	壬子	59	101	致次山總管竊祿帖	尺牘	修士論文	個人蔵	真	
皇慶二年 (1313)	癸丑	60	102	致中峰和尚暫還帖	尺牘	静嘉堂文庫宋元版図録	静嘉堂文庫美術館	真	
皇慶二年 (1313)	癸丑	60	103	致中峰和尚幼女帖	尺牘	静嘉堂文庫宋元版図録	静嘉堂文庫美術館	真	
皇慶二年 (1313)	癸丑	60	104	致中峰和尚仏法帖	尺牘	静嘉堂文庫宋元版図録	静嘉堂文庫美術館	真	
皇慶二年 (1313)	癸丑	60	105	致中峰和尚亡女帖	尺牘	静嘉堂文庫宋元版図録	静嘉堂文庫美術館	真	
延祐五年 (1318)	戊午	65	106	致中峰和尚叨位帖	尺牘	元代書法	北京故宫博物院	真	
延祐五年 (1318)	戊午	65		張公芸九世同居図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
延祐五年 (1318)	戊午	65	107	婦去來辞	詩翰	趙孟頫書画珍品回家展 特集	湖州市博物館	真	
延祐五年 (1318)	戊午	65	108	懷素論書帖	題跋款識	中国書法全集 44	遼寧省博物館	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	109	嵇叔康与山巨源絶交書	詩翰	元代書法	北京故宫博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66		洛神賦	古典臨書	元代書法	北京故宫博物院	真：王連起 私見：存疑	
延祐六年 (1319)	己未	66		九歌図并書	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院	

延祐五年 (1318)	戊午	65	110	致園中提舉東衡帖	尺牘	修士論文	吉林省博物館	真	
延祐五年 (1318)	戊午	65	111	致進之提舉不蒙惠字帖	尺牘	元代書法	北京故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	112	致中峰和尚俗塵帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	113	致中峰和尚南還帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	114	致中峰和尚醉夢帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	115	致中峰和尚兩書帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	116	致中峰和尚還山帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	117	致中峰和尚丹葉帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	118	致進之提舉去家帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	119	仇鏐墓志銘	碑文書法	書道芸術 7	陽明文庫	真	
延祐六年 (1319)	己未	66	120	雜書三段帖（後段）	詩翰	元代書法	北京故宮博物院	真	
延祐六年 (1319)	己未	66		四体千文	古典臨書	オークション図録	個人蔵	真：王連起 私見：存疑	
延祐七年 (1320)	庚申	67	121	道經生神章經	仏道經典	趙孟頫書画珍品回家展 特集	北京故宮博物院	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67	122	杭州福神觀記	碑文書法	中国書法全集 44	北京故宮博物院	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67		蘇軾西湖詩口	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
延祐七年 (1320)	庚申	67		畫錦堂記	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
延祐六年 (1319)	己未	66	123	致中峰和尚兩書帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67	124	致中峰和尚先妻帖	尺牘	中国書法全集 44	プリンス頓大 学付属美術館	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67	125	致中峰和尚山上帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67	126	致中峰和尚入城帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67	127	致中峰和尚塵事帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67		漢汲黯伝	詩翰	中国書法全集 44	永青文庫	真：黃惇 偽：張光寶	
延祐七年 (1320)	庚申	67	128	紅衣西域僧図	題跋款識	墨跡大観 上	遼寧省博物館	真	
延祐七年 (1320)	庚申	67		嵇叔康与山巨源絶交書	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：偽	
延祐七年 (1320)	庚申	67		蘭亭修禊図	題跋款識	羅家倫夫人張維楨女史 捐贈書画目錄	国立故宮博物院	私見：存疑	題跋が六体千字文 に近似
延祐七年 (1320)	庚申	67		六体千字文	古典臨書	墨跡大観 上	北京故宮博物院	偽：徐邦達	
至治元年 (1321)	辛酉	68	129	光福寺重建塔記	碑文書法	墨跡大観 上	上海博物館	真	
至治元年 (1321)	辛酉	68		宋人臨輞川図	題跋款識	故宮書画図録 17	国立故宮博物院	偽：国立故宮博物院	
至治元年 (1321)	辛酉	68		行草書千字文	古典臨書	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	偽：国立故宮博物院	
至治元年 (1321)	辛酉	68	130	隆教禪寺疏	詩翰	中国書法全集 44	天津博物館	真	
至治元年 (1321)	辛酉	68	131	趙氏一門三竹図	題跋款識	趙孟頫画集	北京故宮博物院	真	
至治元年 (1321)	辛酉	68	132	致景亮榮上帖	尺牘	修士論文	中国歴史博物館	真	
至治二年 (1322)	壬戌	69	133	致中峰和尚瘡癩帖	尺牘	中国書法全集 43	国立故宮博物院	真	
至治二年 (1322)	壬戌	69	134	杜甫秋興詩	題跋款識	中国書法全集 43	上海博物館	真	
至治二年 (1322)	壬戌	69		仏説阿彌陀經	仏道經典	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
至治二年 (1322)	壬戌	69	135	致成甫宰公旬日帖	尺牘	修士論文	北京故宮博物院	真	
至治二年 (1322)	壬戌	69	136	為牟成甫乞米帖	尺牘	修士論文	北京故宮博物院	真	
至正二年 (1342)		死後		吳興賦	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：疑	
無紀年			137	易元吉猴貓圖	題跋款識	易元吉猴貓圖	国立故宮博物院	真	張華芝：60歳以降
無紀年			138	閒居賦	詩翰	墨跡大観 下	国立故宮博物院	真	王連起：55歳以降 角井博：66歳以降

無紀年			139	蘇軾煙江疊嶂詩	詩翰	墨跡大觀 上	遼寧省博物館	真	
無紀年			140	双松平遠図	題跋款識	趙孟頫画集	メトロポリタン美術館	真	
無紀年			141	高克恭墨竹坡石図	題跋款識	趙孟頫画集	不詳	真	
無紀年			142	古木竹石図	題跋款識	趙孟頫画集	不詳	真	
無紀年			143	葵花図	題跋款識	趙孟頫画集	不詳	真	
無紀年			144	二体千字文	古典臨書	元代書法	北京故宮博物院	真	
無紀年				黃庭經	古典臨書	元代書法	北京故宮博物院	真：王連起 私見：存疑	
無紀年				洛神賦	古典臨書	元代書法	北京故宮博物院	真：王連起 私見：存疑	
無紀年			145	蘭亭序	古典臨書	元代書法	北京故宮博物院	真	
無紀年			146	行書千字文	古典臨書	元代書法	北京故宮博物院	真	
無紀年				秀石疏林図	題跋款識	趙孟頫画集	北京故宮博物院	真：王連起 私見：存疑	
無紀年				韓愈和盧朗中云夫寄 示盤谷子歌	詩翰	元代書法	北京故宮博物院	真：王連起 私見：存疑	
無紀年				七絶詩	詩翰	元代書法	北京故宮博物院	真：王連起 私見：存疑	
無紀年				陶淵明五言詩	詩翰	元代書法	北京故宮博物院	真：王連起 私見：存疑	
無紀年				致林道人札	尺牘	書道芸術 7	東京国立博物館	真：東京国立博物館 私見：存疑	
無紀年			147	高峰和尚行狀	詩翰	墨跡大觀 上	北京故宮博物院	真	
無紀年				道德經	仏道經典	書道芸術 7	龍谷大学	真：龍谷大学？ 私見：存疑	
紀年剥落				霜柯繫馬	題跋款識	故宮書画図録 4	国立故宮博物院	真：国立故宮博物院 私見：存疑	
無紀年				織図詩	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年				耕織図詩	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年				趙肅書母衛宜人墓誌	碑文書法	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	偽：国立故宮博物院	
無紀年				晴雲散帖	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年				朱子感興詩口	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	真：国立故宮博物院 偽：李郁周	
無紀年				小学	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年				陶詩	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年			148	再拜堦堂提舉友旧執 事	尺牘	墨跡大觀 下	国立故宮博物院	真	
無紀年			149	再拜進之提舉友愛執 事	尺牘	墨跡大觀 下	国立故宮博物院	真	
無紀年			150	再拜廉訪監司相公兄 閣下	尺牘	墨跡大觀 下	国立故宮博物院	真	
無紀年			151	晋之足下	尺牘	墨跡大觀 下	国立故宮博物院	真	
無紀年			152	付至紙素	尺牘	墨跡大觀 下	国立故宮博物院	真	
無紀年			153	奉記德輔教授友愛足 下	尺牘	墨跡大觀 下	国立故宮博物院	真	
無紀年			154	德輔教諭友愛足下	尺牘	墨跡大觀 下	国立故宮博物院	真	
無紀年				臨王羲之書冊	古典臨書	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年				致德敷總管帖	尺牘	故宮歷代法書全集 13	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年				致伝道帖	尺牘	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年			155	論裴行儉書法	詩翰	大汗の世紀：蒙元時代 の多元文化與芸術	国立故宮博物院	真	
無紀年			156	論虞世南書法	詩翰	大汗の世紀：蒙元時代 の多元文化與芸術	国立故宮博物院	真	
無紀年				書贊	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年				韋蘇州詩	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	偽：国立故宮博物院	
無紀年				致子敬教授尺牘	尺牘	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	

無紀年			157	致万户相公尊親家	尺牘	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	真	
無紀年				臨襄鮑帖	古典臨書	中国書法全集 44	国立故宫博物院	真：黄惇 私見：存疑	
無紀年				臨襄鮑帖	古典臨書	中国書法全集 44	国立故宫博物院	真：黄惇 私見：存疑	
無紀年				臨襄鮑帖	古典臨書	中国書法全集 44	国立故宫博物院	真：黄惇 私見：存疑	
無紀年			158	臨王羲之採菊帖	古典臨書	中国書法全集 44	国立故宫博物院	真	
無紀年			159	臨王羲之太常帖	古典臨書	中国書法全集 44	国立故宫博物院	真	
無紀年				元趙孟頫墨跡	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				泥金書孝經	仏道經典	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				詩說	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				行書七言律詩	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				題画詩	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				岳陽樓記	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				畫錦堂記	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				蘇軾稼說	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院 (詹仲和書)	
無紀年				說補標題	詩翰	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				橙黄橘綠	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				窠木竹石	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年			160	陳琳溪凫図	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	真	
無紀年				王詵漁村小雪図	題跋款識	故宫書画図録 16	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				甕牖図	題跋款識	故宫書画図録 17	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				山水	題跋款識	故宫書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				秋山仙奕図	題跋款識	故宫書画図録 17	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				西園雅集図	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	偽：国立故宫博物院 (明人)	
無紀年				松陰晚棹図	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				富春垂釣	題跋款識	故宫書画図録, 4	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				萬柳堂図	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				荷花水鳥図	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				画馬	題跋款識	故宫書画図録 4	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				箕子授書図并書洪範	詩翰	故宫書画図録 17	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				鮮于樞大書二十字	題跋款識	国立故宫博物院データ	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				調良図	題跋款識	故宫書画図録 28	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 偽：王連起	
無紀年				橫琴高士	題跋款識	故宫書画図録 28	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				宋徽宗真跡老蠶図	題跋款識	故宫書画図録 15	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				錢遡画牡丹	題跋款識	故宫書画図録 16	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				江山漁樂	題跋款識	故宫書画図録 28	国立故宫博物院	私見：存疑	
無紀年				趙幹冬景山水	題跋款識	故宫書画図録, 28	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				曲樹觀荷	題跋款識	故宫書画図録 29	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				松泉淪茗	題跋款識	故宫書画図録 28	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				群馬	題跋款識	故宫書画図録 28	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	
無紀年				無款冬景山水	題跋款識	故宫書画図録 28	国立故宫博物院	真：国立故宫博物院 私見：存疑	

無紀年			165	二羊図	題跋款識	墨跡大観 下	北京故宮博物院	真	
無紀年			166	趙伯驪万松金闕図	題跋款識	墨跡大観 下	北京故宮博物院	真	
無紀年			167	宋徽宗竹禽図	題跋款識	墨跡大観 下	北京故宮博物院	真	
無紀年			168	七兒一女帖	古典臨書	墨跡大観 下	北京故宮博物院	真	
無紀年			169	李衍四清図	題跋款識	墨跡大観 下	北京故宮博物院	真	
無紀年			170	遠遊篇	詩翰	元代書法	北京故宮博物院	真	
無紀年			171	為黃公望書快雪時晴大字	題跋款識	芸術巨匠：趙孟頫	北京故宮博物院	真	
無紀年			172	為中峰和尚書心經	仏道經典	中国書法全集 44	遼寧省博物館	真	
無紀年				中峰和尚詩	詩翰	趙孟頫書法全集	不詳	私見：存疑	
無紀年			173	秋聲賦	詩翰	中国書法全集 44	遼寧省博物館	真	
無紀年			174	送秦少章序	詩翰	墨跡大観 下	上海博物館	真	
無紀年			175	行書千字文	古典臨書	墨跡大観 下	北京故宮博物院	真	
無紀年			176	靈隱大川濟禪師塔銘	碑文書法	墨跡大観 下	上海博物館	真	
無紀年			177	真草千文	古典臨書	元代書法	北京故宮博物院	真	
無紀年				謝幼輿丘壑図	題跋款識	趙孟頫画集	プリンストン大学付属美術館	存疑	
無紀年			178	為日林上人書心經	仏道經典	書法叢刊	不詳	真	
無紀年				楞嚴經	仏道經典	書画經典國際學術研討會論文集	広東省博物館	私見：存疑	
無紀年				天冠山詩	詩翰	天冠山詩帖	不詳	偽：王連起	
無紀年				臨聖教序	古典臨書	書法叢刊	不詳	偽：王連起	
無紀年				參同契	詩翰	趙文敏參同契真蹟	不詳	私見：存疑	
無紀年				東坡次韻潛詩	詩翰	国立故宮博物院データ	国立故宮博物院	私見：存疑	
無紀年			179	雪岩和尚拄杖歌	詩翰	趙孟頫書画珍品回家展特集	上海博物館	真	
無紀年			180	南谷帖卷	尺牘	趙孟頫書画珍品回家展特集	上海博物館	真	
無紀年			181	道場何山詩帖	詩翰	趙孟頫書画珍品回家展特集	北京故宮博物院	真	
無紀年			182	出師表	詩翰	趙孟頫書画珍品回家展特集	北京故宮博物院	真	
無紀年			183	王羲之丙舍帖	題跋款識	趙孟頫書法全集	不詳	真	
無紀年				琴賦	詩翰	趙孟頫書法全集	不詳	私見：存疑	
無紀年				與鮮于樞行草合卷	詩翰	趙孟頫書法全集	国立故宮博物院	私見：存疑	

図版出典

【図 1】

…同文庫、美術館編『聴氷閣旧蔵碑拓名帖撰一新町三井家一』第二刷（財団法人三井文庫、三井記念美術館、2005）、頁 53。

【図 2】

…呉大澂『鐘鼎籀篆大觀』上（華正書局、1989）、頁 237。

【図 3】

…西川寧『西川寧著作集』第二卷（二玄社、1991）、頁 270。

【図 4】

…韓国国立中央図書館蔵（版權は韓国国立中央図書館所有）

【図 5】

…韓国国立中央図書館蔵（版權は韓国国立中央図書館所有）

第一章 趙孟頫の碑文書法

序

趙孟頫は宋太祖趙匡胤（後唐・天成二年～北宋・太平興国元年、927～976）の 11 世孫¹にあたり、元世祖、成宗、武宗、仁宗、英宗、五朝に仕えて翰林学士承旨榮祿大夫知制誥兼修国史などの職を歴任した。高貴な身分であったにもかかわらず、73 点もの碑文書法²が残されている。このような例は中国書法史上あまり見られないことから、その背景が実に興味深い。

この一群の碑文書法の中に、現存する真跡の碑文稿 12 点が含まれている³。筆者はこれまで①《玄妙觀重修三清殿記》【図 1】、②《玄妙觀重修三門記》【図 2】二稿（以下《二稿》と略す）の流伝史や書風について研究してきた⁴。

¹張榮慶「趙孟頫世系考（外二則）」『趙孟頫国際書学研究会論文集』（上海書店、1994）、頁 216～224 を参照。

²小川環樹等編『角川新字源 改訂版』（角川書店、2004）、頁 713 に「碑誌＝碑文。いしづみに書いた文章。また、その文体。生前の功德を述べたものが多い。墓に立てるものを墓碑、墓道に立てるものを神道碑、墓中に納めるものを墓誌銘という。同碑版。」とあることから、本章で述べる碑文稿とは碑文の稿本であり、碑文書法とは碑文稿と碑文拓本の包括的な総称とする（一部分は文献のみ）。なお、趙孟頫の法帖類の拓本は、本章の内容とは性質が異なるため、扱わないことにする。

³12 点の作品名は下記のとおりである。①《玄妙觀重修三清殿記》、②《玄妙觀重修三門記》、③《靈隱大川濟禪師塔銘》、④《松江宝雲寺記》、⑤《故総管張公墓志銘》、⑥《湖州妙嚴寺記》、⑦《平江路崑山州淮雲院記》、⑧《某院記残稿》（残本）、⑨《大元勅賜龍興寺大覺普慈広照無上帝師之碑》、⑩《有元故奉議大夫福建閩海道肅政廉訪使副仇府君墓碑銘》、⑪《杭州福神觀記》、⑫《光福寺重建塔記》。収蔵先や揮毫年代は【表 1】を参照。以下、それぞれの碑文稿を称する時は上記の数字（①～⑫）を略称として使う。

⁴拙文「趙孟頫書《三清殿記》と《三門記》二稿の流伝史をめぐって」『書芸術研究』第 5 号（筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2012）、頁 32～42 を参照。これを加筆し、付章として収録している。

趙孟頫の碑文書法稿に焦点を当てた先行研究も幾つか見られる⁵。ここでは本論の研究成果とも関連のある研究を一つ例に挙げる。方聞氏は、正統派と変革派が交互に勢を競った、中国書法史上の四つの革新において、趙孟頫の書がその四番目にあたる「元（1260～1368）時代の記念碑楷書体の再形成」という役割を担ったと高く評価しているが、そこにおける《二稿》の位置や、趙孟頫の碑文書法それぞれの性格や書風の変遷、背景について十分に触れているとは言えない⁶。

この 12 点の碑文稿の中では①の揮毫時期が最も早く、碑文から大徳七年（1303）10 月の書であることが知られ、趙孟頫がちょうど 50 歳の時の作品である。その後に揮毫された②の書風は①に近似している上、時期も大きく降らず、趙孟頫（南宋・淳祐十一年～元・大徳九年、1251～1305）の卒年の大徳九年（1305）を下限とすることができる⁷。この《二稿》の撰文者は牟巖（南宋・宝慶三年～元・仁宗元年、1227～1311）で、依頼者は趙孟頫の五兄趙孟頫である。顕彰の対象はともに蘇州に位置する玄妙観で、書風も近似しており、いくつかの共通点が見られる。本章は《二稿》の検証から出発し、趙孟頫の碑文書法の分期と独自性の解明を主な目的とする。これはまた本論文の問題点（一）への回答でもある。《二稿》の書法の形成は趙孟頫の碑文書

⁵姜一涵「趙孟頫書湖州妙嚴寺」『故宮季刊』第 10 卷、第 3 期（国立故宮博物院、1976）、頁 59～80。劉建華「趙孟頫書《蔚州楊氏先塋碑銘》考」『文物春秋』第 2 期（文物春秋雜誌社、1992）、頁 39～42。楊立言「趙孟頫的書法成就及他的《胆巴碑》」『陝西教育學院學報』第 3 期（陝西教育學院、1997）、頁 20～22。馬国莉、房樹輝「趙孟頫書《聖主本命長生祝誕碑》」『文物春秋』第 5 期（文物春秋雜誌社、2007）、頁 53～54。陳菁「元趙孟頫楷書《仇鏐墓碑銘》卷考」『上海博物館集刊』第 11 期（上海書畫出版社、2008）、頁 27～35 などに取り上げられる。

⁶方聞「中国の書—理論と歴史」『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（読売新聞社、2002）、頁 266 を参照。

⁷この大徳九年（1305）説は、趙孟頫の卒年より推測したものである。詳細は前掲注 4、頁 35～36 を参照。

法だけでなく、趙孟頫の書業全体において、画期的かつ重要なものであったと考えている。趙孟頫はこの《二稿》の書法作品を通して、如何にして新しい書法を創始したのか。そして、その背景には何があったのか。本論によってこれらの疑問を明らかにしたいと思う。更に、董其昌（明・嘉靖三十四年～崇禎九年、1555～1636）、陳繼儒（明・嘉靖三十七年～崇禎十二年、1558～1639）、李日華（明・嘉靖四十四年～崇禎八年、1565～1635）など、明代以降の先学による《二稿》の書風の由来に対する見解⁸と併せて検討したい。

第一節 伝存する趙孟頫の碑文書法

一、数量

桜井智美氏は、社会史、文化史的な視点から趙孟頫の碑文書法を資料として活用し、趙孟頫の元代における活動とその背景について考察している⁹。桜井氏の論文によると、趙孟頫の碑文書法は計 159 点ある。しかし、このデー

⁸董其昌以降の明、清人の論述は前掲注 4、拙文「趙孟頫書《三清殿記》と《三門記》二稿の流传史をめぐって」、頁 32～35 を参照。現代では、王連起氏は《二稿》について、李日華の説が道理にかなっていると述べ、「取蘇靈芝之姿媚而棄其甜俗、參六朝碑版而避其笨拙。」と補った（詳細は王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』（上海書画出版社、1995）、頁 788 を参照）。一方、黄惇氏は董其昌、陳繼儒、李日華の跋文に依拠して《二稿》書法の来歴を解釈し、「其重要特徴是絶去顔真卿面目、一掃中唐以後顔柳書碑大楷的習氣、却又保留了自唐代以来書碑大楷的精神、這正是後世所以將歐顔柳趙並稱楷書四大家的原因。」と趙孟頫の大字楷書の特徴を説明している（黄惇「從杭州到大都—趙孟頫書法評伝」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮宝齋出版社、2002）、頁 460 を参照）。しかし、二人の見解は抽象的で不明瞭である。上記の研究を踏まえ、本章では趙孟頫の碑文書法における《二稿》の位置づけを中心に考察し、具体的な知見の提示を試みたい。

⁹桜井智美「趙孟頫の活動とその背景」『東洋史研究』第 56 巻第 4 号（東洋史研究会、1998）、頁 33～84 を参照。

タは文献のみによる統計であり、現存する碑文稿や拓本で、そうした文献資料には収録されていないものもある。黄惇氏は杭州任官時代に着眼し、この時代に制作された碑文書法が約 20 点確認できるとしている¹⁰。王連起氏も趙孟頫の碑文書法は 100 点以上あるとしている¹¹。筆者はこの三人の研究を踏まえ、古籍文献、展覧会図録、台湾や中国など各国の図書館データベースを利用し、現存する碑文稿及び拓本を加えた全 188 点を改めて整理した。文献 108 点（真：44 点、存疑：64 点）、碑文稿 13 点、（真：12 点、偽：1 点）、拓本 67 点（真：17 点、偽：10 点、存疑：40 点）、計 188 点が確認できている【表 1】。

二、碑文書法の種類と制作背景

これら碑文書法の分類に際し、『北京図書館蔵北京石刻拓片目録』¹²をもとに、碑文稿は 4 種類（a. 墓碑、b. 墓誌、c. 廟宇、h. 雜刻）、拓本は 8 種類（a. 墓碑、b. 墓誌、c. 廟宇、d. 教育、e. 題名碑、f. 芸文、g. 題名と題字、h. 雜刻）に分けた【表 1】。趙孟頫が碑文書法を揮毫した背景について、黄惇氏は「江南儒学における最高官位の行江浙等处儒学提举の責務」だとしているが¹³、単なる職位上の責務だったとは言えまい。趙孟頫は早年から晩

¹⁰同前掲注 8、黄惇「從杭州到大都—趙孟頫書法評伝」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 16 を参照。

¹¹王連起「鮮于枢和他的書法芸術」『文物』総 412 期（文物出版社、1990）、頁 25、32 を参照。

¹²徐自強主編『北京図書館蔵北京石刻拓片目録』（書目文献出版社、1994）、凡例を参照。

¹³同前掲注 8、黄惇「從杭州到大都—趙孟頫書法評伝」、頁 16 を参照。これは『元史』第 8 卷、志（5）（中華書局、2005、頁 2312）に見られる「儒学提举司、秩從五品。各处行省所署之地、皆置一司、統諸路、府、州、県学校祭祀教養錢糧之事、及考校呈進著述文字。」を要約したものと思われる。

年まで、生涯を通して親族や友人のために多数の墓誌銘（《鮮于府君墓誌銘》（拓本）、《先侍郎阡表》（文献）などを書いており、皇帝の勅令で揮毫した⑨《大元勅賜龍興寺大覺普慈広照無上帝師之碑》稿も現代まで伝わっている。本章で取り上げる《二稿》は兄の趙孟頫に頼まれて書いたもので、趙孟頫は断りきれずに気が進まないまましかたなく揮毫した、そのような背景が碑文の内容を見ると理解できる。また、これら碑文書法の多くは寺院、道観との関わりも認められ、趙孟頫と仏教、道教との浅からぬ因縁も窺える。

三、真偽問題

趙孟頫の碑文書法は真偽が明らかになっていないものも多く、啓功氏、徐暢氏、王連起氏らが鑑定を行っている¹⁴。また、生卒年と一致しない碑文について桜井智美氏は、揮毫と立碑に時間差がある可能性を指摘している¹⁵。これらを踏まえ本論では、書風の面から真偽を再検討する必要がある作品があることも併せて提起したい。これに関しては、《上善池碑》拓本や《大元勅賜雍古氏家廟碑》拓本、《李志椿道行記碑》拓本などが挙げられる。先学による指摘のないものでも、書風や文献との照合から真偽が疑わしいものもあり、それらは「私見」と表記し、「偽」または「存疑」に分類して【表1】にまとめた。それらの内どの作品が後人の「集趙字碑」であるかに関しては、今後研究課題の一つとして関心を持ち続けたい¹⁶。そもそも当時、趙孟頫書法

¹⁴啓功「元人膳録《趙府君阡表》趙孟頫改削本」『啓功叢稿』題跋卷（中華書局、2000、頁209）、徐暢「趙孟頫書《蘇公政績記》考評—兼論幾個相關問題」（『趙孟頫国際書学研究会論文集』、上海書店、1994、頁216～224）、王連起「趙孟頫道教碑真偽考」『文物』第6期（文物出版社、1983、頁76～86）を参照。

¹⁵同前掲注9、桜井智美「趙孟頫の活動とその背景」、頁45を参照。

¹⁶序章で提起した《幽風七月賛》帖（韓国国立中央図書館蔵）には「集趙

字典のようなものが存在していたのかどうか、目下のところ、それを明らかにする術はないが、《趙孟頫致季宗源二札》（無紀年、北京故宮博物院藏）後の明・鄧韞（嘉靖年間に活動）の跋文に、「趙魏公書世多偽筆。予聞淞（浙）東、西、江東、仿公書者四百餘家。」との記載があり¹⁷、明時代にはすでに趙孟頫書法の贋作が氾濫していたと考えられる。この点に関しては第二章で検討したいと思う。

以下、本稿で扱う《鮮于府君墓誌銘》（拓本）、《空相寺殘碑》（拓本）は肉筆本ではないが、真偽を疑う研究はない。また、作品中にある「孟」字の「子」の横画がともに比較的長く、それが44歳までの落款の特徴¹⁸と合致することから、真跡だと見なしても問題はないと考えている。これらについても12点の碑文稿書法と併せて同時に考察を進めていきたい。

第二節 碑文書法の成立とその時代背景

かねてより多くの芸術史研究者が、より多角的な視点で元代芸術史を思考する必要があると訴えている。例えば、日本の中砂明德氏は米国の王妙蓮氏の論文を踏まえ、「芸術面では、逆に北との交流が江南を大いに活性化させた。」と結論付けている¹⁹。

台湾の石守謙氏は「元朝の書画芸術の発展は、参与者である漢族と非漢族の異なる種族背景という視点から描き出すことができる。換言すれば、芸術

孟頫字」が確認できた。これは《集王聖教序》と同様、趙孟頫の書法を集めて作品を作るやり方が元代でも引き続き行われていたと言ってもよかろう。

¹⁷王連起「趙孟頫《与季宗源札》攷」『書法叢刊』第3期（文物出版社、1995）、頁42を参照。

¹⁸拙文「元趙孟頫書〈禊帖源流〉卷賞析」『故宮文物月刊』第329期（国立故宮博物院、2010）、頁83を参照。

¹⁹中砂明德『江南 中国文雅の源流』（講談社、2002）、頁41を参照。

的風格に関連する各種の問いと答えは、みな、参与者とその文化環境とのアクションとリアクションの過程及び産物である。こういう風に理解し生れた考えこそ、元代書画芸術の実質である。」と述べている²⁰。

およそ 162 年続いた蒙元時代²¹は立碑が盛行していた。これは北京大学図書館に 2000 点を超える元碑の拓本が収蔵されていることから理解できる²²。このモンゴル王朝統治下に建造された碑文書法を調べると、伝統的な漢字碑のほか、モンゴル語を漢文に翻訳した白話碑やパスパ文字碑もある。碑文に使用された文字は 6 種類が確認されており、それらが考古資料として発掘されつつある。その中には、1345 年《居庸関石刻》拓本、1348 年《敦煌莫高窟六体文字碑》拓本【図 3】のように、6 種類の文字が一つの碑に上石されているものもある。これは中国書法史にも他に例のない、全く新しい遺品であるとされる²³。

次に、上記の研究視点と趙孟頫の碑文書法との関連について述べたい。従来、皇帝の勅令や職位上の責務など、特別な理由がない限りは、文人雅士が碑文の揮毫をすることはなかった²⁴。趙孟頫と同じく元初三大家と称される

²⁰石守謙「衝突与交融：蒙元多族士人圈中の書画芸術」『大汗の世紀 蒙元時代的多元文化与芸術』（国立故宫博物院、2001）、頁 202～219 を参照。引用は筆者の翻訳による。

²¹蒙元時代とは「大蒙古国」（1206～1259）と「元朝」（1260～1368）の二つの段階の併称である。詳細は蕭啓慶「蒙元統治与中国文化発展」『大汗の世紀 蒙元時代的多元文化与芸術』（国立故宫博物院、2001）、頁 186 を参照。

²²北京大学数字図書館古文獻資源庫：
<http://rbd1.calis.edu.cn/aopac/pages/Search.htm> による。

²³同前掲注 20、石守謙「衝突与交融：蒙元多族士人圈中の書画芸術」、頁 214 を参照。なお、石守謙氏論文に引用された《居庸関石刻》『中国民族古文字図録』（中国社会科学出版社、1990、【図 3 2 1】）の他、頁 346 に 1348 年に建立された《敦煌莫高窟六体文字碑》の存在も確認できる。いずれの碑も多元的な文化に彩られた元代において、多数の民族が共存していたことを証明するものである。

²⁴例えば、徐暢氏が漢碑の書者を官方書家、專業書家、民間書家・書手、職業書家または書手の 4 種類に分けている。詳細は徐暢「論東漢書芸的勃興」

鮮于枢、鄧文原（南宋・宝祐二年～元・至治二年、1258～1328）の碑文書法が極めて少ないことから理解できよう²⁵。趙孟頫は元々宋皇室の後裔であり、南宋から元に王朝が替わらなければ、その出自から考えるに、本来ならば碑文の揮毫などには一生縁がなかったはずである。しかし、趙孟頫は元朝に出仕するかどうか迷った結果、異民族の元王朝に仕える道を選択し、大都（現在の北京）と地方（杭州と蘇州）、南北を往還する間に、少なくとも 73 点の碑文書法を残した。これはそれまでの皇室にはできなかった偉業である。趙孟頫が当時、民族、言語、文化の違いによるカルチャーショックを受けながら、自分の意思、職務上の必要、その盛名を慕っての依頼など、様々な事情で碑文を揮毫する度に、何かを参考にし模索する中で、意識的に何らかの書風をもって表現しようとしたことが推測される。例えば、鍾繇風の《鮮于府君墓誌銘》拓本から褚遂良（隋・開皇 16 年～唐・顯慶 3 年、596～658）風の《空相寺碑》拓本に見られる書風の変遷には、意識的に書風を選んで書いていたことが窺える。また、南北が対峙する元代の社会的環境は、趙孟頫の碑文表現に何らかの影響を与え続けたはずである。このような社会に身を置いていた趙孟頫が南人の士大夫が経験できない事を体験し、目にしたことは、後の書表現の展開に一定の影響をもたらしたであろうことが推測できる。以下、《二稿》を中心に、趙孟頫の碑文書法の濫觴とその確立、展開について検討していきたい。

第三節 碑文書法の分期と画期

『漢碑研究』（齐鲁書社、1990）、頁 111～113 を参照。

²⁵鮮于枢《蕭山県新文廟碑陰記》拓本（中国国家図書館蔵、大徳三年立石）、《鮮于必強墓誌銘》拓本（『書法叢刊』第 1 期、1995 より引用）は 2 点、鄧文原《清居院記》（『中国書法』第 3 期、2001）は 1 点が確認できる。

一、碑文書法の濫觴

（一）、趙孟頫北上前の南北の書とその状況

趙孟頫が元王朝に仕える前、江南に滞在していた 20 代後半から 30 代前半にかけての書法は、宋高宗・趙構や智永（生卒年不詳、隋代に活躍）の影響が見られる。《杜甫秋興詩》（29 歳頃、上海博物館蔵）や《草書千字文》（33 歳、上海博物館蔵）など、その書風は優雅なものであった。同じく呉興八俊（敖君善、銭舜举、肖子中、張剛父、陳信仲、姚子敬、陳無逸、趙孟頫）の一人に列せられる銭舜举（南宋・端平二年～大徳七年以降、1235～1303 以降）が描いた《秋瓜図》（無紀年、国立故宫博物院蔵）にある銭舜举自身が書いた題跋を概観しても、当時の江南には南宋時代の「軽柔」（用筆）、「婉約」（結体）に代表される書風が残っていたことが窺える。それとは対照的に、北方の書人である王庭筠《幽竹枯槎図卷題辞》（無紀年、京都財団法人藤井斉成会有隣館蔵）や、金武元直《赤壁図》（無紀年、国立故宫博物院蔵）後の趙秉文（金・正隆四年～天興元年、1159～1232）の跋文、耶律楚材（西夏・乾祐二十年～元・皇后脱列哥那二年、1190～1243）《送劉滿七律詩》（51 歳、メトロポリタン美術館蔵）などに見られる、「遒勁」（用筆）、「豪放」（結体）というべき表現は、南方の書とは異なっている。その特徴として、紙幅に拘束されない章法、骨力のある筆画、転折の著しい圭角などが挙げられる。ここでは耶律楚材を例に挙げておく【図 4】。

（二）、最早期の碑文書法：《鮮于府君墓誌銘》拓本

趙孟頫の書表現の多くが、34 歳に大都に移住してから鍾繇風に変化している。伝王羲之《大道帖》（国立故宫博物院蔵）や《曹娥碑》（遼寧省博物館蔵）後の趙孟頫の跋文がこの間の名跡として挙げられる。その後、34 歳頃から 37

歳頃に揮毫した《褱帖源流》は、鍾繇風から晋・唐書法に変化しているのが見て取れる²⁶。その中の一つとして、肉筆は残っていないが、34歳（奉訓大夫兵部郎中任官中）の時に揮毫した《鮮于府君墓誌銘》拓本【図5】が挙げられる。これによって趙孟頫の碑文書法の濫觴が確認できる。書風を見ると、趙孟頫が「余往時作小楷、規模鍾元常、蕭子雲。」²⁷、「我時学鍾法、写君墓誌銘。」²⁸と学書履歴について自述しているとおり、鍾繇書法が基礎となっている。これは、31歳から32歳にかけて《淳化閣帖》全10巻を順次入手したことと関連があると思われる²⁹。

趙孟頫が39歳頃、済南（現在の山東省済南市）の朝列大夫同知済南路総管府事任職後に揮毫した《空相寺残碑》拓本【図6】、《済陽県廟学碑》拓本は、結体や用筆を見ると、初唐の褚遂良の書法に近似しており、碑文書法の書表現に意識の変化が認められる【図7】。その背景には北方の書環境の影響があると思われる。伝欧陽詢（南朝陳・永定元年～唐・貞観十五年、557～641）《夢奠帖》後の趙孟頫の跋文（39歳、遼寧省博物館蔵）から、集賢官庫にて欧陽詢《勸学帖》を目にしたことが知れる³⁰。この時期に大都の内府で歴代書法の名跡を目にした可能性が高い。いずれにせよ、済南任官時代に鍾繇風から初唐書法をベースにした書風へと変化している。独自の書風の確立に向

²⁶同前掲注18、拙文「元趙孟頫書〈褱帖源流〉卷賞析」、頁83を参照。

²⁷同前掲注8、作品考釈6「褱帖源流考小楷卷並信跋」『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44、頁454を参照。

²⁸趙孟頫著、黄天美点校「哀鮮于伯幾」『松雪斎集』卷3（西泠印社、2010）、頁43を参照。

²⁹同前掲注28、趙孟頫著、黄天美点校「閣帖跋」『松雪斎集』卷10、頁271～272を参照。これについては第三章で更に考察する。

³⁰伝欧陽詢《夢奠帖》卷末に「欧陽信本書、清勁秀健、古今一人。米老云、莊若对越、俊若跳躑、猶似未見其神奇也。向在都下見勸学一帖。是集賢官庫物。後有開元題識具全。筆意与此一同。但官帖是硬黄紙為異耳。至元廿九年、閏月望日為祐之兄書。吳興趙孟頫。」による。図版は前掲注8、『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁94を参照。

けて徐々に歩を進めてゆく、その基盤となったのがこの時期であり、注目すべき点であろう。

二、碑文書法の確立：南方で開花した《二稿》

済南を離れた趙孟頫は、江南に戻った後も碑文書法の揮毫を続けていた。例えば、大徳三年（1299）の《大成殿記》拓本や大徳四年（1300）《有元故征士王公墓誌銘》拓本が挙げられる。しかし、現在確認できる最早期の碑文書法の稿本は《二稿》しかない。前述のように、筆者は以前、《二稿》の流伝を全体的に把握した上で考察したので、ここではまず、《二稿》巻末にある明人の跋文を引用しつつ論を進めたい。

- ・賞鑑家謂玄妙觀碑酷似李邕岳麓碑。若見蘇靈芝鉄仏寺刻、弥見松雪翁書学来歴。此卷精彩可照四裔、更勝吾松亭林碑也。陳繼儒題。（①巻末の跋文）。
- ・熟觀李邕岳麓寺碑、乃知此碑之逼真、猶是集賢偏師耳。董其昌題。（②巻末の跋文）。
- ・越石於天啓之元（1621）得文敏所書殿記於清溪曹起莘家。展至後段、覺語脉齟齬、深以為惑。後三年、又得三門記於五茸何氏、閱之乃悟其首尾互装。向非越石嗜古徇奇、遇即收之、則延津之合難矣。文敏此書有泰和之朗而無其佻。有季海之重而無其鈍。不用平原面目而含其精神。天下趙碑第一也。不易得。不易得。崇禎己巳（1629）秋日。東吳李日華。（②巻末の跋文）。

《二稿》の来歴に近似する古典を見出そうと試みた先行研究もあるが、いまだ定説はない³¹。趙孟頫の碑文書法の臨書作品や、文献の「哀鮮于伯幾」文中の碑文書法に関する自述の他に、《二稿》に関連した記述が確認できない

³¹同前掲注4、拙文「趙孟頫書《三清殿記》と《三門記》二稿の流伝史をめぐって」、頁32～35を参照。

からである。以下、第一節で提起した蒙元王朝における書の時代背景を視野に入れつつ、《二稿》書法の来歴、特にそれが従前から劇変した理由について考察したい。

(一)、李邕書法受容の時期とその書に見られる変化

まず問題になるのは、趙孟頫自ら李邕（李北海）の影響を認めたことを示す文献資料はなく、碑文の臨書遺例も確認できない点である。初唐の楷書に関しては、趙孟頫は欧陽詢、虞世南、褚遂良、薛稷を重んじていた³²。李邕書法は趙孟頫の書法においてどのような位置にあり、受容の面ではどのような背景があるのだろうか。その背景を探るため、以下3点に着目したい。一つは、趙孟頫は32歳頃すでに李邕書法の法帖を目にしていた点である。これは前述した《淳化閣帖》中の歴代名臣第四に李邕《晴熱帖》があることからわかる³³。次に、周密（南宋・紹定五年～元・大徳二年、1232～1298）『雲煙過眼録』に《長短句》、《口味帖》、《葛粉帖》という李邕書法3点が確認できる点である³⁴。《葛粉帖》は趙孟頫が北方から江南に戻った際、自分の収蔵品を江南の文化圏に示したものである。最後に、董其昌が言及した趙孟頫の《岳麓寺碑》の受容についてであるが、筆者は鮮于樞がその鍵を握っているのではないかと推測している。《鮮于樞進学解》（北京首都博物館蔵）巻末の劉致（生卒年不詳、明代に活躍）の跋文に、鮮于樞が至元二十四年（1287）頃、

³²唐陸柬之《文賦》（国立故宫博物院蔵）巻末の大徳二年（1298）の趙孟頫題跋に「右唐柬之行書文賦真跡。唐初善書者、称欧虞褚薛。以書法論之、豈在四子下耶。然世罕有其迹、故知之者希耳。」による。図版は何伝馨等編『晋唐法書名蹟』（国立故宫博物院、2008）、頁234～249を参照。

³³容庚編『叢帖目』1（中華書局香港分局、1980）、頁7を参照。

³⁴周密『雲煙過眼録』（百部叢書集成本76〔底本は十万卷楼叢書本〕、芸文印書館、1968）巻上《蘭坡趙都丞与懃所蔵》、頁3と巻下《趙子昂孟頫乙未自燕回出所収書画古物》、頁19を参照。

湖南憲司（趙孟頫書《鮮于府君墓誌銘》拓本に、従仕郎嶺北湖南道按察司經歷とある³⁵⁾）として任官した際に、《岳麓寺碑》を過眼したことが記されていることから³⁶⁾、34 歳以降、すでに《岳麓寺碑》を耳聞していたか、間接的に目にしていた可能性が非常に高い。

上記 3 点は文献をもとに考察したものである。次に、李邕書法がどのような形で当時の趙孟頫書法に表されているかについて考えたい。趙孟頫が済南から杭州に戻る前に、周密のために書いた《趵突泉詩》（42 歳頃、国立故宫博物院蔵）【図 8】の筆画は骨力が雄強である。これが《二稿》書法にも反映された李邕書法の特徴である³⁷⁾。

以上の考察より、30 代前半から李邕書法の受容が始まったと筆者は考えている。しかし、ここで注意すべきなのは、趙孟頫自身が《岳麓寺碑》や《鉄仏寺碑》を臨習したとする記述はどの文献にも見られず、《二稿》の字形もこの二碑には似ていない点である【図 9】。董其昌、陳繼儒、李日華 3 人の跋文は単に自身の経験に基づく見解、あるいは書法上の対抗意識のもとに憶測を述べたに過ぎない。これらの明人の題跋に拘り過ぎると、趙孟頫書法への理解をゆがめることにもなりかねず、趙孟頫の碑文書法の成立と展開への解釈が制限される恐れもある。

（二）、鮮于樞との交遊と《二稿》書法の成立

鮮于樞は漁陽（現在の河北省薊県）出身で、その書業については多くの先

³⁵⁾ 胡海峰等編《鮮于光祖墓誌》『北京大学図書館蔵金石拓本菁華』（文物出版社、1998）、頁 163 の解題を参照。

³⁶⁾ 楊美莉、趙鉄銘主編『中華五千年文物集刊』法書篇 8（中華五千年文物集刊編輯委員会、1986）、頁 124 を参照。

³⁷⁾ 張光賓氏は「趵突泉詩は行書、它體現了王羲之快雪時晴帖、又融會了唐代李邕的風格、創出典型趙體。」と先に同様の考えを提示している。詳細は張光賓『最美的文字』（国立故宫博物院、1991）、頁 59 を参照。

学が論述している³⁸。李強氏は、「鮮于枢がいなければ、後の趙孟頫の書は成り立たない。」として、後の趙孟頫書法の発展に鮮于枢を関連づけている³⁹。西川寧氏は、「こうした性格（沈厚の気）を一手に大きく強く実現した鮮于枢は元初の代表的存在である。」と高く評価している⁴⁰。

ここでは二人の交遊と書法の異同について探究し、《二稿》成立への関連とその様相について明らかにしたい。これは先学があまり触れていない部分でもある。

趙孟頫は 20 代の頃に鮮于枢と面識を得て⁴¹、趙孟頫が北方にいた頃から文通していたことを示す作品（《元趙孟頫鮮于枢墨跡合冊》第一幅（無紀年、国立故宫博物院蔵）が残っている。42 歳頃に江南に戻った後も、前述した《幽竹枯槎図卷題辭》の卷末に、二人によるほぼ同時期の跋文が確認でき、鮮于枢が亡くなるまで二人の交流は途切れることなく続いたようである。その交遊関係を【図 10】にまとめた。

大徳三年（1299）に鮮于枢と趙孟頫はある碑文の揮毫を共同で行ったのだが、その拓本が現在も残されている。この時、趙孟頫は碑陽《大成殿記》拓本【図 11】、鮮于枢は碑陰《蕭山県新文廟碑陰記》拓本【図 12】を揮毫し

³⁸同前掲注 11、王連起「鮮于枢和他的書法芸術」、頁 25～32、楚默主編『中国書法全集 鮮于枢』45（榮宝齋出版社、2000）、戴立強編著『中国書法家全集 鮮于枢』（河北教育出版社、2003）などが挙げられる。

³⁹白立献、陳培站主編『鮮于枢書法精選』（河南美術出版社、2008）、李強氏序を参照。

⁴⁰西川寧「元朝の書」『定本書道全集』10（名著普及会、1981 年の覆刻版より引用）、頁 172 を参照。

⁴¹趙孟頫書《鮮于府君墓誌銘》拓本の冒頭に「鮮于君初自范陽。徙家於博。予時年廿許。」（前掲注 35、胡海峰等編《鮮于光祖墓誌》『北京大学図書館蔵金石拓本菁華』、頁 161 を参照）。また、文献の「哀鮮于伯幾」に「我生大江南、君長淮水北。億昨聞令名、官舍始相識。我方二十余、君髮黑如漆。契合無間言、一見同宿昔。」（前掲注 28、趙孟頫著、黄天美点校『松雪齋集』、頁 43 を参照）とあり、二人が出会った正確な年代は不明だが、趙孟頫が 20 代の頃だと思われる。

た⁴²。《蕭山県新文廟碑陰記》拓本を概観すると、王羲之《集字聖教序》の受容が随所に見られる。趙孟頫書《頭陀寺碑》帖（47 歳、個人蔵）【図 1 3】も同様で、この時期は二人とも《集字聖教序》を臨習していたことがわかる。しかし、碑陽の《大成殿記》拓本は、《空相寺殘碑》拓本に見られる褚遂良書法の影響が薄れているように思われる。この二つの碑文の拓本を比較して見ると、鮮于枢の書法は秀麗で行意が著しいのに対し、趙孟頫は線質が渾圓で、端正な結体が二稿に近い。拓本だけでなく、この時期の二人の書は肉筆を見ても、側筆の「彳」の用筆をはじめとして、非常によく似た箇所が複数あることに留意したい。思うに《二稿》は、《鮮于府君墓誌銘》拓本より徐々に発展し、趙孟頫自身の字として結実したのではないだろうか。しかし、《二稿》書法の字の多くは、起筆、送筆、収筆の均一性などの特徴が認められ、これは大徳三年鮮于枢書《行楷書趙秉文御史箴》（51 歳、プリンストン大学付属美術館蔵）の用筆から啓発されたものだと考えられる【図 1 4】。書学の来歴は異なるものの、同じく鑑蔵に精通する鮮于枢と文通したり、雅集したりするような関係が、彼らの書芸に切磋琢磨を促し、その筆法に共通性をもたらしたことは全くの偶然ではなからう。

以上から、趙孟頫が《二稿》書法に至るまでには、多様な古典が潜在していることがわかる。まず、南宋宗室の後裔であるという趙孟頫の出自、そして、30 代に受容した智永の《真草千字文》の書法、北方転居後から始めた碑文書法の揮毫、その内面には鍾繇、二王、褚遂良に加え、李邕を温習した形跡が確認できる。また、江南に戻った後は、鮮于枢との親交による啓発など、こうした経験を経る中で、集字聖教序の受容により《二稿》が成り立ったも

⁴²この碑の碑陽と碑陰の基本資料は『東洋文庫所蔵中国石刻拓本目録』（財団法人東洋文庫、2002）、頁 101、方愛龍「元・趙孟頫等蕭山県学重建大成殿記碑」『杭州師範大学学報（社会科学版）』第 6 期（杭州師範大学、2009、無頁数）を参照。

のと思われる。

《二稿》において確立された書法の特質とはどのようなものであろうか。まず挙げられるのが、線質の均一性である。硬めの毛筆を用い、中鋒で引いた線もあるが、《二稿》の多くは側筆で提按のない起筆・送筆・収筆の線であることに注目したい。これは趙孟頫が意図して表現したものと思われる。次に重量感である。筆の運動に提按が少ないのは、筆が紙にしっかりと摩擦して引かれているからで、それがこのような重量感を生み出すのである。三つ目は結体の重心の低さである。特に右下に重心が置かれている字が多い。このほか、2 回に分けて撥ねを作っている点や、厳密な分間布白、多様な字形の構成力なども挙げられる。これらの特質を備える《二稿》は、趙孟頫の書法を代表する「趙体」と呼ぶにふさわしい作品である【図 15】。

ところが、董其昌が言う「趙孟頫は専ら李邕を臨習したこと」と、陳繼儒が言う「蘇靈芝（生卒年不詳、中唐に活躍）の影響」は、《二稿》には確認できない。一方、本論の最初に取り上げた方聞氏は、⑥《湖州妙嚴寺記》について次のように述べている。「1309 年末か 1310 年初頭に書かれた趙孟頫の代表作《楷書湖州妙嚴寺記》では、熟達した楷書の大字が晋・唐その他の時代の模範の見事な統合を見せている。」これに加えて方聞氏は⑥について、趙孟頫の碑文書法に晋唐以来の多様な古典の要素が見られるとしている⁴³。しかし、本章では、⑥よりも以前に書かれた《二稿》にこの要素が含まれていると考える。⑥はすでに確立された《二稿》の筆法や骨格を基盤としなければ、生み出すことのできない名跡だからである。

三、碑文書法の分期と画期の検証

⁴³同前掲注 6、方聞「中国の書—理論と歴史」『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』、頁 273 を参照。

現存する遺品を分類する場合、《二稿》以後の碑文稿は時代により大きく3種類に分けられる（江南滞在期：③④⑤⑥⑦、大都復帰期：⑧⑨、告老期：⑩⑪⑫）。また、その形式から、罫線有り：①②④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪、罫線無し：③⑫の2種類に分けられる。これをもとに趙孟頫の碑文書法の展開を【図16】にまとめた。

③はこれまで見てきた形式とは異なり、罫線がなく、智永《真書千字文》の風格が中心となっている。③から⑦は字体が縦長で行意も顕著である。④は右上がりの字形が特徴的で行意が著しい点は、李邕の影響もあるように思われる⁴⁴。⑧からは左傾し、行意が更に著しくなり、スケールも大きくなっている。⑫は藏鋒で字形は引き締まっており、醇厚さが目立つが、章草の結体や筆法を混用させるなど、盛年時の表現意識とは異なる。これは終期を迎えた頃の最後の碑文稿である⁴⁵。この一群の碑文稿には分期的な書法の変遷が随所に見られる。しかし、書法の根本的な特徴は《二稿》と同様である。趙孟頫の碑文書法は《二稿》以前（大都任官期、山東済南任官期）の変遷も加えると、少なくとも6種類の変化が見られるが、やはり《二稿》の確立が最も顕著な画期と見るべきである。

前述した宋濂が唱えた趙孟頫書法の分期説は、「趙魏公之書凡三変。初臨思陵（宋高宗）、中学鍾繇及羲献諸家、晚乃学李邕。」というものであり、清代の呉栄光がそれを追従し、趙孟頫の書法変遷に関する分期の年代について、「松雪書凡三変。元貞（～1295）以前、猶未脱宋高宗窠臼。大徳年間（1297

⁴⁴王連起氏は、④の《松江宝雲寺記》は趙孟頫が王羲之の筆意から李邕に転換し始めた作品だとしている。詳細は王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』（上海書画出版社、1995）、頁789を参照。

⁴⁵これら12点の碑文稿のうち、③と⑫のような楷書、行書、独草体、章草体四つの書体を混用させる表現は注目すべきだが、本論第四章でそのような表現を作り上げた背景や理由について検討を加えたい。

～1307)、専師定武楔(禊)序。延祐以後(1314～)、変入李邕柳誠懸法。而碑版多用之。」と説明を加えている。宋濂の生年は趙孟頫に近く、その説には説得力があり、呉栄光の分析も一見筋は通る。しかし、趙孟頫の碑文書法の場合、少なくとも6期の変化が看取でき、分期説の捉え方については筆者と宋濂、呉栄光の見解は大きく異なる。更に、鍾繇から王羲之、李邕などの唐人書法を碑文に投入することは、30代にはすでに可能だったと言え、中年または晩年からと分期する必要はない。

鮮于枢が他界してから1年余りの間に、趙孟頫は《二稿》のような熟達した書法を確立した。《二稿》の確立は、楷書の典型だとされる唐代の書家一初唐の欧陽詢、虞世南、褚遂良三大家(または薛稷を含む四大家)や顔真卿、柳公権の楷書にも劣らない。趙孟頫が彼らと並び称されるほどの独自の楷書体を確立したことは、画期的かつ革新的な出来事だったと言える。その背景には、長年に渡って碑文書法を揮毫した経験があったのは無論のこと、南北往還の経験や親友の鮮于枢による啓発があったわけだが、この点は、これまでの趙孟頫書法の研究史では関心が浅かった事柄である。《二稿》の意義は、南方のみならず広く元王朝において、趙孟頫の碑文書法に対する自己の突破、独自性の表明にあったと見てよいだろう。

第四節 研究成果の発展

大徳八年(1304)に趙孟頫が描いた《蘭蕙図》(51歳、サンフランシスコ・アジアアートミュージアム蔵)上の趙孟頫自身による題跋【図17】と、大徳九年(1305)の《行書雜書三段帖》(52歳、北京故宮博物院蔵)前段の行楷書にも注目したい。これら有紀年の作品にも《二稿》と同様の結体と用筆が看取できるので、碑文書法とその他の形式、各状況における書表現の

関連性が認められる。一方、現在でも真跡とされている大徳八年（1304）の《紅衣羅漢図》（51 歳、遼寧省博物館蔵）と、大徳九年（1305）の《高上大洞玉經小楷》（52 歳、天津博物館蔵）、《九歌図冊》（無紀年、メトロポリタン美術館蔵）などの款識は、碑文書法とは異なる書風が認められ、真偽について疑問を抱かざるを得ないが、それらの解明は今後の課題にしたい。このように、《二稿》の書風研究は、趙孟頫の有紀年作品再検討の基準にも成り得ると考える。

《二稿》の検討とともに、趙孟頫書《陋室銘》（無紀年、広東省博物館蔵）【図 1 8】の編年にも着眼した。紀年がない本作の編年に関しては 2 説が確認できる。蕭吟氏は王連起氏の鑑定に依拠し、「比較的に早年の作品である」と結論づけている⁴⁶。朱万章氏は 30 歳前後の代表的な作品としている⁴⁷。しかし、本作は碑文書法ではないが、側筆の筆法、線質の均一性と重量感、結体の低い重心などの特徴から、二稿の書法に近似する点も指摘できる。つまり、この時の趙孟頫は碑文書法で開発した結体や用筆を詩翰類の作品にも投入したのであり、この作品はその証明となる。よって、この《陋室銘》は《二稿》に近い時期、趙孟頫 50 歳から 52 歳頃に揮毫された作品だと推断し、今後は本作その他の視点（流伝史、収蔵印記、題跋の有無など）の鑑定にも努めたいと考える。

付 節 《二稿》に関する文献学的調査

本節では標記の趙孟頫書《玄妙觀重修三清殿記》と《玄妙觀重修三門記》

⁴⁶蕭吟「趙孟頫の両件墨蹟」『書法叢刊』第 1 期（文物出版社、1996）、頁 2～9 を参照。

⁴⁷朱万章「從三件書法看趙孟頫書風的分期」『文物天地』第 10 期（文物天地雜誌社、2007）、頁 84～86 を参照。

の二稿（以下、《玄妙觀重修三清殿記》稿を（ア）、《玄妙觀重修三門記》稿を（イ）とする。（ア）と（イ）両者について述べる時は《二稿》と略す。）の流伝経緯及びそこから派生する諸問題を検討する。

（ア）（50 歳、台湾個人蔵）は乾隆五十八年（1793）に刊行された『石渠宝笈』続編に著録されてから、1983 年にフランスで開催されたオークションで香港在住の袁氏に購入されるまでおよそ 200 年もの間、所在不明であった⁴⁸。それに対して（イ）（無紀年、東京国立博物館蔵）は流伝にも由緒があり、先学もこれに言及することが多い⁴⁹。ただし、それぞれ異なる収蔵経緯を持つ《二稿》は、明末から現在に至るまでに、（ア）には陳繼儒の題跋、（イ）には董其昌及び李日華の題跋が加えられ流伝してきたが、現状から判断すると、誤解を招く恐れがある（後述）。《二稿》遞伝の過程はかなり複雑で、先行研究にその経緯を詳細に辿ったものは見られない。

本節ではまず歴代の文献、作品に鈐された収蔵印記、題跋、先行研究から、改めて《二稿》の流伝史を整理したい⁵⁰。次に、先学の研究成果を踏まえ、（イ）の書写時期を絞り込みたい。最後に、これまであまり気にとめられることの

⁴⁸『書譜』総第 64 期（書譜出版社、1985）、頁 2 を参照。

⁴⁹これまで筆者が関した《二稿》の流伝に関する先行研究は下記の通りである。①前掲注 1、『書譜』総第 64 期、頁 2。②内藤乾吉解説『書道全集』第 17 卷（平凡社、1956）、頁 153～154。③中国書蹟名品展実行委員会編集『中国書蹟名品展』（毎日新聞社・五島美術館、1978）、頁 33 と 78。④東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録』中国書跡篇（東京美術、1980）、頁 34。⑤黄惇主編『中国書法全集 趙孟頫二』44（榮宝齋出版社、2002）、頁 459～460、⑥富田淳「宋元書蹟題跋輯録」『東京国立博物館紀要』第 37 号（東京国立博物館、2002）、頁 96～97 と 134～136。⑦大阪市立美術館編『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（読売新聞社、2003）、頁 320。⑧東京国立博物館・朝日新聞社編『書の至宝 日本と中国』（朝日新聞社、2006）、頁 328。⑨徐邦達著、故宫博物院編『徐邦達集 5 古書画過眼要録、元明清書法 1』（紫禁城出版社、2006）、頁 27～31 である。

⁵⁰本来ならば、流伝史研究では、法帖も考察の対象としなければならない。後述のように、（イ）には法帖としての性質が備わっているが、その検討は別稿を用意したい。

なかった資料や、そこからもたらされる新たな知見や問題点について、以下のように具体的な提起をしたい。

- 1、《二稿》合装と三つの題跋の書写時期
- 2、刻帖への展開
- 3、(イ)稿の巻末の李日華題跋にある「越石」とは何者なのか
- 4、作品後の董其昌と陳繼儒題跋から見る《二稿》の書法淵源

一、《二稿》の流伝史に関する資料

本節では(一)、歴代の文献(以降、便宜的にアルファベットを付した。また、引用は新字体とし、引用者の補足を()で示した。)(二)、収蔵印記(三)、題跋の3項に分け、《二稿》の流伝史に関する資料を整理したい。

(一)、歴代の文献

1、《二稿》を記載した文献：

A、張丑(明・万暦五年～崇禎十六年、1577～1643)『清河秘篋書画表』(劉晩榮輯『述古叢鈔』初集第2冊より、頁6)

・趙孟頫臨韓生双馬図。小竹石図。正書重修元(玄)妙觀三清殿記。又山(三)門記。行書前後赤壁賦。

B、張丑『真跡日録』卷2、4(『景印文淵閣四庫全書』第817冊、台湾商務印書館、1983、頁544～545、583)

・趙子昂正書玄妙觀三門記跋(頁544～545)

① 熟觀李北海岳麓寺碑、乃知此碑之逼真、猶是集賢偏師耳。董其昌題【図19】。

② 越石於天啓之元得文敏所書殿記於清溪曹起莘家。展至後段。覺語脉齟齬。深以為惑。後三年。又得三門記於五茸何氏。閱之乃悟其首尾互裝。向非越石嗜古徇奇。遇即收之。則延津之合難矣。文敏此書有泰和之朗。而無其佻。有季海之重。而無其鈍。不用平原面目。而含其精神。天下趙碑第一也。不易得。不易得。崇禎己巳秋日。東吳李日華【図20】。

③ 賞鑑家謂玄妙觀碑酷似李北海岳麓碑。若見蘇靈芝（八世紀頃に活躍）鉄仏寺刻。弥見松雪翁書学来歴。此卷精彩可照四裔。更勝吾松亭林碑也。陳繼儒題【図21】。

・名人書画題跋記入録者于左（頁583）

三清殿記。

C、倪濤（清人。生卒年不詳）『六芸之一録』（『景印文淵閣四庫全書』第837冊より、台湾商務印書館、1983、頁572）

趙文敏書玄妙觀三清殿等記。

B②と同じ、不録。（『恬志堂集』より抜粋）

趙子昂書玄妙觀重修三門記。

Dと同じ、不録。（『清河書画舫』より抜粋）

2、（ア）のみ記載の文献：

D、張丑『清河書画舫』卷10下（『景印文淵閣四庫全書』第817冊より、台湾商務印書館、1983、頁415～416）

昔人之計久遠者。莫如金石刻文止矣。趙文敏公親書妙觀三清殿等記石。而紙墨若新物。之係於收藏。良非細故云。此記乃蘇州一大故實。其真跡當善藏之。

E、安岐（？～1745）『墨緣彙觀』点校本（嶺南美術出版社、1994、頁107～108）

趙孟頫正書姑蘇玄妙觀重修三清殿記卷。

白紙本。烏絲隔闌。正書八十二行。字大徑寸。筆法雄偉。觀之令人駭然。文敏碑書中第一傑作也。明晉府諸印。緋紅奪目。首書玄妙觀重修三清殿記。後書十月既望。前朝奉大夫牟巖記。集賢直學士朝列大夫行江浙等處儒學提舉趙孟頫書並篆額。大德七年月日。住持曹良瑋。布日昇。張善淵立石。卷前碑額趙文敏篆玄妙觀重修三清殿記。字大四寸許。後紙陳眉公跋云。(B②と同じ、不録。)

F、吳升(清人。生卒年不詳)『大觀錄』(二)卷7(『芸術賞鑑選珍』より、国立中央図書館、1970、頁13～14)

正書重修三清殿記卷。極白。元箋本。高一尺。餘長一丈三尺。前幅二尺二寸。烏絲。五行。每行篆書二字。方四寸。碑額也。正幅一丈零八寸。烏絲。八十二行。每行八寸。正書前後有晉府收藏及蕉林諸印。公書集晉唐大成。不名一家。金石文章。尤為經意。如句容之茆。山湖之妙。嚴松之普照。真跡並晃耀人間。此碑為吳郡具瞻。故公以扛鼎全力。展右軍画像讚而大之。筆墨妙精。當在諸碑之上。而或謂公尚法李邕。恐目論耳。

G、『欽定石渠寶笈續編 乾清宮藏6』(『続修四庫全書』第1069冊より、上海古籍出版社、1995、頁683～684)

趙孟頫書牟巖重修元妙觀三清殿記1卷。

本幅宋牋本。一尺三寸三分。橫一丈三尺九寸。前篆額元(玄)妙觀重修三清殿之記。後楷書牟巖記文。本文不録。陳繼儒跋(B③と同じ、不録。)收藏印記。晉府圖書之印。晉國奎章。圖書(半印)。合同。清和堂(半印)。王廷珪印。七世同居賜号義門程氏世家。程正揆。希世之宝。子孫宝之。珍秘。清溪旧史。梁清標印。乾坤清玩。林書(半印)。蒼巖子梁清標玉立氏印章。觀其大略。蕉林收藏。

H、阮元(清・乾隆二十九年～道光二十九年、1764～1849)『筆記統編 石

渠随筆』卷4（広文書局、1969、頁59）

趙孟頫書牟巖重修元（玄）妙觀三清殿碑記。字徑半寸。筆勢縱橫。趙書廟碑。多學李邕。而筆底終有俗氣。

I、卞永譽（清・順治二年～康熙五十一年、1645～1712）『書画彙考』7（『四庫全書珍本』6集、商務印書館、1976、頁66）

趙文敏玄妙觀三清殿等記石。（原文不録）

外録。Dと同じ、不録。（『清河書画舫』より抜粋）

3、（イ）のみ記載の文献

J、李日華『明代芸術家集彙刊続集 恬致堂集』（六）巻36（国立中央図書館、1971、頁3214～3215）

題趙孟頫書玄妙觀重修三門記。

B②と同じ、不録。

K、王原祁（明・崇禎十五年～清・康熙五十四年、1642～1715）等輯『佩文齋書画譜』第5冊（北京市中国書店、1984、頁2241）

B②と同じ、不録。（『恬致堂集』より）

L、錢泳（清・乾隆二十四年～道光二十四年、1759～1844）『履園叢話』巻10（『筆記続編 履園叢話』上より、広文書局、1969、頁329）

玄妙觀重修三門記。烏絲方格。字大逕寸。前有篆書八大字。作四行。本文計六十三行。每行八字。有董思白、李日華兩跋。錢塘梁文莊公（梁詩正）家藏物也。嘉慶元年（1796）2月。余謁山舟先生（梁同書）。始觀此卷。曲阜孔氏（孔繼涑）既刻鑑真帖。而長白煦齋相國（英和）見而愛之。因介余往錢塘雙鉤。又收入松雪齋帖。

M、崇彝（清末民初の人、生卒年不詳）輯『選學齋書画寓目筆記』2（『歷代書画録続編』第12冊、国家図書館出版社、2010、頁6～7）

趙松雪楷書三門記。牙色紙本。連篆額長一丈三尺余。高一尺三寸余。前烏絲界面方格。篆書玄妙觀重修三門記。四行八字。徑三寸許。碑文徑丈。正楷。烏絲界欄方格。都六十三行。行八字。文敏此書結體絕似麓山碑。尤多參取六朝人筆意。與平時楷書迥別。觀之令人驚心動魄。後隔水綾上有清溪道人藏款一行。後紙董其昌行書題四行。李日華行楷跋九行。孫爾準觀款二行。此卷舊為真定梁相國所藏。故前後蕉林藏印最多。又有孔谷園、梁山舟諸印。元時曾刻石。與三清殿記亦松雪書。今並存蘇州玄妙觀中。但封置於殿隅。禁人槌拓。故世罕見拓本。友人胡君東岩曾至碑下。手自摩娑。為余述之。張米庵所著真蹟日錄亦經記載。趙書中名蹟也。甲寅（1914）閏夏見於沈盒（寶熙）齋中。此卷為貴哲生先生所藏。今歸連平顏氏（顏世清）矣。

N、中国書蹟名品展実行委員会編集『中国書蹟名品展』（毎日新聞社・五島美術館、1978、頁33、78）

文化庁蔵。

O、『東京国立博物館図版目録 中国書跡篇』（東京美術出版社、1980、頁34）

文化庁より管理換。

（二）、收藏印記については【表2】を参照。

（三）、題跋

（ア）

陳繼儒 B③と同じ、不録。

（イ）

① 程正揆（明・万曆三十二年～清・康熙十五年、1604～1676）

清溪道人藏（隔水に直接書したか）⁵¹

② 董其昌 B①と同じ、不録。

③ 李日華 B②と同じ、不録。

④ 孫爾準（清・乾隆三十七年～道光十二年、1772～1832）

道光元年（1821）九月秋四日觀於就儒居。金鑣孫爾準。

⑤ 顏世清（清・同治十二年～民国二十年、1873～1931）

・元趙文敏真書三門記。寒木堂藏。（外題簽）

・趙文敏大楷真書現存人間者僅有四卷。福神觀。妙巖寺。胆巴碑及此三門記而已。福神觀紙質微損。妙巖寺書法略嫌單弱。能得北海円渾雄強者。三門記為最。胆巴碑亦足雁行。今兩卷均在余寒木堂。可稱趙書雙璧。福神觀原藏費西蠡處。妙巖寺則宝熙沈盒所弄。合記於卷尾。戊午（1918）九月五日。瓢叟顏乙書于寒木堂。是日簡長沙関監督、十五年前乃先君曾任之缺。並記。（跋一）

・李竹嬾跋尾尚有趙書三清殿記。原藏一家。深慶延津劍合。今歷三百年。是卷紙素如新。三清殿記不知尚在人間否。考墨緣彙觀曾載收藏此記。卻無三門記一卷。二者想安麓村時代又復分散。古物之離合。蓋亦有數存焉。余幸得与胆巴碑同弄。未始非墨緣奇遇。世有藏趙書者。必首數此二碑。夫復何疑。越十日。灯下展玩再記。是日。復簡兼任特派湖南交渉員。合并附記於此。瓢叟又識。（跋二）

⑥ 長尾雨山（元治元年～昭和十七年、1864～1942）

・趙松雪正書重修三門記。（箱蓋表）

・客秋。燕京顏韻伯（世清）携趙文敏書玄妙觀重修三門記来浪華（大阪）以眎同好。予抵掌歎稱以為天下趙碑第一。惜未及再觀。而韻伯携去。

⁵¹東京国立博物館画像検索：
<http://image.tnm.jp/image/1024/C0099124.jpg> を参照。

今滋甲午(大正十三年、1924)六月過我友阿部君(阿部房次郎、明治元年～昭和十二年、1868～1937)⁵²爽籟館。談及此卷。君笑曰。卷在于此。因見出示。于一驚奇遇。更喜惡或所歸。而予墨緣之不淺也。嘗謂此卷原与重修三清殿記為一。而殿記則明季清初諸家多有著錄。而不及門記。何也。偶閱李竹癭恬致堂集云(李日華跋、不錄。)予於是宿疑渙釈。蓋殿記与門記明時已分為二。諸家多伝殿記。而門記久佚其伝耳。竹癭評其書云。有太和之朗而無其佻。有季海之重而無其鈍。不用平原面目而合其精神。可謂篤論矣。君既獲此卷。宜更物色殿記。以謀釗合。則君為今之越石。其快如何也。記以驗諸他日。雨山学人長尾甲。(箱蓋裏)

二、《二稿》の書写時期

(ア)の本文に「十月既望。……。正確な期日は不明だが、大徳七年 月日」と記載があることから、編年に問題はない。(イ)は紀年がないため、書写時期はいまだに定説を見ない。以下にいくつか例を挙げる。

- ① 内藤乾吉は 49 歳～56 歳の作品とした⁵³。
- ② 王連起氏は《二稿》は同時期の作品であるとした⁵⁴。
- ③ 富田淳氏は「三門記は三清殿記の後に書かれたことが知られる。さらに趙孟頫が卷末に記す官銜「行江浙等处儒学提举」を拝した時期を考えあわせると、大徳 6 年以降至大 2 年の間、趙の 49 歳から 56 歳までの書写と考えられる。しかし両者の書風は比較的近似しており、三門

⁵²阿部房次郎の生涯と収蔵について、弓野隆之「阿部房次郎」『中国書画探訪 関西の収蔵家とその名品』(二玄社、2011)、頁 20～21 で紹介されている。また、同書、頁 210 に参考文献として掲げてられている。

⁵³同前掲注 49、内藤乾吉解説『書道全集』第 17 卷、頁 153 を参照。

⁵⁴王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大観』上(上海人民美術出版社、1995)、頁 3 を参照。

記の書写時期も、大徳6年を大きく降るものではないと思われる。」とした⁵⁵。

- ④ 黄惇氏は《二稿》の紙質や、行の字数、書法の用筆、結字などが同様であることから、《二稿》は同時期の作だと判断した⁵⁶。

このように（イ）の書写年代に関しては諸説ある。筆者は（イ）の書写年代に関連して、これまで注目されることのなかった資料を一つ挙げたい。（ア）、（イ）の本文に登場する人物、序で提起した趙孟頫の五兄趙孟頫の卒年である。趙孟頫書「五兄壙志 代侄作」⁵⁷に「先君生於辛亥（南宋・淳祐十一年、1251）七月十七日。卒於乙巳（元・大徳九年、1305）五月廿三日。享年五十有五。」とある。つまり、（イ）は少なくとも1305年以前に書写されたに違いなく、（ア）が書かれてから2年の間に、（イ）が書写されたことが推測できよう。その当時、趙孟頫は50歳～52歳だった。

三、《二稿》をめぐる諸問題

（一）、二稿合装と三跋の書写時期

本考はやや複雑である。以下にまず富田淳氏の説を抄録し⁵⁸、そのうちのa、b、c（引用者付）について筆者の意見を述べたい。

主な著録の記載を尋ねながら本巻の大まかな遞伝を辿ると、古くは明の張丑の『清河秘篋書畫表』に三清殿記と三門記の記載がある。越石こと斉琦名

⁵⁵同前掲注49、富田淳「宋元書蹟題跋輯録」『東京国立博物館紀要』第37号、頁135を参照。

⁵⁶同前掲注2、黄惇主編『中国書法全集 趙孟頫二』44、頁459を参照。

⁵⁷趙孟頫著、黄天美点校『松雪齋集』（西泠印社出版社、2010）、頁300～301を参照。

⁵⁸同前掲注49、富田淳「宋元書蹟題跋輯録」『東京国立博物館紀要』第37号、頁136を参照。

が、天啓元年（1621）に清溪の曹起莘家で三清殿記を手に入れ、三年後に五茸の何氏から三門記を得た。崇禎二年（1629）、越石のもとで李日華が記した跋には「閱之乃悟其首尾互装」とあり、^a三清殿記と三門記は本来一卷に合装されていたか、少なくともそのような装丁であったことがわかる。^b再び張丑が『真跡日録』に記載したのは三門記のみで、巻後には李日華の跋に続いて、陳繼儒の跋が載せてある。董其昌の跋も、陳繼儒とほぼ同時期に書かれたものであろう。この前後に程正揆の所蔵するところとなった。^c清朝になって、呉升の『大観録』、安岐の『墨緣彙觀』に所収された三清殿記には、巻後にかつて三門記に記された陳繼儒の跋がある。本来、三門記に記された陳繼儒の跋がいつの頃にか切り取られ、三清殿記に移されたのであろう。

a 説については、Aの記載と現在の文献・図版資料だけでは、《二稿》が合装されていたかどうかは確認できない。しかし、王越石が1621年に曹起莘より（ア）を入手する前に、董其昌と陳繼儒がほぼ同時期に（ア）か（イ）の後に記した跋はすでに分割されていたのである。切り取られた陳繼儒跋は（ア）、董其昌跋は（イ）の後に付け加えられたことは、1629年の李日華の跋文より確認できる。その後の『真跡日録』では、董其昌、李日華、陳繼儒跋が並列している（上掲B①～③）が、これは合装の根拠とはならない。この点をより具体的に説明するために、李日華跋と張丑撰A、B、Dにおける二稿の内容を再確認したい。

李日華の跋には「展至後段。覺語脉齟齬。深以為惑。後三年。又得三門記於五茸何氏。閱之乃悟其首尾互装。」とある。この時、李日華が困惑していたのは、（ア）の陳繼儒跋についてのはずである。最初に李日華が（ア）の後段（陳繼儒跋）の内容に「齟齬」を感じた。3年後に李日華が（イ）の董其昌跋を読んだ際、もともとは二つ並んでいた董其昌と陳繼儒の跋が、好事者によって別々に切り取られ、それぞれ（ア）と（イ）の後に付け加えられた

ことに気付き、「董其昌、陳繼儒二跋」が「首尾互装」だったことを理解したのではないだろうか。

Aはかつて張家に収蔵された作品を記録した表である。成書時間は不詳だが、張丑は確実に二稿を収蔵したに違いない。Dは万曆四十四年（1616）に完成したものである。Bの成書年代は不詳だが、Bの張丑自序を見ると⁵⁹、Dの後に撰されたことがわかる。少なくとも李日華跋（1629）以降の撰である。問題^bについては、富田氏はBの性質、そして巻4「名人書画題跋記入録者于左」に（ア）が記載されたことを見逃したため、「再び張丑が『真蹟日録』に記載するのは、三門記のみであり、……。」と誤解したわけである。確かに、董其昌、李日華、陳繼儒3人の題跋は揃ってBの「趙子昂正書玄妙觀三門記跋」一条に記載されたが、巻4に（ア）の題名のみが書き加えられたのは、張丑の「趙子昂正書玄妙觀三門記跋」一条への補筆である。B一書の性質から言えば、「信手筆其一二」、「隨見隨書」のため、「趙子昂正書玄妙觀三門記跋」条に、董其昌、李日華跋に続けて陳繼儒跋を載せたが、必ずしも三跋がこの順で合装されていたとは言えない。故に、^c吳升『大觀錄』と安岐『墨緣彙觀』所収の（ア）の後にある陳繼儒跋は、明天啓元年（1621）からすでにその状態であったのであり、その後、「いつの間にか切り取られる」ような事態は発生しなかったと考える。

（二）、刻帖への展開

⁵⁹『清河書画舫』の提要に「越歲丙辰（万曆四十四年、1616）。是書乃成。其以書画舫為名。……。惟是所取書画題跋。不尽出於手迹。多從諸家文集錄入。且亦有未見其物。但摭傳聞編入者。」とあり、『真蹟日録』第1巻、自序「書画舫成。鑑家謂其粗可觀覽。多以名品卷軸見示就正。因信手筆其一二。命曰真蹟日録。隨見隨書。不復差次時代。如欲附儷前編俟。後日更詳定云。米庵主人張丑志。」上記二書の引用は『景印文淵閣四庫全書』第817冊（台湾商務印書館、1983）、頁1～2と頁512による。

【表3】で示したように、(イ)には梁詩正、梁同書、孔繼涑の収蔵印記が押されている。これについては、Lに関連の事情が窺われるが、先学でこの点に言及した者はいない。また、容庚編『叢帖目』全4冊を確認したところ、乾隆中年、孔繼涑が模勒した法帖《玉虹鑑真帖》全13巻の11巻に(イ)が収録されていることがわかるが、《玉虹鑑真帖》全13巻所収の法帖それぞれの来歴の詳細は不明である⁶⁰。一方、錢泳が嘉慶十四年(1809)に編纂した『松雪齋法書』全6巻は、そのほとんどが相国英公(英和)の収蔵品であることが知られているが⁶¹、Lの記載から、(イ)はかつて梁氏父子に収蔵され、孔繼涑と錢泳が梁氏父子から(イ)を借りて写し、それぞれ《玉虹鑑真帖》、《松雪齋法書》という私刻の法帖に収めたという背景が一層明確になった。言うまでもないが、梁氏父子、孔繼涑の収蔵印記は本物の可能性が極めて高く、上記二つの法帖は(イ)に基づく来歴の確かなものと見てもよからう。

(三)、(イ)稿の李日華跋の「越石」について

上記の先行研究では、李日華の題跋にある越石を齊琦名とするが、《二稿》いずれにも押されている「王廷瑤印」を見れば、この問題は直ちに解決できる。近年、井上充幸氏が李日華題跋の越石は王越石であると論じている⁶²。中国でも王越石と董其昌、陳繼儒、李日華の関係についての研究が見られる⁶³。

⁶⁰同前掲注13、容庚編『叢帖目』2、頁479～482を参照。

⁶¹同前掲注13、容庚編『叢帖目』3、頁1202～1203を参照。

⁶²井上充幸「姜紹書と王越石—『韻石齋筆談』に見る明末清初の芸術市場と徽州商人の活動—」『東洋史研究』第64巻第4号(東洋史研究会、2006)、頁1～37を参照。

⁶³これまで筆者が閲した王越石に関する先行研究は、注を含め下記のとおりである。①王運天「卷内卷外談—読唐寅《黃茅渚小景卷》而想起」『上海博物館集刊』第9期(上海書画出版社、2002)、頁343～352。②肖燕翼「明清之際的骨董商—王越石」『古書画史論鑑定文集』(紫禁城出版社、2005)、頁303～308。③万木春「書画的流通」『味水軒里的閑居者：万曆末年嘉興的書画世界』(中国美術学院出版社、2008)、頁93を参照。

また、張丑『真蹟日録』巻1に⁶⁴

趙文敏公行書中峰和尚懷浄土詩百八首。作梵冊装。連偈跋共百廿則。内失七則。并前阿弥陀仏像亦亡。其字全倣蘭亭。遒勁可喜。乃嚴分宜（嚴嵩か、明・成化十六～嘉靖四十四年、1480～1565）故物也。又文敏公書酒徳頌真蹟。全学羲献。在王越石処。

とあるので、張丑も王越石のことを知っており、彼が明末の書画収蔵史において、一定の地位を有していた様子が窺える。しかし、王越石の収蔵印記についての研究はそれほど進んでいない。確認したところ、国立故宮博物院の蔵品に、（ア）、（イ）と同じ印文の「王廷珪印」が《宋拓晋唐小楷 冊》（作品番号：故帖 000007）に鈐されている⁶⁵。また、《二稿》と同じく、《宋拓晋唐小楷 冊》後にも董其昌と陳繼儒の跋文が見られ、3人の浅からぬ縁が窺える点は興味深い。

（四）、董其昌と陳繼儒跋に見る《二稿》書法の淵源について

先述したように、現段階の資料だけでは《二稿》と董其昌、陳繼儒の各跋の帰属を断定することはできない。董其昌や陳繼儒の題跋を見ても、両者ともに《二稿》について評しているのかは判断できかねる。董其昌は「熟觀李北海岳麓寺碑。乃知此碑之逼真。」と、「此碑」についてしか述べておらず、陳繼儒は「賞鑑家謂玄妙觀碑酷似李北海岳麓碑。」と言い、（ア）と（イ）のどちらについて評したのか判然としない。しかし、（ア）、または（イ）の書法の淵源への論及は、董其昌、陳繼儒の題跋が最古のものである。《岳麓寺碑》

⁶⁴同前掲注12、『景印文淵閣四庫全書』第817冊、頁19を参照。

⁶⁵故宮書画典蔵資料検索：

http://painting.npm.gov.tw/npm_public/System/View.jsp?type=1&ObjectID=5010 を参照。

拓本は遅くとも元代には出土しており⁶⁶、董其昌などの明人がそれを過眼することも可能であった。更に、陳繼儒は董其昌の視点を踏まえ、《岳麓寺碑》よりも家蔵の蘇靈芝書《鉄仏寺碑》拓本のほうが《玄妙觀碑》の書風に近似しており、その淵源は《鉄仏寺碑》にあると強調している。しかし、【表 2】で示したように、結体や用筆、字形の重心などの面から、董其昌、陳繼儒の説が必ずしも正しいとは言えない。

本節では歴代の文献、収蔵印記、題跋より、《二稿》の流伝経緯を考察した。結果は【表 4】の通りである。(ア)は乾隆内府に入ったものの、『故宮已佚書画聞見目』⁶⁷や『故宮已佚書画目』⁶⁸、ないし『国宝沈浮録：故宮散佚書画見聞考略』の「佚目」には収録されておらず、これで「佚目」がまた 1 点増えることになろう⁶⁹。現在は台湾在住の個人が収蔵しているようである⁷⁰。いつ頃、どのような理由で、内府から持ち出されたのかは興味深い。かつて康熙帝が曹日瑛に伝趙孟頫書《元趙松雪六体千文》を下賜したように、乾隆帝も臣下の誰かに下賜したのだろう⁷¹。一方、(イ)は収蔵印記より、完顔景賢（清・光緒元年～民国二十年、1875～1931）⁷²に収蔵されていたことがわかるが、『三虞堂書画目』には収録されなかった。後に、1920 年代に顔世清が阿部房次郎に売却し、日本に持ち出されることとなった。阿部房次郎の『爽籟館欣賞』第 1、2 輯には収録されなかったが、先述した長尾雨山の箱書によ

⁶⁶元劉致跋《鮮于枢進学解》については、吳哲夫主編、楊美莉等著『中華五千年文物集刊 法書篇』8（国立故宮博物院、1986）、頁 124 を参照。

⁶⁷王以埜『故宮已佚書画聞見目』（出版社不詳、1953）

⁶⁸陳仁濤『故宮已佚書画目校注』（東南書局、1956）

⁶⁹楊仁愷『国宝沈浮録：故宮散佚書画見聞考略』増訂本（遼海出版社、1999）

⁷⁰王連起主編『中国法書全集』九（文物出版社、2011）、頁による。

⁷¹清人の沈宗毅跋《元趙松雪六体千文》（古物陳列所、1927）所載の図版による【図 2 2】。

⁷²完顔景賢の生卒年については下田章平「民国期における完顔景賢の書画碑帖の収蔵について」『中国近現代文化研究』第 11 号（中国近現代文化研究会、2010）、頁 44 と 70 による。

り、「阿部コレクション」の一点であることがわかった。その後、日本文化庁より委託された東京国立博物館の収蔵となった。これで流伝史の全体像が明らかになった。今回の検討では、《二稿》と董其昌、陳繼儒二人の題跋の原状を解明するには至らなかったが、この点は今後の課題としたい。

小 結

古来の文献資料と字形分析を検証した結果、趙孟頫の《玄妙觀重修三清殿記》と《玄妙觀重修三門記》二稿に関する董其昌、陳繼儒の説は説得力が無いように思われる。李日華は「文敏此書有泰和之朗。而無其佻。有季海之重。而無其鈍。不用平原面目。而含其精神。天下趙碑第一也。」と述べている。現代の趙孟頫書法の研究者は二稿の形成に関連する書家は李邕だけではないことに気づき、様々な解釈を尽くしている。方聞氏は⑥《湖州妙嚴寺記》の字形を検証し、褚遂良、李邕、顔真卿の書法に似た箇所があるとし、この⑥をもって、趙孟頫の碑文書法を非常に高く評価している。

本章は元時代の碑文製作の風潮に着眼し、趙孟頫が南北往還した際の見聞を元に、上記の先学の説とは異なる見解を提起した。趙孟頫の碑文書法は少なくとも6種類の変化が見られ、《二稿》確立の時期が最も顕著な画期と見るべきである。《二稿》書風の確立は趙孟頫が南方に戻った時期であることを指摘するとともに、その内面に晋・唐などの古法を有するだけでなく、元時代の南北書法の風格を兼有することで、後の碑文書法への展開の基礎を築いた点も明らかにした。特に、鮮于樞との交遊を通して北方書法の受容を深め、李邕の書法を過眼するという大きな契機を得たことが、碑文書法における新たな表現の啓発に繋がったのではないかと考える。二稿独特の表現は中国書法史上においても注目されるべきであり、「趙体」と呼んでもよからう。

今後も広く趙孟頫の碑文書法を検討し、異なる形式の書法作品と対照しつつ、その書風から作品の真偽や編年の鑑定にも有効な手がかりを得られるよう検証したい。

【図1】趙孟頫《玄妙觀重修三清殿記》稿（部分）、（左）

【図2】趙孟頫《玄妙觀重修三門記》稿（部分）、（右）

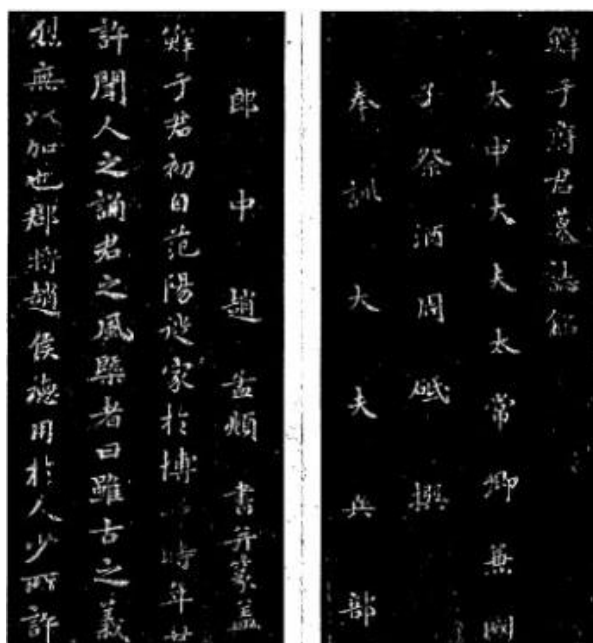


【図3】《敦煌莫高窟六體文字碑》拓本、（左）

【図4】耶律楚材《送劉滿七律詩》の結体と用筆、（右）

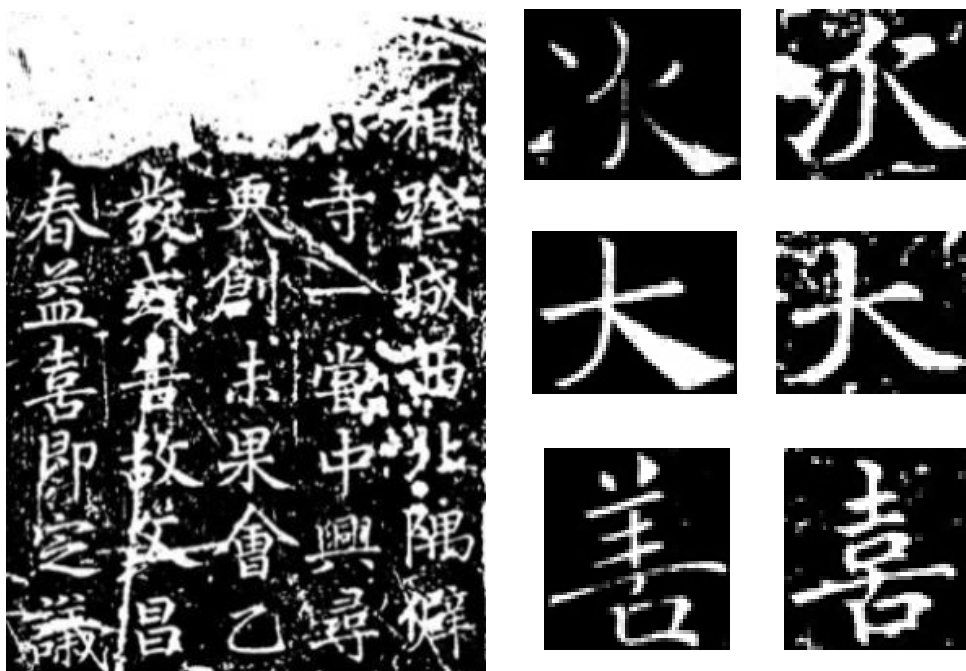


【図5】趙孟頫《鮮于府君墓誌銘》拓本（部分）

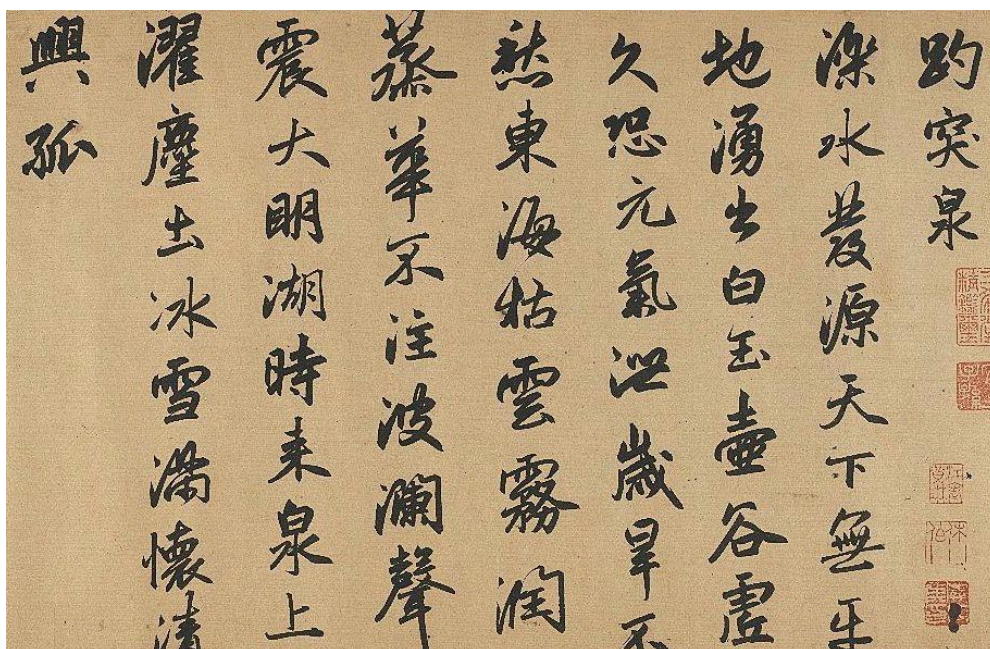


【図6】趙孟頫《空相寺殘碑》拓本（部分）、（左）

【図7】褚遂良《雁塔聖教序》と《空相寺殘碑》拓本の字形対照表、（右）



【图8】趙孟頫《趵突泉詩》（部分）



【图9】《岳麓寺碑》拓本、《鉄仏寺碑》拓本、《二稿》の字形対照表

	岳麓寺碑	鉄仏寺碑	三清殿記稿	三門記稿
三				
門				
成				
天				
崇				

【図 1 0】鮮于樞と趙孟頫の交友

- 1246 鮮于樞生（～1302
- 1254 趙孟頫生（～1322
- 1282 前（趙孟頫が20余歳）二人面識
- 1287 趙孟頫が大都に赴いた
- 1287 鮮于樞が李北海《岳麓寺碑》過眼
- 1287 趙孟頫書《鮮于府君墓誌銘》
- 1287 頃、大都任官中、《趙孟頫鮮于樞墨跡合冊》一*
- 1290 大都にて趙孟頫書「寄鮮于伯機」
- 約 1290、大都任官中、《趙孟頫鮮于樞墨跡合冊》三*
- 1291 趙孟頫書《更生過秦論三篇》、鮮于樞跋
- 南北分離時期、趙孟頫書「題西溪圖贈鮮于伯幾」
- 南北分離時期、趙孟頫書「次韻端父和鮮于伯幾所寄詩」
- 1295 趙孟頫が江南に戻った
- 1296 鮮于樞の寓舎で、《趙孟堅水墨双鉤水仙長卷》同観
- 1298 鮮于樞の寓舎で、《雪霽江行圖》と虞世南《思想帖》同観
- 約 1299 趙孟頫跋鮮于樞《御史箴》卷*
- 1300 鮮于樞、趙孟頫同跋王庭筠《幽竹枯槎圖》*
- 1301 鮮于樞跋趙孟頫書《前後赤壁賦》冊*（台北故宮）
- 1301 鮮于樞、趙孟頫同跋李嗣卿《秋清野思圖》
- 1301 鮮于樞跋趙孟頫書《題子昂書節》冊
- 1302 以後、趙孟頫書「謝鮮于伯幾惠贈餘琴」
- 1303 趙孟頫書《玄妙觀重修三清殿記》
- 1303-1305 趙孟頫書《玄妙觀重修三門記》
- 約 1307 趙孟頫書「哀鮮于伯幾」

【図 1 1】趙孟頫《大成殿記》拓本（部分）、（左）

【図 1 2】鮮于樞《蕭山縣新文廟碑陰記》拓本（部分）、（右）



【図 1 3】趙孟頫《頭陀寺碑》拓本（部分）



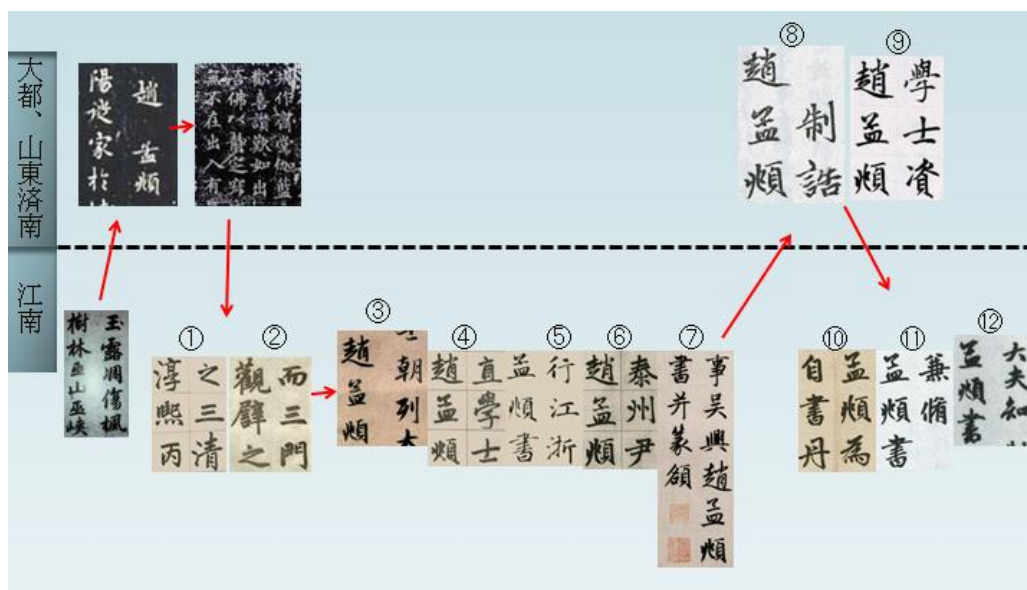
【図 1 4】鮮于樞と趙孟頫の字形対照表、(左)

【図 1 5】趙孟頫《玄妙觀重修三門記》稿の用筆と結体、(右)

鮮于樞		趙孟頫	
大徳二年 茅屋為秋風 所破歌詩		大徳三年 宋人書畫孝 經跋	
大徳三年 蕭山泉新文 廟碑陰記		大徳四年 為盛逸民書 洛神賦	
大徳三年 行楷書趙孟 文御史箴		大徳五年 前後赤壁賦	
大徳四年 幽竹枯槎圖 跋		大徳六年 吳興賦	
大徳四年 歸去來辭		大徳七年 三清殿記	
大徳五年 楊凝式真熱 帖跋		大徳九年 行書雜書三 段帖首段	

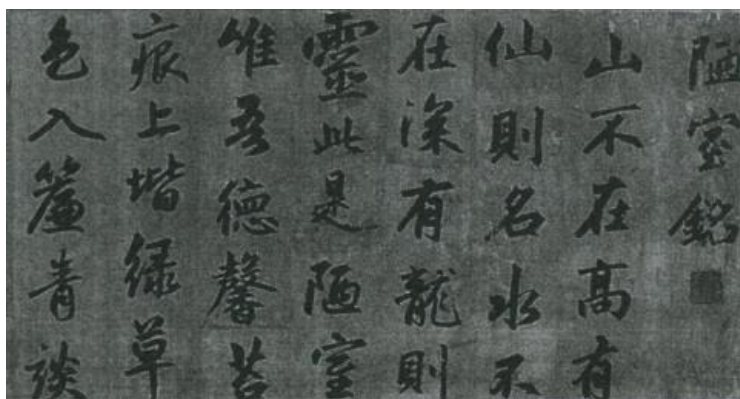
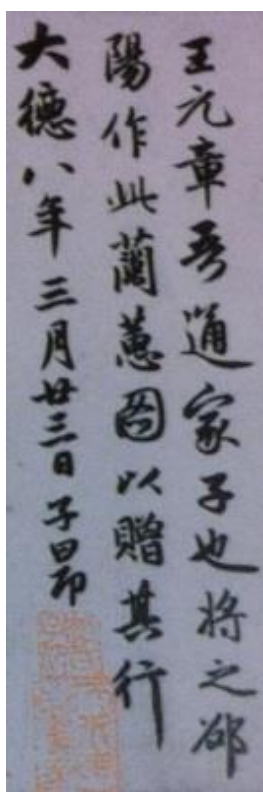


【図1 6】趙孟頫における碑文書法の書風の変遷



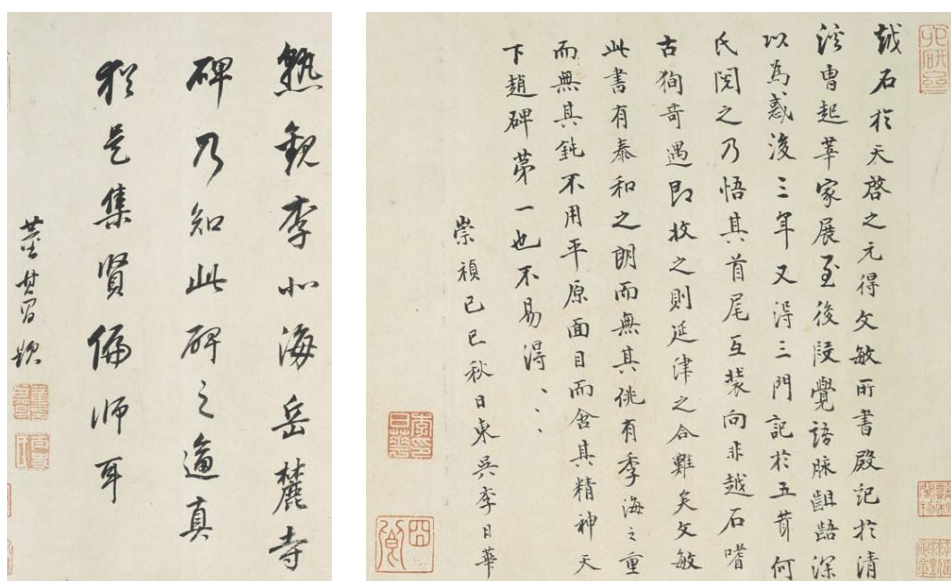
【図1 7】趙孟頫跋《蘭蕙圖》、(左)

【図1 8】趙孟頫《陋室銘》(部分)、(右)



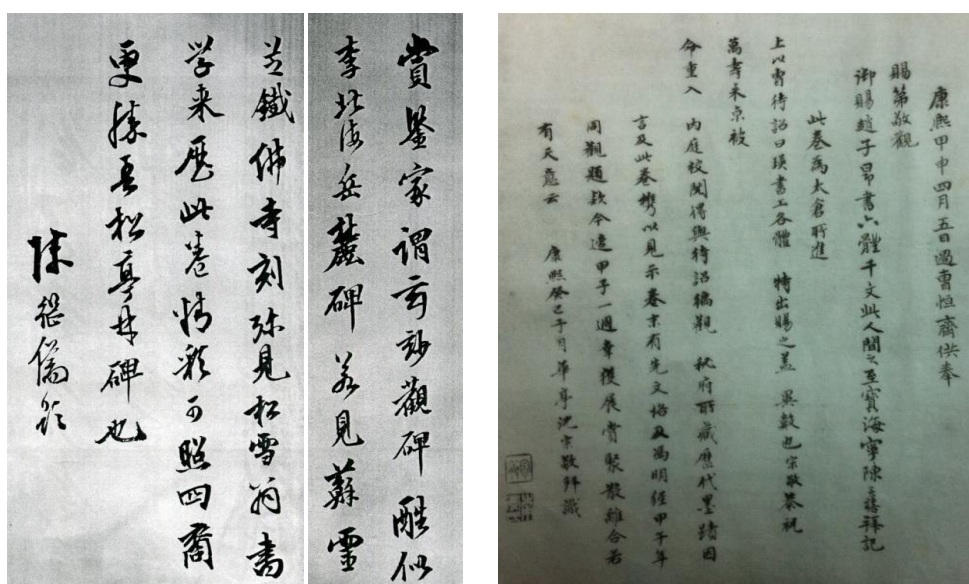
【图 1 9】董其昌跋《玄妙觀重修三門記》稿（左下）

【图 2 0】李日華跋《玄妙觀重修三門記》稿（右下）



【图 2 1】陳繼儒跋《玄妙觀重修三清殿記》稿（左下）

【图 2 2】沈宗毅跋《元趙松雪六体千文》（右下）


















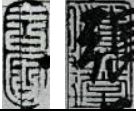

【表 1】趙孟頫の碑文書法

番号	種類	碑文名	年齢	形態	真偽関係	出典/所蔵先
1	h	宋龍隱上巖修經略司稿賞庫記	淳祐九年	拓本	偽：私見	台湾傅斯年図書館
2	c	輝州重修玉虛觀碑	至元元年	拓本	偽：私見	台湾傅斯年図書館
3	h	明肅樓記	至元二十二年（32）	文献	真	松雪齋集
4	h	明肅樓記	至元二十二年（32）	稿本	偽：私見	国立故宫博物院
5	b	鮮于府君墓誌銘	至元二十四年（34）	拓本	真	北京大学図書館
6	c	九官山重建欽天瑞慶宮記	至元二十四年（34）	文献	真	松雪齋集
7	c	空相寺記	至元二十九年（39）	拓本	真	北京図書館
8	b	姜戎墓誌銘	至元三十年（40）	文献	真	松雪齋集
9	b	趙受益墓誌銘	至元三十年（40）	文献	真	松雪齋集
10	c	盤陽路重修先聖廟記	至元三十年五月（40）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
11	d	利津県廟学碑	至元三十年八月（40）	拓本	真	北京図書館
12	b	王深及妻寧氏合葬志	至元三十年八月（40）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
13	d	濟陽県廟学碑	至元三十一年八月（41）	拓本	真	北京図書館
14	c	臨濟正宗之碑	元貞元年（42）	文献	真	松雪齋集
15	b	故成都路防城軍民總管李公墓誌銘	元貞元年（42）	文献	真	松雪齋集
16	h	五台山文殊菩薩願心記	元貞元年（42）	文献	真	松雪齋集
17	a	程氏先塋之碑	元貞元年（42）	文献	真	松雪齋集
18	a	杜氏先塋之碑	元貞元年（42）	文献	真	松雪齋集
19	c	瑞州路北乾明寺記	元貞二年（43）	文献	真	松雪齋集
20	c	南涇道院記	元貞二年（43）	文献	真	松雪齋集
21	c	重修城隍廟碑	元貞二年五月（43）	拓本	存疑：私見	台湾傅斯年図書館
22	c	重修觀堂記	大德元年（44）	文献	真	松雪齋集
23	a	先侍郎阡表	大德元年（44）	文献	真	松雪齋集
24	c	大成殿記	大德三年十月（46）	拓本	真	北京図書館
25	c	上虞蘭穹山寺碑	大德四年（47）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
26	b	有元故征士王公墓誌銘	大德四年（47）	文献	真	松雪齋集
27	d	嘉興路重修儒学記	大德五年（48）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
28	b	張弘綱墓誌	大德五—九年（48—52）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
29	c	玄妙觀重修三清殿記	大德七年（50）	稿本	真	香港個人蔵
30	c	玄妙觀重修三門記	大德七—九年（50—52）	稿本	真	東京国立博物館
31	c	玄妙觀重修三門記	大德七—九年（50—52）	拓本	真	玉虹鑑真帖
32	h	紹興路增置義田記碑	大德八年四月（51）	拓本	存疑：私見	北京図書館
33	b	故嘉興県主簿謝府君墓誌銘	大德九年（52）	文献	真	松雪齋集
34	b	故忠翊校尉海道運糧千戶謝君墓誌銘	大德九年（52）	文献	真	松雪齋集
35	b	五兄墳志	大德九年（52）	文献	真	松雪齋集
36	a	靈隱大川濟禪師塔銘	大德九年（52）	稿本	真	上海博物館
37	a	靈隱大川濟禪師塔銘	大德九年（52）	拓本	真	松雪齋法書帖
38	h	漁莊記	大德十年（53）	拓本	存疑：私見	北京図書館
39	a	康里公碑	大德十一年（54）	文献	真	松雪齋集
40	a	趙国文定公神道碑銘	大德十一年（54）	文献	真	松雪齋集
41	b	吳用晦墓誌銘	大德十一年（54）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
42	c	棣州三学資福寺藏經碑	大德十一年正月（54）	拓本	存疑：私見	台湾傅斯年図書館
43	d	嘉興路重修廟学碑記	大德十一年七月（54）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
44	c	松江宝雲寺記	大德十一年十二月（54）	稿本	真	不詳（影印本）
45	c	松江宝雲寺記	大德十一年十二月（54）	拓本	真	北京図書館
46	b	故總管張公墓誌銘	至大元年（55）	稿本	真	北京故宮博物院
47	b	故總管張公墓誌銘	至大元年（55）	拓本	真	松雪齋法書帖
48	b	王泰来墓誌銘	至大元年（55）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
49	h	吳江重建留珠藍若碑	至大元年九月（55）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
50	h	常熟知州盧侯正祠記	至大二年正月（56）	拓本	存疑：私見	台湾傅斯年図書館
51	b	任叔実墓誌銘	至大二年（56）	文献	真	松雪齋集
52	g	推官庁題名記	至大二年（56）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
53	c	湖州妙巖寺記	至大二—三年（56—57）	稿本	真	プリンストン大学付属美術館
54	c	佑聖觀重建元武殿碑	至大二—三年（56—57）	拓本	存疑：私見	台湾傅斯年図書館
55	a	江東宣慰使瑯竹公神道碑	至大二—三年（56—57）	拓本	存疑：私見	台湾傅斯年図書館
56	h	元加封孔子札付碑	至大三年（57）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
57	d	嘉興路修学記	至大三年（57）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
58	c	華陽道院碑銘	至大三年（57）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
59	a	中條孫氏先塋碑	至大三年（57）	拓本	存疑：私見	台湾傅斯年図書館
60	c	崑山淮雲院記疏	至大三年（57）	拓本	真	秋碧堂法帖
61	c	崑山淮雲院記	至大三年（57）	稿本	真	北京故宮博物院
62	b	靳公墓誌銘	至大四年（58）	文献	真	松雪齋集

63	b	眉州青神陳氏墳道碑銘	至大四年四月 (58)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
64	h	推官庁公生明記	至大年間	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
65	b	濮君墓誌銘	皇慶元年 (59)	文献	真	松雪齋集
66	h	管公樓孝思道院記	皇慶元年 (59)	文献	真	松雪齋集
67	a	定演道行碑	皇慶元年 (59)	拓本	真	北京図書館
68	a	吳興郡公趙公碑	皇慶元年 (59)	文献	真	松雪齋集
69	c	大元大普慶寺碑銘	皇慶元年 (59)	文献	真	松雪齋集
70	a	仰山栖隱寺滿禪院道行碑	皇慶元年 (59)	文献	真	松雪齋集
71	c	袁州大仰山重建太平興國禪寺碑	皇慶元年 (59)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
72	c	靈隱寺碑	皇慶元年 (59)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
73	e	湖州路總管府題名記	皇慶元年 (59)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
74	a	東華大紫府輔元立極帝君碑	皇慶元年十月 (59)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
75	a	騎都尉弘農伯楊瓊神道碑	皇慶二年正月 (60)	拓本	存疑：私見	北京図書館
76	b	義士吳公墓誌銘	皇慶二年 (60)	文献	真	松雪齋集
77	b	田師孟墓誌銘	皇慶二年 (61)	文献	真	松雪齋集
78	c	興隆寺碑	皇慶二年 (62)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
79	h	勅賜玄真妙応淵德慈濟元君碑	皇慶二年 (63)	文献	真	松雪齋集
80	c	呂梁廟碑	皇慶二年十月 (60)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
81	h	敕建大都路總治碑	皇慶二年十月 (60)	拓本	存疑：私見	北京図書館
82	a	楊氏先塋記	延祐元年 (61)	文献	真	松雪齋集
83	a	定慧禪師碑	延祐元年二月 (61)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
84	c	重建泛海觀音殿記	延祐元年二月 (61)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
85	a	陽翟馮氏先塋碑	延祐元年三月 (61)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
86	h	寧都州学孫氏五賢祠記	延祐元年三月 (61)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
87	c	長興州修建東岳行宮記	延祐元年四月 (61)	拓本	存疑：私見	北京図書館
88	h	投龍簡記	延祐元年八月 (61)	拓本	存疑：私見	北京図書館
89	a	少林寺裕公禪師碑	延祐元年十一月 (61)	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
90	a	梁公神道碑銘	延祐二年 (62)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
91	h	貞節堂記	延祐二年正月 (62)	拓本	存疑：私見	北京図書館
92	c	大元一真慶万寿宮碑	延祐二年二月 (62)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
93	c	重陽宮勅藏御服碑	延祐二年三月 (62)	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
94	a	清河郡伯張成墓碑	延祐二年三月 (62)	拓本	存疑：私見	北京図書館
95	c	崑山州重建海寧禪寺碑	延祐二年四月 (62)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
96	a	姚氏先塋記	延祐二年六月 (62)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
97	a	四川廉訪使梁天翔神道碑銘	延祐二年七月 (62)	拓本	存疑：私見	北京図書館
98	c	勅建大興龍寺碑銘	延祐二年七月 (62)	文献	真	松雪齋集
99	c	天目山大覺正等禪寺記	延祐三年 (63)	文献	真	松雪齋集
100	c	魯国公家廟碑	延祐三年 (63)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
101	a	故嘉議大夫浙東海右道肅政廉訪使陳公碑	延祐三年 (63)	文献	真	松雪齋集
102	c	寿春堂記	延祐三年 (63)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
103	c	某院記殘稿	延祐三年以降 (63)	稿本	真	不詳（影印本）
104	d	勅賜伊川書院碑	延祐三年四月 (63)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
105	a	賀公神道碑殘石	延祐三年五月 (63)	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
106	h	大元勅賜雍古氏家廟碑	延祐三年孟秋 (63)	拓本	偽：私見	蘭州碑林藏
107	a	大元勅賜龍興寺大覺普慈広照無上帝師之碑	延祐三年十月 (63)	稿本	真	北京故宫博物院
108	a	大元勅賜龍興寺大覺普慈広照無上帝師之碑	延祐三年十月 (63)	拓本	真	台湾傳斯年図書館
109	a	魏国忠懿公神道碑	延祐三—五年 (63—65)	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
110	a	勅賜玄真妙応淵德慈濟先君之碑	延祐四年 (64)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
111	c	賢樂堂記	延祐四年 (64)	文献	真	松雪齋集
112	a	梁国文正公何璋神道碑	延祐四年 (64)	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
113	a	東平郡桓蕭公碑	延祐四年 (64)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
114	c	徐州呂梁鎮玄武殿碑	延祐四年 (64)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
115	c	佑聖觀捐施題名記	延祐四年正月 (64)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
116	a	晋陽山重修慈雲禪師碑	延祐四年正月 (64)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
117	h	積菴記	延祐四年三月 (64)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
118	c	衆福院記	延祐四年六月 (64)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
119	c	大覺寺長明灯記	延祐四年十月 (64)	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
120	h	龍興寺祝延聖主本命長生碑	延祐四年十一月 (64)	拓本	存疑：私見	北京図書館
121	a	追封吉天英碑	延祐四か五年 (64か65)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
122	c	処州万象小崇福寺記	延祐五年 (65)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
123	a	襄陵牛氏墓碑	延祐五年 (65)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
124	a	勅贈貞文先生揭君碑	延祐五年二月 (65)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
125	a	張氏官原墓表	延祐五年三月 (65)	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
126	a	隆道冲真崇正真人杜公碑	延祐五年三月以降 (65)	文献	真	松雪齋集
127	a	追封隴西郡伯李斌墓碑	延祐五年四月 (65)	拓本	存疑：私見	北京図書館

128	a	大元追封楚国夫人徐君碑銘	延祐五年七月（65）	拓本	存疑：私見	北京図書館
129	c	普照禪師靈瑞塔碑	延祐五年九月（65）	拓本	存疑：私見	北京図書館
130	c	龍虎山真風殿記	延祐六年（66）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
131	h	法智大師行業碑	延祐六年（66）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
132	c	呂梁鎮慶真觀碑記	延祐六年（66）	拓本	存疑：私見	北京図書館
133	a	鞏国武惠公哈剌碑	延祐六年（66）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
134	a	福建閩海道肅政廉訪使副仇府君墓碑銘	延祐六年（66）	稿本	真	陽明文庫
135	a	福建閩海道肅政廉訪使副仇府君墓碑銘	延祐六年（66）	拓本	真	台湾傳斯年図書館
136	c	飛英舍利塔記	延祐六年（66）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
137	c	資福寺記	延祐六年（66）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
138	c	永福寺碑	延祐六年（66）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
139	c	茅山崇禧万寿宮記	延祐六年（66）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
140	b	魏国夫人管氏墓誌銘	延祐六年（66）	文献	真	松雪齋集
141	c	弘明塔銘	延祐六年（66）	拓本	存疑：私見	北京図書館
142	c	番君廟碑	延祐六年三月（66）	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
143	a	虛照禪師明公塔銘	延祐六年八月（66）	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
144	c	大報国圓通寺碑	延祐六年十月（66）	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
145	c	杭州福神觀記	延祐七年正月（67）	稿本	真	上海博物館
146	c	杭州福神觀記	延祐七年正月（67）	拓本	真	台湾傳斯年図書館
147	c	処州万象山崇福寺記	延祐七年正月（67）	拓本	存疑：私見	北京図書館
148	c	乾明広福禪寺觀音殿記	延祐七年二月（67）	拓本	存疑：私見	北京図書館
149	c	上乘寺長明灯記	延祐七年二月（67）	拓本	存疑：私見	北京図書館
150	a	太常博士敬元長墓碣銘	延祐七年三月（67）	拓本	存疑：私見	傳斯年図書館
151	a	金仙寺裕公和尚道行碑	延祐七年（67）	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
152	a	參知政事張思明神道碑	延祐七年（67）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
153	c	龍興寺長明灯記	延祐七年（67）	拓本	存疑：私見	台湾傳斯年図書館
154	g	趙孟頫書三学資福禪寺額	延祐七年十二月（67）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
155	c	撫州永安禪院僧堂記	至治元年（68）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
156	c	光福寺重建塔記	至治元年（68）	稿本	真	上海博物館
157	c	建康路三茅山崇禧万寿宮	至治元年正月（68）	拓本	存疑：私見	北京図書館
158	c	長春道院記	至治元年四月（68）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
159	d	平江路重建儒学記	至治元年七月（68）	拓本	存疑：私見	北京図書館
160	c	嘉興路資聖禪寺長生修造局記	至治元年十月（68）	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
161	a	蔚州楊氏先塋碑銘	至治元年十一月（68）	拓本	存疑：私見	北京図書館
162	h	李志椿道行記	至治二年（69）	拓本	存疑：私見	北京図書館
163	h	涇県尹承務蘇公政績碑	至治二年二月（69）	拓本	真	徐暢氏論文
164	a	孔治墓碑	至治四年	拓本	偽：私見	中国国家図書館
165	a	許熙載神道碑	後至元四年	拓本	偽：私見	台湾傳斯年図書館
166	a	珊瑚公神道碑并蓋	泰定三年	拓本	偽：私見	台湾傳斯年図書館
167	a	張留孫碑	天曆二年	拓本	偽：私見	台湾傳斯年図書館
168	h	孫德彧道行記	元統三年	拓本	偽：私見	台湾傳斯年図書館
169	g	上善池（隸書）	無紀年	拓本	偽：私見	台湾傳斯年図書館
170	h	江寧南門外善世碑	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
171	g	碧瀾二字	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
172	c	天寧万寿禪寺石刻	無紀年	拓本	偽：私見	台湾傳斯年図書館
173	c	普覺堂石刻	無紀年	拓本	偽：私見	台湾傳斯年図書館
174	g	趙子昂白雀山題字	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
175	g	洗墨池三大字	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
176	c	東林寺山門疏殘碑	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
177	g	徐大僕祠舞蚊石題字	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
178	g	龍津二字	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
179	f	大士象贊	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
180	g	福嚴禪寺額	無紀年	文献	存疑：私見	桜井智美氏論文参照
181	h	吳興山水清遠図記	無紀年	文献	真	松雪齋集
182	h	縮軒記	無紀年	文献	真	松雪齋集
183	h	默齋記	無紀年	文献	真	松雪齋集
184	g	完州前進士題名記	無紀年	文献	真	松雪齋集
185	c	大雄寺仏閣記	無紀年	文献	真	松雪齋集
186	a	郝氏先塋之碑	無紀年	文献	真	松雪齋集
187	a	田氏賢母之碑	無紀年	文献	真	松雪齋集
188	c	濟南福壽禪院記	無紀年	文献	真	松雪齋集

【表2】《二稿》の収蔵印記

時代	印主	(ア)	(イ)
明	晋王府		
明末	王廷珪		
明末清初	程正揆		
清	梁清標		
清	安岐		
清	梁氏父子		
清	清高宗		
清	孔繼涑		
清	孫爾準		
清	孫慧翼		
清末民初	完顏景賢		
不詳	不詳		

【表3】《岳麓寺碑》と《鉄仏寺碑》、《二稿》の字形対照

	岳麓寺碑	鉄仏寺碑	(ア)	(イ)
三				
門 閒				
之	 	 	 	 
成 哉				
者				
天				
遠				
也				
書				
有	 	 	 	 
崇				

【表 4】《二稿》の遞伝

遞伝時期	(ア)	(イ)
明初	晋王府蔵	晋王府蔵
明末	張丑蔵、『清河秘篋書画表』記載	張丑蔵、『清河秘篋書画表』記載
万曆四十四年（1616）	張丑『清河書画舫』記載	
天啓元年（1621）前	附董其昌と陳繼儒跋（《二稿》のどちらかの後に）	
天啓元年（1621）	曹起莘→王越石蔵（附陳跋）	
天啓三年 1624）	王越石蔵（附陳跋）	何氏→王越石蔵（附董跋）
崇禎二年（1629）	王越石蔵（附陳跋）	王越石蔵、（附董、李跋）
崇禎二年（1629）後	張丑『真跡日録』記載	張丑『真跡日録』記載
明末清初	程正揆蔵	程正揆蔵
清初	梁清標蔵	梁清標蔵
清初	安岐蔵、『墨緣彙觀』記載	梁師正蔵
清初	吳升『大觀錄』記載	王原祁『佩文齋書画譜』記載
清初	倪濤『六芸之一録』記載	倪濤『六芸之一録』記載
清初	卞永誉『書画彙考』記載	
清乾隆年間		孔繼涑《玉虹鑑真帖》收入
乾隆五十八年（1793）	乾隆内府蔵、『石渠宝笈』続編記載	梁同書蔵
嘉慶元年（1796）		梁同書蔵、錢泳過眼・刻帖
嘉慶十四年（1809）		錢泳《松雪齋法書》收入
道光元年（1821）		孫爾準、孫慧艷（子）蔵
清末民初		完顏景賢蔵
民国三年（1914）前後		貴哲生蔵
民国三年（1914）		沈盒（宝熙）斎にて崇彝過眼

民国七年（1918）		顔世清蔵、附自跋一、二
民国九年（1920）		顔世清が大坂に持参、長尾雨山過眼
民国十三年（1924）		阿部房次郎蔵、長尾雨山跋
1937？－1978 年		日本文化庁蔵
民国六十九年（1980）前後		東京国立博物館管理換、収蔵
民国七十二年（1983）	香港袁氏がフランスで購入	
民国一〇二年（2013）	香港袁氏蔵→台湾個人蔵	東京国立博物館蔵

図版出典

【図 1】【図 2】

…王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大觀』上、下（上海人民美術出版社、1995）、
頁 68、398。

【図 3】

…同社編『中国民族古文字図録』（中国社会科学出版社、1990）、頁 346。

【図 4】

…『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（読売新聞社、2003）、頁 186～191。

【図 5】

…同社編『北京大学図書館蔵金石拓本菁華』（文物出版社、1998）、頁 163。

【図 6】

…北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』第 48 冊（中州古籍、1990）、頁 122。

【図 7】

…筆者作成。左：『中国法書選 34 雁塔聖教序』（二玄社、1987）。右：同前掲【図 6】。

【図 8】

…蔡玫芬主編『精彩一百 国宝総動員』（国立故宫博物院、2011）、頁 231。

【図 9】

…筆者作成。《二稿》の図版の出典は前掲【図 1】【図 2】と同じ。《岳麓寺碑》拓本は『書跡名品叢刊』第 66 回（二玄社、1961）による。《鉄仏寺碑》拓本は藤原楚水著『図解書道史』第 3 卷（省心書房、1972）、頁 457 による。

【図 10】

…筆者作成。

【図 1 1】

…同前掲【図 6】、頁 154。

【図 1 2】

…中国国家図書館蔵（索書号：各地 3593、版權は中国国家図書館所有）。

【図 1 3】

…個人蔵。（剪装本、出版社、出版年不詳）。

【図 1 4】

…筆者作成。《茅屋為秋風所破歌詩》は同前掲【図 4】、頁 223、《蕭山県新文廟碑陰記》拓本は同前掲【図 1 1】、《行楷書趙秉文御史箴》、《幽竹枯槎図跋》は同前掲【図 4】、頁 174、《歸去來辭》は『中国書法家全集 鮮于枢』（河北教育出版社、2003）、頁 54 による。《楊凝式夏熱帖跋》は『中国書法家全集 鮮于枢』（河北教育出版社、2003）、頁 156 による。《宋人書画孝經跋》は『文芸紹興 南宋芸術与文化・書画卷』（国立故宫博物院、2010）、頁 121 による。《為盛逸民書洛神賦》、《前後赤壁賦》、《吳興賦》は『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮宝齋出版社、2002）、頁 105、116、130 による。《玄妙觀重修三清殿記》稿は同前掲【図 1】、《行書雜書三段帖首段》は『故宫博物院藏文物珍品大系 元代書法』（上海科学技術出版社、商務印書館（香港）、2001）、頁 58 による。

【図 1 5】

…筆者作成。同前掲【図 2】。

【図 1 6】

…筆者作成。⑧は羅振玉『羅雪堂先生全集』第七編（三）（大通書局、1976）、頁 1253 による。それ以外は同前掲【図 1】、【図 2】。

【図 1 7】

…同社編『趙孟頫画集』（上海書画出版社、1995）、頁 55。

【図 1 8】

…同社編『文物天地』第 10 期（文物天地雜誌社、2007）、頁 85。

【図 1 9】

…<http://image.tnm.jp/image/1024/C0099124.jpg> (版權は東京国立博物館所有)。

【図 2 0】

…<http://image.tnm.jp/image/1024/C0099125.jpg> (版權は東京国立博物館所有)。

【図 2 1】

…『書譜』総第 64 期（書譜出版社、1985）。

【図 2 2】

…『元趙松雪六体千文』羅復堪題簽本（北平・古物陳列所、1927）、無頁数。

第二章 趙孟頫の小楷書法

序

先行研究では、小楷は小字の楷書であるとされ、王羲之《黄庭經》や王献之《洛神賦十三行》のような大きさの字を指すが、厳密な基準はない¹。ただし、字粒の大きさは1センチ四方と具体的に規定する先行研究も見られる²。

本章では、先行研究の定義に基づき、実際の遺品の大きさにも配慮しながら、1.6センチ四方以下のものを趙孟頫の小楷と定義する³。そこで、現存する肉筆の小楷作品に焦点を絞り、その中から①、詩翰類（4点）、②、題跋・款識類（28点）、③、儒・釈・道教經典類（15点）、④、古典法帖（8点）を表にまとめた【表1】。これらの作品は、第一章で考察した中楷の碑文書法を除くと、大きな一群を成しているのではないかと思う。例えば、袁桷（元至元三年～泰定四年、1266～1327）は、「乙酉歲（1285）、余見今翰林承旨趙公子昂於杭、于時愛堯章書譜、手之不釈。逾三十年、趙公小楷妙天下、是蓋脱其形似、而師其神俊。……。延祐五年（1318）八月乙卯書。」と趙孟頫の小楷書法を天下一と称えており⁴、これは32歳頃に姜夔の書譜を臨池し続けた

¹西林昭一著『中国書道文化辞典』（柳原出版社、2009）、頁428を参照。

²芸術新聞社編『墨』第84号（芸術新聞社、1990）、頁5を参照。

³莊慕俊は「小楷字的尺寸、以不超出五分为度、中楷以二寸上下為度、超此以外的大字都列為大楷。」としている。詳細は姜一涵「趙孟頫書湖州妙嚴寺記」『故宮季刊』第10卷第3期（国立故宮博物院、1976）、頁76を参照。なお、現在では、一分は約0.32センチで、一寸は約3.2センチとされている。詳細は林光澂、陳捷編『中国度量衡』（台湾商務印書館股份有限公司、1967）、頁191を参照。

⁴袁桷『清容居士集』卷五十『文津閣四庫全書』第1207冊（商務印書館、2006）、頁387を参照。

ためだと述べている。一方、友人の鮮于樞は趙孟頫書《過秦論》について、
「子昂篆隸正行顛草為當代第一。小楷又為子昂諸書第一。……。至元辛卯(1291)
十二月七日鮮于樞伯幾父記。」としている。その次に、同じく元人の倪瓚(元・
大徳五年～明・洪武七年、1301～1374)が、「其結体妍麗、用筆遒勁、真無愧
隋唐間人。」と評しており⁵、こうした評価からも趙孟頫の小楷書法的一端を
見ることができる。しかしながら、趙孟頫の小楷書法について系統的に分析
した先行研究は見当たらない。また、現代の先行研究では、趙孟頫の小楷書
法を厳選するべきだと主張しているにもかかわらず、書風変遷を振り返る際
に、一部作品には合理的な解釈がなされていないのが現状である。特に③、
④、は、どれを見ても署名は趙孟頫の名前(字の場合もある)だが、書風に
ばらつきがあり、一貫性がない。これは今日になってもなお、真偽不明の作
品が多々含まれているためであろう。

一方、啓功氏は、「書画の場合、当然、作者の制作年代の差違、筆や墨など
の使用道具の好悪、また、興の乗り具合の違い、更に腕や指に病傷による支
障のある場合なども含めて、これら条件の相違はすべて作品の出来を左右す
る。それらはともに相応の徴れとして作品の中に見てとれるものである。し
かし、一人の作者の同一時期の作品で、いわゆる筆性が全く異なり、あたか
も二人の作者によった作品のごとくに見えるということは絶対にあり得な
い。」とし⁶、徐邦達氏は、「不明白趙氏作品中的那種特有的變化規律和不同面
貌、你就無法認識區別趙畫的真偽。」⁷と述べるなど、両氏とも作者の書風、
または画風は特別な理由がない限り、多少の変化はあるだろうが、その規律

⁵張丑『清河書画舫』卷十下『文津閣四庫全書』第820冊(商務印書館、2006)、
頁385、387を参照。

⁶張珩・謝稚柳・羅福頤・啓功著、今井凌雪・中村伸夫訳『書画鑑定のてび
き』(二玄社、1985)、頁142を参照。

⁷徐邦達「趙孟頫書画偽訛考辨」『趙孟頫研究論文集』(上海書画出版社、1995)、
頁131を参照。

は自ずと一貫するはずだと主張している。本章は啓功氏、徐邦達氏の説に追従し、一貫した規律を見出すに足る基準作を定め、それをもとに、現在確認できる最も早い時期の遺品《曹娥碑》後の趙孟頫題跋（33歳頃、遼寧省博物館蔵）以降唐突な書風が見られる作品の真偽について鑑定し、論を進めていきたい。

本章は趙孟頫の小楷書法の分期と画期の確認を主な目的とするが、その前に、現存する趙孟頫の小楷書法の遺品を全体的に見渡し、真偽を見分ける必要がある。まず先に作品の真偽を鑑定する際に用いる基準作を定めなければならない。基準作の特徴及びそれまでの書法の変遷の法則を活用し、一貫した規律をもとに、分期と画期について論を展開したいと思う。最後に、作品に表れる筆法や結体など、書法的に対照しながら、第一章で提起した趙孟頫の碑文書法にみる画期的な表現が小楷書法といかに関係しているかについて論証を深めてゆきたいと思う⁸。

第一節 作品の真偽鑑定に用いる基準作と準基準作

述した諸問題を解決するには、改めて趙孟頫の小楷を精査して作品の真偽を明らかにし、書風変遷の時期区分を見直す必要がある。その中で最も重要なのは、書風変遷や真偽を鑑定する際に用いる基準作を定めることである。また、遺品の書体や性格が異なる書法の鑑定を行う際には、基準作と同じ機能を持つ準基準作の活用も考慮しなければならない。準基準作とは、書法的

⁸黄惇氏は趙孟頫の小楷について、「小楷無須用碑版法。」と述べているが、その真偽についても本章で確認したい。詳細は、黄惇「高上大洞玉經小楷卷」『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44（榮宝齋出版社、2002）、頁461を参照。この論拠について述べるため、序章で提起した小楷書法の検討を碑文書法の次に列ねている。

特徴と制作背景、結体、用筆、署名、官職名、制作年代など、全ての条件が趙孟頫とその書法に合致する作品のことである。

王羲之《快雪時晴帖》後の趙孟頫による題跋（65 歳、国立故宫博物院蔵、以下《趙跋》と略す）の書法が、最も信頼できる作品の一つであるのは疑いの余地がなく、本作を鑑定の基準作とする【図 1】。なお、この基準作は小楷書法の鑑定にのみ用いるものではない。同時期の書法ならば、その時期にだけ見られる書法的特徴があるはずであり、鑑定の手助けとして中楷の書法作品と合わせて準基準作も活用する。《洞玄靈寶自然九天生神章經》（67 歳、北京故宫博物院蔵、以下《道生神章經》と略す）はその好例である【図 2】。管見の限り、《道生神章經》は現在まで真偽の争議がなく、趙孟頫の晩年の書風や仏・道教類經典の書法の鑑定においては、極めて重要な基準作である。本節では、まずこの 2 作それぞれの特徴を分析し、最後に 2 作に共通する書法的特徴をまとめたいと思う。

一、《快雪時晴帖》後の《趙跋》

（一）、制作背景

元仁宗延祐五年（1318）4 月 21 日から 23 日にかけて、宮廷で王羲之《快雪時晴帖》書法鑑賞会が行われた。《快雪時晴帖》後に元時代の 3 人の題跋が見られる。これは皇帝の勅命により書かれたもので、趙孟頫、劉賡、護都沓児の順に書いてある。鮮明な図版を見ると、3 人の題跋の紙に同じ文様が見られることから、同じ紙に揮毫されたものであろう⁹。この三つの題跋はもとは別々に書かれたもので、切り取ったものを組み合わせて表装したのではな

⁹図版は何伝馨主編『故宮法書新編 一 晋王羲之墨蹟』（国立故宫博物院、2010）、頁 15～19 を参照。

いかという疑問を抱く研究者もいるが¹⁰、これについて筆者は次のように考えている。《快雪時晴帖》冊は、本来は卷子本であり、明・万歴三十二年(1604)に現状の冊子本に表装し直されたものとされている¹¹。劉賡跋は無紀年で、本来の位置と揮毫した時間については、澤田氏が指摘しているとおりの、更なる検討を要する。しかし、もともとは卷子本だった本作が、明代に入ってから切断され、冊子本に改装されたものだとしても、書写素材(紙)と制作時間には関連性があり、趙孟頫と護都沓児が元仁宗の勅命を受けて跋文を揮毫したことに関しては疑う余地はないと思われる。続いては次項で《趙跋》の書風について考察を進めたい。

(二)、書法風格

《趙跋》は全部で86字あり、1センチ四方ほどの小楷を基調とし、行書と独草体¹²を混用する跋文が《快雪時晴帖》の後に揮毫されている。このような書風は、伝王羲之《曹娥碑》(《孝女曹娥碑》ともいう)の後にある早年趙孟頫が揮毫した題跋(33歳頃、遼寧省博物館蔵)から、伝王羲之《大道帖》の後趙孟頫が揮毫した題跋(34歳、国立故宫博物院蔵)、または《禊帖源流》(34歳~37歳頃、国立故宫博物院蔵)以降の小楷作品と比較しても違和感がない。要するに、趙孟頫の小楷は現在の我々の認識する小楷と異なり、楷書を基盤としながらも、行書、独草体を随所に織り交ぜたもので、これが当時の趙孟頫の小楷書法に対する認識であったと推測する【図3】。このような書

¹⁰これは筆者が2012年6月24日(日)、書学書道史学会が日本大学で開催した「第八回 学生・若手の会員による研究発表会」で口頭発表した後に、大東文化大学の教授、澤田雅弘先生より頂いた質問である。

¹¹何伝馨「快雪時晴帖」『晋唐法書名蹟』(国立故宫博物院、2008)、頁22を参照。

¹²独草体は「独草ともいい、連綿の対語。」とされる。詳細は前掲注1、西林昭一著『中国書道文化辞典』、頁731を参照。

表現は書法効果を高める独自の美意識にも関連するだろう。《趙跋》は筆先が効く兼毫のような毛筆で揮毫され、線質が円潤遒勁で、字形の重心が右下にある【図4】。縦長、扁平の結体は紙幅や、行間、字間などが考慮され、揮毫者の書意識や、意図により変化が施されているように見える。本跋の特徴としては、出鋒、蔵鋒、方筆、円筆を兼用している点が挙げられ、左払いも右払いもこれら全ての用筆は決して同じではない【図5】。

（三）、署名と落款印

現存する作品を精査すると、趙孟頫の署名には一定の法則が見られない。必ずしも官職名と名前を合わせて書いているわけではないが、《楷書続千字文》（62歳、北京故宮博物院蔵）【図6】や碑文書法の《大元勅賜龍興寺大覚普慈広照無上帝師之碑》稿（63歳、北京故宮博物院蔵）などは、趙孟頫の書法作品でよく見られる署名の書き方となっており、これは趙孟頫の小楷書法の真偽鑑定の要件ともなっている。「翰林学士承旨荣禄大夫知制誥兼修国史」は、63歳から67歳までの官職名であり、《趙跋》の書き方にも疑わしい点はない¹³。また、署名の「趙孟頫」の「孟」字に注目すると、最後の横画が左に突き出ている書き方は、他の真跡の題跋や尺牘、詩翰類の作品と同様で違いは見られない【表2】。《趙跋》は押印が確認できないが、趙孟頫の小楷作品に押されている落款印【表3】より、前述した伝王羲之《大道帖》や韓滉《五牛図》後の趙孟頫の題跋【図7】（40歳、北京故宮博物院蔵）も同様の書き方が見られるため、理由は不明だが、決して誤りだとは言えない。

以上の考察より、《趙跋》は制作背景から見ても、用筆、結体、署名などの

¹³次に考察する《道生神章經》の款識は、官職に「前」が付けてあるので、延祐七年（1320）以前の官職名は「翰林学士承旨荣禄大夫知制誥兼修国史」だったことがわかる。

書法風格から見ても真跡とみなすことができ、基準作とするにふさわしく、以下ではこれを基準作として鑑定を進めていきたい。

二、《道生神章經》

(一)、制作背景

本作はこれまで真跡だとされている。先行研究は書風が確実なものだけでなく、卷末の題跋の記録より、弟子の張雨（元・至元十四年～至正八年、1277～1348）の依頼で趙孟頫が道教の經典を写し、何道堅に贈ったものという点についても述べている¹⁴。張雨も何道堅も道士であり、題跋から趙孟頫とは深い親交があったことがわかる。本作は真跡である可能性が高い。落款の官職名「翰林学士承旨榮禄大夫知制誥兼修国史」に「前」が付け加えられているのは【図8】、この時、趙孟頫はすでに大都を離れ、杭州に戻っていた証拠であり、先行研究の考察にも一致する¹⁵。卷末に息子趙雍の題跋があり、信頼度が更に高まる。本作の釈文、題跋、収蔵史などについては先行研究に詳しいので、説明は割愛する¹⁶。

(二)、書法風格

仏教や道教の經典類は、端正な楷書で揮毫するのが一般的なようである。これは唐代以降の写經を見れば一目瞭然である。後に、南宋時代の張即之（南宋・淳熙十三年～景定四年、1186～1263）は行意が入る行楷書で写經をして

¹⁴柴培良、趙燕君主編『帰去来兮：趙孟頫書画珍品回家展特輯』（西泠印社、2007）、頁 276 を参照。

¹⁵任道斌『趙孟頫系年』（河南美術出版社、1984）、頁 204～205 を参照。

¹⁶同前掲注 14、柴培良、趙燕君主編『帰去来兮：趙孟頫書画珍品回家展特輯』、頁 276 と徐邦達著、北京故宫博物院編『徐邦達集 五 古書画過眼要録・元明清書法：1』（紫禁城出版社、2008）、頁 87～90 を参照。

おり、《金剛般若波羅蜜經》(1253、京都・智積院蔵)はその代表作である【図9】。だが、趙孟頫の場合、本作の《道生神章經》は全体的に碑文書法のような行楷書が中心で、文字の大きさは中楷よりである。一部は独草体よりの文字で揮毫されており、先述した30代以降の楷書への揮毫意識に一致する。換言すると、趙孟頫の場合、道教の經典であっても必ずしも端正な楷書で揮毫したわけではない、この書はその証である。用筆に関しては、柔らかめの毛筆を用いたことが、墨色のかすれたところや転折部分の圭角、戈画から見て取れる。縦画を二回に分けて書く特徴は碑文稿のそれに一致する。「期」の右側の「月」を章草の結体で書くと不自然に思われがちだが、逆に趙孟頫書法の特徴が明瞭になるとも考えられる【図10】。これは、この時期に章草の結体をふんだんに作品に織り込んだ、趙孟頫自身の美意識と関連があると思われる(これについては、第三章と第四章で考察を深めたい)。一見すると落款は小楷風で揮毫しているように見えるが、《趙跋》のような慎重さとは異なり、やや率意であるが、日頃の書写習慣が窺える。例えば、横画の起筆は初めのところが強く押されており、線の下に楕円形や三角形が現れている。本文の初めは中楷を用い、先述した《趙跋》と同じく柔らかな毛筆で書いたことがわかる。また、書体は楷書とはいえ、「士」「承」二文字は今草の要素も混ぜ込まれ、連綿で書かれている【図8】。これが趙孟頫独特の書写意識であることを見逃してはならない。

(三)、署名と落款印

本作の最後に、趙孟頫は官職名と自分の名前を連ねて署名しているが、これはよくある書き方である。例えば、碑文稿や先述した《楷書続千字文》もこれと同様の書き方となっている。名前の「趙孟頫」の書き方は60代の落款の書写習慣と一致するので、信頼に足るものと言える【表2】。署名の上に落

款印の「水精宮道人」印が押されている。このような押印の習慣も一部作品のそれと共通しており、唐突な感もない【表3】。ただし、この印は「孤印」であり、今後更なる考察を要する¹⁷。

三、《趙跋》と《道生神章經》共通的な書法的特徴

（一）、字座重視

趙孟頫の書法は章法が綺麗に見える。これは字と字の余白のバランスを意識して書かれているからだと思われる。特に楷書が理解しやすい。【図1】と【図2】を見ると、行間は字間よりやや広く、字と字の間に一定の空間を保ちながら、大小の変化も工夫しており、文字それぞれに姿態がある書法的美感を感じさせる。

（二）、行楷書に独草体で揮毫する書写意識

この2作は従来より楷書または小楷と言われるが、【図1】と【図2】仔細に観察すると、3種類の書体で構成されているのがわかる。このような書き方は先述した《曹娥碑》後の趙孟頫題跋、筆者が以前検討した34歳～37歳頃の《禊帖源流》も同じである点から、書表現は一貫していることがわかる。要するに、趙孟頫の楷書は一画一画独立しており、行書、独草体を混ぜないほうが逆に違和感がある。

（三）、結体重視

¹⁷拙文「趙孟頫書《太上老君說常清静經》の真偽について」『書芸術研究』第1号（筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2008）、頁37を参照。なお、近年、《宋黄庭堅書筆陣図説 卷》（無紀年、国立故宫博物院蔵）に別種類の白文の「水精宮道人」印を発見された。この精査は今後の課題としたい。

一文字一文字を観察すると、結体の姿態が美しいだけでなく、文字の内側の余白にも変化をつけようと意識しているのがわかる。例えば、《趙跋》の一文字目の「東」の「田」を見ればわかるように、左半分は小さめで、右半分は大きめに書いてある。雑然とした感はないが、均等に書こうとはしていない。下半部の縦画と「八」が交差する空間も意識され、黒と白の空間が明瞭に分けられているように見える【図 1 1】。同じ文字が現れる時は、楷書、行書、独草体を混ぜあいながら、文字の造形が重複しないように書いている。《趙跋》の「跡」、《道生神章經》の「君」はその好例である【図 1 2】。

(四)、多様な用筆

趙孟頫の用筆は非常に多彩である。同じ点、横画、縦画、ハネ、左・右払いでも、線質が確実で力強いだけでなく、決して同じ起筆、角度に捉われななどの「筆性」が特徴とされる。文字、線質に対する熟練度のほか、細部にまで気を配って書くその意識も関係しているのだろう。《道生神章經》もそうだが、86 字しかない《趙跋》の「至」にもそうした特徴や姿勢が表現されている【図 1 3】。

以上の分析より、《道生神章經》は《趙跋》と同じく、様々な面から見ても真跡と確定できる要素が多く、真跡と考えて間違いない。これを準基準作として、以下でその他の小楷書法の真偽鑑定に活用していきたいと思う。

第二節 小楷書法の真偽鑑定

現在、趙孟頫の小楷の偽作は約 28 点が挙げられる【表 1】。以下では従来より真跡とされる《高上大洞玉經》【図 1 4】、《大乘妙法蓮華經卷》第三卷【図 1 5】と第五卷、《道德經》【図 1 6】、《洛神賦》【図 1 7】、《漢汲黯伝》【図

18】、《六体千字文》【図19】、《臨黃庭經》【図20】計7点の小楷作品を集中的に鑑定していきたい。なお、検討対象の基本資料と先行研究の概要を【表4】にまとめた。

筆者はすでに趙孟頫30代の小楷書法を中心として考察した¹⁸。ここでは、上述した50代以降、特に60代の作品7点を中心に考察していきたい（無紀年で、中晩年と言われる作品も含む）。60代の作品は優品が多いが非常に紛らわしく、先学が特に注目しているからである。この一群の小楷書法の署名や書風はどれも趙孟頫と関わりがあり、書法も上手く、各時期において重要な作品とされているようだが、その他の小楷作品に加え、序言で取り上げた啓功氏や徐邦達氏の理論に基づいて鑑賞すると、書風の変遷や特徴が一定の規則に沿って変化しているようには見えない。この問題は書写用具や環境、書写の目的、贈与対象、身体的理由、ひいては鑑定者が設けた鑑定基準（鑑定者が設けた基準の尺度）などに関連しているのかもしれない。しかし、筆者は書写者の異同、つまり真贋両作の混在が最も大きな要因ではないかと考える。つまり、啓功氏が言うように、同一作者の同一時期の作品ならば、筆性は同じはずだが、現存する遺品を見ると、それから外れるものも少なくない。このような玉石混淆の現状を整理し、作品の真偽を明らかにしなければ、趙孟頫の生涯の事績を明らかにする上でも支障があり、書法への理解を歪める可能性もある¹⁹。また、本来ならば、偽作の研究も中国書法史の研究範囲

¹⁸同前掲注17、拙文「趙孟頫書《太上老君說常清静經》の真偽について」『書芸術研究』第1号、頁29～44と拙文「元趙孟頫書〈禊帖源流〉卷賞析」『故宮文物月刊』第329期（国立故宮博物院、2010）、頁76～84を参照。

¹⁹同前掲注15、任道斌『趙孟頫系年』、頁48～49によると、至元二十五年（1288）3月に江南に戻った趙孟頫が夫人の管道升のために、《黃庭經》〈正式名は《元趙孟頫模黃庭經並写義之換鵝図冊》、国立故宮博物院蔵）を模したというが、書風から判断するに、趙孟頫30代の作品とは思えない。2008年に国立故宮博物院で開催された特別展「探索亜洲－故宮南院首部曲－」では、本作の作品名に「伝」が付けられた。詳細は：

に含まれるのだが、趙孟頫書法の場合、偽作の存在とそれらが制作された背景への解釈は重要視されておらず、これらは趙孟頫を含めた書法史の理解には役立たない。以下では先述した7点の作品を、(一)、書法的特徴、(二)、落款、(三)、作品の押印、(四)、題跋、(五)、流伝史に分けて、観点別に論じたい。なお、書法的風格の鑑定は、《趙跋》だけでなく、すでに第一章で検討した碑文稿、《道生神經》のような準基準作の特徴に基づいている。

一、《高上大洞玉經》の《十月八日本》

文献によれば、趙孟頫書《高上大洞玉經》は《大元延祐三年本》の1点があるが²⁰、現在、確認できる遺品は大徳九年（1305）の《八月十日本》【図2 1】（52歳、北京榮宝齋蔵）と《十月八日本》（52歳、天津博物館蔵）の3点である。徐邦達氏は、《十月八日本》は《八月十日本》の底本であるとし、書法については「精勁渾厚、字字珠機、定為真跡無疑。」と鑑定した²¹。一方、黃惇氏は、《十月八日本》は楊義《黃素黃庭内景經》を取法したものであると指摘している²²。新資料として、2010年の北京保利オークションに出品された《十月八日本》と同じ款識を有する別本【図2 2】（以下、《十月八日本-2》

http://www.npm.gov.tw/exh97/asia/_ch/pieces/103.html を参照。

35歳の頃、趙孟頫はまだ大都に滞在しており、江南に戻っていなかったはずである。この作品と同様、次項で取り上げる延祐三年（1316）に揮毫された《道德經》（63歳、北京故宮博物院蔵）が真跡であれば、趙孟頫はこの時期すでに江南の松雪斎に戻っていなければならない。この点について実際はどうだったのか、これから検証していきたい。

²⁰ 吳升『大觀錄』卷7（漢華文化事業出版社、1970）より。官職名と実際の官職が一致しておらず、偽作だと断定できる。

²¹ 徐邦達『古書畫偽訛考辨』（江蘇古籍出版社、1984）、頁45を参照。

²² 黃惇「趙孟頫書法研究二題」『書法研究』総第124期（上海書畫出版社、2005）、頁41を参照。

と略す)が確認できた²³。いずれにせよ、遺品の3本は書風から落款まで緊密な関係を有することが窺える。一方、『重刊道蔵輯要』の『元始大洞玉経』を確認したところ、明代の蕭允儒は序文で「嘉靖間、我肅宗皇帝遣臺臣徧訪巖穴、乃奉上大洞符法。当是時蔵諸中秘、世鮮有之、即有之、又非人不授、則世之知者益鮮。」²⁴と述べている。この一節により、明代においては、『大洞玉経』という道教の経典が希少な典籍であったことがわかる。本巻の書き出しは「高上大洞玉経」であり、文献との相違が見て取れる。更に、『元始大洞玉経』と趙孟頫書《高上大洞玉経》墨跡本を対照し、内容の異同、漏句が確認できた。当時の趙孟頫がどのようにしてこの経典を手に入れたのか、なぜこの経典を揮毫したのか、その背景まで辿るのは困難である。以上は作品制作の背景についての考察である。

(一)、書法的特徴

この3本は内容が等しく、章法から字形、用筆も非常によく似ており、同一人物による作品と考えていいだろう。検討対象の《十月八日本》について徐邦達氏は、本作は道教の経典を書き写すために書風が変えられているが、真跡だと断言している。だが、これは根拠としては説得力に欠けるように思う。一方、黄惇氏は、趙孟頫は33歳から38歳の間に《黄素黄庭内景経》を猛勉強しており、それが本作の書風に影響を与えたと推測している²⁵。だが、これは徐氏自らが唱える「書法の規律の一貫論」に反している。徐氏の説に従うならば、いくら書風に変化が生じて、作者の書法、書法意識はそのまま

²³卓克芸術網：

<http://auction.zhuokearts.com/artsviw.aspx?id=26921176>

²⁴『重刊道蔵輯要』巻26、『元始大洞玉経』、出版者不明、光緒三十二年刊行。

²⁵同前掲注22、黄惇「趙孟頫書法研究二題」『書法研究』総第124期、頁42を参照。

ま保たれているはずである。また、黄氏は趙孟頫が《黄素黄庭内景經》を勉強したとしているが、ほぼ同じ時期の大徳八年（1304）に揮毫された《周文矩子建採神図》題跋【図23】（51歳、北京故宫博物院蔵）を見ると、右払いの用筆は楷書の筆法である「三波折」の技法が見られ、線の太さの変化がはっきりしている。本論の第一章で《蘭蕙図》上にある趙孟頫が51歳の時に書いた題跋を取り上げ、碑版書法の筆法が投入されている点を言及したが、《十月八日本》ではそれが確認できない。このように同時期の趙孟頫の作品を見渡しても、《高上大洞玉經》三本の書風とも他では見られず、非常に唐突な感のある作品である。後の《趙跋》や《道生神章經》4点の書法的特徴のどれとも異なり、書法的筆性が異なる【図24】。

（二）、落款

落款は「大徳九年十月八日呉興趙孟頫書」である。この落款には一箇所、唐突さを感じるところがある。それは「頫」字の「頁」である。「頁」字は二、三画を連続して書くのが趙孟頫の習慣のはずだが、《十月八日本》は分けて書いている【表2】。真贋鑑定の重要なポイントとまでは言えないが、かなり不自然に見える。

（三）、作品の押印

検討対象の《十月八日本》は巻首は「趙」（正方形、朱文）、「大雅」（長方形、朱文）、落款に「趙孟頫印」（正方形、朱文）と「天水郡図書印」（長方形、朱文）が計四つの印が押されている【図25】。これらはどれもよく見かける印だが、図版が不鮮明なこともあり、印文からの真偽判定は困難である。

(四)、題跋：未見²⁶。

(五)、流伝史

本作は「子京」、「墨林山人」、「項元汴印」などの印が確認できるという点から、明末に活躍した大収蔵家の項元汴（明・嘉靖四年～万暦十八年、1525～1590）の収蔵品であったことがわかる。しかし、明代中期以前の収蔵印は確認できず、制作時間の下限は明末まで遡れる。また、「乾隆御覧之宝」、「秘殿珠林」の印も確認できるため、清内府に入っていたことが推測できる。

上記（一）、（二）、より、《十月八日本》は書法的優劣の判断しかできない。偽作だと断定できるほどの確実な根拠は見出せないが、用筆や結体が千篇一律で、趙孟頫の小楷とは無関係であることが窺え、真跡とは言いがたい。

二、《大乘妙法蓮華經卷》第三卷、第五卷

歴代著録によれば、趙孟頫書《大乘妙法蓮華經卷》は3種類あるが、肉筆の遺品は確認できない²⁷。現在確認できる遺品は《大乘妙法蓮華經》第三卷（個人蔵）と第五卷（首都博物館蔵）がある²⁸。この2作はともに落款が確

²⁶黄惇氏は本作の卷末に文嘉、王世貞の跋が付されていたと述べているが、出版物からは確認ができない。詳細は前掲注8、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44、頁460～461を参照。

²⁷①《大徳元年本》『佩文齋書画譜』巻79（北京市中国書店、1984）、頁2256、②《皇慶二年本》『静嘉堂宋元図鑑』（静嘉堂文庫美術館、2002）、頁41、③前掲注22、黄惇「趙孟頫書法研究二題」『書法研究』総第124期、頁40に黄惇氏が「現蔵北京故宮博物院の妙法蓮華經五巻」と記しているが、未見。

²⁸《大乘妙法蓮華經》第六卷（所在不詳）の図版は確認できる。その書風は《大乘妙法蓮華經》第三卷、第五巻と近似している。しかし、図版では収蔵印記から同一時期の作品なのかどうかを確定するのは困難なため、本章では本作の鑑定・検討は割愛したい。図版は洪陸東主編『趙子昂小楷妙法蓮華經真蹟』（中国書法学会、1976）を参照。

認できないにもかかわらず【図26】、現在でも真跡の名品として認識されている²⁹。以下は、この作品の真贋について検討したい。

(一)、書法的特徴

書風の面では、『書画跋跋』巻1に「此本是敬美所宝。余曾寓目。細筆方匾体、每字起处俱有折鋒。敬美所示余。此蓋字字相連不断勢、習熟有餘、然不脱写經手氣。此云備有北海誠懸之妙而時濟以大令、余未敢附和也。夏太常補一卷、是二沈餘派。謂尤円潔可愛、亦所未解。豈過篤友于遂忘其曲筆耶。」とされ、全体的に文字の起筆に著しい圭角が見られ、写經特有のくせから脱していないと指摘している³⁰。本作の用筆を見ると、この孫鉉の見解は道理にかなっていると思う。しかし、このような用筆の特徴をはじめとして、一定の線質と変化のない結体は、『趙跋』や『道生神章經』の書法的特徴である(二)、(三)、(四)の書法的筆性とは異なっており、真跡だとは認めがたい【図2

²⁹以下四つが挙げられる。①王連起「趙孟頫書法藝術簡論」『趙孟頫研究論文集』(上海書画出版社、1995)、頁792、②単国強「趙孟頫小楷大乘妙法蓮華經卷」『清宮珍秘別藏図録』(倦勤齋芸術出版社、1999)、頁44～45、③黄逸芬「趙孟頫小楷大乘妙法蓮華經卷第三」『悦目：中国晚期書画』(石頭出版社、2001)、頁8、④傅申「石頭書屋法書緣」『書史与書蹟—傅申書法論文集』二(国立歴史博物館、2004)、頁270を参照。なお、王連起氏は文献や印章だけに依拠し、『大乘妙法蓮華經』を偽作とするものを批判しており、現在も『大乘妙法蓮華經』全七巻を真跡としている。詳細は、王連起「小楷真跡妙法蓮華經考」『Out of character: decoding Chinese calligraphy/濃迹 觀遠山莊珍藏法書選』(Asian Art Museum、2012)、頁97を参照。一方、『大乘妙法蓮華經』第三巻が台湾・台北の石頭書屋の収蔵だったが(前掲傅申「石頭書屋法書緣」『書史与書蹟—傅申書法論文集』、頁271を参照)が、いつの間にか楊致遠「觀遠山莊」の収蔵品となっていることを補足説明したい。詳細は、<http://news.singtao.ca/vancouver/2012-10-02/world1349171738d4120067.html>、http://www.wjsfedu.com/index.php?option=com_content&view=article&id=259&Itemid=292を参照。

³⁰孫鉉「趙吳興小楷法華經」『書画跋跋』巻1(漢華文化事業出版社、1971)、頁8を参照。

7】。

(二)、落款：未見。落款が見られないにもかかわらず、旧来より趙孟頫の真跡とされ、名品とされている。

(三)、押印

《大乘妙法蓮華經》第三卷、第五卷の卷末に趙孟頫の落款印「大雅」、「趙孟頫印」、「趙氏書印」、「天水郡図書館印」が鈐されている。これらはどれもよく見かける印だが、印文からの真偽判断は難しい【図26】。

(四)、題跋：未見。

(五)、流传史

著録の記述と遺品を対照すると、真偽を判断するのに重要なポイントが見られる。まず、《大乘妙法蓮華經》第三卷、第五卷は孫鉉『書画跋跋』巻1、高士奇『江邨消夏録』巻1、呉升『大観録』巻8に記載されており、2巻ともに王世懋の「郎邪王敬美氏収蔵図書」収蔵印記が見られ、かつては明の王世懋（敬美）の収蔵品だったことが確認できる。更に、『大観録』巻8、『江邨消夏録』巻1の記録によると、落款に「大元延祐二年（1315）。歳在乙卯秋九月。三宝弟子集賢学士資政大夫趙孟頫誌。」³¹とある。延祐元年（1314）から延祐三年（1316）時の趙孟頫の官職名「集賢学士資徳大夫」と異なるため、明らかな偽作だと判断できる³²【図28】。

³¹同前掲注20、呉升「小楷法華經七卷」『大観録』巻8、頁24を参照。

³²延祐三年時の趙孟頫の官職名は以下二つの資料より確認できる。①楊載「大元故翰林学士承旨榮祿大夫知制誥兼修国史趙公行状」、出典は趙孟頫著、黄天美点校『松雪斎集』（西泠印社、2010）、頁333と②趙孟頫書《楷書胆巴

上記（一）、（五）、より、《大乘妙法蓮華經卷》第三卷、第五卷は偽作だと断定できるほどの確たる根拠は見出せないが、用筆や結体が千篇一律で、趙孟頫の書法的特徴とは無関係であることが窺え、真跡とは言いがたい。

三、《道德經》の《北京故宮本》

現存する趙孟頫書《道德經》墨跡は2点ある。落款は「集賢侍講學士中奉大夫趙孟頫書」【図29】（58歳頃～60歳、黒川古文化研究所蔵、以下《黒川本》）と「延祐三年（1316）歲在丙辰三月廿四五日。為進之高士書于松雪齋。」（63歳、北京故宮博物院蔵、以下《北京故宮本》と略す）とあり、制作年代は近いが、書風から別人の作のように見える。これまでは2作とも真跡だとされてきたが³³、書風から判断するに、2作とも偽作だと思われる。《黒川本》は書風から明らかに偽作だと判断できるので、以下は名品として知られる《北京故宮本》を中心に検証したい。

（一）、書法的特徴

《北京故宮本》は端正で、その秀麗な書風は前述した《大乘妙法蓮華經》第三卷、第五卷に近似しており、写經の習気も看取できる。先行研究では、《大乘妙法蓮華經》第五卷とほぼ同じ時期に書かれた、趙孟頫の真跡であるとされている³⁴。書風の面では、字形や用筆が優れている点は否定できない

帝師碑》、出典は王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』（上海科学技術出版社、商務印書館（香港）、2001）、頁121が取り上げられる。

³³外山軍治「趙孟頫の研究」『書道全集』第17卷（平凡社、1956）、頁15。前掲注32、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁133を参照。

³⁴同前掲注29、王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』、頁792を参照。

が、《妙法蓮華經》第三卷、第五卷と同様、《趙跋》や《道生神章經》の書法的特徴である（二）、（三）、（四）、と書法的筆性が異なる。特に同じ文字を揮毫する際に、《趙跋》や《道生神章經》は変化があるが、《道德經》に見られる一律の技法は一切看取されない【図30】。

（二）、落款

まず制作背景が問題点として挙げられる。款識に「為進之高士書于松雪齋。」と書いてあり、これについて先行研究は、崔進之という人物のために書いたとしているが、その根拠は明確にされていない³⁵。《北京故宮本》の落款に書齋名が書いてある。「松雪齋」は趙孟頫が杭州滞在時の書齋であり、これは《赤壁賦》卷（48歳、国立故宮博物院蔵）後の跋文からも確認できる【図31】。また、大都（今の北京）に任官中の趙孟頫の書齋名は「咸宜（坊）寓舎」【図32】か「大都寓舎」のはずであり、ここに矛盾が生じている³⁶。本作が真跡であるならば、趙孟頫はこの時期すでに杭州にいるはずなのだが、文献や作品にはその裏付けとなるような資料が一切見られない。また、本章の【表2】では趙孟頫の署名を羅列した。そこで、《北京故宮本》の署名の書き方、特に「孟」字左の余白の捉え方と「兆」のそれは、《趙跋》及び他の趙孟頫書法の署名とは大きく異なる点からも、趙孟頫の真跡だとは言いがたい【図33】。

³⁵王徳毅等編『元人伝記資料索引』五（新文豊出版公司、1982、頁185）を調べたところ、字が「進之」の人物が7人いた。徐邦達氏をはじめとして王連起氏もそろって、崔進之だと断定しているが、裏付けがない。

³⁶文人の書齋、堂号は一つの建物や部屋を示すものである。前述のように、趙孟頫が杭州に滞在していた時の書齋名は「松雪齋」であったが、大都に転居してからは、「大都寓舎」または「咸宜寓舎」となっている。よって、《北京故宮本》の真偽を明らかにしなければ、延祐年間（1314～1320）趙孟頫の活動範囲が大きく変更される可能性もあり、趙孟頫の生涯を考える上で重大な課題の一つになるのではないかと考える。

(三)、押印

《北京故宮本》の巻首に趙孟頫の「趙」（朱文、正方形）、「大雅」（朱文、長方形）、巻末に「趙氏子昂」（朱文、正方形）が鈐されている。これらもよく見かける印であり、印文からの真偽判断は難しい。

(四)、題跋：本作に姚授（明・永楽二十一年～弘治八年、1423～1495）の題跋がある点から、制作時代は明代早期にまで遡れる³⁷。

(五)、流伝史

本作は【表4】で示したように収蔵印より、《高上大洞玉經》《十月八日》と同じくかつて明末の項元汴の収蔵品であり、制作時間の下限は明末まで遡れる。ただし、清内府の収蔵印が確認できないため、清内府には入らなかったと推測する。その他の印、例えば張大千の押印は作品の真偽鑑定とは無関係のため、検討を割愛する。

上述した（一）と（二）の検証より、《道德經》の《北京故宮本》は制作時代は明代早期までに遡れるようだが、真跡説には賛同しかねる。

四、《洛神賦》の《北京故宮本》

現存する趙孟頫書《洛神賦》は真筆が3点（天津博物館蔵、プリンストン大学付属美術館蔵、北京故宮博物院蔵）あり、どれも行書風である。一方、小楷風の《洛神賦》は、北京故宮博物院（66歳、以下《北京故宮本》と略す）

³⁷詳細は前掲注16、徐邦達著、北京故宮博物院編『徐邦達集 五 古書画過眼要録・元明清書法：1』、頁59を参照。

と《樹徳堂本》【図3 4】（66歳、所蔵先不詳）2作のみである³⁸。王連起氏は《北京故宮本》を「点画精美、結体清麗、婉約姿媚」と評しているが、筆者の見解とは異なる。以下、《北京故宮本》を中心に検証したい³⁹。

（一）、書法的特徴

趙孟頫は延祐七年（1320）に王献之《洛神賦十三行》墨跡を入手したというが、その遺品の確認はできない⁴⁰。ここで検証する《北京故宮本》は延祐六年（1319）の作品であり、現存する《洛神賦十三行》帖【図3 5】（越州石氏本、東京国立博物館蔵）とは近似しているが、異なる字形の使用からその臨書ではないと思われる。本作の書風を仔細に観察すると、前述した《趙跋》や《道生神章經》の（一）～（四）の特徴が全く見られず、全体的に骨格がアンバランスで、運筆も用筆の太細が不安定である。「靈」字の補筆をはじめとして、「若」字の崩れた結体【図3 6】は趙孟頫の書法とは到底考えられない。また、《趙跋》や碑文書法にもある「得」字の書き方は「筆性」が異なり、真偽鑑定の際には重要な判断材料となろう【図3 7】。また、全体的に先行研究にあるような精麗さは感じられず、本作も真跡とは言いがたい【図3 8】。《洛神賦》と《洛神賦十三行》は、書風の面では近似しているが、「腕」と「腕」は偏が異なるため、その臨書でないことは明らかである【図3 9】。

（二）、落款

³⁸この2作は同時期に制作されたものだが、書風には違いが見られる。《樹徳堂本》は図版のみで、管見の限り、これまで一度も検討されたことがない。だが、書風を見ると、明らかな偽作であるため、検討を割愛する。

³⁹同前掲注29、王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』、頁794を参照。

⁴⁰同前掲注32、趙孟頫著、黄天美点校「跋洛神賦」『松雪齋集』、頁273を参照。

《北京故宮本》の落款は「延祐六年八月五日吳興趙孟頫書」としか書いていないが、《趙跋》の署名を完璧に真似ようとしている【表2】。だが、線質の確実さと筆圧の大小が異なるほか、「頫」の「兆」と「頁」の一画目が不自然に離れており、この名を書き慣れているはずの趙孟頫の署名とは思えない。

(三)、押印

本作は《道德經》の《北京故宮本》と同じく、巻首に趙孟頫の「趙」（朱文、正方形）、「大雅」（朱文、長方形）、巻末に「趙氏子昂」（朱文、正方形）が鈐されており、印文も非常に近似している。この押印からも作品の真偽判断は難しい。

(四)、題跋

本幅の後に張雨と陳方（元人、生卒年不詳）の題跋があるため、先行研究は重要視している。だが、その内容からいくつかの問題点が指摘できる。最初にある陳方跋は疑問点が多い。まず、跋文に誤りが見られる。例えば、「蔡襄云、王子敬愛写洛神賦。」とあるが、実は蔡襄ではなく、一般的な認識では柳公権が正しい。次に、「所題年月、当為公最後之筆。」とあるが、本作の落款は延祐六年（1319）であり、趙孟頫が他界する至治二年（1322）まであと3年あるので、「最後之筆」とあるのは理解しがたい。一方、趙孟頫が収蔵していた《洛神賦》墨跡は全13行あるはずだが、張雨の題跋では9行となっている。そして、張雨の題跋の内容は「句曲外史張天雨觀。至順四年閏三月廿九日。玄文館記」とあり、意味が不明瞭である。趙孟頫と時代が近い元末の人の題跋ではあるが、この作品を真とする根拠にはならないと考える。

(五)、流伝史

本作は文徵明の「文徵明印」、「衡山」印、文彭の「文彭之印」が見られ、明代中期まで遡れる。

本作は落款が趙孟頫の署名に近似しており、流伝史から見ても文徵明の時代までは遡ることが可能で、明代中期までの作品だと判断できよう。ただし、（一）と（二）、（四）から分析した結果、本作も真跡とは言いがたい。

五、《漢汲黯伝》

《漢汲黯伝》の真偽については2説が挙げられる。収蔵先の永青文庫だけでなく、黄惇氏や范景中氏も《漢汲黯伝》は趙孟頫晩年の秀作だとしている⁴¹。一方、張光賓氏や王連起氏は俞和による偽作の可能性を指摘している⁴²。本論では張光賓氏と王連起氏の俞和作説に追従し、俞和《臨樂毅論》【図40】（プリントン大学附属美術館蔵）と《漢汲黯伝》の書風を比較し、その共通性を明らかにしたい。そして、《大乘妙法蓮華經》第三卷、第五卷と《道德經》、《漢汲黯伝》の関連性についても述べたいと思う。

（一）、書法的特徴

まず、《漢汲黯伝》にある文字の結体は、《趙跋》や《道生神章經》の書法的特徴（一）の字座重視と同様であるが、書法的特徴の（二）～（四）と異

⁴¹赤尾栄慶「漢汲黯伝」『細川家の至宝：珠玉の永青文庫コレクション』（NHK、NHKプロモーション発行、2010）、頁420。前掲注8、黄惇「漢汲黯伝小楷冊」『中国書法全集 元 趙孟頫二』44、頁475～476。范景中「書籍之為芸術—趙孟頫的藏書与汲黯伝」『考古与芸術的交匯 国際學術研討会論文集』（中国美術学院出版社、2009）、頁448～476を参照。

⁴²張光賓「俞和書樂毅論与趙孟頫書漢汲黯伝」『国立歴史博物館館刊』第2巻4期（国立歴史博物館、1986）、頁51～62。前掲注34、王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』、頁804を参照。

なる。更に、兪和《臨樂毅論》と《漢汲黯伝》の「不」、「知」、「和」、「兪」を比較すると、この2作は共通性が非常に高いのがわかる【図4 1】。それで、先行研究では本作を兪和による偽作としたのであろう。《臨樂毅論》と《漢汲黯伝》の書法的特徴の近似性から、《漢汲黯伝》の書写年代は兪和《臨樂毅論》とほぼ同じ頃、至正二十年（1360）、兪和54歳の時の偽作だとする仮説を提起したい。

（二）、落款

《漢汲黯伝》と《趙跋》、《道生神章經》の署名を照合してみると、結体、筆法に差異があり、筆画の変化への配慮のなさが見て取れる。また、2回に分けて書く縦画の撥ねなどの特徴も見られない【表2】。このほか、「頰」の左払いに補筆があるのも不自然に思われるが、この点に着目した研究はこれまで一つもない【図4 2】。落款から見ても本作は趙孟頫の真跡であるとは認めがたい。

（三）、押印

本作は《道德經》の《北京故宫本》、《洛神賦》の《北京故宫本》と同じく、巻首に趙孟頫の「趙」（朱文、正方形）、「大雅」（朱文、長方形）、巻末に「趙氏子昂」（朱文、正方形）が鈐されている。こちらも真偽の判断は難しい。

（四）、題跋

本作の巻末に文徵明と笪重光、孫孟延の題跋がある点から、制作時代は明代中期までに遡れる⁴³。

⁴³文徵明らの題跋の内容は、前掲注16、徐邦達著、北京宮博物院編『徐邦達集 五 古書畫過眼要録・元明清書法：1』（紫禁城出版社、2006）、頁

（五）、流伝史

本作は文徵明の「文徵明印」、「衡山」印、文彭の「文彭之印」が見られ、明代中期まで遡れる。その他の著録については、徐邦達氏がすでに抜粋しているので、検討を割愛したい。

（一）と（二）から分析した結果、本作も真跡とは言いがたい。

六、《六体千字文》

元仁宗の勅命を受け、趙孟頫が《千字文》6 巻を揮毫したとの記録が文献にあり、これは趙孟頫が《六体千字文》を揮毫したことの背景となるが⁴⁴、真相（遺品の確認）は現時点では明らかになっていない。徐邦達氏や王連起氏は、《六体千字文》は俞和による偽作だとしている⁴⁵。だが、《六体千字文》と俞和《篆隸千字文》（48 歳、国立故宫博物院蔵）と比較しても関連性は見られない【図43】。その一方で、本作を真跡とする先行研究もある⁴⁶。もう一つ興味深いのは、趙孟頫書《四体千字文》の存在である【図44】。王連起氏はこの書を趙孟頫の真跡だとし、極めて重要な作品として高く評価している⁴⁷。以下、《六体千字文》の真偽について私見を述べたい。

85～87 を参照。

⁴⁴同前掲注 32、趙孟頫著、黄天美点校「魏国夫人管氏墓誌銘」『松雪齋集』、頁 302 を参照。

⁴⁵徐邦達『古書画偽訛考辨 下巻：文字部分』（江蘇古籍出版社、1984）、頁 45～46。王連起「趙孟頫書画真偽的鑒考問題」『中国歴代書画鑒別文集』（紫禁城出版社、2000）、頁 98 を参照。

⁴⁶馮徳良編『趙孟頫六体千字文』（江西美術出版社、2008。）

⁴⁷《四体千字文》の図版は『Fine Chinese Paintings』（Sotheby's New York、1989）より確認でき、現在は個人の収蔵品となっている。真跡説は、前掲注 29、王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』、頁 794 を参照。

(一)、書法的特徴

《六体千字文》の字形は端正で、誇張した用筆や結体も見られず、機械的ではあるが、きちんとした文字の空間処理もまた優れている。本作には空間処理への配慮と一律の用筆が見られるのに対して、《趙跋》の書法が線質の太細の変化、文字内の空間に疎密を付け、端正過ぎないように考量されているのとは対照的である。《六体千字文》は六種類の書体を用いているので、書風が変えられた可能性は勿論ある。だが、いくら書風を変えても、趙孟頫独自の個性や用筆、結体は変わらないと思う。特に縦画のハネの相違は顕著である。《六体千字文》のハネは短くて柔らかなのに対し、《趙跋》や《道生神章經》のそれは非常にはっきりしており、ハネの長さも異なる【図45】

(二)、落款

署名の書き方も《趙跋》や《道生神章經》とは異なる【表2】。仮に《六体千字文》が真跡だとすれば、書家の書風は一貫していることを前提に考えた場合、なぜ67歳の趙孟頫がこれまでない書風で《六体千字文》の落款を揮毫したのかは説明が困難である。更に、趙孟頫《蘭亭修楔図》(67歳、国立故宫博物院蔵)と対照した結果、《蘭亭修楔図》と《六体千字文》の落款はほぼ同じである点から【図46】、この2作は趙孟頫ではなく、どちらも某人、または某集団が同じ落款を使って作った偽作ではないかと考える。これは先行研究が述べていない新知見である。新しい資料の発見によって、本作は偽作の可能性が更に高まった。

(三)、押印

本作は巻首に趙孟頫の「趙」(朱文、半印)、巻末に「趙氏子昂」(朱文、正

方形)、「松雪斎」(朱文、長方形)、「天水郡図書館印」(朱文、長方形)が鈐されている。こちらは真偽の判断が難しい。

(四)、題跋：未見。

(五)、流伝史

卷末に呉廷（生卒年不詳、明・万暦～天啓ころ）の収蔵印があり、呉廷の時代までに遡れる。

七、《黄庭経》の《北京故宫本》

文献によると、趙孟頫臨《黄庭経》は8種類あるが、現存する遺品は《至元三十年本》【図47】(35歳、国立故宫博物院蔵)、《大徳五年本》【図48】(48歳、所蔵先不詳)、《皇慶元年本》【図49】(59歳、収蔵先不詳)、《北京故宫本》(無紀年、北京故宫博物院蔵)の4本が確認できる。先行研究では、《至元三十年本》、《皇慶元年本》は偽作⁴⁸、その他の2本は真跡とされている。そのうちの《北京故宫本》は趙孟頫中晩年の真跡とされるが⁴⁹、いくつか疑問が残る。以下、それに焦点を当てたい。

(一)、書法的特徴

⁴⁸同前掲注19と前掲注45、徐邦達『古書画偽訛考辨 下巻：文字部分』、頁45を参照。

⁴⁹同前掲注32、王連起主編『故宫博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁72を参照。何伝馨主編『山水合璧 黄公望与富春山居図特展』（国立故宫博物院、2011）、頁313を参照。

本作の書法について、徐邦達は「筆法精勁、工中帶拙。」と述べ⁵⁰、王連起氏は「雖為臨書、但毫不拘束、能融法度森嚴與蕭散自得為一體、是趙孟頫小楷書的精品。」と述べている⁵¹。しかし、先行研究が掲げる中晩年の趙孟頫の書風と比較しても、結体といい、用筆といい、共通点が一切見られず、《趙跋》と《道生神章經》の書法的特徴（一）～（四）のどれとも一致しない【図50】。また、作品の中央に大きな空白があり、その上に「心画妙処」印（應甫の持印か）が鈐されている【図51】。非常に不自然な位置であるが、先行研究はこの空白について一言も述べていない。一般的に書家が作品を制作する際、拓本にない字は《黄庭經》を参考にして書き補うのだが、本作からはそうした意図が見られない。更に、趙孟頫他の遺品を確認しても、このような例は皆無である。つまり、中晩年の作品と断定できるような根拠は一つもなく、本作もやはり真跡だとは言いがたい。

（二）、落款

落款は「孟頫」のみ。まず、「孟頫」二文字のバランスの悪さは一目瞭然である。「頫」字は「頁」の一面目と二画目との筆画の繋がりは他の「頫」と比べると、やや不自然で力も弱い。また、「頁」の中の空間もしっかりしておらず、趙孟頫本人によるものとはかなりの違いがあるので、明らかな偽作だと断定できる【表2】。

（三）、押印

⁵⁰同前掲注 45、徐邦達『古書画偽訛考辨 下巻：文字部分』、頁 45 を参照。

⁵¹同前掲注 32、王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』、頁 72 を参照。

本作はよく見かける「趙氏子昂」（朱文、正方形）しか鈐されてない。真偽の判断は難しい【表3】。

（四）、題跋

本作の後に、元・明人の題跋が16則あり、その中には鄧文原や王国器など趙孟頫と親しかった人物も多数含まれ、収蔵印記には鮮于樞の押印も見られる⁵²。王連起氏は本作は趙孟頫中晩年（55歳～60歳）の作品としているが、この時すでに鮮于樞は世を去っており（1302、趙孟頫が49歳）、この時期の作品に鮮于樞の印があるのはあり得ないことで、偽印の可能性が高い。また、趙孟頫の婿である王国器が題跋で自分の舅の卒年を間違えているのも常識的には考えにくく、かなり不自然に思える。図版を見ると、同じ紙の上に題跋の書写年代が前後しているが、これらの点に先行研究は一切触れていない。本作の内容について先行研究は題跋の応甫の跋文に依拠し、本作は《太清樓帖》刻本を臨書したものとしているが⁵³、《太清樓帖》を調べたところ、《黃庭經》帖は確認できなかった⁵⁴。

（五）、流伝史

顧文彬『過雲樓書画記』に《北京故宮本》を著録しているが、内容を見たところ、本作の鑑定には役に立ちそうもない。本作の上に他人の収蔵印もあるが、最も早い時期ものは「柯氏鑒定真跡」印であり、卷末にも柯九思の題跋がある点から、元代まで遡れるかと思われる。だが、書風を見ると柯九思

⁵²題跋の釈文は全て活字になっている。詳細は前掲注16、徐邦達著、北京故宮博物院編『徐邦達集 五 古書画過眼要録・元明清書法：1』、頁67を参照。

⁵³同前掲注32、王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』、頁72を参照。

⁵⁴啓功主編『大觀太清樓帖 宋拓真本（合装本）』（文物出版社、2001）

ではなく、別人の作のように思える。こちらにも詳細な検証を要するが、今後の課題としたい⁵⁵。

以上（一）と（二）、（四）、（五）の検証より、本作は趙孟頫中晩年の臨書作だとは言いがたく、明らかな偽作だと思われる。

《妙法蓮華經》第三卷、第五卷と《道德經》、《漢汲黯伝》は、いずれも優れた小楷であり、結体や用筆も近似しており、一部の用筆や字形は趙孟頫書法にも見られることから、少なからず趙孟頫との関わりが窺える。この3点はいずれも書写年代が延祐年間（趙孟頫61歳から67歳）とされている点に注目すべきであろう。愈和作の根拠が希薄だとしても、延祐年間以降に、愈和と同レベルの腕前を有し、趙孟頫書法を巧みに模倣できた能書家は他にも存在したはずである。だが、《趙跋》や《道生神章經》に見られるような書法的特徴4点に欠けている。これらの偽作者は現時点では明らかにできないが、今後の課題としたい。

第三節 偽作の背景とその手法

一、偽作の手法

先行研究では、従来の中国書画の複製及び偽作の作り方について、①臨（徒手模倣）、②模（描模）、③倣、④造、⑤刻帖と帰納している⁵⁶。本章は《趙跋》を基準作にし、上述した趙孟頫の伝世書法作品を考察した結果、先行研究による偽作制作法の分類に当てはめて、偽作を以下のように分類した。

⁵⁵以上は、前掲注16、徐邦達著、北京故宮博物院編『徐邦達集 五 古書画過眼要録・元明清書法：1』、頁67を参照。

⁵⁶傅申著、葛鴻禎訳、賀哈定校「法書的複本与偽跡」『海外書蹟研究』（紫禁城出版社、1987）、頁1～2を参照。

①臨：《洛神賦》、《六体千字文》、《黄庭經》。

④造：《大乘妙法蓮華經》第三卷、第五卷、《道德經》2卷、《漢汲黯伝》、《高上大洞玉經》3卷。

これらの偽作の中には、趙孟頫の書法を巧みに模倣した優品もあれば、劣品もある。例えば、《高上大洞玉經》3巻や《洛神賦》、《黄庭經》は優品に当てはまるのではないかと思う。これらが真跡だとされている背後の理由の一つは、現存する遺品の中から信頼性の高い作品を基準作として、厳密に検証されることがなかったからであろう。このように、趙孟頫の影響の下、著名人（例えば、劉九庵が指摘した俞和、金琮、詹僖など）であれ、無名の人物であれ、趙孟頫の書法や署名を利用して、各種各様の作品を制作したため、趙孟頫本来の書法が徐々にわからなくなってしまった。このことは、俞和の書法は当時から趙孟頫に勝るとも劣らない腕前だったにもかかわらず、趙孟頫の印鑑を頻繁に使っている点からも理解できよう⁵⁷。

鑑定の際に重視されるもう一つの要因、押印から見ると、本章で検討してきたこの7点の作品のほか、多くの偽作に趙孟頫の押印（名前、字、書斎、雅号）に極めて近い落款印や書斎印が鈐されており、そのせいで真贋の判別が更に複雑となり、鑑定の基準も難しくなった⁵⁸。偽作はある団体（または地域）が意図して行ったものなのか、それとも時代の推移につれて自然に増加したものなのか、これは非常に深刻な問題で、体系化する必要があると考えるが、これは今後の課題としたい。

⁵⁷徐一夔「篆隸行草各臻于妙。一紙出、戲用文敏公印私識之、人莫能辨。」「俞子中墓碣」『始豊稿』巻13を参照（前掲註45、王連起「趙孟頫書画真偽的鑑考問題」『中国歴代書画鑑別文集』、頁97より引用）。

⁵⁸王連起「趙孟頫の名号款印与鑑定問題」『中国書法全集 元 趙孟頫一』43（榮宝齋出版社、2002）、頁66を参照。

二、偽作を作る背景

明の鄧韜（嘉靖年間に活動）は、この時代、趙孟頫書法を模倣する人が 4 百人余りいると述べている⁵⁹。また、清の王澐（清・康熙七年～乾隆四年、1668～1739）は、このような現象が明人の文徵明父子まで続いていたと述べている⁶⁰。その背景についてであるが、現時点では以下の 5 点が考えられる。

（一）、元代における儒、仏、道教への寛容・重視政策：

先行研究は、元代は三教（儒、仏、道教）に対して寛容な政策がとられ、それが元代の芸術に多様性をもたらしたとしている⁶¹。その点に関しては、趙孟頫の作品からもその一端が窺えよう。趙孟頫が揮毫した仏教寺院や道教の道観の碑文書法が大量に残されていることについては、すでに第一章で検討した。趙孟頫は儒生として詩文にも優れ、「書今古文集注序」では儒家の經典である『詩』『書』『礼』『春秋』について論じており、儒学を復興しようという志が文献からも窺える⁶²。このような背景のもと、三教の教義を広めるための經典が必要とされた元代においては、元代の書法をリードする趙孟頫の書法が時代の求めに合致したため、碑文が大量に生産されたことが想像できる。そして、その影響力が徐々に拡大していったのだろうと推測する。

⁵⁹王連起「趙孟頫〈与季宗源札〉攷」『書法叢刊』第 3 期（文物出版社、1995）、頁 42 を参照。

⁶⁰王澐は「自子昂興、而世間作字人無有無趙法者矣。……。蓋非只有元一代皆被子昂牢籠、明時中葉以上猶未能擺脫、文氏父子仍不免在其殼中也。」と述べている。詳細は王澐「元人墨跡」『虛舟題跋』（国立中央図書館、1970）、頁 11 を参照。

⁶¹楚默「元代書法的復興与新变」『中国書法全集 元代名家』47（榮宝齋出版社、2001）、頁 20～23。譚志湘「元代芸術的特色」『元代芸術与元代戯曲』（国家出版社、2008）、頁 73～78 を参照。

⁶²同前掲注 40、趙孟頫著、黄天美点校「書今古文集注序」『松雪齋集』、頁 152～153 を参照。

（二）、趙孟頫と仏教、道教関連の人物との交遊

趙孟頫と仏教（藏伝・漢地仏教）、道教の人物との交友関係もまた、偽作が氾濫することになった主要な原因の一つだと思われる。例えば、禅僧の中峰明本や道士の杜道堅（宋・嘉熙元年～元・延祐五年、1237～1318）との交遊については、先行研究でも論じられている⁶³。作品からもこうした交友関係が窺える。まず、藏（チベット）伝仏教に関連する人物との交友は、《紅衣羅漢図》後にある趙孟頫自作の跋文（68 歳、遼寧省博物館蔵）【図 5 2】、《大元勅賜龍興寺大覚普慈広照無上帝師之碑》稿【図 5 3】がそれを示す好例である。とりわけ、中峰明本との交流が最もよく知られており、《元趙孟頫趙氏一門法書冊》（無紀年、国立故宫博物院蔵）12 通もの尺牘の内容を見れば、趙孟頫、管道昇夫妻と中峰明本が親しく交流していたことがよくわかる。このように、趙孟頫と仏教や道教の友人との往来が世に広く知られていることから、偽作者がそれを利用して款識中に入れ、もっともらしい偽作を作ったとも考えられる。先述した《妙法蓮華經》第三卷、第五卷はそのようにして作られたものであろう。元代以降、趙孟頫の偽作が大量に作られるようになり、非常に技巧的でうまく人々の目を欺く作品も現れた。鑑定の際は、こうした側面も考えに入れなければならない。

（三）、趙孟頫の二王系統の書法への学習

趙孟頫は「右軍小楷存於代者、唯《樂毅論》、《黄庭經》、《東方画賛》耳。余甚愛《画賛》筆意清古。思齋之墨本、以情求之、思齋不吾靳也、乃為臨此

⁶³ 勞悟達『禅師中峰明本の書法』（中国美術学院出版社、2006）、頁 62～68 や前掲注 32、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁 57 を参照。

紙帰之。孟頫。」と王羲之の小楷を評している⁶⁴。一方で、早年は、《曹娥碑》を王羲之の小楷の中で最も優れた作に位置づける論説も見られる【図3(左)】。趙孟頫が専ら二王系統の書法を学習していたことは、現存する遺品や文献、法帖からも確認できる。例えば、《臨王羲之蘭亭序》帖（58歳、韓国国立中央図書館蔵）に、「余臨禊帖無慮数百本、皆心想手追、未嘗対写。雖各有意趣、未若此幅之天真多也。至大辛亥（1311）九月十日。大都寓舍書。集賢侍講学士中奉大夫趙孟頫。」とある【図54】。また、《臨智永千字文》後の題跋にも、「公自題云。僕廿年來写千文以百数。此卷殆数年前所書。当時学褚河南孟法師碑。故結字規模八分。今日觀之。不知孰為勝也。田君良卿于駱駝橋市中買得此卷。持來求跋。為書其後。因思自五歲入小学。学書不過如世人漫爾学之耳。不意時人持去可以粥錢。而吾良卿又捐錢若干緡以購之。皆可笑也。元貞二年（1296）正月十八日子昂題。則知公之書所以妙者。無帖不習也。」とある⁶⁵。この二つの自述資料から、趙孟頫が二王系統の書法を大量に残した当時の状況が理解できる。元時代に生きた趙孟頫周辺の人物、そして後世の人々が更にそれを模倣・複製し、それによってまた書風が近似したため、真偽が定かではない作品が今日まで残されたのだろう。なお、趙孟頫がいつ頃から二王系統の作品を臨習し始めたのか、どれぐらいの作品を残したのかについてはいまだ明らかになっておらず、これは今後の課題としたい。しかし、一つ言えるのは、現存する有紀年の遺品のなかで大徳年間に揮毫された《蘭亭序》は確認できない点から、第一章で提起した呉栄光の3分期説中の「大徳年間、専師定武禊（禊）序」は疑問に思う。先学は趙孟頫が早年から《黄庭經》をよく臨写し⁶⁶、《洛神賦》を百回以上臨書したという引用をしているが、

⁶⁴陳焯輯《元文敏臨東方先生画像贊》『湘管齋寓賞統編』卷一を参照（前掲注8、黄惇主編『中国書法全集 元 趙孟頫二』44、頁500より引用）。

⁶⁵陶宗儀『南村輟耕錄』卷七（中華書局、1980）、頁81を参照。

⁶⁶同前掲注49、何伝馨主編『山水合璧 黄公望与富春山居図特展』、頁313

これも裏づけがなく、解釈を誤る恐れもあり、この点についても更なる考察が求められる⁶⁷。

(四)、皇帝の勅命を受け、大都で写経、六体千字文を揮毫した事績

趙孟頫が元の成宗と仁宗の時に、それぞれ皇帝の勅命を受け、当時の都である大都で写経や《千字文》⁶⁸を揮毫したことが文献より確認できる。これらは重要な出来事であり、大都だけでなく、江南の書壇にも一定の影響をもたらしたことが推測できる。皇帝の勅命を受けて大都で写経をしたことは、友人の方回や弟子の楊載の文集にも記録が残されている⁶⁹。このような盛事は南方の文人、書人たちに大きな刺激を与え、趙孟頫の名声も一層高まったに違いない。残念ながら、現時点では該当する作品が確認できず、今後発見されることが期待される。

(五)、後世の書壇に生じた変化―王羲之崇拜から趙孟頫崇拜へ

を参照。

⁶⁷同前掲注 22、黄惇「趙孟頫書法研究二題」『書法研究』総第 124 期、頁 40 を参照。また、黄惇氏が論文の中に取り上げた『式古堂書画彙考』「趙魏公臨王献之洛神賦併記」の文献資料は、落款に「余臨王献之洛神賦凡数百本。間有得意处亦自宝之。呼顧善夫余之愛友。其家所藏者。皆得意筆也。揚州何進士每以高価求予書。可謂好事者。遂書此賦一通贈之。至治二年（1322）秋孟子昂記。」となっていることが問題である。なぜなら、至治二年の秋季、趙孟頫はすでに他界しており（至治二年六月死去）、偽作の可能性がある。黄惇氏の解釈に誤りが認められ、趙孟頫が本当に《黄庭經》を数百本臨書したかについても文献から再考すべきである。

⁶⁸元成宗時に内府に招かれ、金泥で仏教の經典を揮毫したことと、元仁宗時に《千字文》6 卷を揮毫したことは、前掲注 40、趙孟頫著、黄天美点校「大元故翰林学士承旨荣禄大夫知制誥兼修国史趙公行状」『松雪齋集』、頁 302 より確認できる。

⁶⁹方回「送趙子昂提調写金經」『桐江統集』卷 24『四庫全書珍本』初集（商務印書館、1937）、頁 4。前掲注 40、趙孟頫著、黄天美点校「大元故翰林学士承旨荣禄大夫知制誥兼修国史趙公行状」『松雪齋集』、頁 332 を参照。

方波氏は孔斉の「当今趙松雪公画与書、皆能造古人之闕、又何必苦求古人耶。」という一節を引用し、元代における王羲之と趙孟頫の書法の消長について論証した⁷⁰。事実、作品の補助的な根拠としてもそうであろう。大量に存在する趙孟頫の《黄庭經》、または《洛神賦》の偽作から、偽作者が小楷の古典である《黄庭經》や《洛神賦》を作る際に、王羲之や王献之の名前ではなく、あえて趙孟頫の字か名前を署名する傾向のあったことが、今般の考察により判明した⁷¹。このような現象から、趙孟頫の書法は元代書壇に影響を与えただけでなく、元代以降は二王の影響力をも超えるほどだったことが窺えよう。そして、趙孟頫が二王への復古主義を掲げたという主張については、今日まで過度に述べられてきた感があり、直ちに再考を要する点であろう。趙孟頫本人が復古を口にしたという記録はなく、趙孟頫による二王書法の臨書だとする偽作が大量に制作されたために、後世の解釈に誤りが生じたのではないかと考える【図55】。

第四節 小楷書法の分期と画期

趙孟頫の小楷は、碑文書法の発展とほぼ重なるように見えるが、典型が確立された時期が異なる。上記の考察を経て、現存する趙孟頫の小楷の時期区分は、およそ以下のように3期に分けることができる。

⁷⁰孔斉「冀国公論書法画法」『至正直記』卷二（中華書局、1991）、頁42を参照。（方波著『宋元明時期崇王觀念研究』（南方出版社、2009）、頁89～90より引用。）

⁷¹実際、《黄庭經》や《洛神賦》だけではなく、真偽問わず、伝称趙孟頫臨《淳化閣帖》卷六～八所収する王羲之法帖や《十七帖》の遺品も存在しており、いずれも趙孟頫の影響力を示している。これら行草書よりの書法については、第三、四章で検討したいと思う。

一、古典吸収期（33 歳～43 歳）

現存する趙孟頫における最早期の小楷の代表作は《伝王羲之曹娥碑》後の題跋である。早い時期から王羲之の書法（拓本）を過眼していたことがわかる。この題跋の書法を見ると、行間が字間より広く、結体はやや扁平で、横の線が常に強調されており、線質は円潤で、転折に丸い曲線が見られ、鍾繇の小楷に近似している。この時期に《淳化閣帖》を購入したことが背景として考えられ、本人も自分の小楷は鍾繇、蕭子雲に出自していると述べている⁷²。もう一つは、趙孟頫が大都に転居した後、元内府所蔵の古書画文物が見られるようになった点も関係するかと思う。この頃の趙孟頫は、鍾繇書法を取り入れつつ、唐人以降の書法も学んでいたことが窺える。例えば、《伝欧陽詢夢奠帖》後の跋文（39 歳、遼寧省博物館蔵）【図 5 6】に見られるように、字形の骨組が聳えるようになり、行意も投入しているが、このような表現は鍾繇書法ではなく、第一章で述べた碑文書法における変遷の背景と同じく、宮廷で唐人書法の名跡を過眼したことに関連していると思われる。しかし、この時期の小楷はやはり鍾繇書法を中心に臨習しており、それによる影響や受容も大きく、《定武蘭亭帖》後の跋文（42 歳、北京故宮博物院蔵）【図 5 7】の書法表現を見るに、10 年間ほど続けていたと考えられる。書の古典を吸収したこの時期における小楷の意義とは、趙孟頫が鍾繇のような紀元 2、3 世紀の書人の書法にまで遡り、「古意を追う」ことに努めた、その臨書態度に注目すべきであろう。

二、過渡期（45 歳～51 歳）

⁷²同前掲注 18、拙文「元趙孟頫書〈禊帖源流〉卷賞析」『故宮文物月刊』第 329 期、頁 83 を参照。

過渡期に入ると、趙孟頫の小楷の書風は多様化するが、大きく二つの時期に分けられる。前半は雄強で、後半は秀麗だが、いずれの書も鍾繇の扁平（結体）、丸み（線質）などの特徴が目立たなくなり、パターン化される前の模索期とも言える。陸柬之《文賦》後の題跋（45 歳、国立故宫博物院蔵）【図 5 8】や、《宋高宗書孝經馬和之絵図》後の題跋（46 歳、国立故宫博物院蔵）は前半の代表作である。作品中の用筆からは兼毫か柔らかめの筆で揮毫されたとわかる。全体的に第一期より線質が太くなり、筆力も強くなっている。その背景は李邕の書法や懷仁《集字聖教序》の学書、もしくは碑文稿書法の制作に関わりがあると推測する。《赤壁二賦》巻末の題跋（48 歳、国立故宫博物院蔵）や《呉興賦》（49 歳、浙江省博物館蔵）のような作品は、ほぼ一致していた行間と字間が変わって、爽やかな章法に明朗の分間布白の空間処理、繊細な線質の太細変化が非常に秀麗で、趙孟頫独自の風格がほぼ完成されている。大徳八年（1304）の《周文矩子建採神図》（51 歳、北京故宫博物院蔵）後の跋文は、この時期の最高峰だと思われる。これまでこれらの作品は行書だとされてきたが、厳密に言えば、行書、独草体、楷書三種類の書体を混用した「雑体書」である⁷³。この時期に揮毫された楷書はすでに第一期の古朴さから抜け出している。これは注意すべき点ではあるが、趙孟頫独自の小楷としてはまだ未完成のように見えるため、第二期に位置づけた。

三、典型の確立期（61 歳～67 歳）

【表 1】で示した 51 歳より 61 歳まで約十年間は、趙孟頫の小楷書法の真跡を確認するのは難しい。この時期の始まりとなったのは、《五牛図》三跋（61

⁷³ 「雑体書」については、本論第三章第三節で詳しく説明したい。

歳、北京故宮博物院蔵）【図59】である。第三期の特徴としては、字間が狭まり、横画の右上がりが顕著、左傾した結体などが挙げられ、字形の大小や縦長、扁平な字と紙面での位置を考慮しながら、変化をつけようとしているのが見て取れる。この典型の確立に至る過程で見られる最も重要な特徴は、縦画を2回に分けて書く撥ね（戈画も含む）だと考える。特に皇帝の勅命を受け、趙孟頫が全力を尽くして揮毫した《趙跋》は、成熟した章法、分間布白、字形の多様化、繊細な筆調、字座による変化も付けられ、整然とした書法の中で文字が生き生きとしている。《趙跋》に至るまで、趙孟頫は三国・魏の時代から、東晋、隋、唐、宋、元各時期の書法を幅広く学んだ。とりわけ碑文書法を小楷に取り入れた点に注目すべきであり、これによって独自の小楷が確立されたとも考えられる。また、こうした書法表現や書学背景は前述した偽作を見分ける際には重要なポイントの一つになる。この種の書風は中国書法史から見ても、趙孟頫個人の書法の変遷から見ても、極めて独特な表現であり、独自の小楷を確立したと言っても過言ではない。

一方、趙孟頫の碑文書法は少なくとも73点が確認でき、そのうち、信頼できる真跡が12点残されていることは本論の第一章で考察した。50歳の時に制作された《玄妙觀重修三清殿記》稿とそれ以降の碑文稿とを比較すると、《趙跋》の側筆や、2回に分けて縦画のハネを作る痕跡が明確に残っており、同じ文字を揮毫するときに字形や文字の分間布白の疎密に変化を付けるなどの特徴は、碑文書法の影響下にある既存の技法であり、風格も一貫していることがわかった。上記の検証により、碑文書法と小楷の《趙跋》の用筆や結体の関連性が窺えるが、これはこれまでの研究では十分に注意されていなかった点である⁷⁴。ただし、《趙跋》の書表現は碑文稿の技法に由来し、碑文書

⁷⁴黄惇氏が「關於趙孟頫小楷其實不可能出於沈馥《魏定鼎碑》、也不可能出於李邕、因其所書小楷與其書碑大楷本不一類。在書写碑版大楷時、為作金石

法の確立が無ければ、《趙跋》は成立しないと考える。また、《趙跋》のように秀逸な書法表現はわずか一点だけなので、画期（画期的な表現）でなく、集大成と称する。

小 結

従来の真贋鑑定の研究は、作品本幅のみに注目してその真贋を鑑定する傾向が見られる。宮廷収蔵の王羲之《快雪時雪帖》のような名品の《趙跋》は、間違いなく真跡であることが定説となっているが、その書法に潜む技法や鑑定への応用性は提起されていない。本章は《趙跋》は題跋ながらも、趙孟頫の小楷の最高峰であり、集大成でもあることを提起した。また、一般の偽作者は本作の書法を容易に入手、模倣できなかったであろうことから、鑑定の際には他の 60 代の小楷書法を基準作として応用するという鑑定方法も合わせて提起した。

鑑定の際にはまず書風を中心に精査し、この他に款識や題跋、収蔵印記、歴代著録の記載なども考慮し、全般的に考察を行った。55 点の小楷中、真偽について十分に検討が加えられていなかった 7 点を集中的に検討し、これらを偽作と判断した結果、真跡は 27 点となった。

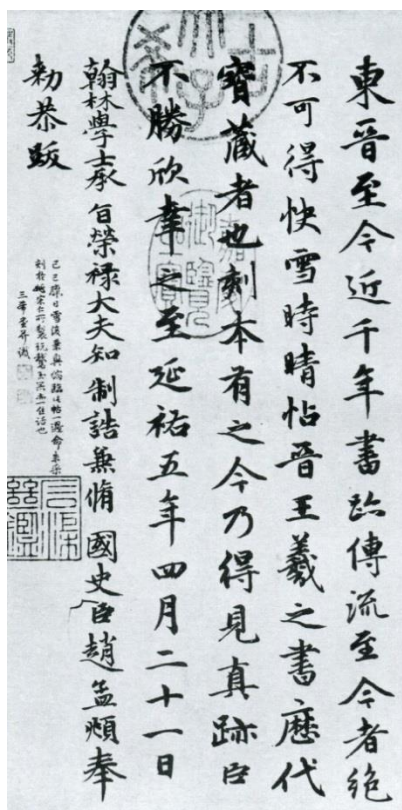
この 27 点の真跡の時期区分を試み、大きく古典吸収期、模索期、典型の確立期の 3 期に分けることができた。趙孟頫が《趙跋》に至るまでに、三国・

之想、趙孟頫確実在其大徳七年（1303）所書《玄妙觀重修三清殿記》中已窺及融入李邕筆法。然小楷無須用碑版法、即用筆加以穩實、故趙氏小楷並不用李邕法、況李邕無小楷伝世、何以比較。」云々と述べており、詳細は前掲注 8、黄惇「高上大洞玉經小楷卷」『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44、頁 461 を参照。全体的に趙孟頫の小楷を考察した後、黄惇氏の考えに反論したい。逆に、これこそ趙孟頫の小楷書法の特徴であり、その独自の表現の由来は碑版にあったと改めて認識できた。

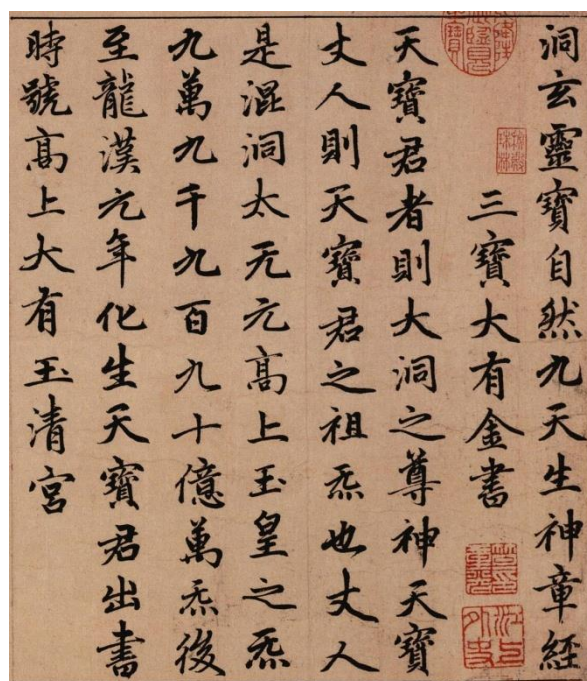
魏の鍾繇以降の古典書法を勤習する変遷の軌跡及び独自の書法を生み出そうという意図は作品からも見て取れる。《趙跋》は各時代の書法の特徴を有しながらも、碑文書法の結体、用筆を取り入れられていることが確認された。ただし、これは碑文書法を大量に揮毫したことで得られた独自の技法に由来すると考えられるので、画期の定義に符合しない。そのため、画期ではなく、集大成と称する。

本章は伝存する有紀年の肉筆の小楷に焦点を当てたが、今後無紀年作品の編年の可能性、そして、拓本についても研究範囲を広げたいと思う。

【図1】《趙跋》



【図2】趙孟頫《道生神章經》（部分）



【図3】趙孟頫の楷書、行書、獨草体の三書体を混用させる小楷の章法



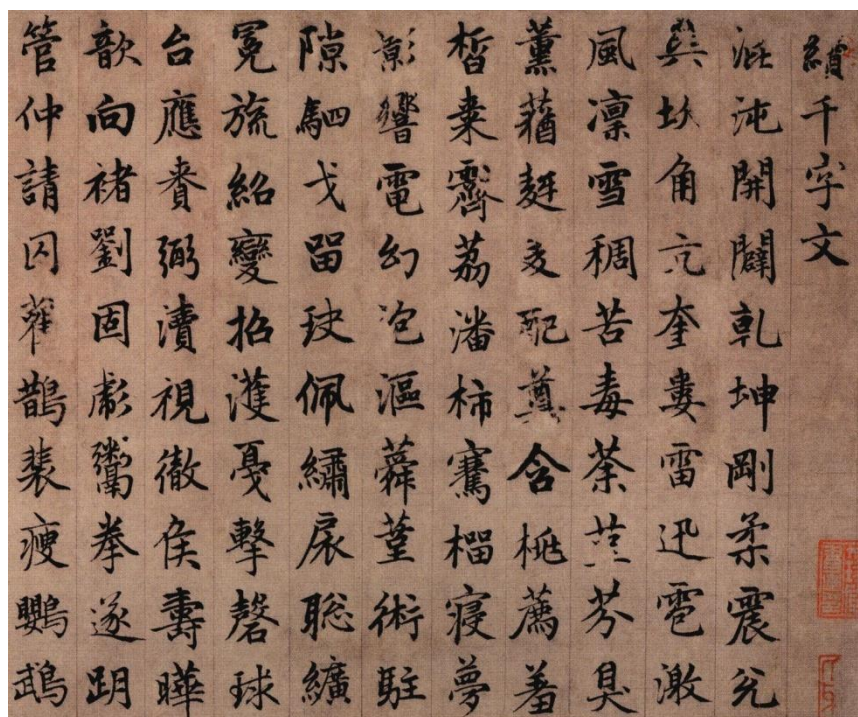
【図4】《趙跋》の重心が右下にある結体



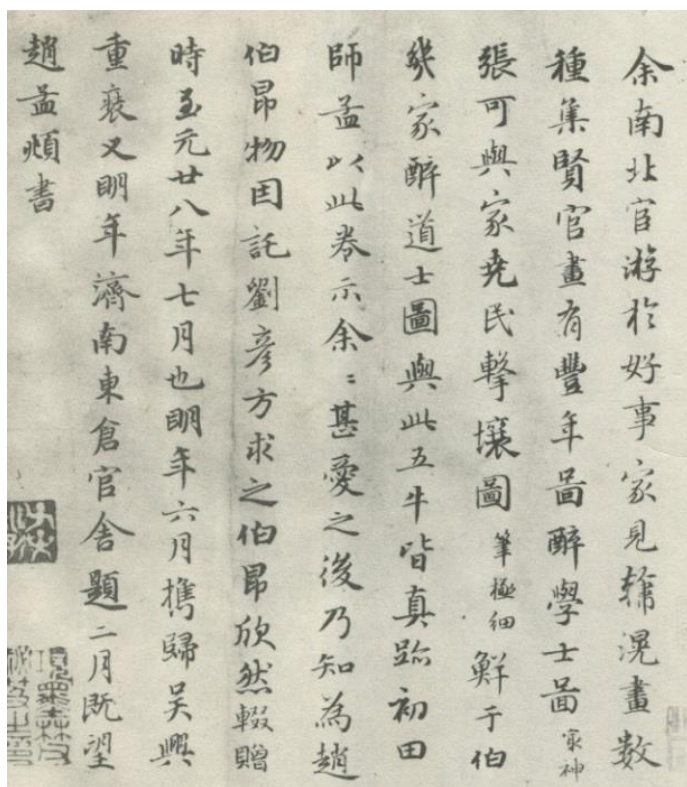
【図5】《趙跋》の多様な用筆



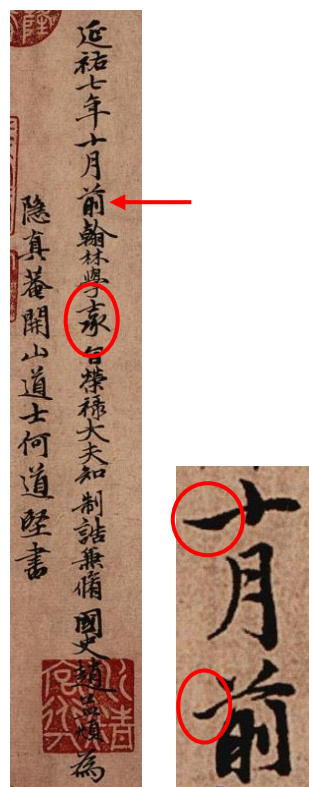
【図6】趙孟頫《楷書統千字文》(部分)



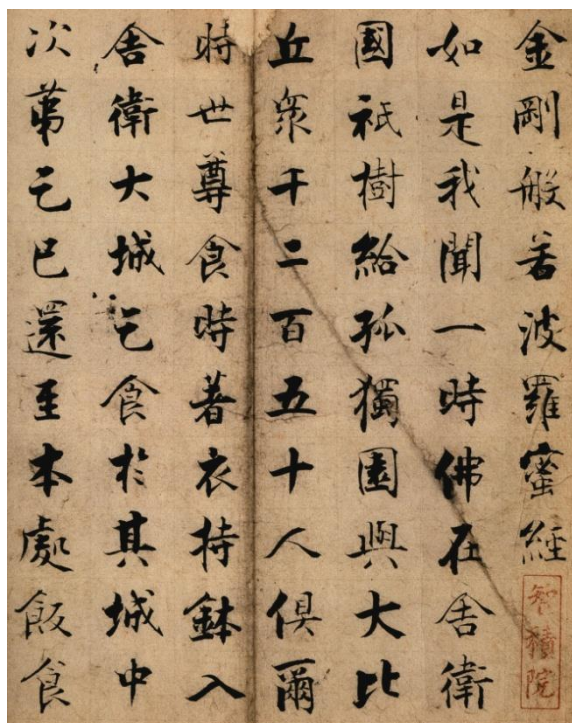
【图 7】趙孟頫跋《韓滉五牛圖》



【图 8】



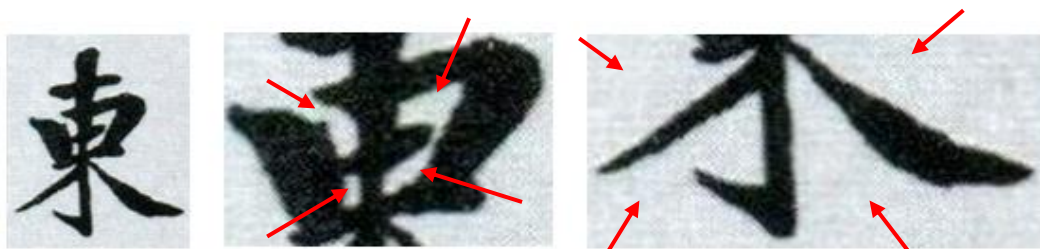
【图 9】張即之《金剛般若波羅蜜經》（部分）







【図 1 0】《道生神章經》書法の特徴









【図 1 1】《趙跋》の結体の疎密



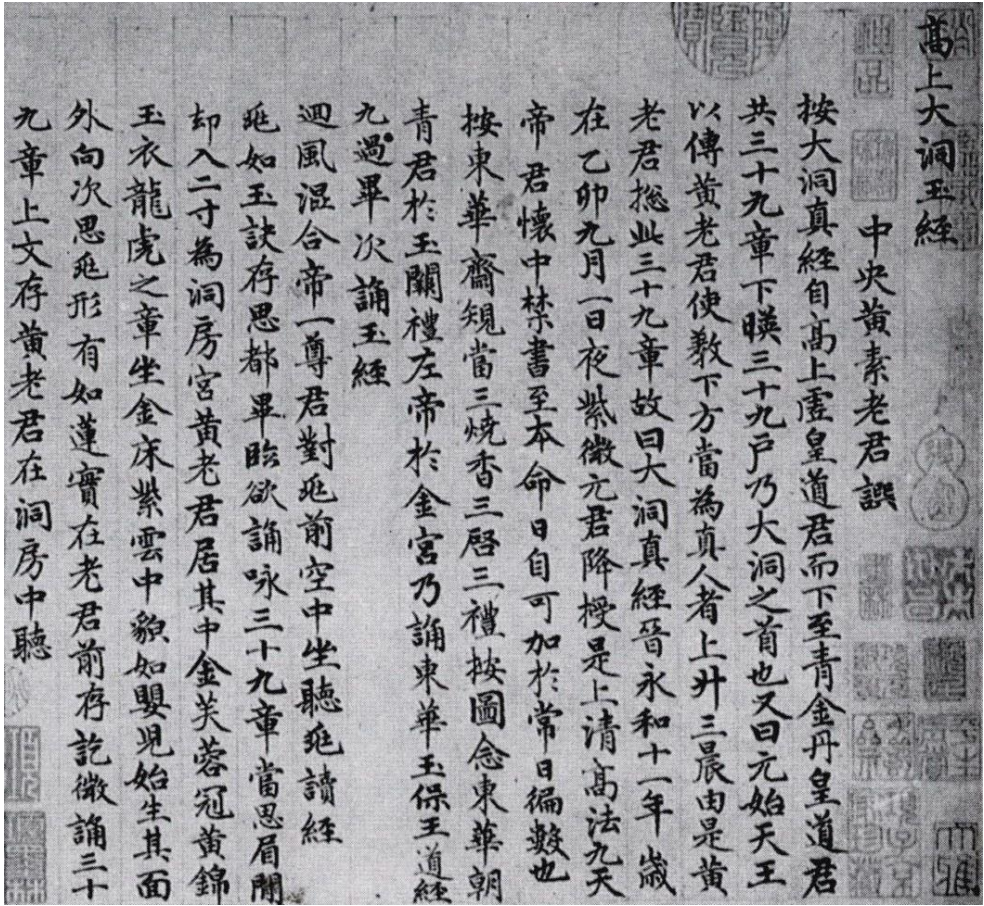
【図 1 2】《趙跋》と《道生神章經》多様な結体

《趙跋》		《道生神章經》	
			

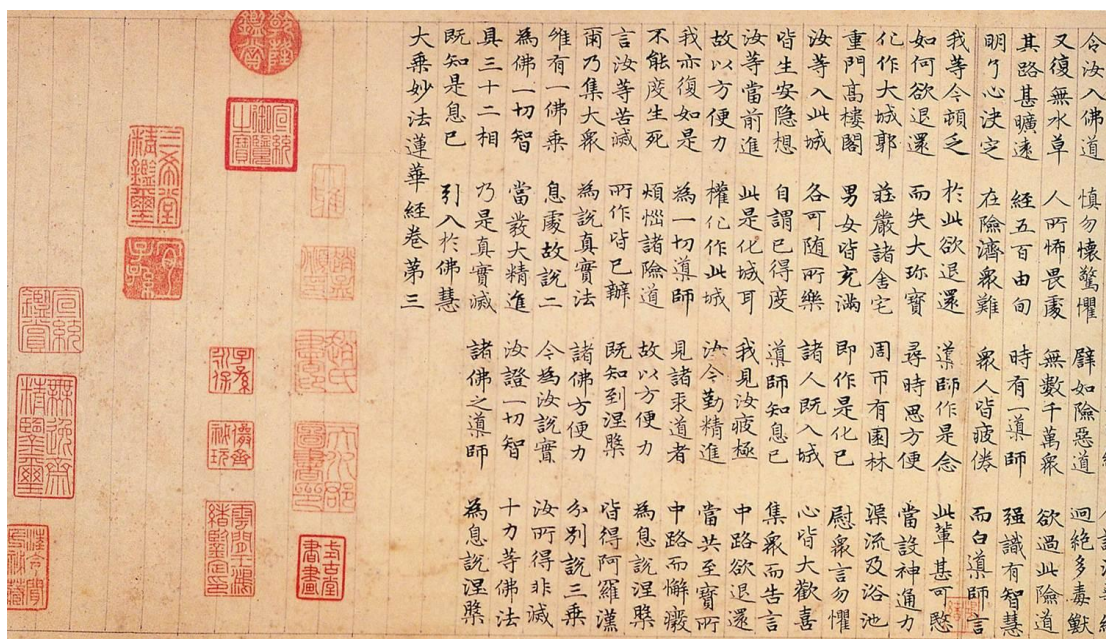
【図 1 3】《趙跋》と《道生神章經》多様な用筆

《趙跋》		《道生神章經》	
			
			

【図 1 4】趙孟頫《高上大洞玉經》の《十月八日本》（部分）

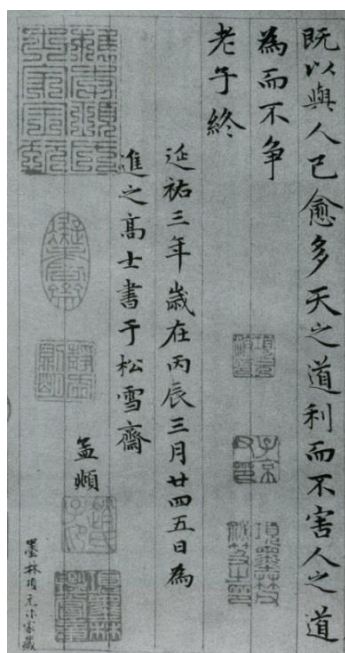


【图 1 5】趙孟頫《大乘妙法蓮華經卷》第三卷（部分）



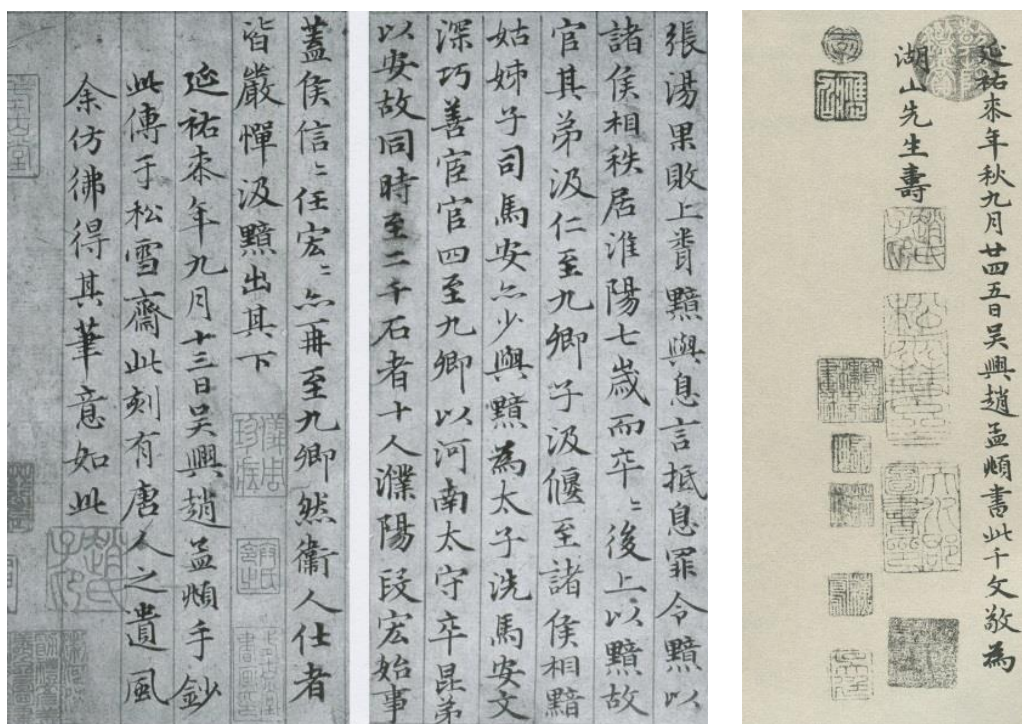
【图 1 6】趙孟頫《道德經》の《北京故宫本》（部分）、左下

【图 1 7】趙孟頫《洛神賦》の《北京故宫本》（部分）、右下



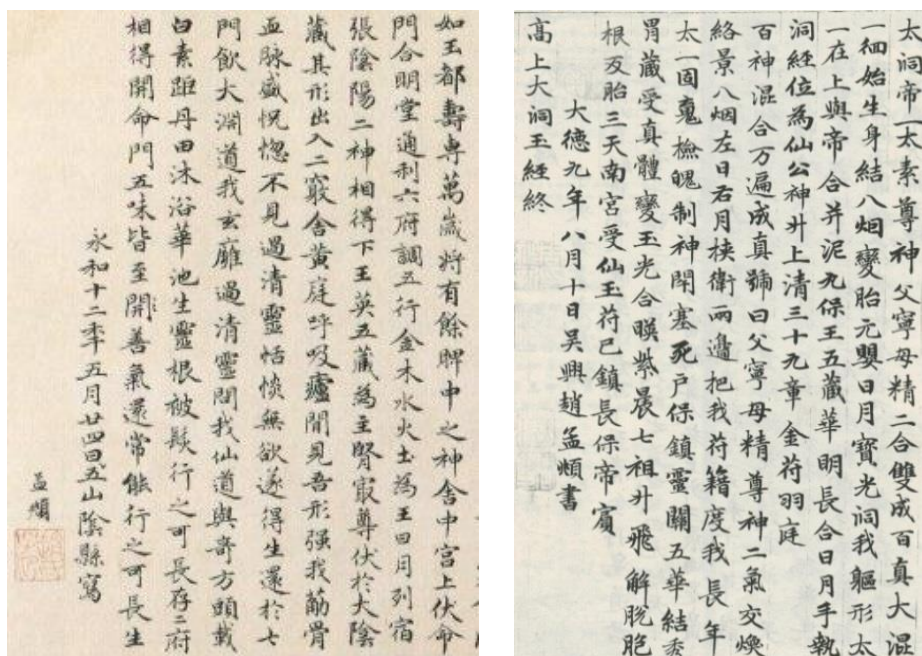
【图18】趙孟頫《漢汲黯傳》（部分）、左下

【图19】趙孟頫《六體千字文》（部分）、右下



【图20】趙孟頫《臨黃庭經》の《北京故宮本》（部分）、左下

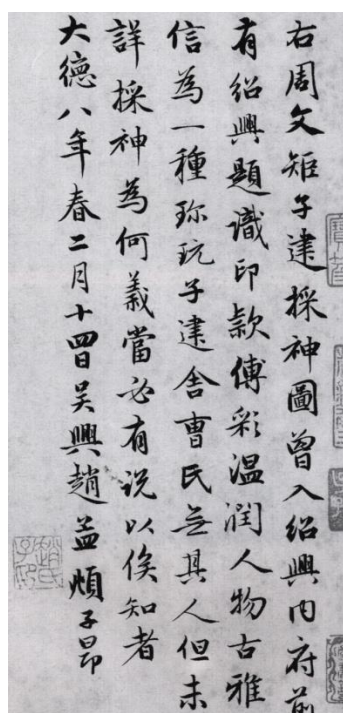
【图21】趙孟頫《高上大洞玉經》の《八月十日本》（部分）、右下







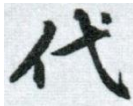





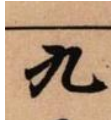
【図 2 2】趙孟頫《高上大洞玉經》の《十月八日-2 本》（部分）



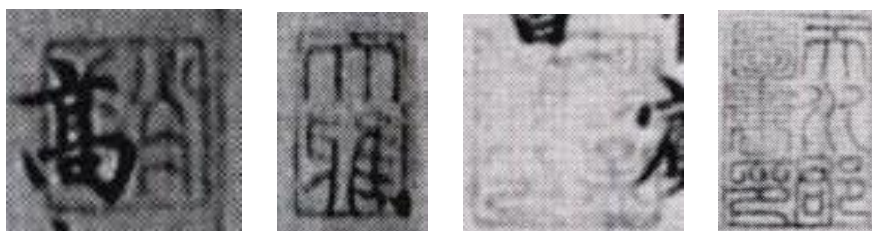
【図 2 3】趙孟頫跋《周文矩子建採神図》



【図 2 4】《十月八日本》と《趙跋》、《道生神章經》の字形比較

	代	大	有	九
《十月八日本》 (52 歳)				
《趙跋》 (65 歳)				
《道生神章經》 (67 歳)				

【図 2 5】《十月八日本》の押印



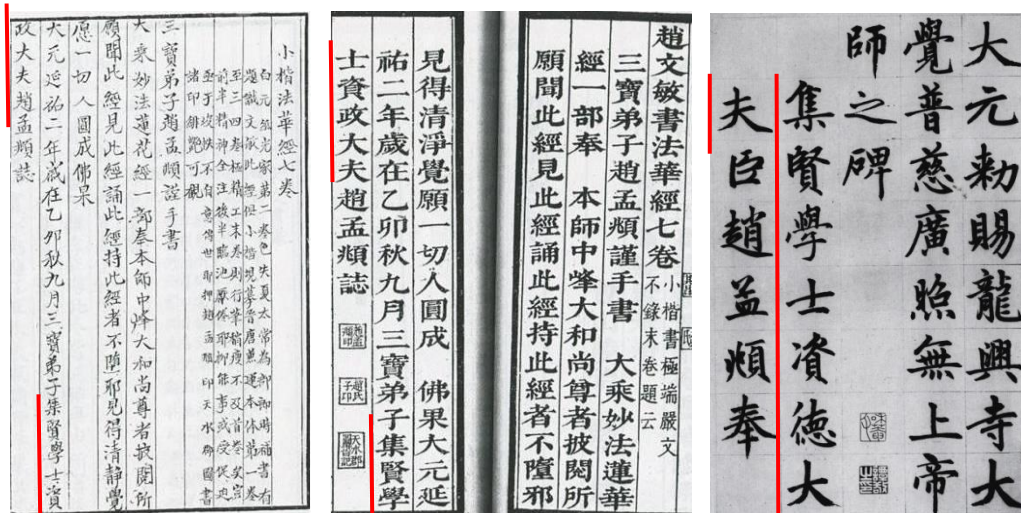
【図 2 6】落款のない《大乘妙法蓮華經》卷三と卷五



【図 2 7】《趙跋》と《大乘妙法蓮華經卷》第三卷、《道生神章經》の書法



【図 2 8】「集賢學士資政大夫趙孟頫」と「集賢學士資德大夫趙孟頫」



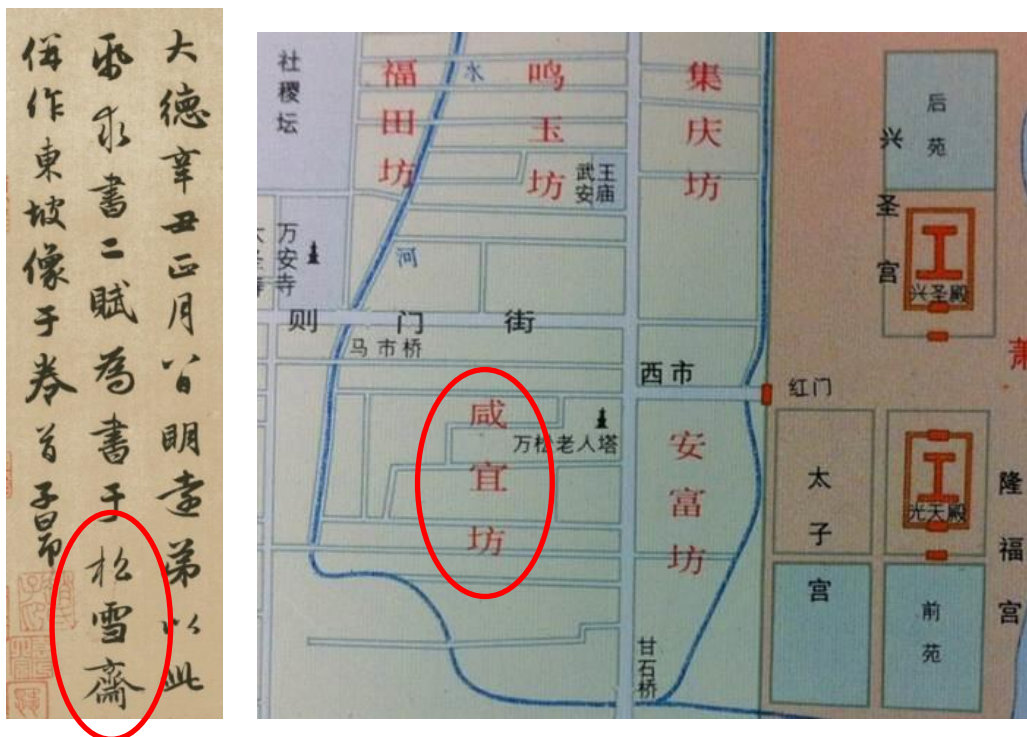
【図29】趙孟頫《道德經》の《黒川本》（部分）、左下

【図30】趙孟頫《道德經》の《北京故宮本》と《趙跋》の字形検証、右下

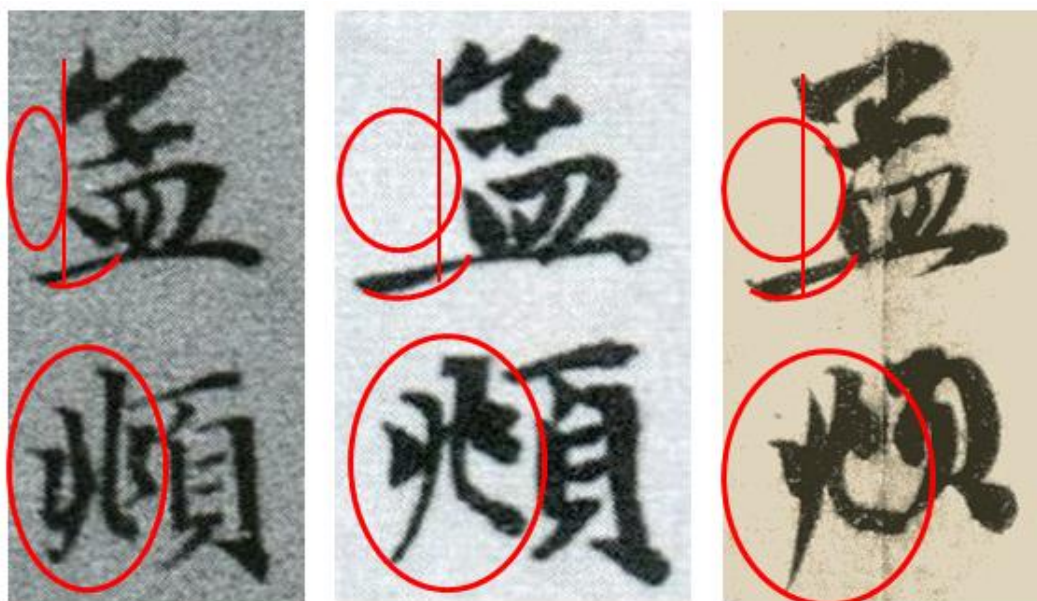


【図31】趙孟頫《赤壁賦》冊（部分）、中下

【図32】元代の大都に位置する咸宜坊の地図、右下



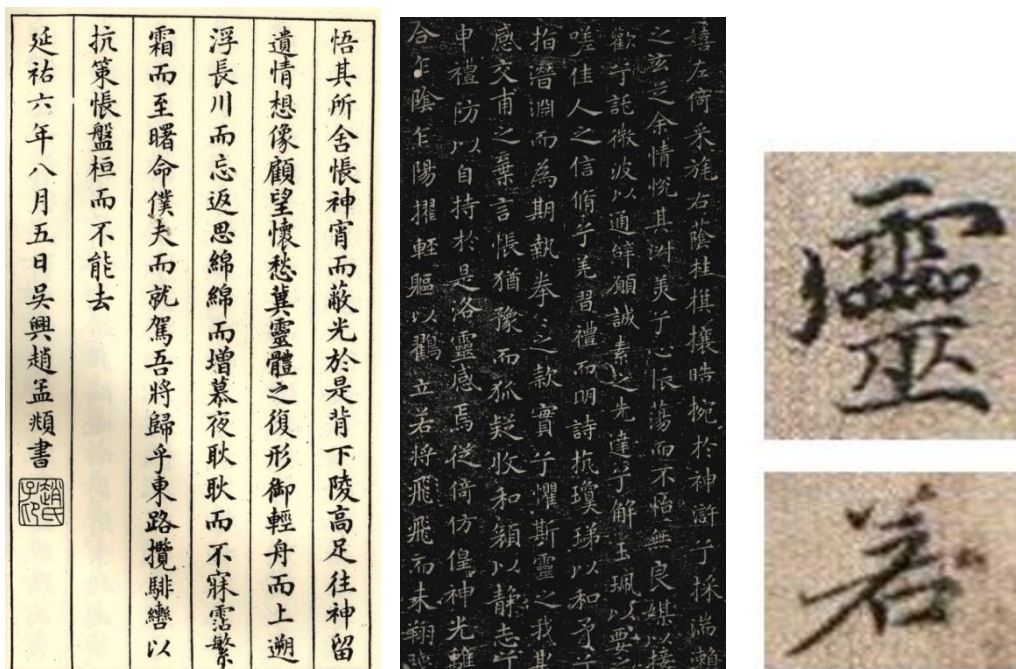
【図 3 3】 趙孟頫《道德經》の《北京故宮本》、《趙跋》、尺牘の署名



【図 3 4】 趙孟頫《洛神賦》の《樹德堂本》（部分）、左下

【図 3 5】 王献之《洛神賦十三行》（越州石氏本、部分）、中下

【図 3 6】 趙孟頫《洛神賦》の《北京故宮本》の不安定の結体、右下



【図37】《洛神賦》（左上）と《趙跋》（右上）、碑文書法（左下）の字形

【図38】《洛神賦》の書法、右下



【図39】趙孟頫《洛神賦》と《洛神賦十三行》「腕」字の異同、左下

【図40】俞和《臨樂毅論》（部分）、右下



【図4 1】 俞和《臨樂毅論》（左）、趙孟頫《漢汲黯伝》（右）の字形、左下

【図4 2】 落款の「頤」字の補筆、右下



【図4 3】 俞和《篆隸千字文》（部分）、款識



【图 4 4】趙孟頫《四体千字文》（部分）、右下



【图 4 5】趙孟頫《六体千字文》（上）、《趙跋》（下）



【図46】趙孟頫《蘭亭修禊図》（左）と《六体千字文》題跋、（右）

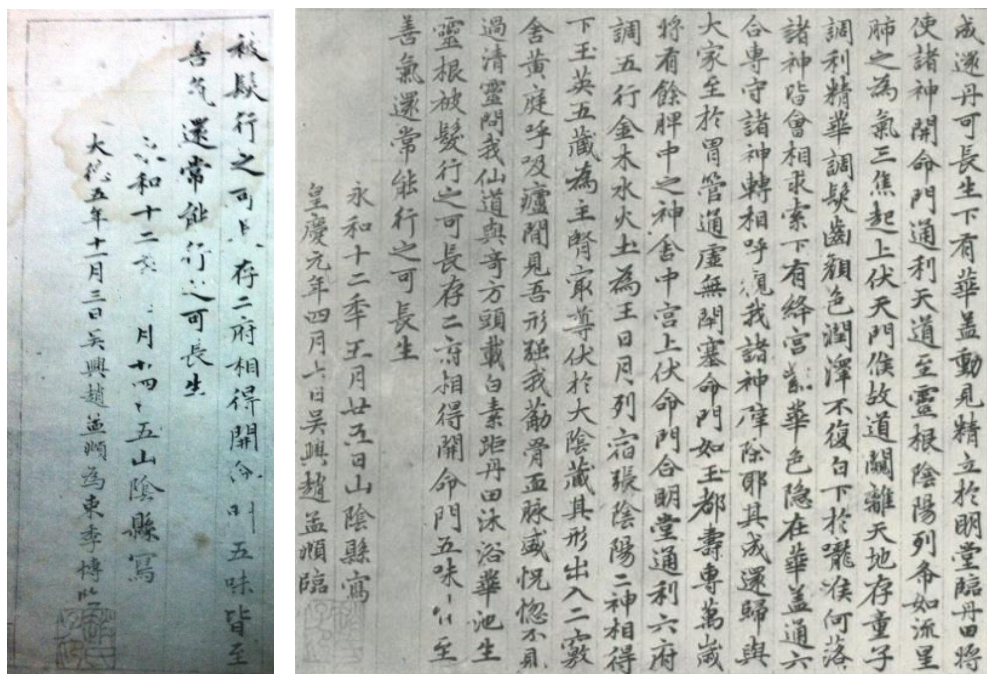


【図47】趙孟頫《臨黃庭經》の《至元三十年本》、（部分）



【図48】趙孟頫《臨黃庭經》の《大徳五年本》（部分）、左下

【図49】趙孟頫《臨黃庭經》の《皇慶元年本》（部分）、右下



【図50】趙孟頫《臨黃庭經》の《北京故宮本》と《趙跋》、《道生神章經》

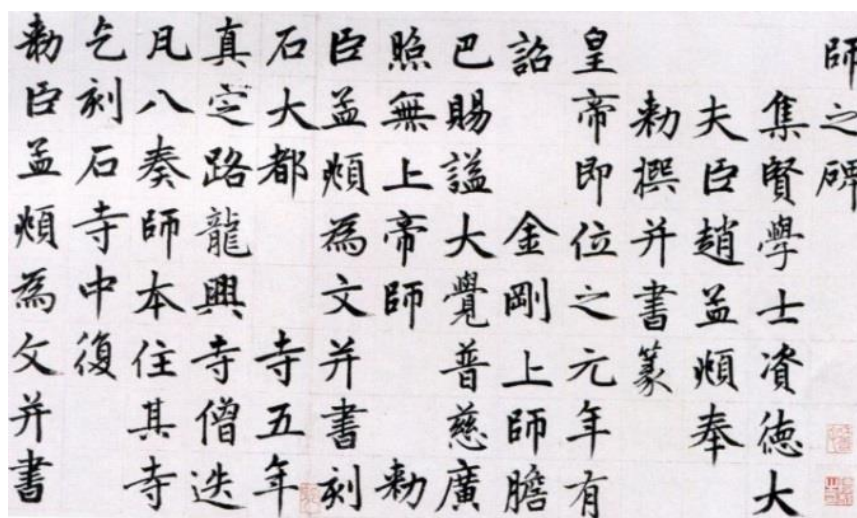
	有	至	靈	跡
《北京故宮本》 (王：中晩年)				
《趙跋》 (65 歳)				
《道生神章經》 (67 歳)				

【图 5 1】「心画妙处」印（應甫持印）、左下

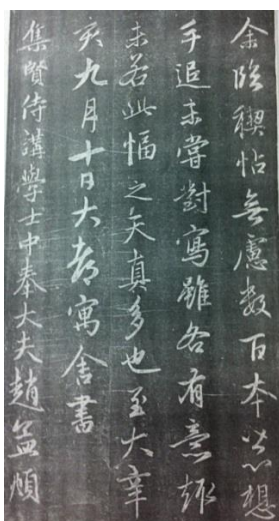
【图 5 2】趙孟頫跋《紅衣羅漢圖》、右下



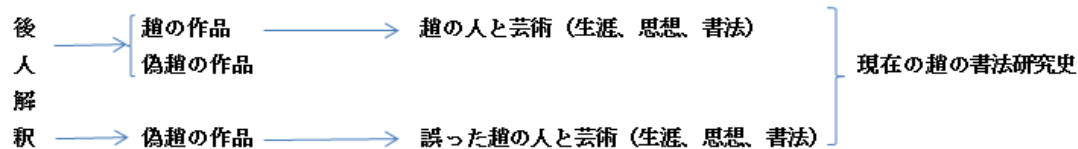
【图 5 3】趙孟頫《大元勅賜龍興寺大覺普慈廣照無上帝師之碑》稿（部分）



【図5 4】趙孟頫跋《臨王羲之蘭亭序》帖、右下

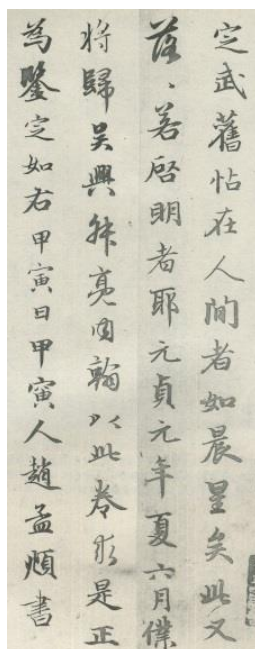
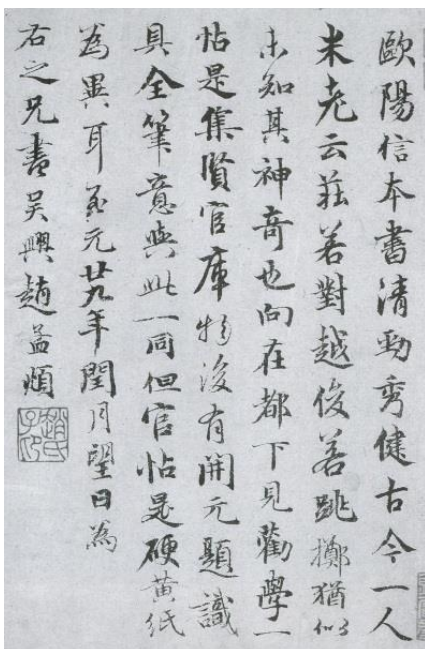


【図5 5】



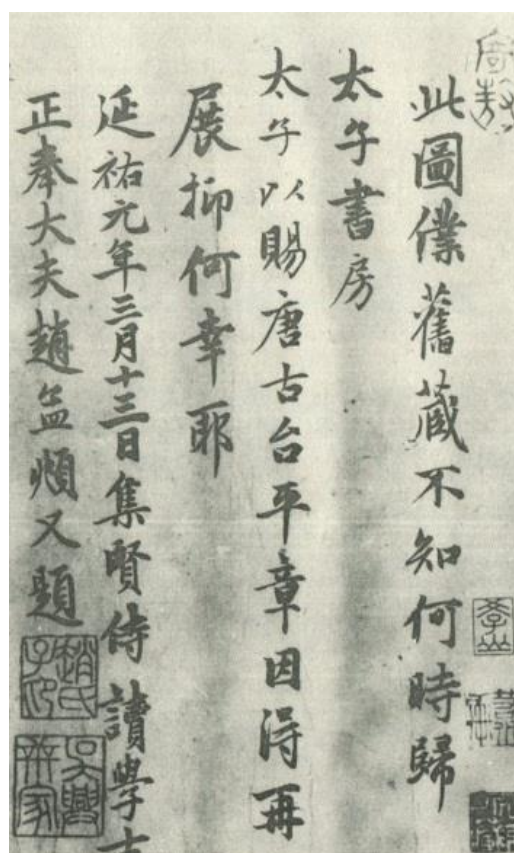
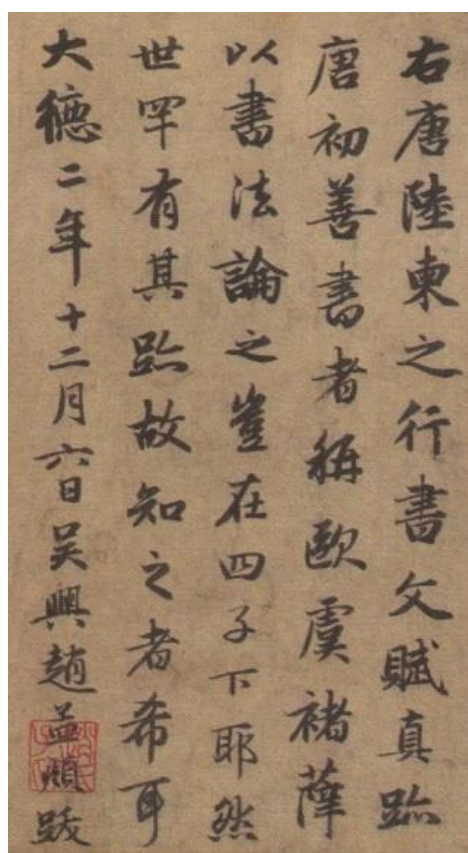
【図5 6】趙孟頫跋《伝欧陽詢夢奠帖》、左下

【図5 7】趙孟頫跋《定武蘭亭帖》、右下



【图 5 8】赵孟頫跋《文赋》、左下

【图 5 9】赵孟頫三跋《五牛图》、右下



【表1】趙孟頫の小楷書法の遺品

年代	西暦	①詩翰類	②題跋・款識類	③儒・家・道教経典類	④古典法帖類
至元二三年	1286		曹娥碑跋 (遼博)		
至元二四年	1287		大道帖跋 (台北故宫)		
至元二五年	1288				臨黃庭經(台北故宫) x: 台北故宫、私見
至元二六年	1289		八花園跋 (北京故宫)		
至元二六年?	1289?	襍帖源流 (台北故宫)			
至元二九年	1292		夢真帖跋 (北京故宫)	常清靜經(フリーアギャラリー) ○: 傅申、楊仁愷等 x: 私見	
至元三十年	1293		五牛図初跋 (北京故宫)		
元貞元年	1295		蘭亭帖跋 (北京故宫)		
元貞元年	1295		鵲華秋色図跋(台北故宫) ○: 台北故宫 x: 丁義元		
元貞二年	1296		人騎図跋 (北京故宫)		
大徳二年	1298		文賦跋 (台北故宫)	金剛般若波羅蜜經(台北故宫) x: 私見	
大徳三年	1299		人騎図二跋 (北京故宫)		
約大徳四年	1300		幽竹枯槎図跋 (有鄰館)		
大徳四年	1300		洛神賦跋 (天津博物館蔵)		
大徳四年	1300		古木散馬図跋 (台北故宫)		
大徳五年	1301		赤壁二賦冊跋 (台北故宫)		臨黃庭經(収蔵先不詳) x: 私見
大徳六年	1302		水村図跋 (北京故宫)		
大徳七年	1303		重江疊嶂図跋 (台北故宫)		
大徳八年	1304		紅衣西域僧図初跋(遼博) x: 私見	常清靜經(所蔵先不詳) x: 私見	
大徳八年	1304		蘭蕙図跋 (サンフランシスコ・アジア ン・アート・ミュージアム)		
大徳八年	1304		周文矩子建探神図跋 (北京故宫)		
大徳九年	1305			高上大洞玉経(天津博物館) ○: 黃惇 x: 私見	
大徳九年	1305			高士大洞玉経(収蔵先不詳) x: 私見	
大徳九年	1305			高士大洞玉経(北京榮宝齋) x: 徐邦達	
至大元年	1308			度人妙経(所蔵先不詳) x: 私見	
至大四年	1311			金剛般若波羅蜜經(所蔵先不詳) x: 私見	
約至大四年	1311			道德経(黒川古文化研究所) ○: 外山軍治 x: 私見	
皇慶元年	1312				臨黃庭経(蘇州博物館) x: 徐邦達
延祐元年	1314		五牛図三跋 (北京故宫)		

延祐二年	1315			妙法蓮華經卷第三（石頭書屋） ○：傅申、単国強等 ×：私見	
延祐二年	1315		統千字文款 （北京故宮）	妙法蓮華經卷第五（首都博物館） ○：首都博物館、王連起 ×：私見	
延祐三年	1316		夏熟帖跋 （遼博）	道德經（北京故宮） ○：王連起等 ×：私見	
延祐五年	1318		快雪時晴帖跋 （台北故宮）	重輯尚書集注序言（オークション） ×：私見	
延祐六年	1319				臨洛神賦（北京故宮） ○：王連起 ×：私見
延祐六年	1319				臨洛神賦（樹德堂） ×：私見
延祐六年	1319				四体千字文（台北個人藏） ○：王連起 ×：私見
延祐七年	1320	漢汲黯伝（永青文庫） ○：徐邦達、黃惇、永青文庫 ×：王連起、張光賓	紅衣西域僧図二款 （遼博）		六体千字文（北京故宮） ○：馮德良 ×：王連起
延祐七年	1320		道經生神章卷款 （北京故宮）		
無紀年		金丹四百字（蘇州顧氏） ×：徐邦達	補唐人臨二帖（所藏先不詳）	書孝經（台北故宮） ×：私見	臨黃庭經（北京故宮、中晚年） ○：北京故宮、台北故宮 ×：私見
無紀年		琴賦（所藏先不詳） ×：私見	趙大年〈江村秋晚図〉 （北京故宮）	小学（台北故宮） ×：徐邦達	
無紀年			易元吉獼猴図跋 （台北故宮）		
計	全55点	4	28	15	8
真偽		真：1、偽：3	真：26、偽：2	真：0、偽：15	真：0、偽：8







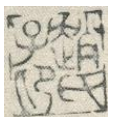





















表注（作品を偽とする理由）



























1. 書物や展覧図録に所収されているが、正当な根拠、または研究発表が見られない作品。
2. 本論で帰納した各書体の時期区分に当てはまらず、不自然さがあり、更なる研究を要する作品。

【表2】趙孟頫の落款

	子建採神 図跋款 51 歳	韓滉五牛 図三跋款 61 歳	続千字文 款 62 歳	楊凝式夏 熱帖跋款 63 歳	趙跋款 65 歳	道生神章 經款 67 歳	紅衣羅漢 図跋款 68 歳
趙孟頫 51歳以降の落款							
	宗陽宮帖 51~52 歳	国賓山長 帖 53 歳	呉門帖 59 歳	兩書帖 66 歳	還山帖 66 歳	入城帖 67 歳	塵事帖 67 歳
							
伝称趙孟頫の書法の落款	高上大洞 玉經款 52 歳	黄庭經款 無紀年	大乘妙法 蓮華經款 62 歳	道德經款 63 歳	洛神賦款 66 歳	漢汲黯伝 款 67 歳	六体千字 文款 67 歳
			確認できない				

【表 3】 趙孟頫の押印

曹娥碑跋	大道帖跋	臨黃庭經	禊帖源流	八花図跋
	無し			
夢奠帖跋	常清静經	五牛図初跋	定武蘭亭跋	鵲華秋色図
		無し		
人騎図跋	文賦跋	金剛經	人騎図二跋	幽竹枯槎図跋
				
洛神賦跋	古木散馬図跋	赤壁二賦冊跋	臨黃庭經	水村図跋
				
重江疊嶂図跋	紅衣西域僧図跋	常清静經	蘭蕙図跋	子建採神図跋
				
大洞玉經	大洞玉經	大洞玉經	度人妙經	金剛經帖
	確認できない	確認できない		
				

道德経	妙法蓮華経第三、五		五牛図三跋	続千字文
	  		 	
夏熱帖跋	道德経	快雪時晴帖跋	重輯尚書集注 序	臨洛神賦
		無し	 	
臨洛神賦	四体千字文	六体千字文	漢汲黯伝	紅衣西域僧図
	  	  		
道生神章経	補唐人二帖	書画孝経	臨黄庭経	琴賦
		確認できない		
江村秋暁図跋	小学	猴猫図跋		
	確認できない			

【表 4】7 点趙孟頫の検討作品の基本資料

	妙法蓮華経卷第三、五 (62歳、個人蔵、首都博物館)	道德経 (63歳、北京故宮)	洛神賦 (66歳、北京故宮)	漢汲黯伝 (67歳、永青文庫)	六体千字文 (67歳、北京故宮)	高上大洞玉経 (52歳、天津博物館)	黄庭経 (無紀年、北京故宮)
寸法	26.8×65.4.2cm 26.7×73.0cm	24.5×618.6cm	10.3～13×25.7×6cm	17.6×17.4×20cm	23×1448cm	29.7×457cm	26.5×485.4cm
落款	なし 大元延祐二年歳在乙卯 秋九月三圭弟子集賢学 士資政大夫趙孟頫誌（ 『大観録』卷八、『江 都消夏録』卷一）	延祐三年歳在丙辰三月 廿四五日為進之高士書 于松雪斎	延祐六年八月五日吳興趙 孟頫書	延祐泰年九月十三日吳興 趙孟頫手鈔此伝于松雪斎 此刻有唐人之遺風余仿佛 得其筆意如此	延祐泰年秋九月廿四 五日吳興趙孟頫書此 千文敬為湖山先生寿	大德九年十月八日吳興 趙孟頫書	孟頫
作者印記	趙、大雅、趙孟頫印、 趙氏書印、天水郡圖書	趙、大雅、趙氏子昂	趙、大雅、趙氏子昂	趙、大雅、趙氏子昂	趙、趙氏子昂、松雪 斎、天水郡圖書印	趙、大雅、趙孟頫印、 天水郡圖書印	趙、大雅、趙氏子 昂
題跋	なし 王世貞「書法華者。 人以十數。独趙吳興為 勝。而此卷乃吳興自用 了願者。以小楷書精麗 盡備。有北海誠懸之 妙。而時濟以大令者 也。第二卷缺。為明夏 大常景所補。尤円潔可 愛。吾弟其善護之。」 （『書画跋跋』卷一よ り）	墨林項元汴家藏	①陳方「蔡襄云。王子敬 愛寫洛神賦。故世多伝十 三行而已。余見隴子順所 藏者。其筆意峭拔。隴得 之於文敏公。且謂文敏晚 年楷法之進。蓋得此故 也。或者又謂。隴藏十三 行。其法往々類歐搢。今 較文敏所書此賦。與中年 臨本不同。賦後所題年 月。當為公最後之筆。故 其法度如此。元統二年六 月。考亭陳方題。」②張 雨「公藏大令真蹟。凡九 行。嘗為余手臨于松雪 斎。此卷典刑具在。当居 石刻之右。句曲外史張天 雨觀。至順四年閏三月廿 九日玄文館記。」	明) 文徵明 項元汴 清) 宣重光 (文不録)	未見	未見	元) 鄧文原、楊 載、孔清、柯九 思、黃潛、楊瑀、 段天祐、杜本、王 國器、歐陽玄、趙 奕、劉貞、黃公 望、応本、王元杰 明) 周鼎 (文不 録)
収蔵印記	明) 王世懋 清) 王鴻緒、張岳崧、 張鍾彦、張揚寿樞、朱 晉脩 民国) 王懿榮等	明) 項元汴、項篤寿 清) 梁清標 民国) 張大千等	明) 文徵明、文彭、項元 汴 清) 梁清標、嘉慶内府等	明) 文徵明、項元汴 清) 宣重光、安岐等	明) 吳廷 清) 乾隆内府 不明) 李応召、蘇鳳 等	明) 項元汴 清) 乾隆内府、陳介祺 印	不明) 応氏珍藏、 柯氏清玩、常関図 書
著録	明) 『書画跋跋』卷一 清) 『墨縁彙観』法書 統録 『平生壯観』卷四 『佩文斎書画譜』卷七 九 『大観録』卷八 『江都消夏録』卷一 民国) 『壮陶閣書画 録』卷五 『悦目：中国晚期書 画』 『清宮珍秘別蔵図録』	清) 『平生壯観』卷四 『汪氏珊瑚網法書題 跋』卷八 『式古堂書画彙考』書 卷一六 民国) 『元代書法』 『中国書法全集』44	清) 『平生壯観』卷四 『汪氏珊瑚網法書題跋』 卷八 民国) 『徐邦達集』五 『元代書法』 『中国書法全集』44	清) 『平生壯観』卷四 『墨縁彙観』法書下卷 『壮陶閣書画録』卷五 民国) 『中国書法全集』 44 『古書画偽託考弁』下卷 日本) 『細川家の至宝： 珠玉の永青文庫コレクシ ョン』 『海を渡った中国の書』	明) 『鈴山堂書画 記』元 『東園玄覽』玄二 『法書名画見聞表』 清) 『式古堂書画彙 考』書卷四 民国) 『盛京故宮書 画録』卷三 『古書画偽託考弁』 下卷	明) 清) 『平生壯観』卷 四、『汪氏珊瑚網法書 題跋』卷八、『式古堂 書画彙考』書卷一六、 『佩文斎書画譜』卷七 九、『大観録』卷八 民国) 『古書画偽託考 弁』下卷	明) 『書画跋跋』 卷一、『真賞齋 賦』 清) 『平生壯観』 卷四、『佩文斎書 画譜』卷七九、 『式古堂書画彙 考』書卷一六、 『大観録』卷八、 『壬寅消夏録』、 民国) 『三虞堂書 画目』上、『校理 中秘書画録』、 『古書画偽託考 弁』下卷
法帖	未見	『安素軒石刻』	『經訓堂法書』 (二帖とも張雨跋のみ)	『平遠山房法帖』 『松雪斎法書墨刻』	未見	未見	未見
真偽	真：王連起、単国強、 傅申 偽：任道斌 (官職名) 私見：偽：書風、官職 名	真：徐邦達、王連起 偽：私見	真：徐邦達、王連起 偽：私見	真：徐邦達、黄惇、 永青文庫等 偽：王連起 (俞和作 存疑：張光賓 (俞和作か 私見：偽 (俞和作	真：馮德良 偽：王連起 (俞和作 存疑：徐邦達 (俞和 作か 私見：偽、非俞和作	真：徐邦達、黄惇等 私見：偽	真：王連起、黄 惇、台北故宮 私見：偽

図版出典

【図 1】

…黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44（荣宝斋出版社、2002）、頁 315。

【図 2】

…柴培良、趙雁君主編『帰去来兮—趙孟頫書画珍品回家展特集』（西泠印社、2007）、頁 201。

【図 3】

…楊新主編『中国歴代書画鑑別文集』（紫禁城出版社、2000）、頁 92。黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（荣宝斋出版社、2002）、頁 76～77、頁 80。同前掲【図 1】、頁 315。

【図 4】

…筆者作成。同前掲【図 1】。

【図 5】

…筆者作成。同前掲【図 1】。

【図 6】

…王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』（上海科学技術出版社、商務印書館（香港）、2001）、頁 134。

【図 7】

…王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大觀』上（上海人民美術出版社、1995）、頁 10。

【図 8】

…同前掲【図 2】柴培良、趙雁君主編『帰去来兮—趙孟頫書画珍品回家展特集』、頁 201。

【図 9】

…『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（読売新聞社、2003）、頁 184。

【図 10】

…筆者作成。同前掲【図 8】。

【図 11】

…筆者作成。同前掲【図 1】。

【図 12】

…筆者作成。同前掲【図 1】、【図 8】。

【図 13】

…筆者作成。同前掲【図 1】、【図 8】。

【図 14】

…同前掲【図 3】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 146。

【図 15】

…蔡怡璇主編『悦目：中国晚期書画 図版篇』（石頭出版社、2001）、頁 47。

【図 16】

…同前掲【図 1】、頁 281。

【図 17】

…同前掲【図 6】、頁 134。

【図 18】

…同前掲【図 1】、頁 345。

【図 19】

…馮徳良編『趙孟頫六体千字文』（江西美術出版社、2008）、頁 20。

【図 20】

…同前掲【図 6】、頁 134。

【図 2 1】

…徐邦達『古書畫偽訛考辨 下卷：圖版部分』（江蘇古籍出版社、1984）、頁 94。

【図 2 2】

…卓克藝術網：<http://auction.zhuokearts.com/artsview.aspx?id=26921176>

【図 2 3】

…筆者作成。同前掲【図 3】黃惇主編『中國書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 145。

【図 2 4】

…筆者作成。同前掲【図 1 4】、【図 1】、【図 2】。

【図 2 5】

…筆者作成。同前掲【図 3】黃惇主編『中國書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 146～149。

【図 2 6】

…（左）同前掲【図 1 5】、蔡怡璇主編『悅目：中國晚期書畫 圖版篇』、頁 47。（右）薛海洋編『小楷大乘妙法蓮華經』（河南美術出版社、2011）、頁 42。

【図 2 7】

…筆者作成。同前掲【図 1】、【図 1 5】蔡怡璇主編『悅目：中國晚期書畫 圖版篇』、頁 45～46、【図 2】。

【図 2 8】

…吳升『大觀錄』卷八（漢華文化事業、1970）、頁 967。高士奇『江邨消夏錄』卷一（漢華文化事業、1971）、頁 108～109。同前掲【図 1】黃惇主編『中國書法全集 元代 趙孟頫二』44、頁 302。

【図 2 9】

…『老子道德經』（華正書局有限公司、1981）、頁 46。

【図 3 0】

…筆者作成。同前掲【図 1 6】、【図 1】。

【図 3 1】

…同前掲【図 3】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 116。

【図 3 2】

…侯仁之主編『北京歴史地図集』（北京出版社、1988）、頁 27。

【図 3 3】

…筆者作成。同前掲【図 1 6】、【図 1】、【図 3】黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 220。

【図 3 4】

…『趙孟頫書洛神賦』（湘江出版社、1992）、無頁数。

【図 3 5】

…『中国法書選』11（二玄社、2006）、頁 41。

【図 3 6】

…筆者作成。同前掲【図 1 7】。

【図 3 7】

…筆者作成。同前掲【図 1 7】、【図 1】、【図 1】頁 334。

【図 3 8】

…筆者作成。同前掲【図 1 7】。

【図 3 9】

…筆者作成。同前掲【図 1 7】、【図 3 3】。

【図 4 0】

…『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（読売新聞社、2003）、頁 59。

【図 4 1】

…筆者作成。同前掲【図38】、【図18】。

【図42】

…筆者作成。同前掲【図18】。

【図43】

…何伝馨主編『五体千字文選輯』（国立故宫博物院、2010）、頁74。

【図44】

…《四体千字文》『Fine Chinese Paintings』（Sotheby's New York、1989）、
Lot17。

【図45】

…筆者作成。同前掲【図19】、【図1】。

【図46】

…筆者作成。（左）国立故宫博物院（版權は国立故宫博物院所有）、（右）同前
掲【図19】。

【図47】

…国立故宫博物院（版權は国立故宫博物院所有）。

【図48】

…『元趙孟頫臨黃庭經真跡』（天津市古籍書店、1989）、頁10。

【図49】

…同前掲【図21】、頁54。

【図50】

…筆者作成。同前掲【図20】、【図1】、【図2】。

【図51】

…同前掲【図6】、頁71～72。

【図52】

…同前掲【図8】、頁201。

【図 5 3】

…同前掲【図 6】、頁 134。

【図 5 4】

…韓国国立中央図書館蔵『趙子昂書帖』（出版社、出版年不詳）、無頁数。（版權は韓国国立中央図書館所有）。

【図 5 5】

…筆者作成。

【図 5 6】

…同前掲【図 3】 黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 116。

【図 5 7】

…同前掲【図 7】、頁 159。

【図 5 8】

…何伝馨等編『晋唐法書名蹟』（国立故宫博物院、2008）、頁 240。

【図 5 9】

…同前掲【図 7】、頁 10。

第三章 趙孟頫における行草書への章草体混用

序

趙孟頫の草書¹については、古くから様々な考え方が提起されている。元人の楊載（元・至元八年～至治三年、1271～1323）は「行草則法逸少猷之、不雜以近体。」とし、趙孟頫の行草書の由来を二王に求め、同じく元の虞集（元・至元九年～至正八年、1272～1348）は「至於草書、飽十七帖而變其形。」とし、趙孟頫の草書に《十七帖》の影響を見る。近代の李瑞清（清・同治六年～中華民國九年、1867～1920）は「大王草法、孫過庭後、惟趙子昂略涉其藩。」とし、王羲之の正脈に、孫過庭（唐・貞觀二十二年～嗣聖二十年、648？～703？）と趙孟頫を列ねている²。しかし、これらの旧説は道理にかなってはいないが、現存する数多くの趙孟頫の遺品に見られる様々な表現を説明するには不十分である。例えば、王連起氏は趙孟頫《二贊二詩帖》（無紀年、北京故宮博物院藏）の風格が顔真卿（唐・景龍三年～貞元元年、709～785）、米芾（北宋・皇

¹劉欣耕氏は「草書技法是各種書体技法中最難以講透徹、最難以講明白的一種。這不僅由於草書形式的多樣性（有章草、今草、狂草、行草等）使技法複雜化、還由於草書創作時、其筆法、墨法及作品的構成樣式、構成方法變化極多、幾乎法無定法。」（劉欣耕編『歷代草書技法通講』（上海書畫出版社、1998）、前言より引用）と、草書の多様性と明確な区別の難しさを端的に説明している。思うに、趙孟頫の草書は、まさに劉欣耕氏が指摘するように簡単に形式で区別できない作品が多いと言える。ここでは、劉欣耕氏の草書の分類に追従し、趙孟頫の多様な草書表現のうち、行草書への章草体（章草と章草体の差異については後述する）の混用について論を展開したいと思う。第四章は第三章に引き続き、趙孟頫の行草書への章草体と楷書の四書体混用の論考である。

²馬宗霍『書林藻鑑』（商務印書館、1935）、頁 151、155 を参照。

祐三年～大観元年、1051～1107) の筆意を得ているとし³、黄惇氏は趙孟頫の章草は刻帖を由来としていると述べている⁴。それぞれが趙孟頫の草書の形成や特質などの解釈に努めていることから、趙孟頫書法の多面性が理解できよう。

本章のテーマは、従来より関心が寄せられてきた論点である。しかし、先行研究は単一作品に対する指摘、あるいは系統的に整理されていない概説が大多数を占める⁵。2011 年に上梓された李舒氏の最新研究では、趙孟頫における行草書への章草体の混用についても述べている。しかしながら、最も早い時期の作品で、今草と章草体のみを混用した《千字文草書》(33 歳、上海博物館蔵)【図 1】を見逃しているばかりか、趙孟頫跋《李衍画墨竹图》(55 歳、ネルソン・ギャラリー蔵)【図 2】を「今・章草混用」表現が見られる初めての作品としている(実は行草書への章草体と楷書の四書体混用、第四章で検討する)。更には「今・章草混用」の表現は晩年に比較的多いとするなど、

³王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』(上海科学技術出版社、商務印書館(香港)、2001)、頁 44 を参照。

⁴黄惇『中国書法史 元明卷』(江蘇教育出版社、2002)、頁 25 を参照。

⁵黄惇氏は《王献之保母碑》後の趙孟頫が揮毫した題跋について、「此跋筆法精湛、即細如毫髮處亦円潤挺健、又多見章草用筆滲入。」としている。詳細は黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44 (荣宝齋出版社、2002)、頁 453 を参照。また、単国強氏は趙孟頫が 30 代の頃に書いた尺牘《致丈人札》、《致希魏札》について、「稍晚的《致丈人》、《希魏》兩帖、仍保持方闊之体、並時出章草之撇捺。」だとしている。詳細は単国強「趙孟頫信札繫年初編」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43 (荣宝齋出版社、2002)、頁 52 を参照。両氏ともに趙孟頫の一作品中にある章草体の混用表現に気付いているが、その書法史的な位置づけについては提起していない。一方、張月慶氏は研究の焦点を元代章草三家(趙孟頫、康里巎巎、楊維禎(禎))に絞り、趙孟頫の書法について「於書作中首開章草与今草、楷書其他書体同時並陳。」と提起しているが、実はこの表現は南宋以前すでにあったので、検討の余地が残る。詳細は張月慶『元代章草三家之研究』(国立屏東師範学院視覚芸術教育系碩士論文、2004)、摘要を参照。

本章とは大きく異なる結論となっている⁶。

こうした研究の現状を踏まえ、趙孟頫における行草書への章草体の混用に焦点を絞り、現存する遺品の時期区分はどう区切るべきか、画期の有無についてを本論の主要な目的としたい。各時期の書法にはどのような特質が見られるのかなどに加えて、後世への影響をも視野に入れて具体的に跡付けし、第三章の研究成果を第四章にも用いたいと思う。。

第一節 伝存する趙孟頫の草書書法

以下、まず趙孟頫の草書の種類、数量、真偽について述べたい。

趙孟頫の草書はその形式より、①純然たる章草⁷の《急就章》3点、②独草体、行書、楷書が交じる作品の《杜甫秋興詩》(29歳頃、上海博物館蔵)、③今草、行書が交じる行草作品の《致野翁札》(34～37歳、国立故宫博物院蔵)、④今草、章草体が交じる「今・章草混用」の《千字文草書》(33歳、上海博物館蔵)、⑤今草、章草体、行書が交じる《王献之保母碑》(34歳、北京故宫博物院蔵)、⑥今草、章草体、行書、楷書が交じる《嵇叔夜与山巨源絶交書》(66歳、北京故宫博物院蔵)計6種類に分類できる。筆者が整理したところ、これらの草書作品は趙孟頫書法の中で最も多いことがわかった。①は真偽が2説あり⁸、②は論文として発表していないが、別稿ですでに言及している⁹。

⁶李舒『芸術巨匠 趙孟頫』(河北教育出版社、2011)、頁130～138を参照。

⁷純然たる章草は、他に《章草千字文》、《六体千字文》が挙げられる。《六体千字文》については第二章ですでに真跡とはみなしがたいという鑑定結果を提出した。また、《章草千字文》については、『張伯駒潘素書画集』(人民美術出版社、1985)の作者簡介(劉玉山氏による)に記されているが(かつては張伯駒所蔵という)、この遺品は未見のため、今後の課題としたい。よって、この2点の純然たる章草については本論では検討しないものとする。

⁸趙孟頫書と言われる《急就章》3点を贋作とする論考は、福田哲之「趙孟頫本『急就篇』考」『書学書道史研究』第5号(書学書道史学会、1995)、頁

③は本論と関係が薄いため、①、②、③を割愛し、本章の検討対象である④と⑤のみを一覧にした【表1】¹⁰。

【表1】で示したように、遺品の性質から④と⑤は、臨書（意臨）（1点）と題跋（1点）、尺牘（30点）の3種類に分けられる。④の《千字文草書》から、終期を迎える頃に中峰明本（南宋・景定五年～元・至治三年、1263～1323）に宛てた⑤の《瘡痕帖》（69歳、国立故宮博物院蔵）【図3】を含む全32点となる。

一方、ほぼ同時に展開した行草と章草体、楷書が交じる⑥は、郭右之に宛てた《致右之二札》（一）（35歳頃、日本個人蔵）¹¹からすでにその雛形が看取でき、最晩年（66歳）の《嵇叔夜与山巨源絶交書》がその最も代表的な作品だと考える。⑥は、⑤と同じく④の「今・章草混用」をもとに展開した異なる書表現で、趙孟頫独自の個人的色彩を有する重要な作品群の一つであり、これについては第四章で改めて整理・論述したいと思う。

これらの作品のうち、①の《急就章》3点、⑤の《蜀山図歌》と《偽趙孟頫七札之一》の真偽はすでに鑑定されている¹²。一方、④の趙孟頫《臨十七

47～54を参照。ただし、真跡とする論考も各著書に散見できる。ここでは『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44（榮宝齋出版社、2002）、頁462～463と鮑賢倫「趙孟頫急就章分析」『歷代草書技法通講』（上海書画出版社、1998）、頁54～56の2例のみ挙げておく。

⁹陳建志「趙孟頫の小楷の真偽について—《快雪時晴帖》趙跋を手がかりに—」書学書道史学会第8回学生・若手会員口頭発表（2012年6月24日（日）、日本大学にて）の発表資料を参照。

¹⁰尺牘類の編年は、前掲注5、単国強「趙孟頫信札初編」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁51～63を参考にした。

¹¹西川寧「趙子昂の二群の尺牘」『西川寧著作集』第二卷（二玄社、1991）、頁238を参照。

¹²《蜀山図歌》の真偽については、劉九庵「書画題款的作偽与識別」『劉九庵書画鑑定集』（河南省美術出版社、1999）、頁19～21を参照。《偽趙孟頫七札之一》は王連起「趙孟頫の名号款印与鑑定問題」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮宝齋出版社、2002）、頁67を参照。

帖》(66 歳、国立故宮博物院蔵、王世杰(号は雪艇) 寄存) や、趙孟頫《臨
裏鮐帖》3 点(無紀年、国立故宮博物院蔵) などの作品群を明らかな偽作だ
とする研究発表は見られないが、第二章で述べたように、鑑定の際に依拠す
べき主要根拠である書風や、補助根拠の印文、題跋などから、真跡とはみな
しがたい¹³。これらは純然たる章草や行草書に章草体が混ざる混用表現を有
する作品だが、後人による倣書という可能性は排除できず、真跡とする根拠
が乏しいため、本章では扱わないこととする。

第二節 趙孟頫と「今・章草混用」

一、「今・章草混用」とは

(一)、「今・章草混用」の概念と初出

まず、「今・章草混用」という呼称について説明したい。「今・章草混用」
という言葉は書道辞典には確認できない。従来より、中国書法史では書体が
五体、または六体に大まかに帰納され、今草と章草体を混用する作品を「今
草より」、または「章草と今草の間の作品」、「今草に章草が雜じりこむ」など

¹³現時点では趙孟頫《臨十七帖》は真跡として扱われており、『中国書法全
集 元代 趙孟頫二』44(榮宝齋出版社、2002) や、国立故宮博物院編『王
雪艇先生続存文物図録』(国立故宮博物院、1988) にも収録されている。だが、
本作の真偽については従来より深く考察されておらず、落款を除くと、趙孟
頫と結びつく書法的な根拠は極めて薄い。例えば、趙孟頫《臨十七帖》は書
法的に見ても技術不足であるほか、①脱字が確認できる上、②26 点しか臨書
しておらず(29 点があるはずだが、欠落の理由は言及されていない)、③北
宋拓の上野本《十七帖》と比較すると、位置のズレが一目瞭然である。更に、
趙孟頫臨《裏鮐帖》一の落款の下にある「墨妙」連珠印が俞和《臨定武禊帖
冊》(54 歳、国立故宮博物院蔵) の落款の下にある印と極めて近似する点か
ら、2 作の関係が疑わしく思われる。これらの作品群は更なる考察を要する
ため、真偽が判明するまでは検討しないものとする。

と表現することが多いようである¹⁴。この見方は、書体変遷の過程において、一つの作品中に2種類以上の書体が同時に使われ、書体が混用される現象に注目する昨今の研究動向が反映されている¹⁵。例として、前漢から後漢の簡牘書法¹⁶や西域出土の残紙【図4】などが挙げられる。

2003年以降、「章草与今草合体融合」という呼称が用いられるようになったが、これは元代書法における「今、章草混用」という表現の提示を端緒とするものである¹⁷。その後、李一忱氏が「今・章草混用」という概念の理論的な分析を試みた。李一忱氏は、中国書法史上に見られる、今草でもなく章草でもない「今・章草混用」の書風を有する作品は、「章草定型前の早期草書」と「元明時期興起的章今融合潮流的産物」2種類（厳密に言えば、3種類である）があると想定しているが、同時に分類の難しさも提起している¹⁸。王波氏は李一忱氏の説を踏襲し、「章草和今草融合型書作」を列挙しているが¹⁹、分類については李一忱氏と同じく明確に定義されておらず、作品の選別が独断にすぎるところもあり、検討の余地がある（例えば、章今融合潮流に符合する作品は南宋時代にすでに確認でき、前述した

¹⁴ 順番に沃興華「漢代の草体」『中国書法史』（湖南美術出版社、2009）、頁107と林采森「二王新体書風の轉換与開拓」『章草書法研究』（逢甲大学中国文学系博士学位論文、2009）、頁222と徐利明「元人章草及其變体的新創意」『中国書法風格史』（河南美術出版社、1997）、頁364を参照。

¹⁵ 沃興華氏は、簡牘分書が篆書から分（隸）書へ、分（隸）書から楷書へ展開していく間に、篆書と分書、分書と楷書が結合する字体書風が自然に生まれたと述べている。詳細は、同氏「西北漢簡書法研究」『中国書法全集 秦漢簡牘帛書卷一』5（榮宝齋出版社、1997）、頁28を参照。

¹⁶ 横田恭三『中国古代簡牘のすべて』（二玄社、2012）が詳しい。

¹⁷ 同前掲注5、張月慶氏論文の摘要を参照。なお、前掲注14の徐利明氏の著書に「章、今合体芸術」（『中国書法風格史』、頁366）との表現も見られる。張月慶氏が徐利明氏の研究を踏襲したか否かについては明記されていない。

¹⁸ 李一忱「章草、今草融合模式之源流」『中国書法』第4期（中国書法雜誌社、2005）、頁28～32を参照。

¹⁹ 王波「略論章草与今草的結合」『中国書法』第10期（中国書法雜誌社、2010）、頁192～193を参照。

上海博物館所蔵する趙孟頫《千字文草書》が選ばれなかった点など。

(二)、混用される章草体の条件

本来、章草は作品中の一文字一文字が独立し（章法）、収筆の波磔（用筆）が顕著な書体を指すものである²⁰。決して一文字のみを指すものではない。よって、今草や行草書に混用される時、そこに出現しやすい章草の結体の特徴を把握しておく必要がある（以下、章草体と略す）。便宜的だがその特徴を要約し、混用されがちな章草体の条件を予め決めておきたい【表2】。

- ① 明瞭な章草の筆法：波磔（右払い）、左・右回旋の転折（国構え）、「月」の1画目と2画目の交差と右回旋、鉤型のシンニョウなどが挙げられる。このうち、波磔（右払い）は判断の基準とされることが多い。運筆中に現れた右回旋の転折や紡錘形の線質も考慮されるべきだが、これは判断の基準としがたいところがある²¹。
- ② 自然に今草に溶け込む章草の字形：今草と章草両方にある文字。例えば「月」、「愛」、「慰」、「方」、「也」、「君」などが挙げられる。これら独特の字形を見逃してはならない²²。

ここでもう一点補足しておきたい。今草と判断するには2文字以上の連綿の章法が見られるべきで、これを基本条件とする。独草体に章草体の混用が

²⁰章草の説明については、西林昭一著『中国書道文化辞典』（柳原出版社、2009）、頁445の定義を要約したものである。

²¹これは趙孟頫の遺品に良く見られる特徴だが、見落とされがちである。

²²章草か否かを判断する際、収筆の払いのみならず、字形にも気をつけなければならない。その際、余德泉、孟成英編『章草大典』（中川古籍、2003）と北川博邦編『章草大字典』（雄山閣、2004）の字典類が有用である。また、林榮森氏は章草の単字の形態を①独体結構、②左右結構、③上下結構、④包围結構、⑤三聯結構の五種類に分類を試みたので、林榮森氏の研究は章草体の判断にも参考になる。詳細は前掲注14、林榮森「二王新体書風の転換与開拓」『章草書法研究』、頁151～159を参照。

見られ、かつ字間に行意があっても顕著な連綿の痕跡がなければ、今草より、または「今・章草混用」よりと称したい。陸機（呉・永安四年～晋・太安二年、261～303）の《平復帖》はその一例だと考える²³。

この3つの条件を基準とすれば、従来、今草の典型とされている王羲之《十七帖》は、「今・章草混用」、もしくは「今・章草混用」よりの作品ではないかと思う²⁴。また、明瞭な意識の確認は難しいが、智永《真草千字文》や孫過庭《書譜》の遺品にも今草と章草体が交じった書表現が見受けられるので、「今・章草混用」の射程に入れるべきだと考える²⁵。これら晋唐書法と趙孟頫書法との「今・章草混用」における書表現の意識には異同が認められる。

（三）、「今・章草混用」の来歴について

趙孟頫の遺品には章草体の混用表現が看取できる。これは、趙孟頫が章草を学んでいたことを示している。その背景を説明するには、『松雪斎集』や『孫氏書画鈔』の考察が有力な裏付けとなりうる。以下に要点を記す。

1. 《淳化閣帖》全十卷

甲申歳（31歳）五月、於書鋪中得古帖三卷、第二、第五、第八。明年（32歳）五月、又得七卷、多第八、缺第九。六月以其多者、加公權帖一卷、於錢唐康自修許易得第九卷、始為全書²⁶。

²³ 《平復帖》の書風については、啓功「《平復帖》說並釈文」『啓功叢稿』論文卷（中華書局、1999）、頁32～33を参照。しかし、前掲注18、李一忱氏論文には「『啓功叢稿』中直接称它（平復帖）是由章草向今草過渡的草書」とあるが、『啓功叢稿』全4巻を調べてもその出自が確認できなかった。

²⁴ 中西慶爾編『中国書道辞典』（木耳社、1981）、頁607には《十七帖》を今草の典型とする論述が見られる。

²⁵ 何伝馨氏は「卷中則是在以王羲之妍美書風の今草体中、參雜較為質樸的章草、運筆往往由提筆中鋒突然轉為重捺側鋒。……。在結字与筆意上、都有古今之別。」とし、孫過庭《書譜》の書風について述べている。詳細は何伝馨「書譜」『晋唐法書名蹟』（国立故宮博物院、2008）、頁115を参照。

²⁶ 趙孟頫著、黄天美点校「閣帖跋」『松雪斎集』卷10（西泠印社出版社、2010）、

趙孟頫が 31 歳から 32 歳の間に続けて《淳化閣帖》を入手したことが本人の著書に記されている。これは非常に信憑性の高い史料の一つだと言えよう。この当時、趙孟頫が《急就章》のような純然たる章草を身に付けていたか否かは不明だが、31 歳以降に《淳化閣帖》から純然たる章草（例えば、漢章帝の《辰宿帖》や漢の張芝の《八月帖》が挙げられる²⁷。）や「今・章草混用」書法を学び、独自の書法の展開に役立てたとも考えられる。現存する趙孟頫臨《淳化閣帖》所収の王羲之《適太常帖》（無紀年、国立故宫博物院蔵）、《採菊帖》（無紀年、国立故宫博物院蔵）、《七兒一女帖》（無紀年、北京故宫博物院蔵）からも、王羲之書法と趙孟頫書法との緊密な関係が見て取れる。

2. 《眠食帖》

右王右軍眠食帖真迹。世之博古之家所収王帖、僕亦略見之。如此帖章草奇古雄強、精神逼人、指不可再屈也。至元丙戌（33 歳）十一月朔。大梁趙孟頫為冲賓員外跋²⁸。

（後に鮮于枢、秦略、馮子振の題跋あり。不録。）

《眠食帖》は王羲之《豹奴帖》の一部である。現在、この作品を確認することはできないが、趙孟頫が黄絹に揮毫された肉筆の章草《眠食帖》を過

頁 271～272 を参照。

²⁷陳昕氏は《淳化閣帖》所収の章草に関する全作品の選別・分析を行っている。詳細は同氏、「《淳化閣帖》中の章草法帖整理研究」『図書館工作与研究』総 171 期（天津図書館学会、2010）、頁 59～61、「《淳化閣帖》中の章草法帖整理研究補述」『図書館工作与研究』総 192 期（天津図書館学会、2012）、頁 90～92 を参照。また、《淳化閣帖》に所収されている章草の法帖には真偽をめぐる論争があるが、趙孟頫本人が臨書の手本の真偽に関してどのような考えを持っていたのか不明であるため、ここでは趙孟頫が章草を学んだ際に用いた手本の一つと考えて論考を進めたい。

²⁸孫鳳『孫氏書画鈔』『中国書画全書』3（上海書画出版社、2000）、頁 888 を参照。肉筆の真跡とする関連資料は、郁逢慶「続書画題跋記 卷一」『郁氏書画題跋記』『中国書画全書』4（上海書画出版社、2000）、頁 672 を参照。張丑『清河書画舫』嘴字号『中国書画全書』4（上海書画出版社、2000）、頁 156 を参照。

眼し、章草について論評したことが文献により確認可能である。このことから 33 歳の頃すでに章草を知っていたことがわかる。

その翌月の 12 月に、先述した「今・章草混用」表現を有する、上海博物館所蔵の《千字文草書》が揮毫されたのは決して偶然ではないと思う。なぜなら、この《千字文草書》は意臨の作品で、章草体の「競」と「農」の払いの筆法【図 1】が智永《草書千字文》（ここでは《小川本》と《関中本》を指す）が異なる点は重要である。つまり、現在まで伝わる智永《草書千字文》にはない章草体の波磔は、《淳化閣帖》が所収する章草の法帖や《眠食帖》の受容がなければ、趙孟頫がいくら智永の《草書千字文》を臨池しても、《千字文草書》に見られるような独自の「今・章草混用」表現が形成されることもなかったのではないかと考える。また、趙孟頫の章草に見られる受容は単に刻帖（拓本）から得たものだけではなく、王羲之《眠食帖》のような墨跡本も過眼していたため、揮毫の際に章草体を活用できたとも考えられるのではないだろうか²⁹。

（四）、《淳化閣帖》受容の疑問点

趙孟頫の《淳化閣帖》の受容が 60 代まで続いていたか否かについては検討が必要である。『十百齋書画録』甲巻「趙孟頫臨淳化閣帖」には³⁰、「善夫副使与余交最深。……。暇日出其所蔵宋拓淳化閣帖一〇巻見示、紙墨湛湛、古

²⁹前掲注 28 の孫鳳『孫氏書画鈔』に収録されている趙孟頫や鮮于枢が王羲之《眠食帖》後に揮毫した題跋から、二人は当時肉筆の章草の作品を過目したことは確実だと言えよう。これにより前掲注 4、黄惇氏が述べる「趙孟頫の章草の来歴は刻帖のみ」という論説は根拠があいまいだが、『孫氏書画鈔』《眠食帖》に収録されている趙孟頫や鮮于枢の題跋によりそれを補うことができよう。

³⁰佚名『十百齋書画録』『中国書画全書』4（上海書画出版社、2000）、頁 523 を参照。

香可掬、不覺技癢。至大二年（56 歳）仲春下弦日。吳興趙孟頫題。……。延祐元年（61 歳）歲在甲寅仲夏臨。水晶宮道人。……。孟秋七月、子昂識。」とある。単国霖氏がこの文献記録を取り上げ、趙孟頫と《淳化閣帖》との関係について論述しているが³¹、内容を詳しく見ると、本文の落款が「水晶宮道人」となっており、著者が贋作を原本のまま著録した可能性がある³²。また、単国霖氏は《淳化閣帖》卷六（上海博物館蔵）に「大雅」という趙孟頫の持印が鈐されているため、上海博物館蔵《淳化閣帖》卷六はかつて趙孟頫の収蔵品であったとし、趙孟頫と《淳化閣帖》を結び付けようとしたが³³、遺品の「大雅」印を比較したところ、確かにこれらは全て趙孟頫の持印となり得るが、疑問も残る【図 5】。

第三節 趙孟頫と「雑体書」

ここまで、「今・章草混用」の表現が見られる、趙孟頫の各草書作品の背景について考察した。続いては、趙孟頫の書法における書体の混用とその書表現について説明する。まずはその定義から検討したい。

一、雑体と雑書卷（冊）

一つの書法作品中に異なる書体を混用する書風に関しては、これまでに複

³¹単国霖「趙孟頫的《閣帖》情結」『上海文博論叢』5（上海辞書出版社、2003）頁 87 を参照。単国霖氏はなぜか引用の出典を明記していないが、内容を比較したところ、前掲注 30 からの引用であることが判明した。

³²傅申「趙孟頫書小楷常清静經及其早期書風」『書史与書蹟—傅申書法論文集』（一）（国立歴史博物館、1996）、頁 186 を参照。

³³同前掲注 31、単国霖「趙孟頫的《閣帖》情結」『上海文博論叢』5、頁 86 を参照。

数の論文が発表されている。例えば、游国慶氏は「但回顧各朝各代、都有主流或主要的通行字体、如篆、隸、草、行、楷。相較於罕用僻見的雜體、所以名之曰正体」とし、《宋夢英集篆十八体書碑》（国立故宮博物院蔵）を中心に論考し、「是現存最早的多体、雜体篆書作品」と結論付けている³⁴。一方、白謙慎氏は明末清初の雜書卷冊に焦点を当て、「雜書卷冊的特点是、一件手卷或冊頁由兩種以上的書体随意書写而成。」とし、また、「雜書卷冊濫觴於何時有待進一步研究。至遲在元末明初已有有些書法家（特別是松江一帶的書家）对此已頗有嘗試。」としている³⁵。游国慶氏は正体と雜体を区別しているが、「雜体書」という言葉は用いていない。白謙慎氏は一つの作品の中に、2種類以上の書体を混用する作品を雜書卷冊³⁶としている。

雜体や雜書という名称は、混用する書体が限定されておらず、同じような書体混用の書風を指すものと思われる。この2種類の名称に対し、一般的には2種類の書体を混用する作品なら、「行楷」、「行草」、「真草」（智永《真草千字文》）と呼ばれ、2種類以上の書体を混用する作品なら、《三体石經》や《四体千字文》、《五体千字文》、《六体千字文》など、書体数を明記するのが古くからの習慣となっており、中国書道史ではこうした名称がすでに固定化されていると言えよう。

一方、書体を混用する作者の意識についてであるが、白謙慎氏は作者が揮

³⁴游国慶「宋夢英集篆十八体書碑及其相關問題」『書画芸術学刊』第3期（国立台湾芸術大学書画芸術学系、2007）、頁98～99を参照。

³⁵白謙慎「雜書卷冊和晚明文化生活」『書法叢刊』総第63期（文物出版社、2000）、頁20～32を参照。

³⁶雜書卷（冊）はもう一つ別の意味があり、古代の詩翰や書簡を何首か一枚の紙にまとめた作品を指す。例えば、《宋薛紹彭雜書卷》（無紀年、国立故宮博物院蔵）は詩翰と書簡が四つ収められた名跡として知られている。同様に、《行書雜書三段帖卷》（北京故宮博物院蔵）のように、三段異なる紀年の詩翰が一卷に表装された趙孟頫の作品も確認できるが、本論が検討する雜書卷（冊）とは意味が異なるので、ここでは触れない。

毫時に「随意」で揮毫したと述べているが、同意しがたい³⁷。むしろ、これらの書風も全て「意図的」になされたことを前提とし、古くからあった表現手法の一つと考え、論考を進めたいと思う。それは、章草という書体を知らない書人の作品中に、章草の筆法や結体が現れるはずがないと考えるからのである。もう一つの問題点は、白謙慎氏が雑書卷（冊）の起源を、遅くとも元末明初からとしているが³⁸、本論の考察では、実は隋代の《曹植廟碑》【図6】、北宋の蔡襄（宋・祥符五年～熙寧元年、1012～1067）の《離都帖》（無紀年、国立故宫博物院蔵）【図7】など、3～4種類の書体を混用する作品が確認できる。

いずれにせよ、游国慶氏が言う多体や雑体、白謙慎氏が言う雑書などの用語の書法史的定義は本章で掲げる「雑体書」と近似しているが、意味が異なる。以下、キーワードとなる雑書、そして本論で使う「雑体書」という名称について改めて考察し、私見を述べたい。

二、趙孟頫と雑書

許慎『説文解字』には「雑、五彩相会。」とある³⁹。これに依拠して「雑」を定義するなら、「五彩」とされる五つの要素を満たさねばならないことを念頭に置く必要がある。続いて、雑書について考えたい。

雑書という言葉の初出は宋高宗の趙構であることが確認できている。宋高宗は「至若紹興以来、雑書、游絲書、惟錢塘呉説。」とし、呉説（生卒年不詳、

³⁷同前掲注 35、白謙慎「雑書卷冊和晚明文化生活」『書法叢刊』総第 63 期、頁 20 を参照。

³⁸同前掲注 35、白謙慎「雑書卷冊和晚明文化生活」『書法叢刊』総第 63 期、頁 20 を参照。

³⁹臧克和、王平校訂『説文解字新訂』卷八（中華書局、2002）、頁 551 を参照。

南宋に活躍)の雑書と游糸書を高く評価している⁴⁰。現在まで伝わる伝王維《伏生授經図》(無紀年、大阪市立美術館蔵)巻末に呉説の題跋があり、3種類の書体(楷書、行書、章草体)を混用した表現が確認できる【図8】。このような表現はこの1点しか確認できないので、呉説の雑書書法を裏付ける貴重な作品の一つに違いない。

第一章で述べたように、趙孟頫は宋太祖趙匡胤の後裔である。このような背景を持つ趙孟頫ならば、宋高宗が著した『翰墨志』を拝読したに違いなく、そこから呉説の書法とその特徴を知り得たことが、趙孟頫の雑書の芽生えとなったのではないかと推測する。目下のところ、趙孟頫書法が呉説に由来することを明らかに示す文献は確認できないが、この二人の書法の近似性について触れ、おそらく同じ古典(二王書法系統か)を重視した「異曲同工」の妙趣であろうとする研究がある⁴¹。呉説と趙孟頫の作品を対照すると、傅申氏の論述には大きく頷けるものがある【図9】。趙孟頫と呉説の関係については、著名な独孤(僧)本《蘭亭序》にこの二人が揮毫した題跋が取り上げられている。これによると、呉説は1129年に題跋を書しており【図10】、後に趙孟頫が1310年に《蘭亭序》帖の臨書と《蘭亭十三跋》(57歳、東京国立博物館蔵)を残したこともわかり、二人の因縁が確認できる。

しかし、宋高宗が評した呉説の雑書の明確な定義(何種類の書体を混用したものか)は明らかになっていない。次に述べる趙孟頫の作品の中に、3~4種類の書体を混用したものが確認できるが、『説文解字』が解釈する「雑」の条件を満たしているとは言えず、本論では雑書という言葉を用いず、他の適切な言葉を探したいと思う。

⁴⁰趙構『翰墨志』『中国書画全書』2(上海書画出版社、1992)、頁712を参照。

⁴¹傅申「元代前期の書法」『欧米収蔵中国名蹟集』第3巻(中央公論社、1981)、頁125参照。

三、趙孟頫の「雑体書」書法

「雑体書」という言葉は書道辞典でも確認できるが、この言葉は近年になってから用いられるようになったものと思われる。西林昭一氏は「雑体書」を3種に分類している⁴²。そのうちの一つである「一作中に書体を雑じえ書きするもので、ことに北朝晩期～隋に流行した。」という定義は本論の第三章で検討する行草書への章草体混用、第四章で検討する行草書への章草体、楷書の四書体混用の作品群の特徴に一致することから、ここでは西林氏の説に追従したい。ただし、作品の形式によっては「雑体書」を2種類に分類することも可能なため、西林昭一氏の定義づけを補いたい。一つ目は西林昭一氏を取り上げた隋代の《曹植廟碑》や同時代の《任軌墓誌銘》（楷書、隸書、篆書）のような石刻資料であり、もう一つは西林昭一氏が触れていない紙上の墨跡である。前述した蔡襄の《離都帖》や伝王維《伏生授經図》後の呉説題跋などが例として挙げられる。これらの「雑体書」に混用された書体は不規則で、基本的に3～4種類の書体が混用されているのが確認できる。各作品の書法表現を見ると、個々の書家が古代文字（特に篆書、隸書、章草）を重んじていたことや、独自の美意識が窺える。趙孟頫の作品には、篆書、隸書、楷書3種類の書体を混用した例を確認することはできないが、これまで行草書だと認識されてきた作品の中に、章草体と楷書を混用した表現が確認できる。注意すべきなのは、第一章と第二章でも述べたように、趙孟頫の楷書にもしばしば行書や独草体の混用が見られる点である。趙孟頫自身の書体への認知や揮毫の際の意識などは興味深い研究課題だが、ここでは触れず今後の課題としたい。

⁴²同前掲注20、西林昭一著『中国書道文化辞典』、頁354を参照。

第四節 行草書への章草体混用の分期と画期

第一節で分類した④「今・章草混用」の《千字文草書》と⑤今草、行書、章草体を混用する作品群を中心に検討した結果、趙孟頫の「今・章草混用」表現は33歳の頃に形成され、翌年の34歳から行草書に章草体を混用するようになり、その書表現が徐々に展開していったことが明らかになった。

一、行草書への章草体混用の濫觴

現存する趙孟頫の遺品最早期の作品は行書、楷書、独草体が交じる《杜甫秋興詩》(29歳頃、上海博物館蔵)である。この時期、趙孟頫は江南に滞在しており、章草の受容もまだ見られない。しかし、33歳の時に揮毫した《千字文草書》には明瞭な章草体が見られる。「競」、「農」字の波磔がその好例である【図1】。他の草書作品との比較により、本作が趙孟頫唯一の純然たる「今・章草混用」表現を有する作品であることが判明した。

翌年に《千字文草書》の書風に非常に近い作品が見られる。《王献之保母碑》後の趙孟頫題跋(34歳、北京故宫博物院蔵)である。本作は従来より草書に分類されてきたが、よく見ると、実は⑤今草、行書、章草体3種類の書体が交じる作品だとわかる。つまり、趙孟頫における行草書への章草体の書表現は34歳の時すでに形成されていたのである。このような書風で題跋を揮毫する作例は元代までの中国書法史にはほぼ見られず、非常に稀な例だと言える。今草、行書、章草体を混用させるこの技法は、友人の石民瞻に宛てた43歳の《雨中悶坐札》まで確認できる。当時の趙孟頫の書環境、或いは趙孟頫独自の美意識に深い関わりがあるのではないだろうか。

《千字文草書》と《王献之保母碑》後の趙孟頫題跋を概観すると、以下の特徴が挙げられる【図 1 1】。

- ① 連綿字数が多い。4 文字連綿する箇所もある。
- ② 分間布白は慎重で、字形が適美である。また、章草体を多用しているため、章草風の風格が顕著である。
- ③ 起筆や紡錘型の用筆、中鋒用筆が顕著で、弾力と丸みのある線質と細かい文字内の牽糸連綿の字痕がはっきり作品に残っている。自身の技量を披露する意図かと思われる。

二、行草書への章草体混用の展開

【表 1】で示したように、趙孟頫における行草書への章草体混用の表現は尺牘に集中して展開したことがわかった。この時期以降の章法は行間が字間より大きいことは前期と同じだが、天が揃い、地は余白の美しさを意識しながら参差錯落して揮毫する様子が 30 代初期とやや異なる。結体においては、字形が大きくなり、尺牘に使われた章草体は、②の自然と今草に溶け込む章草字形が多い。大徳七年（1303）前後に揮毫された《宗陽宮帖》（無紀年、北京故宮博物院蔵）【図 1 2】などを見ると、「想」、「也」、「月」の字形は、40 代と同じく②の自然と今草に溶け込む章草字形の章草体が続けて使用されているが、「再」、「足」、「前」などの側筆の筆法が見られる。このような表現は、全体的に「筆力厚重」と高く評価されている⁴³。この書表現の由来は、碑文稿制作の応用ではないかと第一章で述べたので、ここでは詳述しない。行草書への章草体を混用させる展開期は、皇慶二年の《亡女帖》（1313、静嘉堂文

⁴³同前掲注 3、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁 53 を参照。

庫美術館蔵)や《幼女妖亡帖》(1313、静嘉堂文庫美術館蔵)まで続いた。要約すると、43歳から～60歳にかけて、行草書への章草体混用の展開には二つの特徴が見られる。一つは、章草体の収筆のハネ(波磔)が見えなくなること(潜伏化)で、もう一つは、碑文書法の投入である。

三、行草書への章草体混用の確立

56歳以降、中峰明本に宛てた尺牘群には、30代からずっと使ってきた①と②の章草体も見られるほか、章草体の収筆のハネ(波磔)が再び強調されている。最も注目すべきなのは単一文字の波磔を強調した点だが、先行研究はこの点に対する関心が浅い。この特徴を更に探求し、現存する19通の尺牘⁴⁴(趙孟頫が中峰明本に宛てた書簡)を確認したところ、《仏法帖》(60歳、静嘉堂文庫美術館蔵)、《叨位帖》(65歳、北京故宫博物院蔵)、《南還帖》(66歳、国立故宫博物院蔵)、《還山帖》(66歳、国立故宫博物院蔵)、《瘡痕帖》(69歳、国立故宫博物院蔵)の5帖がこれに当てはまり、特に《叨位帖》以降の4帖は波磔の使用が確実に定着しているように見える【図13】。この特別な章法の紙面効果についてであるが、章草体の払いの筆法を作品の中ほどに置くと章草体の度合いが薄れるにもかかわらず、かえって明瞭で色濃く見える。これは他の時期の作品には見られず、文字が非常に際だって見える表現だと言えよう。

このように、意図的に単一文字のみを使い、明瞭な章草体の波磔を作品に

⁴⁴国立故宫博物院の《呉門帖》、《俗塵帖》、《南還帖》、《醉夢帖》、《還山帖》、《丹藥帖》、《兩書帖》、《入城帖》、《塵事帖》、《山上帖》、《瘡痕帖》11通、静嘉堂文庫美術館の《承教帖》、《長兒帖》、《暫還帖》、《幼女帖》、《佛法帖》、《亡女帖》6通、北京故宫博物院の《叨位帖》1通、プリンストン大学付属美術館の《先妻帖》1通の全19通である。

入れる技法の来歴を調べると、南宋人の張孝祥（南宋・紹興二年～乾道五年、1132～1169）《涇州帖》（無紀年、上海博物館蔵）にも同様の技法が看取できることが判明した【図14】。現存する遺品から分析した結果、おそらく55歳前後にこのような技法を過眼した趙孟頫は、まず《李衍画墨竹图》後に揮毫した題跋に応用し（四書体混用）、ほぼ同じ時期に行草書法（詩翰類、尺牘類）にも応用したのではないかと推測する。ただし、趙孟頫における行草書への章草体混用の表現と張孝祥のそれと異なるのは、波磔を行末に置くのではなく、意識的に適宜な字を選び、作品の中ほどに置いた点である。作意⁴⁵でありながら、明瞭な章草体を生かす独特の章法表現は、張孝祥より一歩進展したものと捉えることができる。66歳の《南還帖》も先述した章草体混用の条件①と②を兼有する一例だが【図15】、この特徴を最もよく説明できるのは69歳に他界する前に書いた《瘡痕帖》である。【図3】で示したように、作品中の「疾」字は章草体の払いを抑えてあるのだが、次の行で「食」字を思い切り払っているのは、意図的な表現としか考えられない。この時期における行草書への章草体混用の書法表現は確立期と称する。ただし、歴代の中国書法作品、南宋以降の書人の作品にも同様な表現が看取できる点から、画期的な表現とは言えない。

中峰明本以外の人物に宛てた尺牘にはこの特徴が見出せず、中峰明本にだけこれを披露したのはなぜだろうか。これについては、趙孟頫と中峰明本の書学上の切磋琢磨ではないかと思う。趙孟頫が中峰明本に宛てた尺牘の内容を読むと、相手の健康を気遣うなどの日常的な挨拶、家庭内の問題の相談、仏教（禅宗）事情、死生観などが多く、最後の書簡の《瘡痕帖》は「略」、「報」、「中」字に涙の痕のような滲みも見られ、二人の師であり友でもある関係が

⁴⁵ 刻意、経意と同義。詳細は前掲注20、西林昭一著『中国書道文化辞典』、頁1003を参照。

よく理解できる。では、書簡を通して他の人物の書法に影響を与えた可能性はないだろうか。中峰明本の書法は「柳葉体」として世に知られており、独特な書法の来歴は章草にあるとの研究発表が見られる⁴⁶。しかし、所掲の中峰明本の書法作品《重修呉門幻住庵記》（無紀年、五島美術館蔵）【図16】などを概観すると、確かに章草体を使うような結体や筆法が看取できるが、全体的に擬古の雰囲気は薄い。現在、中峰明本が趙孟頫に宛てた尺牘は一通も確認できないが、当時、趙孟頫は当然中峰明本から尺牘をもらい、中峰明本の書法を目にしていたはずである⁴⁷。章草を30年近く臨習してきた趙孟頫は、人生の師であり、相談相手でもあった中峰明本に恩返しのつもりで、この特別な技法を披露し、自分の章草を指導も兼ねて伝えたかったのではないだろうか。尺牘を介した意思疎通は往々にして受信者と発信者二人しか知らない事情が多く、これ以上の文献資料による裏付けを提起するのは難しいが、今後も引き続き考察を深めていきたいと思う。

第五節 行草書への章草体混用の特質

ここまで、趙孟頫における行草書への章草体混用を見てきたが、その書法的特質を考える時、以下3点に帰納できる。

① 章草体を区別して揮毫する意識が高い

智永と孫過庭の草書にも章草体を混用する表現が見られる。しかし、

⁴⁶（独）勞悟達著、畢斐・殷凌雲・樓森華訳『禪師中峰明本の書法』（中国美術学院出版社、2006）、頁101～102と156を参照。また、「柳葉篆」と中峰明本書法「柳葉書」については、中田勇次郎氏の解説が詳しい。詳細は『書道全集』第17巻（平凡社、1956）、頁164～165を参照。

⁴⁷《呉門帖》（59歳、国立故宮博物院蔵）に「孟頫歸自呉門、得所惠字。」云々とあり、二人が文通していたことがわかる。図版は黃惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮寶齋出版社、2002）、頁212を参照。

その結体を見ると、先述した章草体の条件②自然に今草に溶け込んだ章草体が多いことがわかる。右上に撥ねる波磔を右下に変えた筆法は、《草書千字文》と《書譜》とともに今草の典型だとみなされてきた。趙孟頫は智永や孫過庭と同じく王羲之の正脈下に置かれたが、行草書における章草体の混用、いわば前述した二種類の章草体を混用する技法は、意識的により顕著で特徴的な章草体を他の文字と対比させており、趙孟頫の独自性が際立っている【図17】。

② 来歴と書風の変遷が明確

趙孟頫における行草書への章草体混用の技法は、南宋の張孝祥や元人の鮮于樞の作品にも看取できる。しかし、趙孟頫の場合、まず33歳に「今・章草混用」表現を有する作品が1点確認できるが、これは極めて特別な表現だったと考える。その後は行草書への章草体混用の開始から展開、確立へと徐々に変化していく軌跡が明確である。これに対し、張孝祥と鮮于樞の遺品からはその推移が判断しにくかった。この特別な表現手法は一時期潜伏したように見えるが、60歳以降、中峰明本に宛てた尺牘に集中して書表現の意識的な推移が窺え、30代初期から大きく時間をあけて、この時期にまた頻繁に用いるようになった。

③ 古意の横溢

趙孟頫が30代初めに入手したもの、または目にしたのは、《淳化閣帖》や《眠食帖》のような古典が多く、そこからの擬古により、自ずと作品に古意が醸し出されたかと思われる。その後、意図して一文字のみに章草体の特徴である波磔を用い、観者に容易に章草の時代や名品が持つ「古」または「古典」を連想させる工夫は、張孝祥の受容も考えられるが、若年時に形成された基盤による。また、その後も継続的にアンテナを高く張りめぐらさなければ、この特徴が形成されるこ

とはなかったであろう。

このような行草書と章草体の混用表現について、徐利明氏は、「康里子山（元・元貞元年～至正五年、1295～1345）很善于在章草与今草之間加以变通。他对二王書法研習有道、不僅得其法度、更可貴的是能得其隨機应变之理、所以我認為其行草書在趙孟頫与鮮于枢之上。」と趙孟頫と鮮于枢の行草書は康里巎巎より劣ると述べた⁴⁸。確かに、康里巎巎の作品は、章草と今草の混用表現が巧みに生かされた個性溢れる作品であり、その点は評価すべきだが、西川氏が言うように「概して縦長の構成を意気一すじにしまくった金属的な緊張は病的である」という批判的な見方もある⁴⁹。作品表現の自由度に関しては、趙孟頫は比較的に慎重かもしれない。時代の先端を行く趙孟頫は章草には熟練していたが、使うタイミングを過度に気遣ってしまい、字と字の間に連綿の形成が難しくなり、それに束縛された点もあるかと考える。しかし、擬古⁵⁰主義の角度から見れば、趙孟頫は書の古典の枠内にいながらも、自分の書の更なる発展を目指そうという意志が窺えるのに対し、康里巎巎はその作風を古法から遠ざけているようにも見える。また、元初三大家の趙孟頫と鮮于枢、鄧文原（南宋・宝祐六年～元・致和元年、1258～1328）のように古法を守り、後人の足がかりとなった元代初期の書人がいなければ、康里巎巎が飛躍的に「更可貴的是能得其隨機应变之理」の書風に至ることもできなかったのではないか。陶宗儀『書史会要』に「評者謂国朝以書名世者、自魏公後便及公也。」とあり、前人がすでに康里巎巎を趙孟頫の次に置く評価から見

⁴⁸同前掲注 14、徐利明「元人章草及其变体的新創意」『中国書法風格史』、頁 365 を参照。

⁴⁹西川寧「元朝の書」『定本書道全集 宋・元』10（河出出版社、1955）、頁 173 を参照。

⁵⁰擬古とはいいにしえになぞらえる。むかしのものになぞらえて詩や文などを作ることを意味する。小川環樹等編『角川新字源 改訂版』（角川書店、2004）、頁 432 を参照。

でも、このように解釈すべきではないかと考える⁵¹。

第六節 元時代及び後世の受容

先述した康里巎巎や後の楊維禎(元・元貞二年～明・洪武三年、1296～1370)の行草書への章草の筆法や、結体を混用する書表現がしばしば趙孟頫と比較されことは、先行研究でも述べられている⁵²。それに対し本章第五節で、元代初期の趙孟頫や鮮于枢が作った基盤がなければ、彼らの飛躍的な展開もあり得なかつただろうとの私見を述べた。以下、先行研究があまり触れていない書人とその作品について、趙孟頫における行草書への章草体混用の書表現を中心に考察し、趙孟頫が影響を及ぼした範囲の解明に努めたいと思う。

一、尺牘類作品

行草書への章草体混用の影響について考える際、尺牘の書表現に焦点を絞ると、興味深い現象が見えてくる。これは先学が述べていない部分である。

① 趙雍《致彦清都司札》

趙雍(元・至元二十七年頃～至正二十年頃、1290 頃～1360 頃)の書法は父趙孟頫よりきていることが文献からも確認できるが⁵³、どのように継承されたかについては、明確な知見が見られない。《致彦清都司札》(無紀年、プリンストン大学付属美術館蔵)【図 1 8】を見ると、作品

⁵¹陶宗儀『書史会要』『中国書画全書』3(上海書画出版社、2000)、頁 65 を参照。

⁵²ここでは二例だけを挙げておく。伏見冲敬『書の歴史』10 版(二玄社、1971)、頁 162、黄惇『中国書法史』元明卷(江蘇教育出版社、2002)、頁 73～77、118～120 を参照。

⁵³同前掲注 50、陶宗儀『書史会要』、頁 60 を参照。

解説にも書いてあるように、「良」字に章草の法を用いている⁵⁴。この特徴は明らかに趙孟頫が中峰明本に宛てた尺牘と同じ手法である。こうした家法継承の面から見ても、趙孟頫のこの類の作風は極めて重要で、当時頻繁に披露していたからこそ、息子の趙雍に継承されたに違いない。

② 無名氏《偽趙孟頫七札之一》

本論の最初に、《偽趙孟頫七札之一》（無紀年、北京故宮博物院蔵）【図 19】は贋作と鑑定されたことを説明したが、この作品には重要な情報が含まれている。本作の章法や字形のみならず、意識的に「食」字の波磔を強調した表現まで趙孟頫書法に近似しており、贋作とはいえ、本来の趙孟頫の作風や特徴が十分に表現されている作品として再評価すべきである。このように高度な贋作技法を有する者の背景を考えると、二つの可能性が考えられる。一つは、趙雍と同じく趙孟頫の家法を知っている者。もう一つは、趙孟頫と直接的な関わりのない者である。趙孟頫のこの技法は当時からすでに流行していたのかもしれない、家族や門下でなくても、人の目をたやすく欺けるほど立派な偽趙書者になれる者がいた可能性がないとは言えない。いずれにしても、趙孟頫の影響力の大きさが垣間見えよう。

③ 虞堪《期約帖》

虞堪（元代、生卒年不詳）の《期約帖》書簡は、約 116 文字の中に明確な章草体を 5 箇所使用している【図 20】。先行研究は「此帖書法遠師王羲之、用筆、結体保持了晋人風範。同時又受趙孟頫影響、風格勁

⁵⁴同前掲注 40、中田勇次郎、傅申編『欧米収蔵中国法書名蹟集』第 3 巻、頁 147 を参照。

健、意態優雅。」としている⁵⁵。確かに一見すると趙孟頫書法の受容が見られるが、結体、用筆の精緻さはともかく、章法的に一箇所のみでははく、ふんだんに使っている点を見ると、趙孟頫のこの書法表現本来の特徴からも遠ざかっており、視覚効果も薄くなっているように思う。

二、詩翰類作品

詩翰類作品にも趙孟頫における行草書への章草体混用の影響が見られる。ここでは元代と明代の作品から一例ずつ挙げたいと思う。

① 張紳等五家《行書詩帖卷》

『書史会要』には王東に関する資料が見当たらないが、王連起氏は「此帖書法学趙孟頫、有一定功力。」としている⁵⁶。これは的確な評価だと思う。張紳五家《行書詩帖卷》【図2 1】に収録された王東（元人、生卒年不詳）の七言律詩2首（1355、北京故宮博物院蔵）を見ると、「長」字の最後の一画は章草の筆法を使っている。更に一步進めて言うと、本作は結体や筆法のみならず、題跋を揮毫する際に、今草、行書、章草体三つの書体を混用しながら、1文字のみ章草体を強調している点は、先述した虞堪とは異なり、趙孟頫が60歳以降の行草書への章草体混用を忠実に学んでいる様子が窺える。つまり、王東と趙孟頫の直接的な関わりが不明であっても、作品から二人の書法上の関係を窺知ることが可能である。また、本作は5人による作品だが、王東の作品にだけ

⁵⁵同前掲注3、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁250を参照。

⁵⁶同前掲注3、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁251を参照。

この表現があり、この点にも注目したい。

② 文彭《書七言律詩》

次に、明人の文徵明(明・成化六年～嘉靖三十八年、1470～1559)の次子である文彭(明・弘治十一年～万暦元年、1498～1573)の書法作品を見ていきたい。文彭《書七言律詩》【図2-2】は73歳晩年の作品であり、書体は草書、あるいは狂草と呼んでもよからう。王耀庭氏は懷素(唐・開元十三年～貞元元年、725～785)の影響を受けた表現だとしている⁵⁷。確かに章法から見れば、懷素や唐代の僧籍にあった書法家たち、黄庭堅(北宋・慶暦五年～崇寧四年、1045～1105)の受容があるかもしれない。しかし、作品中に使用された書体、例えば「長」、「麓」、「花」などの収筆は明らかに章草の筆法である。懷素や黄庭堅の作品には章草の筆法を使用した作品例が見当たらない。要するに、文彭は宋代以降の書人の作品を見て、それをアレンジして自分の書に用いたに違いない。もちろん、これは明代当時の影響であるとも考えられる。例えば、父の文徵明の作《書蘭亭序》【図2-3】(89歳、国立故宫博物院蔵)にも、同じように章草の筆法を用いた「欣」、「快」が見られるので、文彭のこの書法は父から伝わったとも考えられる。しかし、章草体を作品に投入するこの手法は、趙孟頫の時にはすでにあったので、文徵明の書学来歴を考えると、趙孟頫の影響下において生じた表現の一つだと思われる。

三、題跋

⁵⁷王耀庭「帝國的回忆」『故宫文物月刊』第16卷第6期(国立故宫博物院、1998)、頁17を参照。

① 管道昇《紫竹庵図》

趙孟頫が妻の管道昇（南宋・景定三年～元・延祐六年、1262～1319）の尺牘の代筆をしていたことは、近年明らかになりつつある。例えば、《秋深帖》（55歳～56歳頃、北京故宮博物院蔵）、《二哥久出帖》（56歳頃、プリンストン大学付属美術館蔵）などは代筆であることがすでに明らかにされている⁵⁸。だが、管道昇の書法の研究はあまり進んでおらず、実際の状況はそれほど理解されていないようである。《管道昇致中峰和尚尺牘》（無紀年、国立故宮博物院蔵）の書法は趙孟頫の代筆ではなく、管道昇自身も達筆だったことがわかる。「慰」、「謝」字は王羲之書法（《淳化閣帖》）に由来するのが見て取れるが、これからより系統的な考察を進めていきたい。管道昇は絵画も得意とし、《紫竹庵図》（35歳、大和文華館蔵）を見てもその画技の巧みさがよくわかる【図24】。ここで注目したいのは《紫竹庵図》の上にある題跋で、「筆」字の最後の一面に章草の筆法が用いられている点である。この題跋の揮毫時間は元貞元年（1295）以降であり、1文字だけ章草の筆法を使ったのは偶然か否か、興味深い。管道昇独自の発想であることも考えられるが、趙孟頫の影響の可能性もある。この特徴は先述した趙孟頫や次子の趙雍の書法と同じである。趙家一族、皆がそろって章草を学び、章草体を作品に投入して、元代に一つの風潮を巻き起こそうとした様子が窺えるようにも思う。

② 祝允明《題楊季静小像賛卷》

祝允明（明・天順五年～嘉靖六年、1461～1527）の行書が趙孟頫の影

⁵⁸同前掲注5、単国強「趙孟頫信札繫年初編」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁57を参照。

響を受けていることは先行研究からも確認できる⁵⁹。確かに祝允明の書法はその作品からも趙孟頫の受容が看取できる。《題楊季静小像贊卷》（64 歳、国立故宫博物院蔵）の第八行の「比」、そして横の第九行の「咎」字は、最後の収筆全てに章草の筆法が使われている【図 2 5】。しかし、本章で検討した趙孟頫による行草書への章草体混用は、章草体を使うのは一箇所のみで、連続した行には決して使わないのが特徴でもあることから、祝允明の書法はやはり趙孟頫の章草体混用表現の本質とは異なる。つまり、時代が下って明代になると、趙孟頫の影響を受けながらも、趙孟頫本来の作意的な表現から遠ざかっていった、時代的な風格の差異が窺える。

以上で述べた事柄は、長い歴史を有する書法史上においてはごく一部の例に過ぎない。しかし、これら元代から明代中期にかけての作品群は、趙孟頫の影響力を説明するに足るものだと考える。一方、《歐陽修集古録跋尾》の巻末にある元代末期の方從義の題跋など、本格的で純然たる章草で題跋を揮毫する例も見られる。これは趙孟頫の影響なのか、あるいは別系統の書法表現なのか、この点については更なる検討が必要であり、今後の課題としたい【図 2 6】。ここでもう一度、第二章でも提起した清人の王澐の言説「自子昂興、而世間作字人無有無趙法者矣。……。蓋非只有元一代皆被子昂牢籠、明時中葉以上猶未能擺脫、文氏父子仍不免在其殼中也。」を振り返ってみたい⁶⁰。本節では、元代及び後世に及ぼした趙孟頫における行草書への章草混用の影響力を作品の性質から 3 種類に分けて検討した。その結果は王澐の言説と一致しており、王澐の観察力と見識の高さがよくわかる。これをもって本節の

⁵⁹ 傅申「祝允明問題」『海外書蹟研究』（紫禁城出版社、1987）、頁 99 と前掲注 4、黃惇「吳門四家」『中国書法史 元明卷』、頁 259 を参照。

⁶⁰ 王澐「元人墨跡」『虛舟題跋』（国立中央図書館、1970）、頁 11 を参照。

結論としたい。

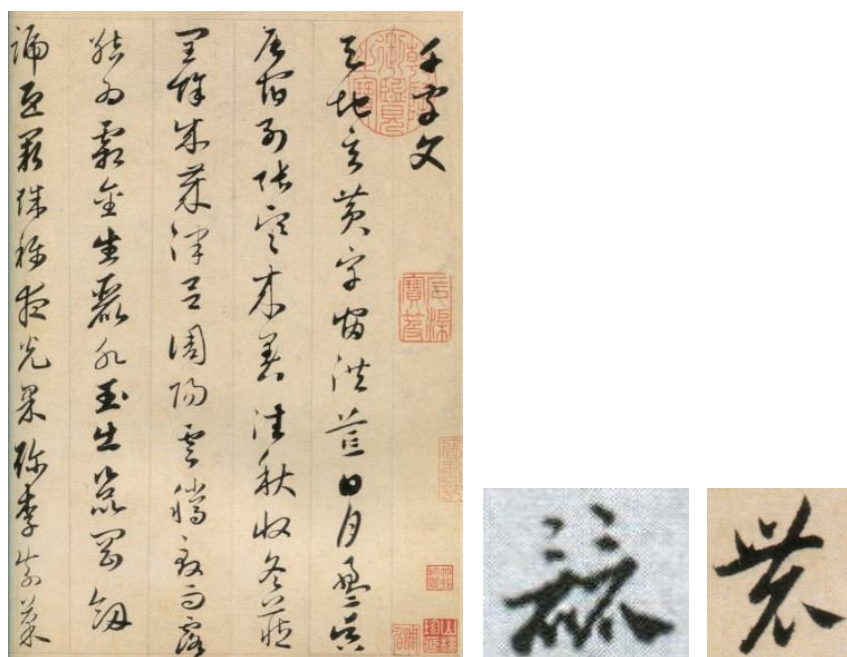
小 結

趙孟頫の草書における今草と章草体混用の書法表現は従来より関心が寄せられてきた論点であるが、全ての分析が的確とは言えない。作品中にある今草と行書、章草体を混用させた、この三者の関係についても十分に考察されているとはいいがたく、趙孟頫の作品は時系列、あるいは作品の性格によって厳密に分類されたこともないため、別種の作品が混淆され、趙孟頫の作品表現の評価すべき点が見逃されてきた感がある。

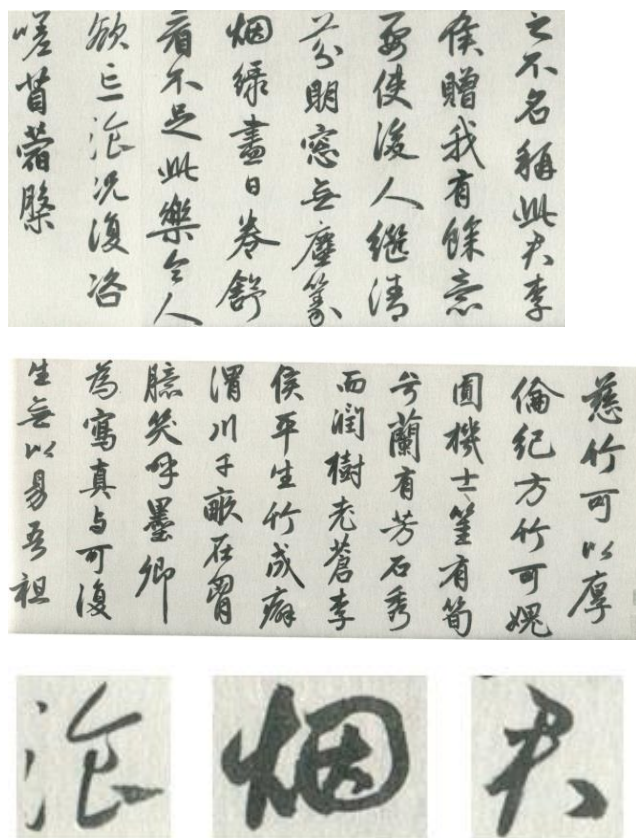
趙孟頫が33歳の時に揮毫した《千字文草書》は、「今・章草混用」の表現を有する唯一の作品であることが判明した。これは《淳化閣帖》や《豹奴帖》の受容が最も大きい理由だと考えられ、後の書法表現において重要な書学来歴となる。《王献之保母碑》後にある趙孟頫34歳の題跋や43歳に友人の石民瞻に宛てた《雨中悶坐札》は、今草と章草体、行書の混用を示す好例であり、34歳から43歳まで、行草書への章草体混用の形成期とした。それから60歳までは、行草書の尺牘を中心に、自然に今草に溶け込む章草の字形を混用させながら、碑版書法の用筆法をも投入する時期を展開期とした。60歳から69歳にかけては、中峰明本に宛てた《佛法帖》などの尺牘群に、単一文字による章草の筆法、波磔を意図的に強調する表現が看取できることに着目し、この時期を確立期と称する。このような行草書への章草体混用の書法表現は、歴代の中国書法作品、とりわけ南宋以降の書人の作品にも同様な表現が看取でき、画期とは言えないが、①章草体を区別して揮毫する意識が高い、②来歴、書風の変遷が明確、③古意の横溢という趙孟頫における行草書への章草混用の独自性を上記3点に帰納できた。

この特別な技法は一つの家学として、息子の趙雍に継承されただけではなく、趙孟頫書法の偽作者にまで模倣されるなど、その影響力の大きさが垣間見える。元代当時から明代中期書法の要所であった呉中（現蘇州市の市轄区）の書家の作品を中心に検討すると、書簡類、詩翰類、題跋類のような性格が異なる作品や狂草よりの作品でも章草体が混用されているなど、趙孟頫の影響下にあることが見て取れ、明代中期に至っても当時の書家に影響を及ぼしていたようである。

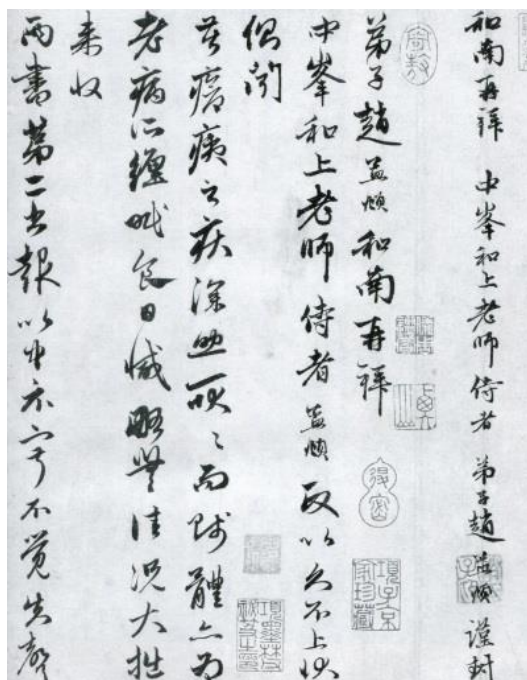
【图1】趙孟頫《千字文草書》（部分）



【图2】《李衍画墨竹图》卷末の趙孟頫題跋（部分）



【图3】趙孟頫《瘡痍帖》（部分）



【图4】西域出土殘紙



【图5】趙孟頫「大雅」印比較圖

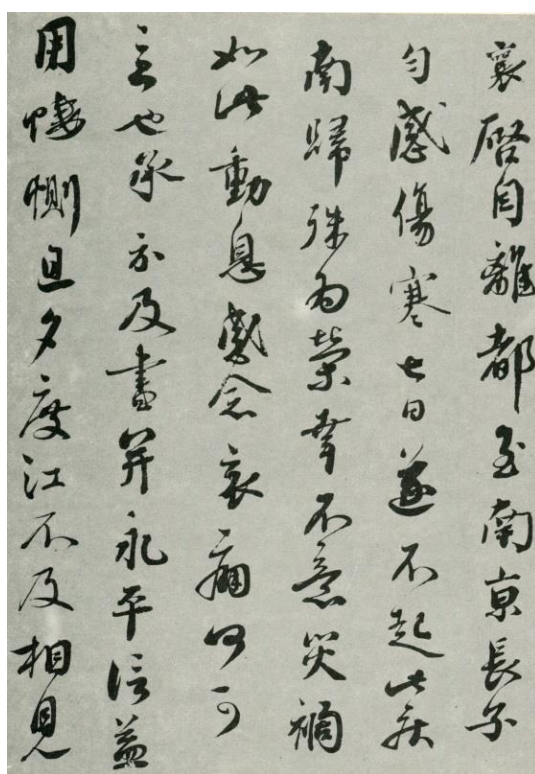


上から：《淳化閣帖》第6卷（上海博物館藏）、《洛神賦》（大徳4年本、天津博物館藏）、《行書千字文》（北京故宮博物院）、《光福寺重建塔記》（上海博物館藏）、《楊桓篆書無逸篇》（半印、北京故宮博物院藏）

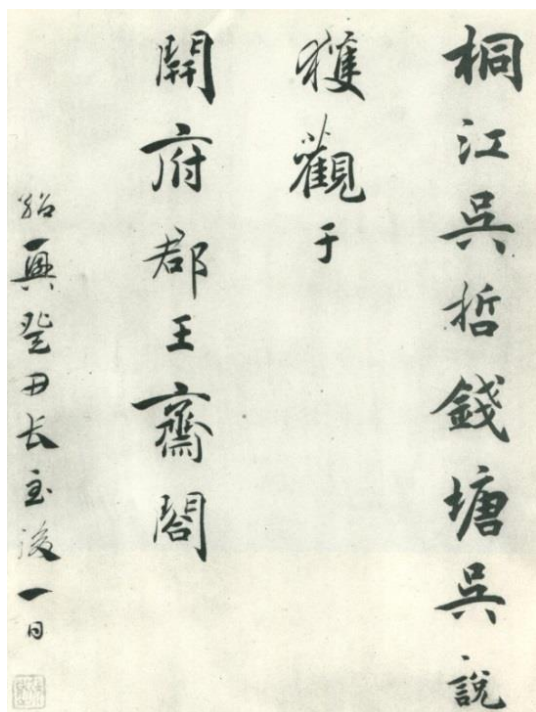
【図6】隋代の《曹植廟碑》







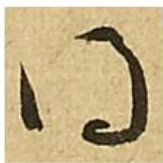

【図7】蔡襄《離都帖》（部分）



【図8】伝《王維伏生授經図》卷末の呉説題跋



【図 9】 呉説と趙孟頫の書法的対照図表

	呉説《上啓明善帖》	趙孟頫《致希魏判簿帖》
右回旋		
宣		
得		

【図 1 0】《定武蘭亭帖》の呉説題跋

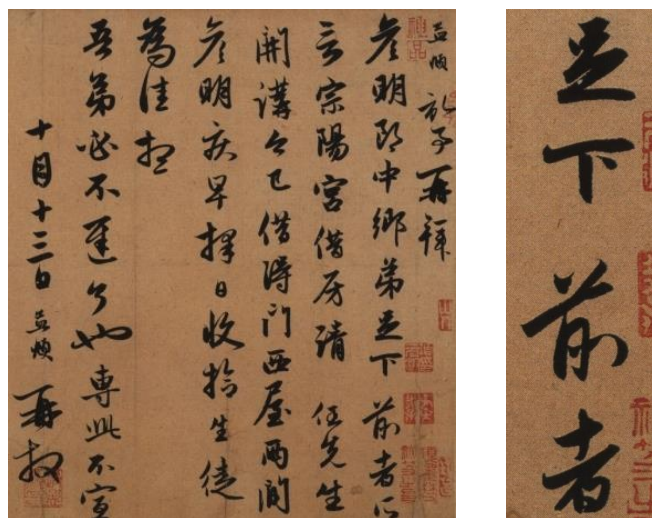


【図1 1】《千字文草書》の特徴

章法： 結体： 用筆：



【図1 2】趙孟頫《宗陽宮帖》（部分）

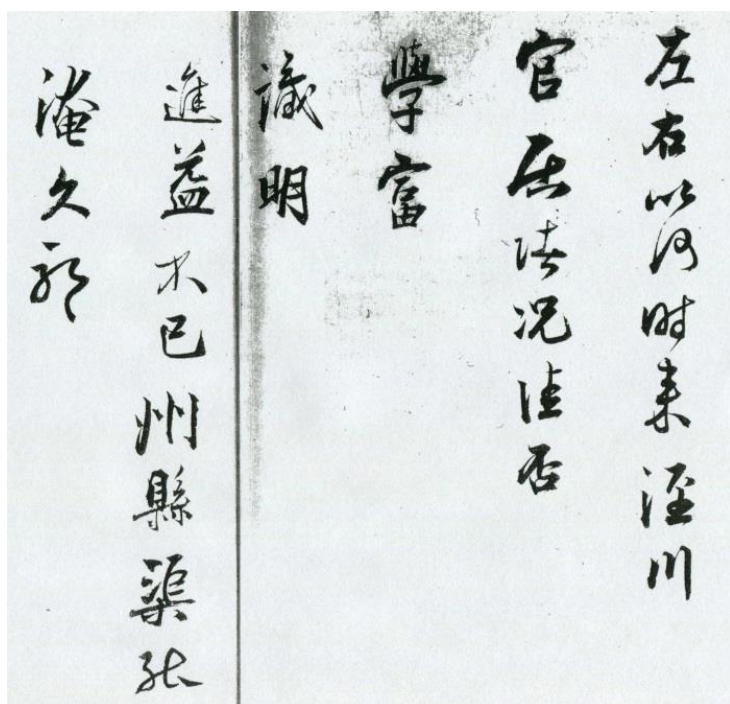


【図1 3】行草書への章草体混用の確立

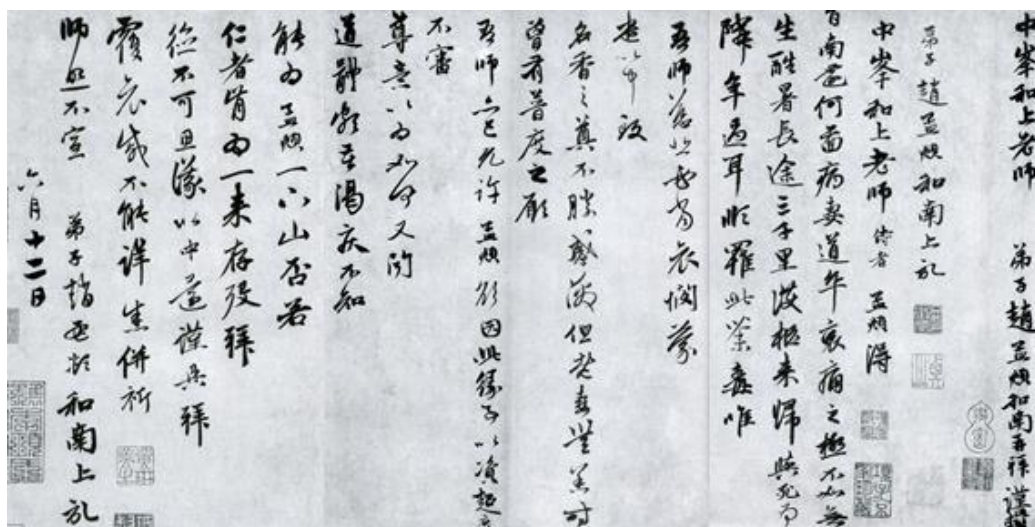


左から：《佛法帖》、《叨位帖》、《南還帖》、《還山帖》、《瘡痕帖》

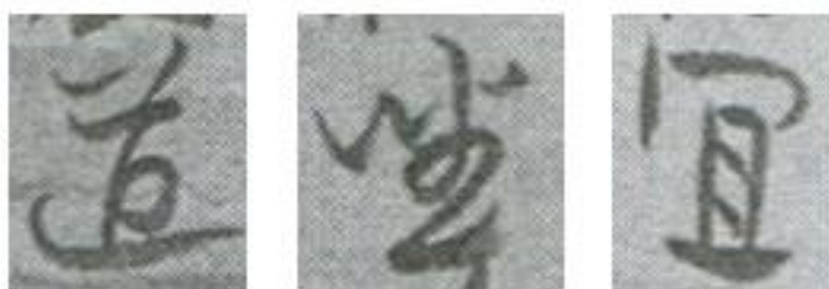
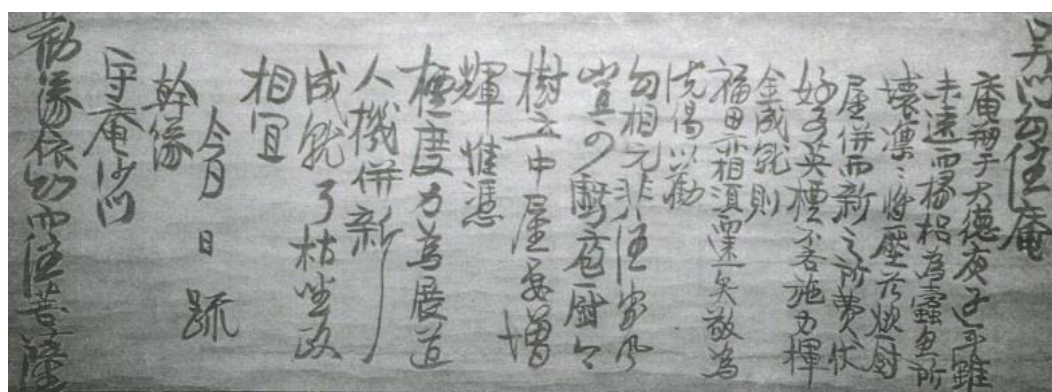
【图 1 4】張孝祥《涇州帖》（部分）



【图 1 5】趙孟頫《南還帖》



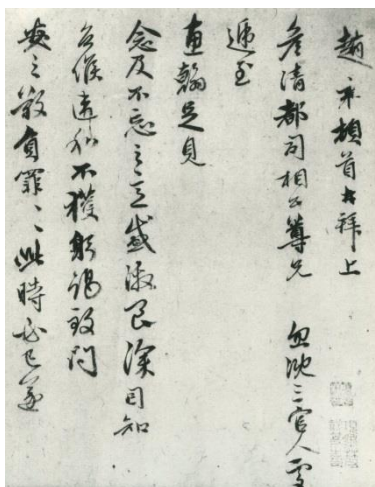
【図 1 6】 中峰明本《重修吳門幻住庵記》



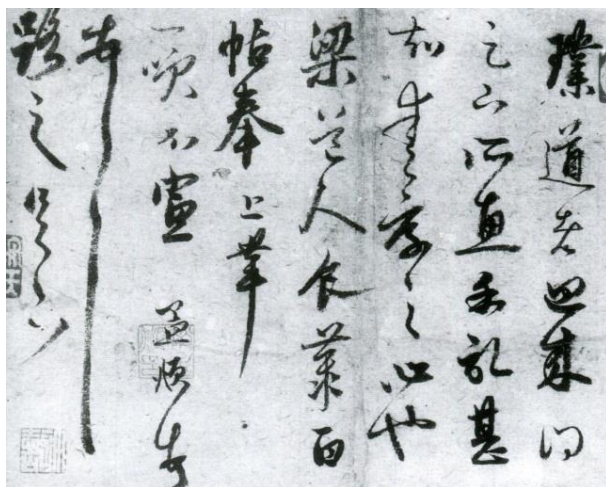
【図 1 7】 智永と孫過庭、趙孟頫の書法的対照図表

		口	之	散
		結体（筆法）		筆法
智永	今草より			
孫過庭				
		結体（筆法）		筆法
趙孟頫	章草より			

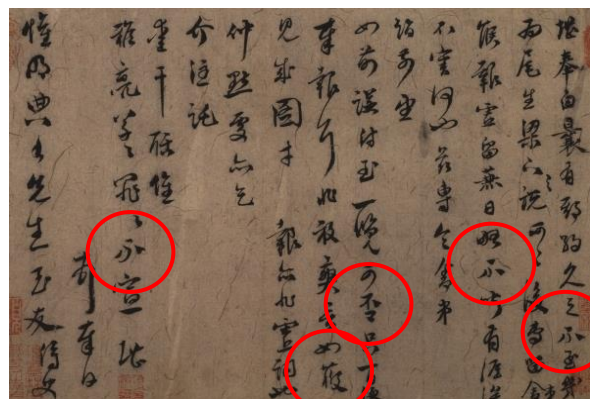
【图 1 8】赵雍《致彦清都司札》（部分）



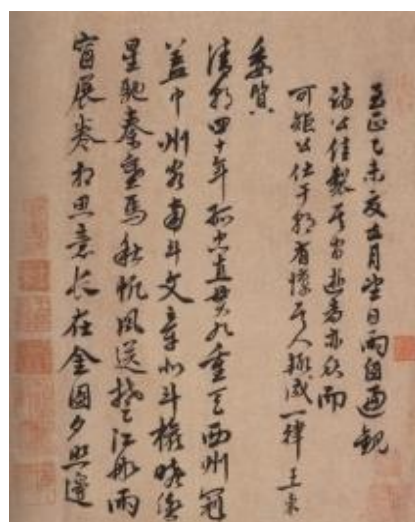
【图 1 9】《偽趙孟頫七札之一》



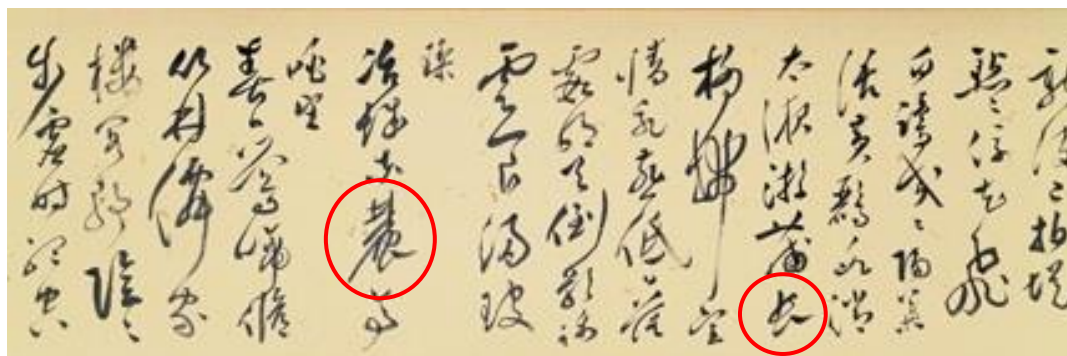
【图 2 0】虞堪《期約帖》



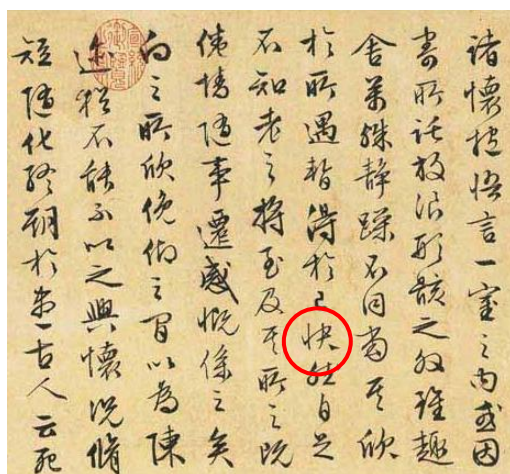
【图 2 1】張紳等五家《行書詩帖卷》（部分）



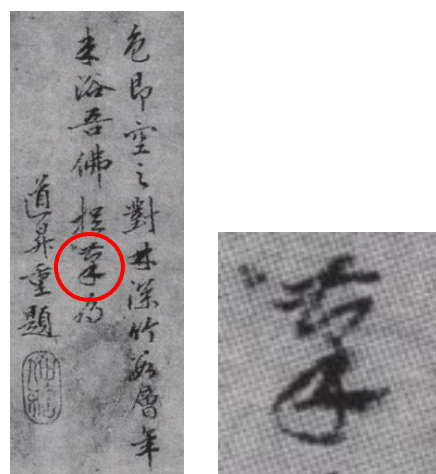
【图 2 2】文彭《書七言律詩》（部分）



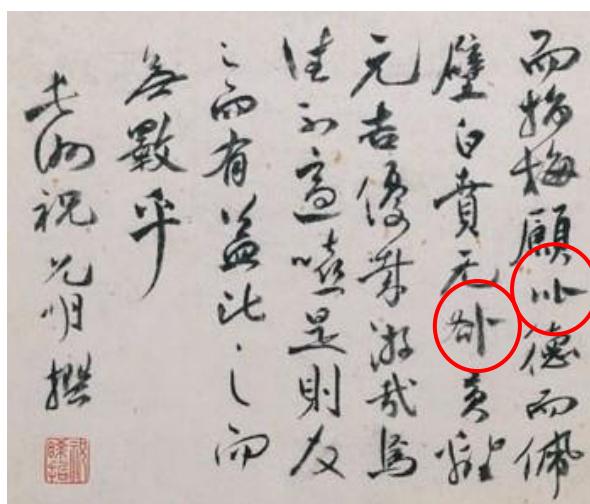
【图 2 3】文徵明《書蘭亭序》（部分）



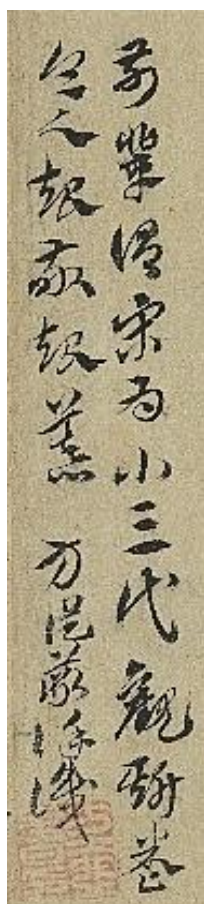
【图 2 4】《紫竹庵圖》管道昇二跋



【图 2 5】祝允明《題楊季靜小像贊卷》（部分）



【图26】方從義跋《歐陽修集古錄跋尾》



【表 1】 趙孟頫における行草書への章草体混用作品

年号	西暦	作品名
至元二十三年	1286	千字文草書卷① (上海博物館蔵) (今草、章草)
至元二十四年	1287	跋王獻之保母碑② (北京故宮博物院蔵) (行書、今草、章草)
元貞元年	1295	許惠碧盞札 (③、以下同じ) (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
元貞二年	1296	不聞動靜札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
元貞二年	1296	雨中悶坐札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
元貞二年	1296	雨中札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
元貞二年	1296	令弟文書札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
元貞二年	1296	翡翠石札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
元貞二年	1296	厚貺札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
元貞二年	1296	煬發於鬢札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
大徳元年	1297	遠寄鹿肉札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
大徳元年	1297	便過徳清札 (上海博物館蔵) (行書、今草、章草)
江浙任上	1299 ～1309	惠竹帖 (台灣陳氏蔵) (行書、今草、章草)
大徳八、九年	1304 ～1305	宗陽宮帖 (北京故宮博物院蔵) (行書、今草、章草)
約大徳九年前	～1305	遼遠帖 (北京故宮博物院蔵) (行書、今草、楷書)
大徳十年	1306	入城帖 (北京故宮博物院蔵) (行書、今草、章草)

約大德十年	1306	国寶山長帖 (北京故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
至大二年	1309	承教帖 (靜嘉堂文庫美術館藏) (行書、今草、章草)
至大三年	1310	久疏上狀帖 (北京故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
至大四年	1311	長兒帖 (靜嘉堂文庫美術館藏) (行書、今草、章草)
皇慶元年	1312	吳門帖 (國立故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
皇慶二年	1313	得旨暫還帖 (靜嘉堂文庫美術館藏) (行書、今草、章草)
皇慶二年	1313	幼女夭亡帖 (靜嘉堂文庫美術館藏) (行書、今草、章草)
皇慶二年	1313	佛法帖 (靜嘉堂文庫美術館藏) (行書、今草、章草)
皇慶二年	1313	亡女帖 (靜嘉堂文庫美術館藏) (行書、今草、章草)
延祐五年	1318	叨位帖 (北京故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
延祐六年	1319	俗塵帖 (國立故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
延祐六年	1319	醉夢帖 (國立故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
延祐六年	1319	山上帖 (國立故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
延祐六年	1319	南還帖 (國立故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
延祐六年	1319	還山帖 (國立故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
至治二年	1322	瘡痕帖 (國立故宮博物院藏) (行書、今草、章草)
計	32	①臨書1点、②題跋1点、③尺牘30点

【表2】混用される章草体の条件

	八月十日帖	急就章	月儀帖	豹奴帖	閣帖王書	十七帖
払い						
之						
国構え						
月						
迄						
愛						
慰						
方						
也						
君						

図版出典

【図 1】

…王連起主編『中国法書全集』9（文物出版社、2011）、頁 128。

【図 2】

…中田勇次郎、傅申編集『欧米収蔵中国名蹟集』第 3 卷（中央公論社、1981）、
頁 48～49。

【図 3】

…黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（栄宝齋出版社、2002）、頁
238。

【図 4】

…社団法人書芸文化院『西域出土の木簡と残紙』（社団法人書芸文化院、1962）、
頁 49。

【図 5】

…筆者作成。

【図 6】

…秦公主編『中国石刻大観』資料篇 6（株式会社同朋社・中国展望出版社、
1992）、頁 25。

【図 7】

…曹宝麟主編『中国書法全集 蔡襄』32（栄宝齋出版社、1995）、頁 115。

【図 8】

…河出孝雄『定本書道全集』第 10 卷（河出書房、1955）、頁 82。

【図 9】

…筆者作成

【図 1 0】

…同前掲【図 8】、河出孝雄『定本書道全集』第 10 卷、頁 84。

【図 1 1】

…筆者作成

【図 1 2】

…王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』(上海科学技術出版社、商務印書館 (香港)、2001)、頁 53。

【図 1 3】

…筆者作成

【図 1 4】

…同朋舎、文物出版社編『中国真蹟大観』宋・金 (同朋社、1995)、頁 110～111。

【図 1 5】

…黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43 (荣宝齋出版社、2002)、頁 220～222。

【図 1 6】

…(独) 勞悟達著、畢斐、殷凌雲、樓森華訳『禪師中峰明本の書法』(中国美术学院出版社、2006)、図 50。

【図 1 7】

…筆者作成

【図 1 8】

…同前掲【図 2】、中田勇次郎、傅申編集『欧米収蔵中国名蹟集』第 3 卷、頁 62。

【図 1 9】

…同前掲【図 1 5】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 67。

【図 2 0】

…同前掲【図 1 2】、王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』、
頁 250。

【図 2 1】

…同前掲【図 1 2】、王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』、
頁 253。

【図 2 2】

…同院編纂『故宮歷代法書全集』第 4 冊（国立故宮博物院、1976）、頁 111。

【図 2 3】

…同前掲【図 2 2】、同院編纂『故宮歷代法書全集』第 6 冊、頁 48～49。

【図 2 4】

…同社編『大和文華館所藏品』8、絵画・書蹟〔中国・朝鮮篇〕（大和文華館、
1988）、頁 16。

【図 2 5】

…何炎泉主編『毫端万象一祝允明書法特展』（国立故宮博物院、2013）、頁。

【図 2 6】

…同院編纂『故宮歷代法書全集』第 2 冊（国立故宮博物院、1976）、頁 43。

第四章 趙孟頫書法に見られる四書体混用

序

序章で述べたように、趙孟頫書法の分期は、古くより明人の宋濂や清人の吳榮光の三期変遷の旧定説に従い、時期区分に年代の違いがあるにせよ、大まかに分類されている点は現在も同様である。その一方で、この分期説に異論を唱える研究者もあり、「ある時期、一つの色彩に没頭するといった個性の強さや自己主張のはげしさはなく、むしろ常に全体的なバランス感覚とマルチ人間的“全才”にあると思います。」という見方もあるが、その根拠は乏しく、やや偏った見解のように思える¹。先学の意見は尊重するが、まず論拠が明らかにされておらず、妥当な評価だとは言いがたい。有紀年の作品ではなく、無紀年で書風変遷の法則の掴みにくい作品（非典型作品）がいざ目の前に置かれた際、個々の作品を解釈するのみでは、恣意的なものになりがちなことであり、この点は批判されるべきであろう。趙孟頫の遺品は数量が多く、書風も多種多様であるにもかかわらず、系統的に整理されていないのがその原因の一つだと思われる。また、現在確認できる趙孟頫の遺品は真偽が明らかになっていないものも多く、現時点では全般的に厳密な基準を設けた検討・研究が充分に行われているとは言えず、趙孟頫書法の様式論研究の行き詰まりを感じなくもない。

こうした問題意識をもとに、本章では第三章で考察した趙孟頫における行草書への章草体混用という視点から引き続き検討をし、行草書への章草体、

¹杭柏樹「趙子昂の書のバランス感覚」『中国法書ガイド』49（二玄社、1989）、頁 32～33 を参照。

楷書といった四書体混用の分期と画期を示すことを主要な目的として検証していきたい。

本章で焦点を当てる《栳叔夜与山巨源絶交書卷》(66 歳、北京故宫博物院蔵。以下《北京故宫本》と略す)は趙孟頫最晩年の名品の一つとして世に知られているが、本作は他の趙孟頫書法の表現とは異なり、作品中に行書、今草書、章草体、楷書四書体が混用されている。これはかねてから関心が寄せられてきた論点の一つである。例えば、王連起氏はこの作品について、趙孟頫が本文の内容に共感し、内心の矛盾が引き起こされた後に揮毫した作品ではないかと推測している²。しかしながら、《北京故宫本》の書法は、趙孟頫の書法及び中国書法史における位置付けやその重要性について提起している先行研究は見当たらない。

ここで本章とも深く関わる大きな問題について述べておきたい。仮に宋濂以降の先行研究の分期説が適切だとして、《北京故宫本》を先学による分期に従って第3期あるいは第4期に分類するならば、李邕書法に近似していることが必須となる。しかし、《北京故宫本》に見られる章草体の混用は李邕書法には皆無の表現である。この点は一体どう解釈すべきなのか。偶発的な例外の一つと見るべきであろうか。また、本作は王連起氏がいうように情緒的な背景から生まれたものに過ぎないのか、書法的な理由(書表現の手法の一つ)はないのかについても疑問を抱かざるを得ない。よって、この最晩年に揮毫された《北京故宫本》の書法の独自性と書法上の意義を解明することをも目的とし、趙孟頫最晩年の書風研究に一石を投じたい³。以下の順に論述を行い

²王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』(上海科学技術出版社、商務印書館(香港)、2001)、頁124を参照。

³趙孟頫晩年の書法を検討した王連起氏は、《北京故宫本》を検討対象の一つとして取り上げたが、《方外交疏》(68歳、天津博物館蔵)に考察の重心を置いている。詳細は王連起「從《方外交疏》看趙孟頫晩年的書風」『書法叢刊』

たいと思う。

一、行書、今草書、章草体、楷書の四書体混用を有する趙孟頫の遺作を網羅し、書法的表現の変遷をたどりながら、分期を示したい。

二、趙孟頫書法の遺品をはじめとして、法帖資料、文献資料の3方面より、伝存する多様な趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》とされる作品群に焦点を当て、これら全ての相互関係およびこれらが全部趙孟頫の真跡と言えるのか否かを明らかにすることによって、中国書法史における《北京故宫本》の位置付けをしたい。

三、《勉学賦并序》の法帖（68歳、個人蔵）⁴を提示し、《北京故宫本》は偶然に生まれた、情緒的な試行だったのか⁵、最晩年において趙孟頫の四書体混用という表現手法の更なる展開だった可能性はないかについて論じたい。一から三までを受け、《北京故宫本》と《勉学賦并序》帖の書表現は、中国書法史においても趙孟頫の書法においても、もう一つの画期を証明したい。

四、《北京故宫本》の書表現を基準に、これまで十分に検討されたことのない《高峰和尚行狀》（無紀年、北京故宫博物院蔵）の編年、分期について私見を述べたい。

第17輯（文物出版社、1989）、頁20～33を参照。しかし、この2作の書法表現は全く異なるものであり、同じ時期に分類した点については疑問を感じざるを得ない。よって、本章では趙孟頫最晩年の書風に焦点を絞り、新たな分期、または新たな表現手法の試行だった可能性の有無について考察したい。

⁴拙文「法帖所収の趙孟頫書法の編年研究：《宝雪斎趙帖》を中心に」『芸術学研究』第17号（筑波大学大学院人間総合科学研究科、2012）、頁79～88を参照。本論文の第五章はそれを基に加筆したものである。

⁵王連起氏は「此帖不是常見的雍容虛和、秀逸適媚面貌、而是頗為激越迅疾、縱放跌宕。与文章的憤激不平、尖銳深刻相一致。」とし、《北京故宫本》は趙孟頫が文章の内容に共感したことによって書風に大きな変化が生じたと述べている。詳細は前掲注3、王連起「從《方外交疏》看趙孟頫晚年的書風」『書法叢刊』第17輯、頁23を参照。

第一節 四書体混用の分期

本節では、まず四書体混用の濫觴と展開、確立について整理したい。

一、四書体混用の濫觴

行草書と章草体、楷書を混用させた最早期の作品は《与右之手札》⁶（35歳、日本個人蔵）である【図1】。また、その3年後に書かれた《元趙孟頫致希魏判簿尺牘》⁷（38歳、国立故宮博物院蔵）【図2】にも同様の書表現が見られる。《元趙孟頫致希魏判簿尺牘》にある「勝」字は明らかに章草の収筆の特徴を有し、《与右之手札》一よりも更にはっきりとした章草体となっている。一般に書簡は早書きされることが多い。そのせいか二通ともに行草書の要素が多く、章草体や楷書はあまり使用されていない。例えば、《元趙孟頫致希魏判簿尺牘》の「曹」、「魏」は一画一画が独立した楷書で、「勝」の収筆は章草の筆法だが、その他は行書と独草体、二文字連綿の今草がほとんどである。この時期、つまり趙孟頫が35歳～38歳の間に、四書体混用の書法表現を用いるようになっていたと考えられる。章草受容の背景がその要因であり、この点についてはすでに第三章で述べた。全体的には、書体の混用を殊更意識していたとは言えないだろうが、4種類の書体を混用して揮毫していたことは確実である【表1】。

⁶本作の説明と編年は、西川寧「趙子昂の二群の尺牘」『西川寧著作集』第二卷（二玄社、1991）、頁238～278を参照。

⁷本作の説明と編年は、単国強「趙孟頫信札初編」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（栄宝齋出版社、2002）、頁51～63を参照。

二、四書体混用の展開

第一期に引き続き、その後も行草書を中心に楷書と章草体を混用する作品が多く見られる。また、書体の混用は書簡だけではなく、文字数の多い詩翰類の作品にも見られるようになり、徐々に一つのパターンが形成されていったようで、この時期を展開期とする。作品例としては、《帰去来辞》（44 歳、上海博物館蔵）【図 3】や《行書赤壁二賦冊》（48 歳、国立故宫博物院蔵）、《吳興賦卷》（49 歳、浙江省博物館蔵）などが挙げられる。《赤壁賦》や《帰去来辞》は蘇軾（北宋・景祐四年～建中靖国元年、1037～1101）が揮毫した肉筆の作品として世に残されている⁸。ただし、趙孟頫によるこの 2 作はいずれも臨書ではなく、独自の書風（自運）で揮毫されたものである。

この時期における四書体混用の特徴は、第三章第二節で検討した行草書への章草混用の第二期と同じく、章草体の字形が多く混用されているが、何らかの理由で章草の特徴である収筆の払い（波磔）がはっきりと認識できなくなっている点にある【表 2】。これらの作品から趙孟頫が章草の字形に熟達していたのはよくわかるが、格別大胆な表現は見られず、慎重に筆を運んでいる点が興味深い。その背後には、日々公文書を執筆する役人生活の影響なのか、あるいは独自の美意識に基づいて保守的な作品が生まれたのかなど、いくつかの要因が考えられる。こうした保守的とも言える表現が見られる作風については、決定的な判断材料、つまり文献の裏づけが無いため、今後更な

⁸この 2 点はともに国立故宫博物院の所蔵品である。《赤壁賦》の図版は国立故宫博物院編輯委員会編輯『赤壁賦書画特展』（国立故宫博物院、1984）、頁 11～12 を参照。なお、《帰去来辞》は真偽二説ある。真跡とするのは国立故宫博物院編輯委員会編輯『淵明逸致特展図録』（国立故宫博物院、1988）、頁 112 を参照。後世による倣作とするのは：
http://painting.npm.gov.tw/npm_public/System/View.jsp?ObjectID=2761&type=1 を参照。

る論拠の強化を課題としたい⁹。

三、四書体混用の確立

55 歳の作品から、1 文字のみ章草体の波磔を顕著に表し、四書体を交えて揮毫した作品が確認できる。それは第三章で取り上げた《李衍画墨竹图》巻末にある趙孟頫の跋文である。本作から四書体混用の場は書簡類から詩翰類へと移ったばかりではなく、更には題跋類にも用いるようになったことがわかる。そして、第 1 期の《元趙孟頫致希魏判簿尺牘》と同じように、作品中に 1 文字のみ章草体の①で、明瞭な収筆の波磔を使う表現が復活し、最晩年まで続いており、すでに定着しているように見て取れる。例えば、《万年歡曲》（61 歳、北京故宮博物院蔵）【図 4】、《酒徳頌》（63 歳、北京故宮博物院蔵）【図 5】が挙げられる。こうした事実に基づき、四書体混用は 55 歳以降に確立されたものとし、この時期を確立期とする。第三章と第四章を併せて見ると、55 歳以降、趙孟頫の章草体の応用が全面的によみがえった感がある。

この時期から四書体混用に見られる表現手法の来歴をたどるのは困難だが、第三章で考察したとおり、30 代初期に章草を習っていたこととその後もアンテナを高く張り続けたことと大きく関係しているものと思われる。趙孟頫書といわれる《臨黄庭經》後、元人の欧陽玄（元・至元二十年～至正十七年、1283～1357）の題跋（北京故宮博物院蔵）【図 6】もそれを知るための手がか

⁹ 《行書二贊二詩卷》（約 44 歳、北京故宮博物院蔵）は趙孟頫が江南に戻った時に揮毫したものである。本作は狂草書に近く、趙孟頫の遺品の中では非常に稀な作品である。巻末の款識によると、酩酊状態で揮毫したものだとわかる。そのため、他の行書作品と大きく異なるのであろう。おそらく趙孟頫も自由奔放で斬新な書風を試みたものの、結局は保守的な表現の道を選び、それが後に独自の書として開花したのであろう。

りの一つであり、文献の補助資料として有用である¹⁰。欧陽玄の跋文には「…趙魏公學魏晉書歷年、殆徧諸體。此帖不雜他法 蓋佳製也。至正六年(1346)九月十一日。龔郡歐陽玄跋。」とある。つまり、特定の魏晉の書人や法帖に私淑してその書表現を学んだか否かは不明だが、長期に渡って魏晉時代の諸家の書法（書人の体でも言える）を臨池・習熟した結果、その作品には多くの書体が交じり合うようになったと解釈する。しかし、この欧陽玄が目にした《臨黃庭經》は他者の書体が交じっていなかったため、「蓋佳製也」と賞賛されたのである。欧陽玄は多種類の書体が交じる趙孟頫の作品を実際にその目で見ていたからこそ、このような評価が下せたのであろう。また、当時はそれほど珍しい書表現ではなかったとも推測できる。なぜなら、欧陽玄が見たと思われる趙孟頫が3～4種類の書体を混用した作品の多くが、現代の我々が見ている作品と同じはずだからである。思うに、欧陽玄が言う「魏晉書」とは、《淳化閣帖》、《十七帖》のような古典である可能性が最も高い。《淳化閣帖》には作品ごとに楷書、行書、章草、行草書がそろっており、《十七帖》は行草の名品である（一部の書簡に章草体が混用されている）。作品を揮毫する際、自身の書表現にとってこれら古典の名作は格好の素材だったに違いない。この点は趙孟頫の作品に《淳化閣帖》または《十七帖》と同じ筆法や結体の文字があることから証明できる。もし仮に王羲之《遠宦帖》（無紀年、国立故宫博物院蔵）の内容に楷書の書体で書かれた文字があったとすれば、現在の我々が見ても趙孟頫の書法の来歴は一目瞭然であったことだろう。

55歳以降は四書体混用の確立期であるが、趙孟頫はこれに留まらず、最晩年の作品にも新たな展開による試行が見られる。その端緒は前述した《北京故宫本》に見られる【図7】。問題は、伝存する趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶

¹⁰同前掲注2、王連起主編『故宫博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁74を参照。

交書》が《北京故宮本》1 点のみではないことで、まず先に数ある《嵇叔夜与山巨源絶交書》の真偽や、相互の関係を整理しておく必要がある。これら遺品群の《嵇叔夜与山巨源絶交書》と《北京故宮本》の関係を論証することは、四書体混用の再展開における《北京故宮本》の位置づけを理解することにも繋がると考える。

第二節 四書体混用の画期

以下ではまず、趙孟頫と関係があり、現存する多数の《嵇叔夜与山巨源絶交書》群を確認してから、《北京故宮本》の位置を示したい。

一、多様な《嵇叔夜与山巨源絶交書》

歴代の著録を確認したところ、《孫承沢藏本》、《頤庵文選著録本》、《范半醒藏本》、《趙子俊題識本》、《平湖高氏緑絹本》、《石渠宝笈三編本》と、6 種類の《嵇叔夜与山巨源絶交書》が現存するが、肉筆の作品は《平湖高氏緑絹本》（《北京故宮本》）と《石渠宝笈三編本》（以下《台北故宮本》と略す）しか残されていない【表 3】。その他の 4 本は未見のため、これについては今後の課題としたい。

法帖は、《宝雪斎趙帖本》と《戲鴻堂法帖本》、《三希堂法帖本》の 3 種類が確認できる。《宝雪斎趙帖本》は《北京故宮本》唯一の拓本である。そして、《宝雪斎趙帖本》と《三希堂法帖本》とは別系統であることは別稿で論じた¹¹。新たな資料である《戲鴻堂法帖本》は、《北京海士徳国際拍卖会本》及び《汪

¹¹同前掲注 4、拙文「法帖所収の趙孟頫書法の編年研究：《宝雪斎趙帖》を中心に」『芸術学研究』第 17 号、頁 82 を参照。

由敦臨本》と比較したところ、字形は大同小異だと言え、3 法帖とも同じく本文中段ほどの「人倫有礼」から書き出した残巻で、この3作の関係が最も近いと判断できる【図8】。

2点の墨跡の遺品では、《北京故宮本》が従来真跡とされているが、管見の限り《台北故宮本》は未検討、未公開の新資料である。他に《北京海士徳国際拍賣会本》¹²と清人の汪由敦（清・康熙三十一年～乾隆二十八年、1692～1758）による《清汪由敦書法 卷 臨趙孟頫書趙榮祿写絶交書》（無紀年、国立故宮博物院蔵、以下《汪由敦臨本》と略す）が確認できる¹³。ただし、《北京海士徳国際拍賣会本》と《汪由敦臨本》2作は共に残巻であり、趙孟頫書法との直接の関係は判断しがたいので、ここでは取り上げないこととする。

これら多様な趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》が残っているということは、乾隆帝の言うように「想孟頫当時愛康此書、再三泚筆。亦如虞世南謂王子敬好写洛神。人間合有数本、毋庸作分別相也。」¹⁴だったのかもしれない。ただし、趙孟頫が作品を揮毫する際、自分の好みで文章を選別したことも充分考えられるが、全般的に考察した結果、これらの作品は真贋が混じり合っており、《北京故宮本》以外は、趙孟頫書法の影響下の産物と解釈したほうがより適切かもしれない。

二、《北京故宮本》の位置

¹² 『首届芸術品拍卖会 中国古代書画』（北京海士徳国際拍賣有限公司、2010）、ロット番号440を参照。

¹³ 《汪由敦臨本》も未公開の資料で、基本資料については：
http://painting.npm.gov.tw/npm_public/System/View.jsp?ObjectID=30428&type=1 を参照。

¹⁴ 同前掲注4、拙文「法帖所収の趙孟頫書法の編年研究：《宝雪斎趙帖》を中心に」『芸術学研究』第17号、頁82を参照。

《北京故宮本》は卷前の文彭(明・弘治十一年～万暦元年、1498～1573)が直筆した隸書の引首及び卷上の収蔵印記によれば、制作年代は明代中期まで遡ることができる。先行研究では特に検証することなく趙孟頫の真跡とされているが、その理由は明記されていない。しかし、王連起氏は「此帖書法与趙書其他作品似有区别。」と、他作との違いを指摘しており¹⁵、こうした作品が生まれた要因や背景を深く論ずる必要があるのではないかと思う。本節ではまず趙孟頫が《北京故宮本》を揮毫した理由について私見を述べたい。次に、《北京故宮本》を真跡とした先行研究の判断は妥当であったかについて、以下、書法面を中心に考察していきたいと思う。

(一)、《北京故宮本》の体裁と書写内容

まず、《北京故宮本》についての基本資料を紹介したい。下記の資料は『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』¹⁶と『徐邦達集 五』¹⁷を基に筆者が加筆したものである。

1、寸法：縦 21.8、横 254.7 センチ（継ぎ目が一箇所ある）

2、材質：緑絹本。烏絲欄の罫線入り

3、引首と題跋：文彭引首「松雪真跡」。(清) 乾隆帝(曹文植奉勅敬書)

と陳廷敬、高士奇三人の題跋落款：延祐六年(1319) 九月望日吳興趙孟頫書

4、文字の大きさ：約 1.5 センチ平方

5、脱字：教養子孫。時与親旧叙闊、陳説平生。濁酒一杯、弹琴一曲、志

¹⁵同前掲注 2、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁 124 を参照。

¹⁶同前掲注 2、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁 124 を参照。

¹⁷徐邦達著、故宮博物院編『徐邦達集 五』古書画過眼要録・元明清書法：1 (紫禁城出版社、2008)、頁 71 を参照。

願畢矣。足下若鵬之不置、不過欲為官得人、以益時用耳。足下旧知吾潦倒羸疏、不切事情、自惟亦皆不如今日之賢能也。若以俗人皆喜¹⁸。

6、揮毫の内容と理由：文章の内容は書き出しの通りである。題名は「嵇叔夜与山巨源絶交書卷」、嵇康（魏・黄初五年～景元三年、224～262頃）の文章を書写したものである。落款を見ると、人に請われて揮毫したものではないようである。王連起氏は趙孟頫が生きた時代の社会的背景、仕官歴、内心の矛盾などから答えを探すべきだと示唆している¹⁹。現存する趙孟頫の遺品は、竹林七賢の劉伶（魏・黄初二年頃～晋・永康元年、221頃～300）の文章を書写した《酒徳頌》や嵇康の《琴賦》、《北京故宮本》の計3点が確認できる。また、『松雪斎集』を見ると、趙孟頫本人が書いた詩翰「修竹賦」に「七賢同調、六逸斉踪、良有以也。」とあり、自身の詩文で竹林七賢に触れている²⁰。一方で、南宋の高宗も嵇康が著した《養生論》を抜粋し、真・草書並列の《嵇康養生論》（無紀年、上海博物館蔵）肉筆の作品を残している²¹。偶然かもしれないが、宋高宗の趙構、南宋皇室の後裔である趙孟頫がともに竹林七賢、あるいは嵇康の文章を愛好し、特にそれを選んで揮毫したのは興味深い。

¹⁸対照の底本は嵇康『嵇中散集』第二卷、王雲五主編『国学基本叢書四百種』262（台湾商務印書館、1968）、頁16～19とした。

¹⁹同前掲注2、王連起主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁23を参照。

²⁰趙孟頫著、黄天美点校「修竹賦」『松雪斎集』（西泠印社出版社、2010）、頁6を参照。

²¹肉筆の収蔵先の資料は<http://big5.china.com.cn/chinese/CU-c/136760.htm>を参照。法帖は《三希堂法帖》に収録されている。詳細は西林昭一著『中国書道文化辞典』（柳原出版社、2009）、頁280を参照。

(二)、《北京故宮本》の書体混用の検証

ここでは、《北京故宮本》に見られる書体の混用とその理由、特徴などについて記す。

1、書体混用の状況

本作は約 1440 文字あり、字母数は約 580 個ある。使用されている書体は今草、章草体、楷書、行書の 4 種類あり、その内訳は【表 4】の通りである。以下、書体別に見ていきたい。

(1)、今草：

趙孟頫の今草についてだが、40 歳代以前の作品には 3、4 文字の連綿が見られる。これは《淳化閣帖》の受容が一番の要因だと思われる。40 歳代になると、2 文字だけの今草（連綿草）を書くようになり、それが徐々に定着していったようである。本作もやはり 2 文字のみの連綿となっている。12 種類の使用字例を【表 5】にまとめた。「足下」、「以此」、「性復」に注目すると、同じ字形の文字を揮毫する際、千篇一律の変化に乏しい書となりがちであるが、熟練の筆遣いで凡庸に陥ることなく変化をつけようとしたのであろう。そのような意識が窺える。

(2)、行書：

「之」、「不」、「悶」、「能」、「月」を見ると、同じ文字を再度書く時は先のそれとは違った変化をつけようとしたのがよくわかる。行書の字形は《蘭亭序》や《集字聖教序》に近似しており、深く会得した王羲之の書法が反映されている。《蘭亭序》と趙孟頫書法の近似性については、先行研究がすでに詳しく分析しているので、検討は割愛する²²。

(3)、章草体：

²²吉川蕉仙「趙孟頫は羲之を超えたのか」『中国法書ガイド 元 趙孟頫集』49（二玄社、1989）、頁 24～28 を参照。

第三章で指摘したように、章草体は①明瞭な章草の筆法と、②自然と今草に溶け込む章草の2種類に分けられる。【表4】で示したように、章草体と今草の文字数はほぼ同じで、この二つが全体の2パーセントを占めている。

「不」や「能」のような章草の収筆の払いを使う筆法が多く使用されているのは、作品中に1文字だけ章草体の波磔を投入した第三期の特徴と大きく異なっている。また、章草の古典にもよく見られるシンニョウ（「𠂔」）や「月」、「君」の結体が本作にもある。つまり、本作は趙孟頫が30代前半以来、章草体を臨習した延長線の一つであり、書法面から見た場合、来歴有緒の標準的な趙孟頫書法だと言えよう。

（4）、楷書：

本作の文字の大きさは約1.5センチ平方である。第二章で述べたように、楷書の場合はこれを小楷と言う。【表6】で示したように、「自」、「君」、「之」、「不」などの文字は端正かつ謹厳な書きぶりが見られる。「自」の字形が前述した《帰去来辞》や《呉興賦》と非常によく似ていることから、同一人物によって揮毫されたものとみなしてもよかろう。このように文字に対する用筆や結体の分間布白のこだわりは、年を取っても変わらなかったようである。

2、四書体混用の理由と特徴

趙孟頫が最晩年に四書体混用を再展開した理由の一つは、長篇の詩翰類作品がその鍵を握っている。例えば、同時期に書いた1千文字以下の《帰去来辞》（65歳、湖州市博物館蔵）、《紅衣羅漢図》跋（67歳、遼寧省博物館蔵）、《方外交疏》（68歳、天津博物館蔵）、《行書七絶詩冊頁》（晩年（王連起氏による）、北京故宮博物院蔵）、《行草書陶淵明五言詩冊頁》（晩年（王連起氏による）、北京故宮博物院蔵）には本作のような四書体混用の表現手法は見られない。また、四書体混用の展開期に位置する長文の作品と比較しても（例え

ば、50 歳頃に揮毫したとされ、1 千文字ほどある《洛神賦》（無紀年、北京故宮博物院蔵）、波磔に明瞭な章草の筆法は確認できない。長篇の作品を揮毫する際に、若年、あるいは中年時と同じ書風で書くと、平凡になってしまう恐れがあり、あえて章草体と楷書を多めに入れたのではないだろうか。異なる時期の作品を比較した結果、書風、とりわけ使用する書体の選別上の変遷が看取できた。

《北京故宮本》は四つの書体混用の濫觴と展開、確立を経て、更に激化している。この激化は非常に作為的で、最晩年における新たな書風の試行ではないかと判断した。作品中に使用された各書体はそれぞれ古典にもあるが、行書、今草書、章草体、楷書を混合し作品として作り上げるのは、趙孟頫の書法生涯においてはもちろんのこと、元代書法史においても、中国書法史上においても画期的だと言え、本作の書表現は趙孟頫最晩年（66 歳）における入魂の作に違いない。先述のとおり、本作は友人に贈ったものではないらしい。おそらくまだ試行錯誤の段階で、人に見せるまでには至っていなかったのではないかとと思われる。

（三）、《台北故宮本》の検討

《北京故宮本》が制作された翌年、紙本の趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》という《台北故宮本》が制作されたようである。《北京故宮本》を見ていなければ、《台北故宮本》は間違いなく真跡だと確信するほど趙孟頫書法に非常によく似た作品である。管見の限りでは、本作はこれまで一度も論じられたことのない肉筆の新資料である。《北京故宮本》と比較することによって、《台北故宮本》も趙孟頫の書法か否か、その真偽、優劣などを明らかにしたいと考えている。なお、鑑定の際に直接目鑑はしておらず、国立故宮博物院が所有する非公開の高画質デジタルデータを元に鑑定したことを言い添えて

おきたい。

1、《台北故宫本》の基本資料

《台北故宫本》は『石渠宝笈』三編に著録されている²³。刊行図録は確認できないが、寸法、体裁、素材、題跋、収蔵印記などの資料は、国立故宫博物院によって系統的に整理された上で公開されているので、個々の細かい紹介は割愛する²⁴。国立故宫博物院が公開している資料によると、作品の本幅に元人の収蔵印記はなく、元末明初の張羽（元・元統元年～明・洪武二十一年、1333～1385）、明人の胡儼（元・至正二十年～明・正統八年、1360～1443）をはじめ、林慈（生卒年不詳）、王英（生卒年不詳）、鄒緝（？～明・永樂二十年、？～1422）、陸深（明・成化十三年～嘉靖二十三年、1477～1544）計 6 人の題跋が確認できる。これらの題跋の内容から判断するに、当時は趙孟頫の真跡だとみなされていたようである。このほか、清代の梁清標、安岐の収蔵印も見られ、その後乾隆、嘉慶内府に入り、民国以降は、李煜瀛の題跋によると、王雲五が収蔵していたという。その後李煜瀛が購入し、最後に国立故宫博物院が購入したという民国以降の流传史が確認できる。

2、《台北故宫本》の真偽

（1）、書法：

《北京故宫本》と比較した結果、《北京故宫本》の款識は「延祐六年（1319）九月望日。吳興趙孟頫書。」とあるが、《台北故宫本》は「延祐泰年（1320）

²³同院編『秘殿珠林石渠宝笈三編』石渠宝笈（九）（国立故宫博物院、1969）、頁 4128～4133 を参照。

²⁴故宫書画検索資料：
http://painting.npm.gov.tw/npm_public/System/View.jsp?ObjectID=80126&type=1

二月十九日書于松雪齋。子昂。」とあり、揮毫年代にずれがある。不自然だと思うのは、書き出しから末行まで、2作の書法（用筆、結体、章法、）が非常に似ている点である【図9】。全ての字形が同じだとは言えないが、2作とも四書体混用の表現手法で制作された作品であることは確認した。一見すると、字形はほぼ同じように見えるが、連続する3文字や連続する2行を比較対照した結果、《台北故宮本》は《北京故宮本》の書き方を真似しながら書いたような印象があり、趙孟頫が半年も経たない内に改めて揮毫したとは思えない【表7】。更に文字の用筆を比較すると、《台北故宮本》の方は線質がやや硬めで、起筆に圭角が見られ、誤字や運筆時に結体が崩れたり、不自然な箇所が随所に見られる【図10】。《台北故宮本》はところどころ《北京故宮本》の字形を変形させているが、全体的にやはり《北京故宮本》に依拠した臨本であることが現れている。上述したように、《北京故宮本》原本の形式をそのまま保ちながら、細かな箇所を巧みに変えたりしている点などから、高度な技術を駆使して制作された、後人による偽作であることは間違いない。

（2）、落款印：

《台北故宮本》の落款印を検分した結果、興味深い発見があった。「趙氏子昂」と「大雅」印、この二つの印の枠と印文の一部が欠落しているように見える。愈和書といわれる《漢汲黯伝》の落款印と対照した結果、同じ場所に同じ欠落が見られることがわかった【図11】。むろん、これは紙面の凸凹や印の押し方による、単なる偶然の一致かもしれないが、こうした特徴が見られることは留意しておきたいと思う。

（3）、題跋：

《台北故宮本》から、最も早く揮毫された題跋は元末明初の張羽であるこ

とが確認できるので、ここではこの張羽の題跋のみ検討対象としたい。張羽の題跋には一部に空白がある。なぜこのような空白ができたのかは不明だが、かなり不自然である【図 1 2】。また、趙孟頫の卒年にも誤りがある。張羽は題跋で延祐七年の「3 年後」と記しているが、正しくは「2 年後」のはずである。これらのことから、まずこの題跋自体に疑問が生じる。張羽の書法の遺品は少なく、対照可能な基準作の選出が難しいのだが、《台北故宮本》巻末の張羽跋と字形に近い伝《宋趙令穰陶潛賞菊図》（国立故宮博物院蔵）画上の題跋と《台北故宮本》と対照した結果、書風は近いが、落款印の印文は異なっており、目視による比較だけでは落款の真偽を確定するには至らなかった【図 1 3】。題跋の真偽が確定できない以上、元末明初の人物の題跋があるからといって、それを《台北故宮本》が真跡である証拠とすることはできない。

以上の考察より、《台北故宮本》は《北京故宮本》本来の形を残しつつ、一部に手を加えた後人による倣作だと考える。この点は 2 作を対照すれば明らかである。《台北故宮本》は《北京故宮本》を真似て作られたもので、趙孟頫の作品ではない。(1)、(2)、の考察結果から推測すると、兪和による偽作の可能性が高い。これについてはより詳細な比較・検討を行い、後日別稿で論じたいと思う。

前述のように乾隆帝は虞世南の言葉を引用し、王献之は特に好んで洛神賦を書いたので同種の作品が多数世に残されたと述べ、趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》もそのような作品の一つであるとしている。王連起氏も「曾不止一次書写此文」、「何以屢屢書写嵇康這篇痛斥虚偽礼教、表示絶不与当権者同流合汚的憤世疾俗之文呢？」と、趙孟頫は何度も繰り返し《嵇叔夜与山巨源絶交書》を揮毫したと述べているが²⁵、こうした見解には首肯しがたい。

²⁵同前掲注 3、「從《方外交疏》看趙孟頫晚年的書風」『書法叢刊』第 17 輯、頁 20～33 を参照。

本節で考察した結果、目下のところ、真跡だと確定できる趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》は《北京故宫本》のみであることが明らかになった。趙孟頫書と言われる多数の《嵇叔夜与山巨源絶交書》は真偽が定かではなく、それぞれに細かい差異が認められ、いずれも《北京故宫本》という祖本から生まれた後世の倣本である可能性が高い。

第三節 四書体混用の再展開の裏づけ

本節では四書体混用の再展開説の裏づけとして、趙孟頫の《勉学賦并序》の法帖（68歳、個人蔵）【図14】、碑文稿の《光福寺重建塔記》（68歳、上海博物館蔵）、この二つの作品を提示する。《北京故宫本》の次に制作されたこの2作は、遺品の性格が異なっても《北京故宫本》と同じ書法的表現と意識を有しており、四書体混用の再展開を意味する作品であることを証明したいからである。

一、《勉学賦并序》帖

（一）、《勉学賦并序》帖の基本資料

《勉学賦并序》帖は肉筆と法帖が1本ずつ残されている。肉筆本は贋作だが、法帖は真跡によったものである可能性が非常に高く、これに関する考察は拙論を参照願いたい²⁶。ここでは、本節と関わる資料を抜粋して紹介する。

1、文字数：約1363文字。

2、題跋：右中峰大和上所作勉学賦、言言皆実、乃学人喫緊用力下工夫之

²⁶同前掲注4、拙文「法帖所収の趙孟頫書法の編年研究：《宝雪斎趙帖》を中心に」『芸術学研究』第17号、頁79～88参照。

法門也。……。因以中上人見示、於是疾書一過。至治元年（1321）三月廿二日。弟子吳興趙孟頫記。

以上の2点から三つの情報が得られよう。①：《勉学賦并序》は《北京故宫本》と同じく1千文字以上ある長篇の作品だとわかる。②：題跋より、本作は趙孟頫が他界する1年前の作品で、内容は中峰明本が書いた《勉学賦》を以中和尚を経由して拝見し、趙孟頫が改めて揮毫したものである。③：師であり友でもあった中峰明本に宛てたものだとわかる。

（二）、書体を混用する理由と特徴

《勉学賦并序》帖を概観すると、楷書、行書、今草書、章草体、4種類の書体を混用しているのがわかる。これを【表8】にまとめた。《勉学賦并序》帖と《北京故宫本》の共通点は四書体を混用していることである。また、章草体の波磔を1箇所だけではなく随所に使用しているのも共通している。重要なのは、題跋の「於是疾書一過」という趙孟頫自身の言葉である。これは《北京故宫本》にはない貴重な情報で、趙孟頫が長文の文章を早書きした時に四書体混用の書表現が生まれたとも考えられる。

二、《光福寺重建塔記》の書法

第一章で検討したように、趙孟頫の碑文書法は、《玄妙觀重修三清殿記》や《玄妙觀重修三門記》二稿のように罫線を引いて端正な行楷書、独草体で書いたものもあれば、《靈隱大川濟禪師塔銘》稿のように罫線がなく、智永《真草千字文》の書風で書いたものもあり、表現手法は実に多様である。ここで掲げる《光福寺重建塔記》稿【図15】は現存する趙孟頫最晩年の碑文稿である。文字数は約814字あり、延祐年間（1314～1320）に吳県（現在の蘇州

省蘇州市)の光福寺が僧侶によって建立されたことと、至治元年(1321)に碑が立てられたことが記されている。碑文は開山住持の了清和尚が撰文し、趙孟頫が篆額と内容を揮毫したものである。書体は楷書、行書、独草体、章草体を混用しており、現存する12点の碑文稿の中ではかなり特殊な構成となっている。

本作には章草体の特徴である波磔は確認できないが、「還」、「月」は章草の古典にある文字で【図15】、第三章でも述べた章草体①の字形である。碑文書法、または碑文稿に章草体も含めて四書体を混用させ、揮毫する表現は、50代の《靈隱大川濟禪師塔銘》稿より一歩進めて展開したことが窺える。また、管見の限り、中国書法史上における唐太宗《温泉銘》や李邕《麓山寺碑》、《李思訓碑》のような行書碑文と比較した場合、あまり例を見ない珍しい表現だと言えるのではないかと思う。最晩年に章草体を作品に投入しようという意識のもと、長編作品を揮毫する際、第三期までの既定の枠(規則)から逸脱したいと願った、その影響かと思われる。人生の幕が下りつつある最晩年にもかかわらず、詩翰類作品と碑文稿作品という性格の異なる作品にも意図的に変化を加えるなど、更なる発展を求める意識の高さが窺える。

三、《北京故宮本》と《勉学賦并序》帖の意義

先述した王連起氏が言うように、《北京故宮本》は趙孟頫書法の中では特別な遺品であるに違いない。本作は肉筆の真跡で、最晩年に長篇の作品を揮毫する際に新たな書風—四書体混用を試みた端緒となる作品であり、これが最も評価すべき点だと考える。本作を改めて解釈、意味づけしたことにより、趙孟頫書法の多様性、個性の強さや自己主張があることも明らかになった。このような表現は少ないが、この作品にのみ見られるものではないことを付

け加えておきたい。後に制作された《勉学賦并序》帖も同じような書風が見られ、四書体混用の書法的表現が定着していたようである。これは章草体の活用を目的としていたほか、《洛神賦》のような長文作品を揮毫する際に、同じ手法を繰り返すことによって生じる平板さを回避しようという、趙孟頫最晩年における美意識の変化から生まれたものだと考える。このような思いは《光福寺重建塔記》稿でも確認でき、この書写意識と書風を碑文稿にも投入しようとしたのであろう。これで、第4期の66歳から68歳までを最晩年における新様式—四種の書体混用の再展開期とすることができた。《北京故宫本》と《勉学賦并序》帖には一定した変遷がありながら、創作意識が強く感じられる重要な書表現である。この種の表現は中国書法史には見られず、最晩年に開拓された趙孟頫書法を代表するもう一つの「趙体」だと考える。2作の書風の確立期も、碑文稿書法の確立期も同じく南方に戻った後に開花した独自の画期的な表現である。

最晩年に開花した四書体混用の新様式が見られる遺品は数が少なく、現在確認できる2作の落款を見ると、1点は趙孟頫の名前のみで、1点は中峰明本に贈ったものであることがわかる。この特殊な構成の章法は多用することがなかったため、第三章で考察した行草書への章草混用の作品（詩翰類、尺牘類、題跋類書法）のように広まることもなかったのではないだろうか。

第四節 研究成果の発展

一、《高峰和尚行状》に関する研究史

《高峰和尚行状》【図16】に関する文献資料は『詹東圖玄覽編』と『真跡日録』しか確認できなかった。これについては『徐邦達集五』にも抄録され

ている²⁷。『東図玄覧』には「子昂書高峰和尚行状、法蘭亭叙、是得意書。其行状長有千餘言。」とある²⁸。『真跡日録』には「元趙孟頫書高峰和尚行状、宋紙所書、一紙長五丈許。字倣禊帖。」とあり²⁹、『南陽法書表』にも収録されている³⁰。詹景鳳と張丑は二人とも《高峰和尚行状》の書法の来由は王羲之《蘭亭序》にあるとしている。

収蔵史に関しては、本幅と同じ紙に揮毫されたものではないが、卷末に元人の危素（元・大徳七年～明・洪武五年、1303～1372）の題跋が見られ、その書法と内容のいずれも信頼できるものである³¹。また、作品上の押印には明代の韓世能（明・嘉靖七年～万暦二十六年、1528～1598）の子息である韓逢禧（生卒年不詳）の収蔵印記が確認できる。その後の流伝史は不詳である。本作には乾隆帝、嘉慶帝、宣統帝の収蔵印記がなく、清内府に入ったことはなかったようである。民国に至ってから、徐石雪（清・光緒六年～民国四十六年、1880～1957）の収蔵となり、1953年に同氏から本作と趙孟頫書《淮雲院記》が北京故宮博物院に寄贈されたという³²。

二、《高峰和尚行状》の基本資料

²⁷同前掲注 17、徐邦達著、故宮博物院編『徐邦達集五』古書画過眼要録・元明清書法：1、頁 76 を参照。

²⁸詹景鳳『詹東圖玄覧編』（盧輔聖主編『中国書画全書』第 4 冊（上海書画出版社、1992）、頁 33 を参照。

²⁹張丑『真跡日録』（盧輔聖主編『中国書画全書』第 4 冊（上海書画出版社、1992）、頁 392 を参照。

³⁰張丑『張氏四表』（盧輔聖主編『中国書画全書』第 4 冊（上海書画出版社、1992）、頁 122 を参照。

³¹《小楷書方寸樓記卷》（無記年、北京故宮博物院蔵）と対照した結果、この 2 作の書風は非常によく似ており、同一人物による書跡だと考えられる。図版は、孫宝文編『趙孟頫墨迹精品選 高峰和尚行状』27（吉林文史出版社、2008）を参照。

³²<http://big5.dpm.org.cn:82/gate/big5/www.dpm.org.cn/shtml/402/@/26959.html>

《高峰和尚行状》の基本資料は二つの出版物より確認でき、その要約は以下の通りである³³。なお、題跋の釈文や収蔵印記などは『徐邦達集 五 古書画過眼要録・元明清書法』を参照願いたい。

- 1、寸法：縦 25.8、横 717.5 センチ³⁴
- 2、材質：紙本
- 3、落款：天目洪喬祖状。吳興趙孟頫書。
- 4、題簽：趙魏公小像。江都禹慎齋摸本。錢唐黃易題簽
- 5、引首：禹之鼎模写趙魏公小像と自題詩、趙雍題跋
- 6、題跋：危素の題跋
- 7、文字の大きさ：1.5 センチ平方ほど
- 8、収蔵印記：不録

三、《高峰和尚行状》の編年と分期

先行研究によると、《高峰和尚行状》の揮毫年代は盛年と 60 歳以降の二説が挙げられる。執筆者は不詳だが、前掲の孫宝文編『趙孟頫墨迹精品選 高峰和尚行状』の出版説明には「此作雖無書写年代、但拠書風判断、当為書家盛年以後之作。」とある。一方、徐邦達氏は「此卷書法蒼秀、似乎是六十以後所写。但拠状中所述高峰卒年則為元貞元年乙未(1295)、趙氏は年為四十二歳、似不甚相合、或則是隔了多年後才書的。」としている。

³³孫宝文編『趙孟頫墨迹精品選 高峰和尚行状』27(吉林文史出版社、2008)、出版説明を参照。前掲注 17、徐邦達著、故宮博物院編『徐邦達集 五 古書画過眼要録・元明清書法』1、頁 72～76 を参照。

³⁴図版では紙の継ぎ目が確認できなかった。元代に 715 センチもの長い紙があったのかどうか、確認の上、データを補いたい。

《高峰和尚行状》の制作時代を示す文献資料は入手困難のため、ここでは第一章で検討した《陋室銘》の編年を決める方法と同じく、書法面から揮毫年代を考えたい。趙孟頫その他の遺品と比較した結果、《高峰和尚行状》の線質や結体はかなり衰えたように見えるが、同じ字形、筆法の使用から、先学の結論に追従し、趙孟頫の真跡であることに同意する【表9】。《高峰和尚行状》の書法には、趙孟頫が生涯を通して習得した様々な技法が含まれているだけでなく、完全に独自の書として成り立っており、詹景鳳と張丑が言うように《蘭亭序》を真似て書いた作品ではないと考える。例えば、一部の文字に見られる、縦画のハネを2回に分けて書く技法は、碑文稿の影響による趙孟頫 50 歳以降の書法の特徴であることはすでに指摘したとおりである【表9】。これは《蘭亭序》から来た技法ではなかろう。また、本作は2千文字を超える長文であり、本章の結論、最晩年の66歳～68歳に再展開した四書体混用の表現手法に一致し、これも《蘭亭序》の章法とは異なる【表10】。盛年、あるいは60歳以降の作品とする先学の指摘も、間違いとは断言できないが、これまで検討した四書体混用の第4期に位置づけられるべき作品だと言えよう。68歳の《勉学賦並序》帖と比較して考えれば、他界直前の作品ではないかと思われる。

小 結

本章は趙孟頫における四書体混用に着目し、書風の特徴より、35歳～38歳、44歳～49歳、55歳～63歳、66歳～68歳の4期に分期した。第1期の作品の書表現は第3章のそれと同じく、《淳化閣帖》や《眠食帖》の影響が大きい。第2期に見られる四書体を混用させた作品は詩翰類に集中しており、混用意識も第1期より顕著になった。だが、章草の収筆の特徴である波磔の使

用が見られなくなっている。この点も第三章の第2期と同様である。第3期から、単一文字による波磔を意図的に作品中に投入する意識が復活している。この点については第三章でも検討したように、南宋人から大きな影響を受けたのではないかと推測した。一般的には一旦書風が確立されると、それを突破するのは難しいと思われがちだが、趙孟頫は最晩年に再度の展開を試みたのである。第4期が第3期と異なるのは、第4期の作品は文字数が1千文字を超える長篇の詩翰類であることと、1文字だけではなく多数の文字に、章草体の収筆に波磔が目立つ形で用いられていることである。第2期以降に揮毫した《洛神賦》のような長文作品と同じ手法を用いることによって生じる平凡さを回避しようという、趙孟頫最晩年における美意識の変化がその理由だと考える。この再展開期を意味する重要な役割を担う作品は2作ある。一つは《北京故宮本》である。《北京故宮本》は現存する趙孟頫唯一の《嵇叔夜与山巨源絶交書》真跡であり、その他の伝趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》は趙孟頫の影響下の産物としか考えられない。2作目は《勉学賦並序》帖で、四書体混用は《北京故宮本》と同じ表現であり、四書体混用の書風の下限は68歳まで続いたことを証明できる重要な新資料である。また、詩翰類だけではなく、碑文稿にも四書体混用の章法構成を用いているのは、最晩年だけに見られる特徴で、強烈な美意識の変化から生じたものであることを明らかにした。66歳～68歳の第4期の書法は、30代から徐々に変化する中で誕生したものであり、書法に一定の法則を有する最晩年に作り上げた書表現と断定してよいと考える。中国書法史上、このような書表現は他になく、個性溢れるもう一つの「趙体」であり、画期的な表現だと言える。

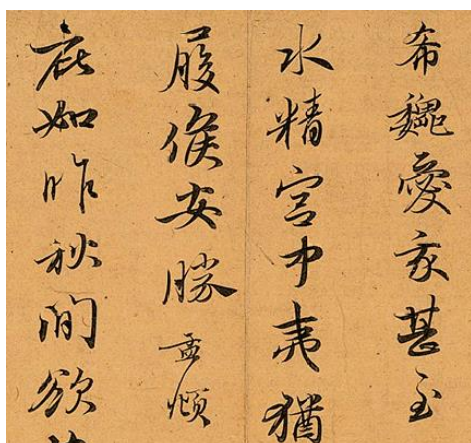
無紀年の趙孟頫書《高峰和尚行状》の編年を盛年、あるいは60歳以降の作品だとする研究もあるが、その根拠を示しているものはない。現存する遺品の変遷から見て、本章の主な論点である四書体混用の展開の法則を利用すれ

ば、盛年あるいは 60 歳頃はまだこのような書表現は見られず、先行研究の推測したおよそその年齢を上回る 66 歳以降の作品に絞れるのではないかと考える。

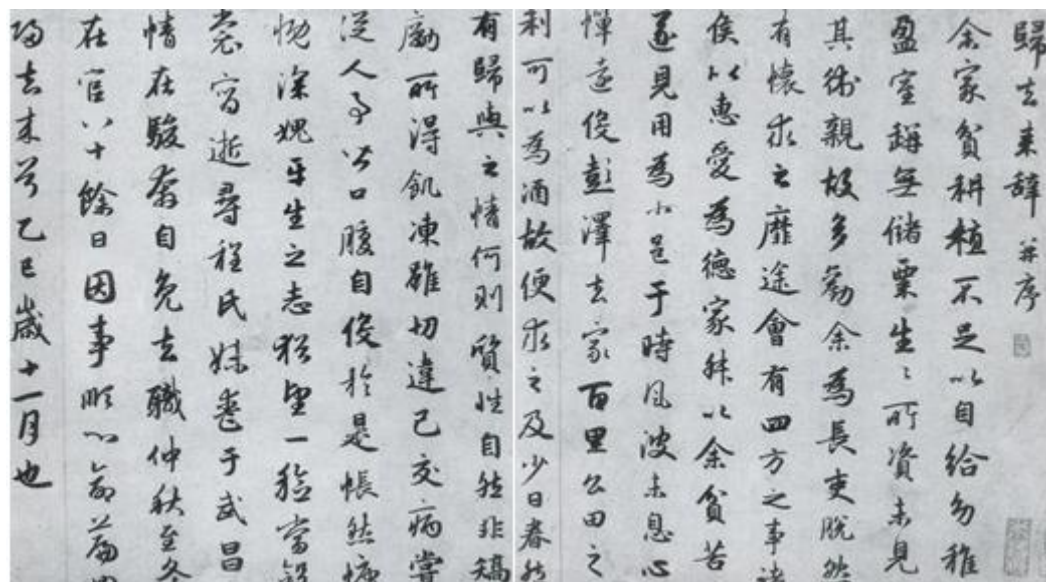
【图1】趙孟頫《與右之二札》（一）（部分）



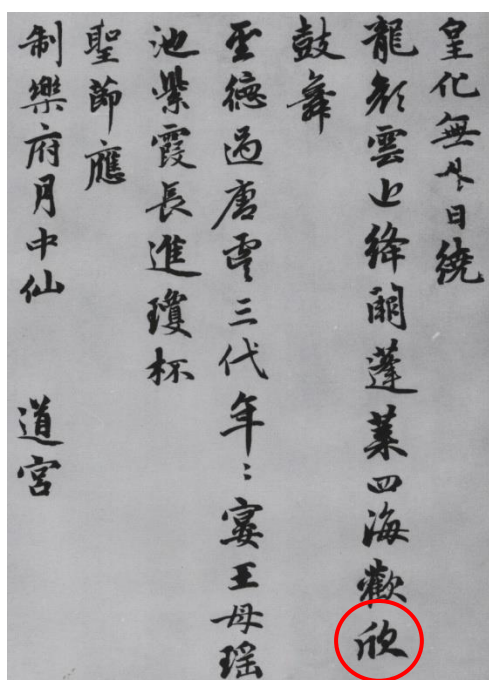
【图2】趙孟頫《致希魏判簿尺牘》（部分）



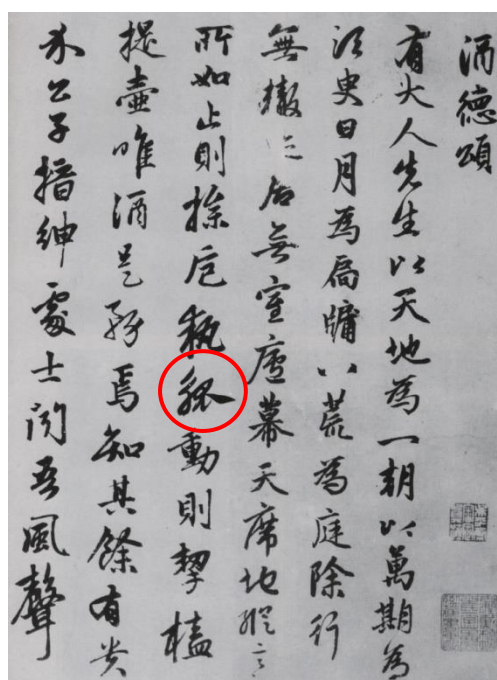
【图3】趙孟頫《歸去來辭》（部分）



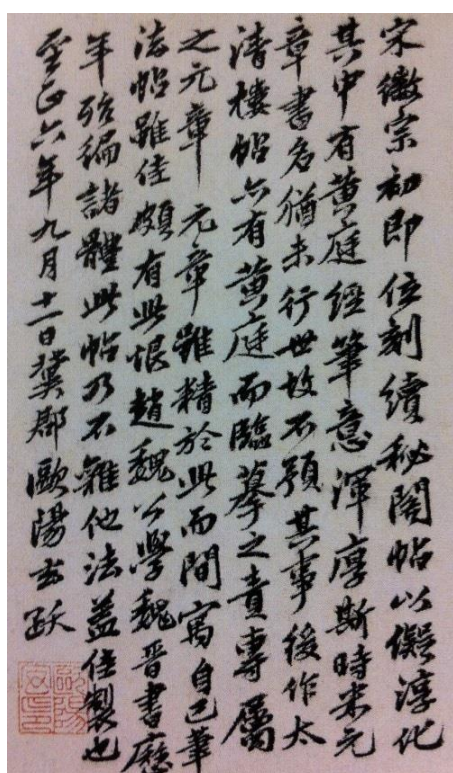
【图4】趙孟頫《万年歡》（部分）



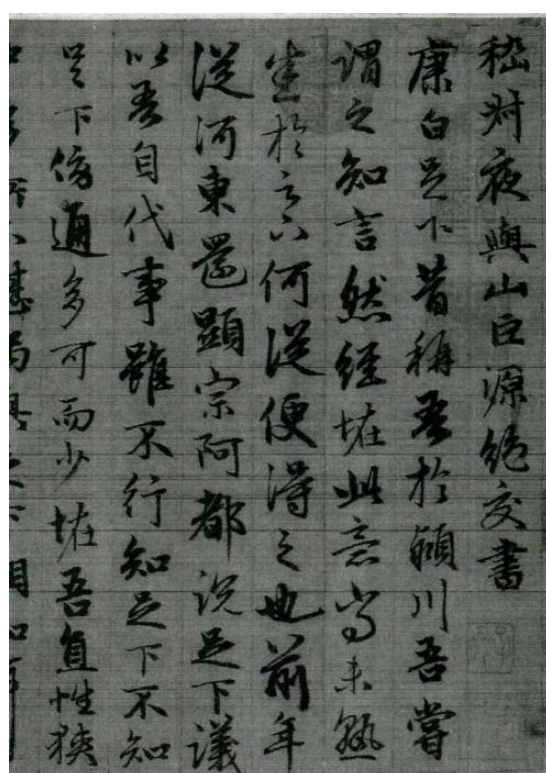
【图5】趙孟頫《酒德頌》（部分）



【图6】趙孟頫《黃庭經》歐陽玄題跋

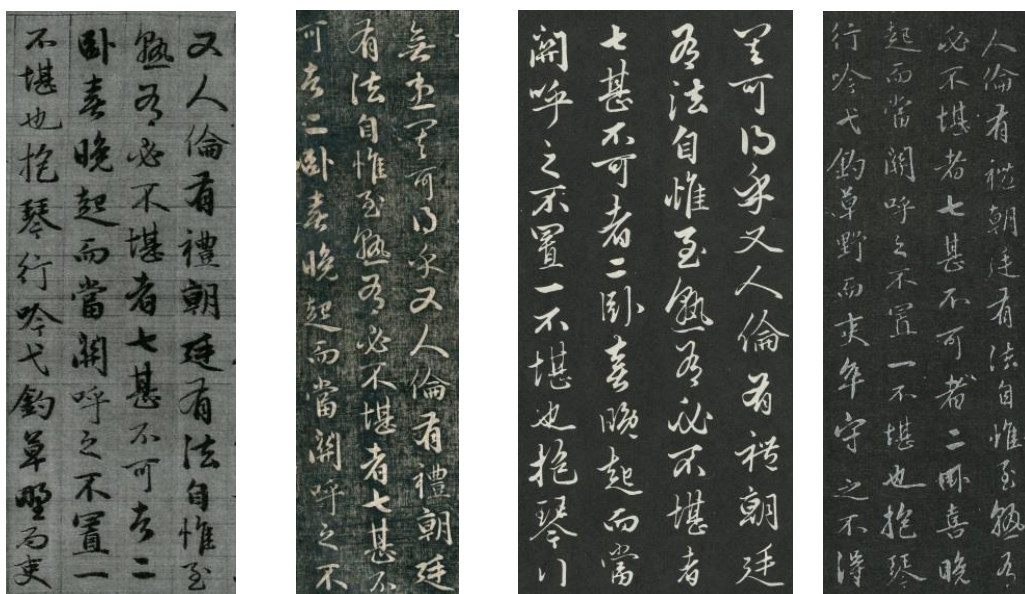


【图7】《北京故宮本》（部分）

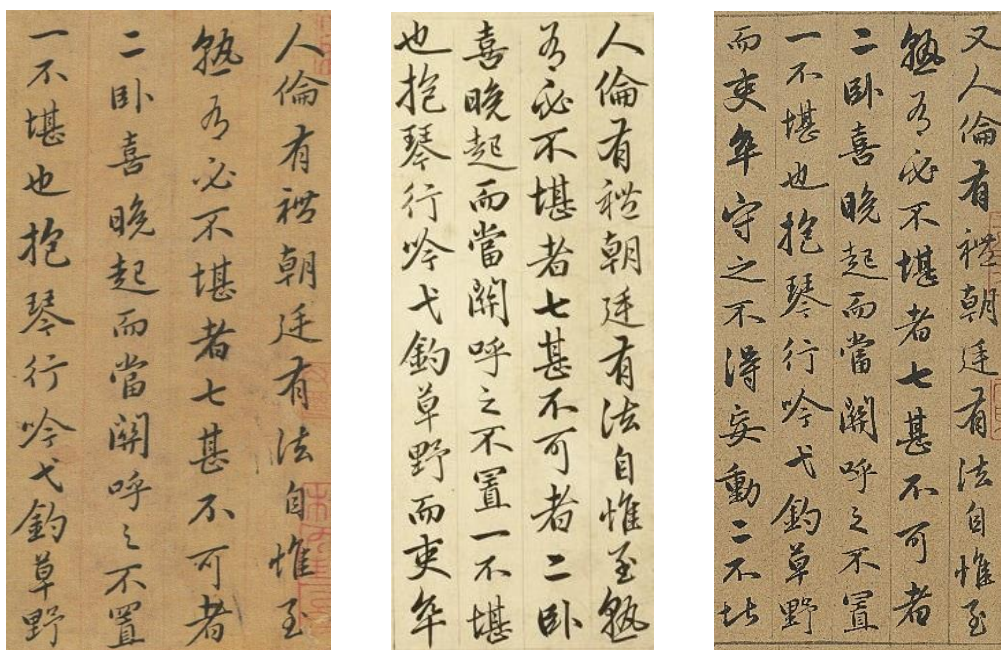


【図8】多様な伝趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》

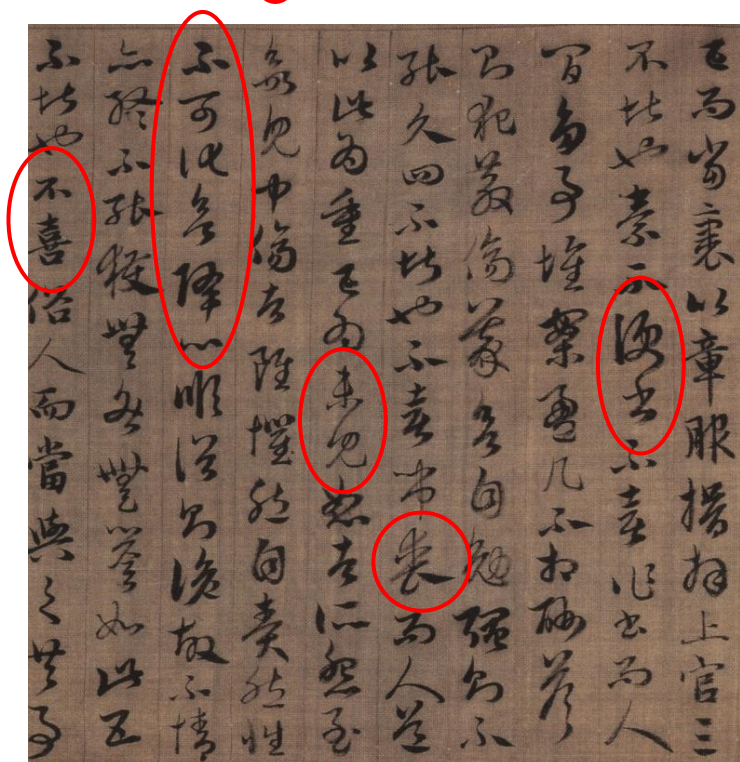
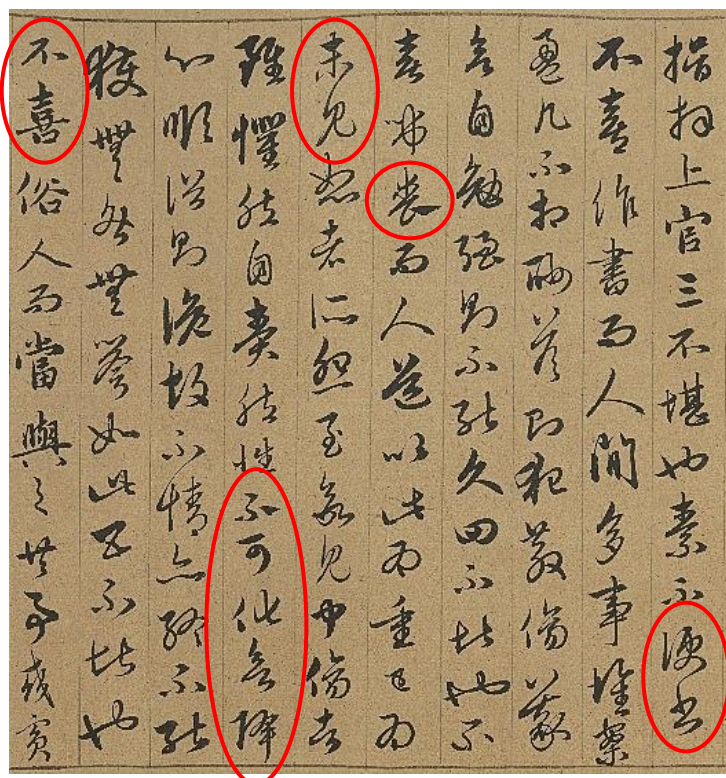
①《北京故宫本》②《宝雪斋赵帖本》③《三希堂法帖本》④《戲鴻堂法帖本》



⑤《北京海士德国际拍卖会本》⑥《汪由敦臨本》⑦《台北故宫本》



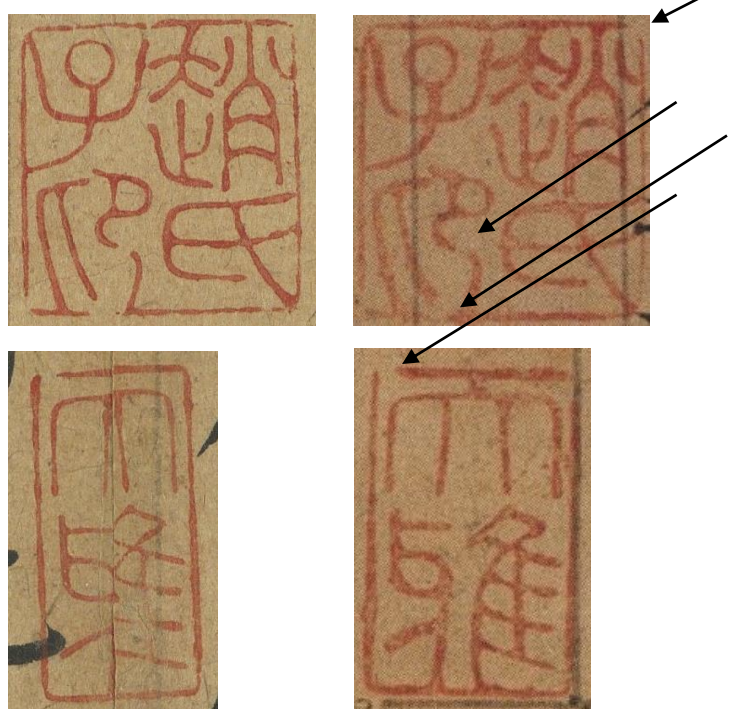
【图9】《台北故宫本》（部分）上、《北京故宫本》（部分）下



【図10】《台北故宫本》書法の特徴

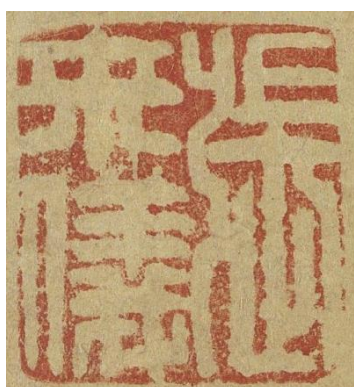
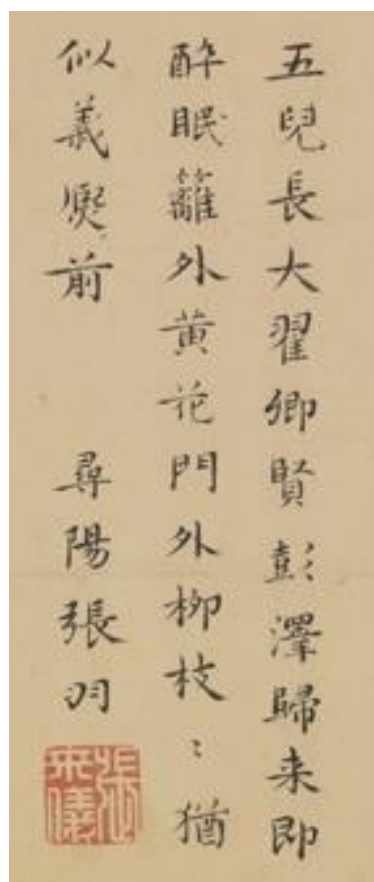
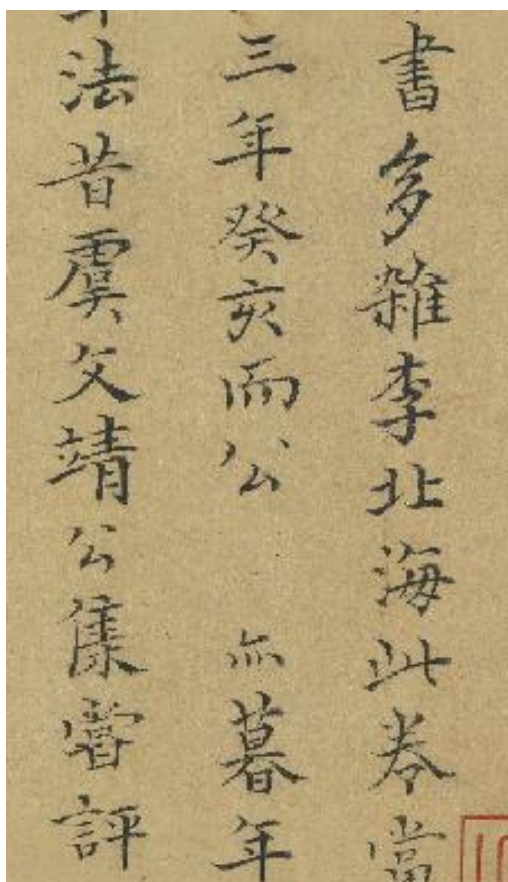


【図11】《台北故宫本》左、《漢汲黯伝》右



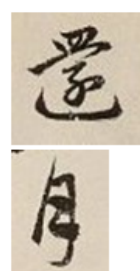
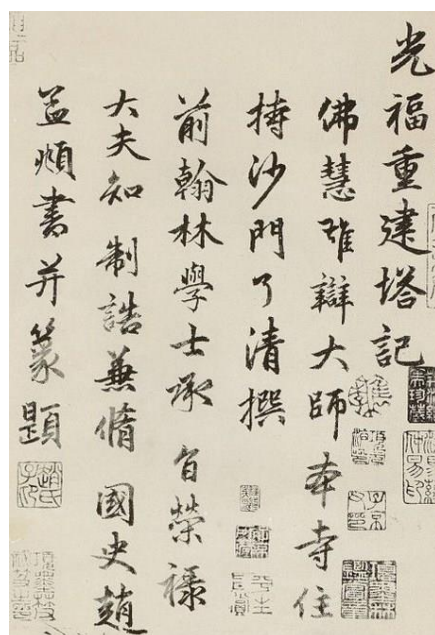
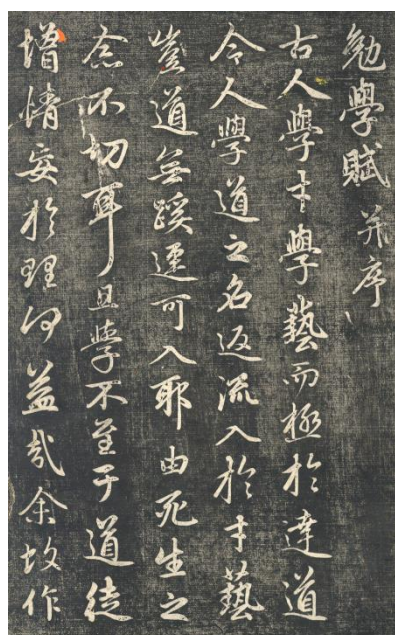
【図12】《台北故宫本》卷末の張羽題跋（部分）、落款印（下左）

【図13】伝《宋趙令穰陶潛賞菊図》卷上の張羽題跋と落款印（下右）

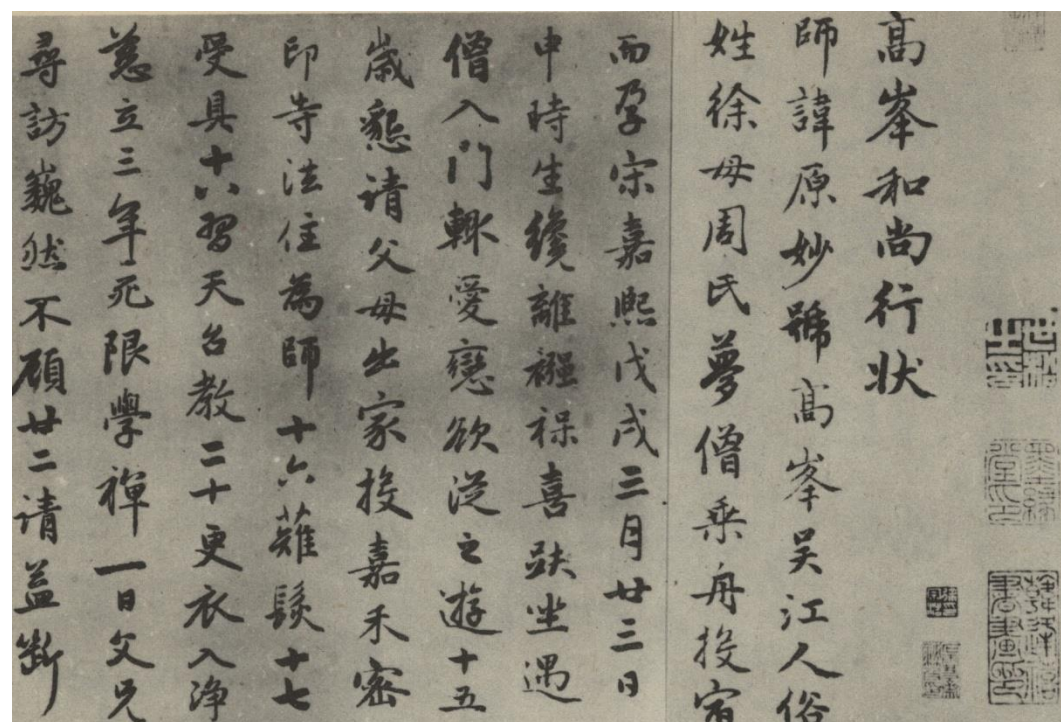


【图 1 4】赵孟頫《勉学赋并序》帖（部分）（下左）

【图 1 5】赵孟頫《光福寺重建塔记》（部分）（下右）



【图 1 6】赵孟頫《高峰和尚行状》（部分）



【表 1】趙孟頫における四書体混用の濫觴

	《与右之手札》一	《元趙孟頫致希魏判簿尺牘》
楷書		
行書		
独草体		
今草書		
章草体		

【表2】趙孟頫における四書体混用の展開

	《帰去来辞》	《行書赤壁二賦冊》	《呉興賦卷》
楷書			
行書			
独草体			
今草書			
章草体	 	    	    

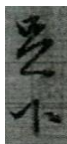






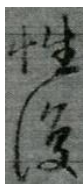
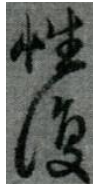
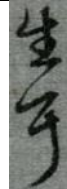
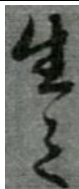
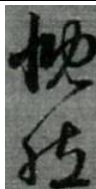
【表3】多様な《嵇叔夜与山巨源絶交書》

	肉筆資料	法帖資料	著録記載	落款	揮毫年
①	不詳	不詳	孫承沢蔵本 (偽)	予十年前嘗為仲長書此，不意失去後 兩幅。今攜至都下，復為全之。觀者 審定。延祐六年（1319）八月十日。	延祐六年（66 歳
②	不詳	不詳	頤庵文選著 録本	不詳	不詳
③	不詳	不詳	范半醒蔵本	不詳	不詳
④	不詳	不詳	趙子俊題識 本	不詳	不詳
⑤	北京故宮本	宝雪齋趙帖 本	平湖高氏録 絹本	延祐六年（1319）九月望日。吳興趙孟 頫書。	延祐六年（66 歳
⑥	台北故宮本	不詳	石渠宝笈三 編本	延祐泰年（1320）二月十九日書于松 雪齋。子昂。	延祐七年（66 歳
⑦	不詳	三希堂法帖 本			無紀年
⑧	不詳	戲鴻堂法帖 本（残本）			無紀年
⑨	北京海士徳 国際拍売会 本（残本）	不詳			無紀年
⑩	汪由敦臨本 (残本)	不詳			無紀年






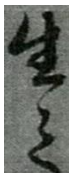








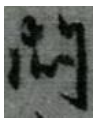






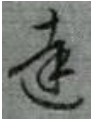
【表 4】《北京故宫本》書体混用の内訳

《北京故宫本》の文字数：1439 字			
《北京故宫本》の字母数：580 個			
書体		文字数	内訳
楷書		299 字	約 20%
行書		771 字	約 53%
草書	独草体	300 字	約 20%
	今草（二字連綿）	20 字	約 2%
	章草	章草体①：22 字	} 約 2%
		章草体②：8 字	

【表 5】《北京故宫本》にある 2 文字の連綿書法

足 下				
以 此				
性 復				
生 耳		生 之		慨 然
				






【表6】《北京故宫本》の四書体混用

	楷書	行書	独草体	章草体①	章草体②	今草
自						
君						
之						
不						
悶						
能						
月						
之						

【表 7】《北京故宫本》と《台北故宫本》の書法

《北京故宫本》			
《台北故宫本》			



【表 8】《勉学賦并序》帖の四書体混用

楷書	行書	章草体①、②	独草体	今草
				
				
				
				
				
				

【表 9】《高峰和尚行状》の用筆と字形

結体、線質の衰弱（右）	よく見かける字形	2回分けて書くハネ
  	  	 

【表 10】《高峰和尚行状》の四書体混用

楷書	行書	章草体①、②	独草体	今草
  	  	      	   	  

図版出典

【図 1】

…渡邊隆男発行『書跡名品叢刊』83（二玄社、1962）、頁 31。

【図 2】

国立故宮博物院（版權は国立故宮博物院所有）。

【図 3】

…黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮宝齋出版社、2002）、頁 100～101。

【図 4】

…同前掲【図 3】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 241。

【図 5】

…同前掲【図 3】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44、頁 312。

【図 6】

…王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』（上海科学技術出版社、商務印書館（香港）、2001）、頁 74。

【図 7】

…同前掲【図 3】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44、頁 324。

【図 8】

…《北京故宮本》：同前掲【図 3】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44、頁 321。《宝雪齋趙帖本》：個人藏。《三希堂法帖本》：張順芝等編輯『三希堂法帖』（北京日報出版社、1984）、頁 1380。《戲鴻堂法帖本》：『戲鴻堂法帖』（中国書店、1989）、無頁数。《北京海士德國際拍売会本》：『北京海士德國際拍売有限公司首届芸術品拍売会』（北京海士德國際拍売有限公司、2010）作品番号 440。《汪由敦臨本》：国立故宮博物院（版權は国立故宮博

博物院所有)。

【図 9】

…《台北故宫本》：国立故宫博物院（版權は国立故宫博物院所有）。北京故宫本》：同前掲【図 6】王連起主編『故宫博物院藏文物珍品大系 元代書法』、頁 125。

【図 10】

…筆者作成。

【図 11】

…筆者作成。

【図 12】

…国立故宫博物院（版權は国立故宫博物院所有）。

【図 13】

…同院編輯委員会編輯『故宫書画図録』第十六冊（国立故宫博物院、1997）、頁 26。

【図 14】

…個人蔵。

【図 15】

…王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大觀』上（上海人民美術出版社、1995）、頁 267。

【図 16】

…同前掲【図 15】王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大觀』上、頁 329。

第五章 《宝雪斎趙帖》考

序

従来、趙孟頫の肉筆作品を対象とした真偽及び編年研究は、各学界先賢方の努力の結果、大きな成果が得られてきた。しかしながら、趙孟頫法帖の研究は重要視されず、研究活動の停滞を招いている。容庚（清・光緒二十年～民国七十二年、1894～1983）編『叢帖目』全4冊の中で、所収題名が趙孟頫と関連する法帖作品は約108種563点（清人臨趙書を含む）にも及ぶが¹、これらの趙孟頫法帖の研究について、一定の成果を上げてきたのは唯一王連起氏だけであろう²。法帖研究が遅れている原因の一つは、法帖は一般的に博物館・美術館、図書館や個人の収蔵が多いこと、趙孟頫法帖出版物の刊行が遅く、良質の図版が入手困難であったためと思われる。そのため、本章では筆者が所有し、いまだに深く論及されていない《宝雪斎趙帖》及び所収の趙孟頫作品5点を対象にし考察を行いたい³。

法帖は肉筆作品をもとに拓製するが、原拓や復刻、刻拓の品質などの問題

¹容庚編『叢帖目』1～4（中華書局香港分局、1980～1986）の統計によるデータである。

²王連起「談三希堂法帖所刻趙孟頫書」『書法叢刊』第10輯（文物出版社、1986）、頁76～94。同氏「快雪堂法書帖考」『故宮博物院院刊』第4期（紫禁城出版社、1991）、頁31～52。同氏「元樂善堂法帖考略」『故宮博物院院刊』第5期（紫禁城出版社、2001）、頁31～37を参照。

³『叢帖目』4所収する《宝雪斎趙帖》卷二に、文徵明「真賞齋銘並序」、董其昌「金剛經並跋」があることが確認できた。本来、それを叢帖と見なしで考察するべきであったが、筆者所有の《宝雪斎趙帖》は唯一卷一のみである。しかし、文徵明と董其昌の作品は《宝雪斎趙帖》の帖名にふさわしくなく、その作品が収録されている《宝雪斎趙帖》が見られない現時点では、単帖と見なしで考察を進めても研究には支障がないと判断し、考察を進めた。

が存在し、研究時に肉筆作品と対照できなければ、文字の濃淡乾湿の変化も弁別できない。また、行の位置や文字の配列に法帖製作者によるアレンジが施された可能性もあるので、真偽問題の解明がより一層難しくなる。法帖のみで当該作品の流伝史や書法の風格、書写可能年代、後世にもたらした影響などを考察する場合、肉筆作品の考鑑より制限が多く、研究成果も制限されることが、法帖研究の難点でもある。こうした限界はあるが、本研究では、《宝雪斎趙帖》所収の下記5帖（うち肉筆3点現存）について、趙孟頫の肉筆作品との比較から、その真偽及び編年を考察するとともに、《宝雪斎趙帖》の史的位置を明らかにしたい。それによって、趙孟頫の肉筆作品を鑑別する際の新たな手がかりを得ようとするものである。

第一節 《宝雪斎趙帖》と所収法帖、墨跡本の現況

一、《宝雪斎趙帖》に関する先行文献

《宝雪斎趙帖》の参考文献としては、張伯英（清・同治十年～民国三十八年、1871～1949）「付録・法帖提要」⁴、容庚『叢帖目』4、王壯弘（民国二十年～九十七年、1931～2008）『帖学举要』⁵が挙げられる。『叢帖目』4に「宝雪斎趙帖分卷一、卷二、帖後有康熙歲在戊戌孟冬穀旦、薰沐上石。瑞応律院」⁶。

⁴張伯英書、張濟和主編『張伯英碑帖論考』参、付録・法帖提要（河北教育出版社、2006）、頁242～243を参照。

⁵王壯弘編著『帖学举要』（上海書画出版社、1987）、頁161を参照。

⁶北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』清八（中州古籍出版社、1990）の頁31に「性証和尚塔銘」（冒頭「勅賜瑞応律院檀波和尚塔銘」）という碑刻の資料を確認した。当碑は北京海淀区北太平莊黄亭子にあると記されている。碑の内文より、キーワードである「瑞応律院」は康熙壬辰（1712）年頃、康熙帝に下賜されたものであることが明らかになった。今後は「性証和尚塔銘」と《宝雪斎趙帖》との関係について更なる検証を行い

正書二行。」⁷との記述があることから、当時の《宝雪斎趙帖》は2巻あり、康熙57年(1718)に上石されたという記述があるのがわかった。残念ながら現時点では、《宝雪斎趙帖》所収各法帖の所有者や刻者、瑞應律院についてはまだ解明できていない。張伯英は、「乃此刻名為宝雪、而所取諸帖未盡美善。松雪書名既著、臨仿遂多、真贋最難區別。如絶交書、鴻堂之刻乃不全本、而此與三希堂皆全文、書家於古人文字固有屢書不一書者、既出一手、相去当不甚遠、以此與鴻堂互校、優劣懸殊、正如思翁所譏為鈍滯吳興者。蘭亭考小楷極秀媚、而吳興他書似不如是之弱。然則刻此帖者雖以宝雪名齋、於趙書之如何可宝或未深知、以松雪書名之盛珍重焉而已。」⁸とし、所収法帖について批判している。王壯弘の『帖学举要』には、「瑞應律院模勒（坊間偽作）。」⁹とあり、《宝雪斎趙帖》を民間の偽作と見なしているが、その根拠は明記されていない。

筆者が蔵する《宝雪斎趙帖》は巻一のみであり、線装、縦35センチ、横20センチ、74葉である。表紙に「趙松雪書法乙種」、巻頭に帖名「宝雪斎趙帖」隸書5文字があるが【図1】、法帖内には収蔵印記がなく、帖後に先述した刻款も見当たらない。しかし、上記の参考文献や国立故宮博物院収蔵の法帖をはじめ、北京故宮博物院¹⁰には収録されていないことから、《宝雪斎趙帖》所収の原跡が真跡ならば、非常に希少価値の高い趙孟頫法帖とみなすべきであろう。

たい。

⁷同前掲注1、容庚編『叢帖目』4、頁1566を参照。

⁸同前掲注1、容庚編『叢帖目』1、頁242を参照。

⁹同前掲注5、王壯弘編著『帖学举要』、頁161を参照。

¹⁰筆者が2009年1月から2011年1月の間に、国立故宮博物院書画处在職中、故宮所蔵の法帖に関する資料を確認した結果、《宝雪斎趙帖》は収蔵されていないことがわかった。施安昌主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 名帖善本』（香港・商務印書館、2008）に未収であることから、北京故宮博物院にも収蔵されていないものと見られる。

二、《宝雪斋赵帖》所収各法帖に該当する肉筆本の現状

《宝雪斋赵帖》における趙孟頫の作品は、所収順に《禊帖源流》、《襄陽歌》（附趙麟跋）、《勉学賦并序》（中缺）、《閒居賦》（後缺）、《禊帖源流》題跋一、《与野翁教授尺牘》、《禊帖源流》題跋二、《嵇叔夜与山巨源絶交書》（後缺）である。帖内の一部は欠損や装幀反転、字体の増補などが確認でき、単に法帖のみを観察するだけでは、作品本来の様子は見えにくい。幸い、この五つの法帖のうち、《禊帖源流》、《閒居賦》については原本とみられる墨跡が国立故宫博物院に、《嵇叔夜与山巨源絶交書》の原本とみられる墨跡は北京故宫博物院に収蔵されており、上記3点の肉筆本は本法帖研究に最適な校勘資料だと言える。一方、伝趙孟頫書《勉学賦并序》肉筆本は、2009年嘉徳広州冬季コレクションの図録に登場したが¹¹、臨写本という説がある¹²（《勉学賦并序》帖とは不同）。香港中文大学文物館と北京故宫博物院に各1本ずつ《襄陽歌》肉筆本が収蔵されているが¹³、《襄陽歌》帖と併せ3本とも別本である。詳細は次節で論じたい。

第二節 《宝雪斋赵帖》所収法帖の研究史

一、《禊帖源流》

¹¹『中国嘉徳 2009 広州冬季拍卖会中国書画』（中国嘉徳広州国際拍賣有限公司、2009）、番号 1088 を参照。

¹²李遇春「嶺南名士羅天池」『嶺南考古研究』第9号（中国評論學術出版社、2010）、頁223～235を参照。

¹³許忠陵「三希堂法帖与趙孟頫行書襄陽歌卷」『中国碑帖与書法国際研討会論文集』（香港中文大学文物館、2011）、頁275～281を参照。

歴代著録では、《李梅公本》、《何義門模本》、《国立故宫博物院本》（肉筆本）という 3 種類の《禊帖源流》が確認できる¹⁴。先述したように《禊帖源流》肉筆本は現在国立故宫博物院に収蔵されているが、それを法帖にしたものは、管見の範囲では《宝雪斎趙帖》の《禊帖源流》帖のみである。《禊帖源流》の字形や点画は細部まで《国立故宫博物院本》と合致しており、これより刻し拓されたものと考えられる。しかし、《国立故宫博物院本》の後には夏文彦（元・皇慶元年～明・洪武三年、1312 頃～1370 頃）と趙礼用（生卒年不詳）の題跋はあるが、《禊帖源流》帖は収録されていない。《禊帖源流》巻の評価については、前述のように張伯英氏は「蘭亭考小楷極秀媚、而吳興他書似不如是弱。」と貶し、王壯弘氏は《禊帖源流》巻全体を偽とみなしている¹⁵。しかし、《禊帖源流》巻は遅くとも乾隆朝には内府に収蔵され、今日まで国立故宫博物院に収蔵されているため、張氏や王氏が《何義門模本》のような民間にある別本《禊帖源流》¹⁶には論及せずに、「坊間偽作」としたのには賛同できない。

二、《襄陽歌》

歴代著録では、《欽定石渠宝笈初編本》、《欽定石渠宝笈続編本》、《寓意編著録本》という 3 種類の趙孟頫書《襄陽歌》が取り上げられるが、内容から《宝雪斎趙帖》の《襄陽歌》帖は《欽定石渠宝笈続編本》に合致することがわか

¹⁴拙文「元趙孟頫書〈禊帖源流〉巻賞析」『故宮文物月刊』第 329 期（国立故宫博物院、2010）、頁 76～84 を参照。

¹⁵王壯弘『碑帖鑑別常識』（上海書画出版社、1985）、頁 120 を参照。

¹⁶清人の宗源瀚が何義門模《禊帖源流》本を見たことを『燹餘所見録』に著録したことから、《国立故宫博物院本》のほかに、《何義門模本》が実在したことは確かであろう。しかし、張伯英、王壯弘はそれについては触れていない。

った。

現在、《襄陽歌》帖が依拠した肉筆本の存在は確認できないが、許忠陵氏の研究より①《北京故宫博物院本》と②《香港中文大学文物館本》【図2】という二つの肉筆本が存在するが、どれも偽作であることが明らかになっている¹⁷。一方、趙志成氏が①を存知し、これを偽作だと述べ、更には《欽定石渠宝笈続編本》後の趙孟頫の孫趙麟（生卒年不詳）跋を利用して、趙孟頫の息子である趙雍の卒年を1361年と断定した¹⁸。しかし、その当時の許忠陵氏や趙志成氏はいずれも《宝雪斎趙帖》所収の《襄陽歌》帖の存在には言及していない。上述のように《襄陽歌》帖は著録の《欽定石渠宝笈続編本》と内容が合致し、《香港中文大学文物館本》は《欽定石渠宝笈続編本》の内容を編纂して書いてあるため、《襄陽歌》帖はこの系統で最も祖本に近い位置にあると考えられる。しかし、現時点では、《襄陽歌》墨跡（肉筆本）の存在が確認されておらず、本当に《襄陽歌》帖が趙孟頫の真跡に基づいて刻された法帖か否かが解明されない限り、趙志成氏の趙雍卒年による研究成果はやや唐突に感じられる。

《襄陽歌》帖の款識は「子昂為仲宝書」である。元代に確かに仲宝（卞瑛か）という人物が存在したことが確認できる¹⁹。仲宝の生卒年は不詳であり、趙孟頫と本当に親交があったか否か、適切な史料を証左に挙げられないが、あながち否定することもできない。李白《襄陽歌》詩との字句を比較した結果、誤字や別字があり²⁰、《襄陽歌》帖の書者がどういった環境、または心境

¹⁷同前掲注13、許忠陵「三希堂法帖与趙孟頫行書襄陽歌卷」『中国碑帖与書法国際研討会論文集』、頁275～276を参照。

¹⁸趙志成「元代画家趙雍的生卒年及相關問題」『文物』第1期（文物出版社、1994）、頁76～83を参照。

¹⁹王德毅、李榮村、潘柏澄編『元人伝記資料索引』第1冊（新文豊出版社、1979）、頁37～38を参照。

²⁰許忠陵氏は「経与原文核对、此卷漏字、掉句、抄錯之处甚多。」と述べて

でこの詩を書いたかも不明であるが、趙麟の題跋と他の少ない書跡との書風比較を行うと、書風は確かに近い。題跋に登場する子厚がいかなる人物なのかは解明できないが、跋中にある「厚」の篆書風の「子」字の特徴は、趙孟頫や吳叡（元・大徳二年～至正十五年、1298～1355）《隸書九歌》の題跋（吉林省博物館蔵）にもほぼ同様の書き方があることから、趙麟の題跋は元時代に溯り得る【図3】。しかし、これらの点は、《襄陽歌》帖を趙孟頫の真跡とみなす根拠にはならない。次節では書風の面から、《襄陽歌》帖が趙孟頫の真跡に基づいた法帖の可能性の有無について検証したい。

三、《勉学賦并序》

歴代著録では、趙孟頫書《勉学賦并序》は《胡儼跋本》²¹、《卞士華文嘉題跋本》、《文嘉題跋本》、《伝羅天池臨写本》（肉筆本、後に王文治（清・雍正八年～嘉慶帝七年、1730～1802）題跋がある。法帖では、《海山僊館蔵真統刻》帖本がそれであることを確認した。）の4種類が確認できるが、《伝羅天池臨写本》以外、どれも現在の存在状況が確認できない。現時点では、《勉学賦并序》についての研究は2説あり、李遇春氏は前述した《伝羅天池臨写本》を観察した上で、書法の特徴や押印の習慣から羅天池（清・嘉慶十年～同治五年、1805～1866）による臨写本であると推定している²²。一方、黄啓江氏は

いる。だが、『李太白全集』上冊と対照した結果、漏字はなく、掉句もなかった。詳細は前掲注13、許忠陵「三希堂法帖与趙孟頫行書襄陽歌卷」『中国碑帖与書法国際研究会論文集』、頁275を参照。また、李白《襄陽歌》詩は清王琦注『李太白全集』上冊（中華書局、1977）、頁369～372を参照した。

²¹清佚名編「清宮旧蔵歴代法書名画総目」『故宮珍本叢刊』第464冊（海南出版社、2000）、頁213を参照。

²²同前掲注12、李遇春「嶺南名士羅天池」『嶺南考古研究』第9号、頁227～228を参照。

至大戊申(1308)年の作品だとしているが、根拠が明確でなく、《勉学賦并序》の内容や図版についても言及していない²³。

そこで、中峰明本《勉学賦并序》本来の様子を推定するために、『中華大藏経』「勉学賦并序」²⁴と《伝羅天池臨写本》、《宝雪斎趙帖》の《勉学賦并序》3者を対照した。その結果、それぞれの文字数や書写内容が異なることから、中峰明本「勉学賦并序」本来の内容は把握できないものの、少なくとも3種類の伝本があることになる【表1】。また、《勉学賦并序》帖の題跋に述べられた以中(?～元・至治元年、?～1321)という人物は中峰明本の弟子であり、時折趙孟頫や妻の管道昇が中峰明本に宛てた尺牘に登場するので、実在した人物と考えてよい²⁵。特に、その一群の尺牘のなかの《瘡痕帖》に「大拙来、収両書。第二書報以中示寂、不覺失声。蓋平生以中至為相愛、今其長往、固是無可深悲。但人情世諦、自不能已耳。」という記述があるので、《勉学賦并序》帖は至治元年(1321)に、以中和尚經由でそれを見た趙孟頫が揮毫したと見ることは可能であろう。《勉学賦并序》帖の真偽、そして《伝羅天池臨写本》との関係については第三節で述べたい。

四、《閒居賦》

歴代著録では、《閒居賦》は全て《国立故宫博物院本》(肉筆本)を指す。

²³黄啓江『泗州大聖与松雪道人—宋元社会菁英的仏教信仰与仏教文化』(台湾学生書局有限公司、2009)、頁352～353を参照。

²⁴中華大藏経編輯局編「天目中峯和尚広録」『中華大藏経』第78冊第21巻(北京中華書局、1984)、頁567～568を参照。

²⁵『元人伝記資料索引』と积有晃『元代中峰明本禪師之研究』(法鼓文化、2007)を確認したところ、以中に該当する人物は見当たらなかったが、国立故宫博物院所蔵の趙孟頫《趙孟頫致中峰和尚尺牘》と管道昇《管道昇致中峰和尚尺牘》の遺品にその名が見られることから、元代に以中という人物が実在していたのは間違いない。

《国立故宫博物院本》と対照した結果、《宝雪斎趙帖》の《閑居賦》帖はそれより作られたもので、字形や点画を正確にとらえている。(欠筆だけが肉筆本と異なる、後述。)本作は無紀年で、従来、《国立故宫博物院本》後の曹溶(明・万曆四十一年～清・康熙二十四年、1613～1685)跋を参考に、趙孟頫晩年の作品だとみなされている²⁶。角井博氏は本作を延祐六年(1319)以降の作品と推測している²⁷。一方、王連起氏は書風から、角井博氏より早い時期、中晩年(55歳から60歳まで)の作品と位置づけている²⁸。

本作は落款が「子昂」のみで、他に記録がない。趙孟頫が自分の心境に合わせて、いつ頃それを書いたかについては、角井博氏、王連起氏の見解を参考にしながら、次節の書風分析を通して検討したい。

五、《嵇叔夜与山巨源絶交書》

歴代著録では、《北京故宫博物院本》(肉筆本)、《趙子俊題識本》、《范半醒藏本》、《延祐七年本》(肉筆本)、《孫承沢藏本》²⁹、《平湖高氏緑絹本》、《頤庵文選著録本》全7種類の《嵇叔夜与山巨源絶交書》が確認できるが、真偽作が混在している。例えば、《孫承沢藏本》は落款の紀年と趙孟頫の活動地域が一致しないため、明らかな偽作だと判断できる。そのため、《北京故宫博物院本》後の曹文植(清・雍正十三年～嘉慶三年、1735～1798)奉勅跋乾隆帝

²⁶侯怡利「元趙孟頫書閑居賦」『故宮文物月刊』第300期(国立故宫博物院、2008)、頁13を参照。

²⁷角井博解説、『故宮法書選 前後赤壁賦・閑居賦・尺牘』8、(二玄社、2006)、頁53を参照。

²⁸王連起「趙孟頫書法芸術簡論」『趙孟頫研究論文集』(上海書画出版社、1995)、頁800～801を参照。

²⁹孫承沢『庚子消夏記』『芸術賞鑑選珍続輯』37(漢華文化事業股份有限公司、1971)、頁78～82を参照。

の識語は必ずしも正しいとは言えない³⁰。一方、本作の後には、まず曹文植が書いた題跋があり、続いて陳廷敬（明・崇禎十二年～清・康熙五十一年、1639～1712）、高士奇（清・順治二年～康熙四十三年、1645～1704）の題跋（二回に渡る）がある。これらの題跋から、本作は王鴻緒（清・順治二年～雍正元年、1645～1723）の家蔵品で、康熙帝の南書房でこれを見たことが知られる。題跋の先後順は陳廷敬跋（1685）、高士奇跋（1685、1697）、曹文植跋（1785）だったと考えられる。しかし、《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖には陳廷敬と高士奇、曹文植の題跋が見られない。

《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖は《北京故宮博物院本》をもとに刻されたものである。王連起氏は《三希堂法帖本》が兪和による《北京故宮博物院本》の臨本だと述べているが³¹、端的に言えば、《三希堂法帖本》は《北京故宮博物院本》を写して刻されたものではなく、字形が変えてある点から、別系統と考えられる（第四章参照）。つまり、《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖のみが《北京故宮博物院本》による法帖である【図4】。款識によれば、《北京故宮博物院本》は趙孟頫延祐六年（1319）の作品であり、今日まで真跡とされてきた作品である。真偽の論争はないが、以下で延祐6年前後の作品と比較分析を行い、本作の特徴などを見い出したい。

第三節 《宝雪齋趙帖》所収法帖の真偽と編年

³⁰ 《北京故宮博物院本》（肉筆本）の巻末に「趙孟頫書嵇康絶交書。……。想孟頫當時愛康此書、再三泚筆、亦如虞世南謂王子敬好写洛神。人間合有数本、毋庸作分別相也。乾隆乙巳孟冬御識。臣曹文植奉勅敬書。」と記述し、乾隆帝は世間の嵇康絶交書は皆真跡だと判断している。しかし、当時は《孫承沢蔵本》や後述の伝兪和臨本の《三希堂法帖本》などの偽作が存在していたため、乾隆帝の識語は妥当ではないと考える。

³¹ 王連起「談三希堂法帖所刻趙孟頫書」『書法叢刊』第10輯（文物出版社、1988）、頁78、同氏「兪和及其行書蘭亭序」『書法叢刊』総第28輯（文物出版社、1991）、頁4を参照。

一、《褻帖源流》

《国立故宫博物院本》の真偽編年などについては、すでに考察している³²。内容については、《褻帖源流》帖は真跡と同じく、①《蘭亭考》②《与野翁教授尺牘》③《趙孟頫跋一》④《趙孟頫跋二》（以下は数字で表す）4部分に分けられる。編年については、③の《国立故宫博物院本》の「余二十年前為郎兵曹。野翁謁選都下。求余書蘭亭考。風埃傾洞中。作字不成。然時時往来胸中不忘也。宣城張巨川自野翁處得此卷。携以見過。恍然如夢。余往時作小楷。規模鍾元常。蕭子雲。爾来自覺稍進。故見者悉以為偽。殊不知年有不同。又乖合異也。至大二年歲在己酉（1309）十二月廿四日孟頫書。」の款識と同様、特に問題はなく【図5】、①②は34歳頃から37歳頃で、④は56歳の作品だと推測した。しかし、《褻帖源流》帖には、①が真跡と異なる部分や真跡をもとに編纂したところもある。以下③を基準に《国立故宫博物院本》と対照しながら、①②④の真偽について考察する。

まずは章法についてであるが、①は小楷で、3行目から5行目までが失われているが、天が高く、地が狭く、行が変動されていない。字間は字座が重視され、一定の空間が保たれているが、行尾に「臨本之」「藏石龕」のように字詰めが調整された配置も見られる【図6】。字と字の間に連綿体の使用は見られない。②③は行草書、肉筆本とは行立てが大きく異なり、真跡がもつ雰囲気とは別趣のものになっている。④は行草書、わずか2行で、肉筆本と一致する。

³²思うに、真偽や編年（一般的に、本作品は36歳の作品と認識されているが、官職より34歳から37歳までは可能とした）、収蔵印記などを仔細に考察した。詳細は前掲注14、拙文「元趙孟頫書〈褻帖源流〉卷賞析」『故宮文物月刊』第329期、頁84を参照。

次に結字についてであるが、①全体を見ると、「蔵」「龕」のように結体が縦に長い字もあれば、「向」「所」のように扁平な字もあり、「張」「僧」四方形の字もある。「於」のような行書もあれば、「臨」のような草書もある。この作品の書風は小楷とされているが、実際には楷、行、草書が混在する。「亭」字は10回ほど書いてあるが、一番最後の「亭」だけ横ハネが横豎ハネになっており、鍾繇の字形に近い【図7】。よって、趙孟頫はこの時期以前からすでに鍾繇の書風を受容していたと判断できるが、全体的には晋唐人の書風を多く混ぜているように見える。なお、「永」が補筆され、「畫」が欠筆となっている点は真跡と異なる【図8】。②③④の結字は真跡と同じであるため、ここでは分析を略したい。

最後に用筆についてであるが、①の起筆は出鋒が多く、書き始めのところの点は目立って大きい。左払いはやや左上に上がる傾向があり、起筆・収筆ともに精緻で、横画と払いを常に強調する特徴は、同時期の《曹娥碑》（遼寧省博物館蔵）や《大道帖》（国立故宫博物院蔵）後の趙孟頫の題跋に近い。②は書法の行意が強い。刻拓者ができる限り書者の筆意を表そうと努力した跡が見える。③④の起筆は出鋒で、線に丸みありながら、提按の変化がはっきりと見て取れる。「恍然」、「稍進」のような連綿の字を作品中に配置するのが趙書の特徴であり、刻帖にもそれが明瞭に再現されている【図9】。

上記書風を分析した結果、特に③の自跋が信頼性の高い真跡であるだけでなく、趙孟頫が30代に書いた他の作品と同じ特徴が見られる点から、《禊帖源流》帖は《国立故宫博物院本》に依拠して、字形をそのまま拓したが、一部の字形や行立てが変えられたことがわかった。

二、《襄陽歌》帖

先述したように《襄陽歌》帖は、文献による検討では、真跡だと判断するには決定的な根拠に欠ける点を提起した。趙孟頫書《襄陽歌》の真跡が残されていないため、行の配置や墨の変化、収蔵印記などの考察ができないので、《襄陽歌》帖の真偽判定は非常に困難である。

ここでは、《襄陽歌》帖の計 215 字から特別だと思われる用筆や字形を取り上げ、特徴を見出したい。まず、「三水」偏の「没」、「漢」、「流」の書き方が同じで、「鸕鷀」、「鸚鵡」の「鳥」も固定された書きぶりが見られる。本文の「咲何」、「行相」など、連綿の使用は《禊帖源流》の③の特徴と一致する。「兒」、「問」の横画の書き出しは非常に強く、「峴」の縦画の書き出しは露鋒が著しい。「金」の書き方は見慣れないものだが、《亡女帖》（静嘉堂文庫美術館蔵、60 歳頃）の中の「金」字と合致するため、絶対にない書きぶりとも言えない。「酔」「籬」の結字はやや窮屈に見え、「翁」のくずしは一画足りない。こうしたことから、原本の真偽判断については留保するとしても、本帖の書風は墨跡本からの拓として、大きな矛盾はないように見受けられる【表 2】。

三、《勉学賦并序》帖

《勉学賦并序》帖の作成時間は 10-2 の款識によると至治元年（1321）であるため、至治元年前後の趙孟頫他の書跡を集めて比較したが、書風が多様で共通または一致する要素が見出しにくい【図 10】。

そこで、尺牘などの落款によく書かれている「趙」と「頫」を集めて比較したところ、ある程度の特徴が見出せた。1319 年（66 歳）から 1322 年（69 歳）までの「趙」の字形から見ると、一画目の書き出しの横画は重く、「走」の形状は片寄っているように見える。「頫」の「頁」の一画目は横画の右上がり著しい。これは《勉学賦并序》帖に合致するが、《伝羅天池臨写本》は平

凡に見え、臨書者の配慮不足が一目瞭然である【表3】。また、作品中に章草を混ぜた書きぶりは、管見では遅くとも《酒徳頌》（北京故宮博物院蔵、63歳、）以来の傾向であり、《勉学賦并序》帖にも章草の筆法が使われているので、この時期の書風に合致するため、真跡より拓されたものと見るべきであろう。《伝羅天池臨写本》は臨写の可能性はあるが、本来の形式を踏襲していると見られ、この《勉学賦并序》帖と対照させれば、趙孟頫書《勉学賦并序》本来の章法と用筆が、ともに明らかになるのではないかと思われる。

四、《閒居賦》

先述したように、《国立故宮博物院本》の編年に対して、二つの見解が提起されているため、本節では書風の面から考察をしたい。

本作も楷、行、草書が混在し、章法は行間が字間よりやや広く、行と行は整然と並んでいるように見えるが、実際は全体に動きが見られる。続いて字形の面から考察したいと思う。まず、「玄」字の欠筆は康熙帝の諱を避けたためと思われる【図11】。趙孟頫他の作品と《閒居賦》とを比較した結果、《前後赤壁賦》冊（48歳、国立故宮博物院蔵）から《湖州妙嚴寺記》（56歳、プリンストン大学付属美術館蔵）まで一部の字形が合致することがわかった【表4】。すなわち、《閒居賦》全体の字形の線質に肉付きがある点から、これは《玄妙觀重修三清殿記》稿や《玄妙觀重修三門記》稿以降の傾向だと思う。特に《洛神賦》（50歳、北京故宮博物院蔵）や《松江宝雲寺記》（54歳、所蔵先不詳）などは、《閒居賦》と同じく全体的に肉があり、墨調が最も近い。しかし、《張総管墓誌銘》（55歳、北京故宮博物院蔵）、《湖州妙嚴寺記》と比較すると、同じ字形はあっても、全体に字の円やかさや墨調が一致しない。ゆえに、書風から本作は王連起氏説より5年程度早く、おおよそ大徳七年(1303)

から大徳十一年（1307）頃の作品ではないかと考える。換言すれば、これは趙孟頫晩年の作品ではなく、行江浙等处儒学提举在職中（1299～1309）に書いた作品であると推定される。

五、《嵇叔夜与山巨源絶交書》

先述したように《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖は趙孟頫が66歳に書いた《北京故宫博物院本》に依拠して拓されたもので、字形は同じだが、行立ては変えられている。《北京故宫博物院本》は絹本で、1文字約1センチ強である。黒い罫線が引かれ、楷、行、草、章草体が混在している。34歳頃から37歳頃に書かれた《禊帖源流》では楷書、行書、草書3種類の書体が混在しており、2種類以上の書体を使いながら作品を完成させる傾向は66歳時でも変わっておらず、これが趙孟頫独特の作法となっていることが判明した（第四章参照）。

本作を見ると、用墨は濃淡の変化が激しく、結字は方正、「耳」「耶」などの字形が時に長く伸ばされる。字と字の間に連綿の書き跡が著しく、全体の変化が非常に多様であり、時に「人」「吝」「也」のような衰えとも受け取れる筆線の揺れも認められる。この66歳の時の作品にはいくつかの特徴が見られる。例えば、「延」「廷」の「乚」の交差する右払いが左に張り出しておらず、「通」「道」の「辶」に見られる右払いの線が右の字の末端と繋がっている【表5】。これらの特徴は今後の趙書の編年に対しても示唆を与えるものであろう。

第四節 《宝雪斋趙帖》の法帖史的位置

《宝雪斎趙帖》の中国法帖史の位置を探るために、本節では乾隆帝御製《三希堂法帖》及び民間の梁清標による《秋碧堂法帖》所収の趙孟頫書法と比較したい。

一、《三希堂法帖》との比較

すでに王連起氏が《三希堂法帖》所収の趙孟頫書法の肉筆本の所蔵地から真偽、模刻の様子まで全般的に論じているが³³、《三希堂法帖》所収の趙孟頫法帖の真偽については、更なる検討の余地がある。例えば、国立故宫博物院所蔵の《朱子感興詩》もその一つである³⁴。王連起氏の研究を参考し、《三希堂法帖》所収の趙孟頫書法を分類すると、全 62 点のうち、題跋が 7 点、尺牘が 41 点（3 点は管道昇の代筆）、その他の作品が 14 点ある。その研究結果は下記 3 点にまとめられる：

1、真偽失鑑（真偽についての鑑察が疎かである）が多すぎて、偽帖が 3 割を超えている。

2、移行換位が激しく、行の流れや神韻に大きな影響を与えている。

3、題跋と収蔵印記に恣意的な選別があり、印文の位置も正確ではない。

《宝雪斎趙帖》にも 2、3、のような現象はあった。しかし、1、については先述のように、《宝雪斎趙帖》及び収められた 5 点の作品を全般的に考察した結果、宝雪斎主人は決して真偽失鑑の収蔵者ではないと考える。

³³同前掲注 2、王連起「談三希堂法帖所刻趙孟頫書」『書法叢刊』第 10 輯、頁 76～94 を参照。

³⁴李郁周氏は、《朱子感興詩》は後人の偽作だと断定している。詳細は李郁周「趙孟頫朱子感興詩墨跡卷考述」『趙孟頫国際書学研究会論文集』（上海書店出版社、1994）、頁 184～203 を参照。

二、《秋碧堂法帖》との比較

《秋碧堂法帖》については図版がすでに出版・公開されており、これに所収された《黄庭経》帖、《太上老君説常清静経》帖、《洛神賦》3点の法帖については先行研究が5本ある³⁵。以下でその3点の法帖について分析をしたい。

(一)、《秋碧堂帖本》の《黄庭経》には落款がない。賀保銀編『秋碧堂法書』一書では趙孟頫書と分類されているが、その他の先行研究は宋高宗趙構の書法とみなしている³⁶。しかし、どれもその根拠を述べていない。そこで、歴代著録及び現存する宋高宗の書法を通覧しているところ、書風が大きく異なる上、《黄庭経》にある「紹興」印も偽印であるため、《秋碧堂帖本》の《黄庭経》を宋高宗書とするのは不適切であろう。現存する伝趙孟頫書《黄庭経》は、北京故宫博物院と国立故宫博物院に各1本の肉筆本が収蔵されているが、どちらも偽作だと思われる³⁷。もう1本は《大徳五年本》の《黄庭経》もあ

³⁵同前掲注1、容庚編『叢帖目』一、頁379～384。林志鈞「秋碧堂法帖」『帖考』（華正書局、1985）、頁183～196。傅申「趙孟頫書小楷常清静経及其早期書風」『書史与書蹟：傅申書法論文集』一（国立歴史博物館、1996）、頁183～189。宮坂直樹「法帖と秋碧堂法書」『季刊 書道ジャーナル』第61号（書道ジャーナル研究所、2000）、頁33～38。許国平「秋碧堂帖考略」『書法叢刊』総第96期（文物出版社、2007）、頁62～69を参照。

³⁶前掲した容庚、林志鈞、宮坂直樹氏、許国平氏は宋高宗を作者としたが、理由は述べていない。

³⁷《国立故宫博物院本》については、前掲注14、拙文「元趙孟頫書〈禊帖源流〉卷賞析」『故宫文物月刊』第329期、頁72～75を参照。《北京故宫博物院本》は、2011年6月国立故宫博物院で実見した。結体や線質の弱さ、筆法の単調性、作品中に不明な空白があるなどの点から、趙孟頫の真跡とは考えにくい。しかし、現在、国立故宫博物院、北京故宫博物院ともに真跡として扱っており、その解説については陳韻如「元黄公望跋趙孟頫楷書臨黄庭経」『山水合璧 黄公望与富春山居図特展』（国立故宫博物院、2011）、頁313と王連起編『故宫博物院藏文物珍品大系 元代書法』（上海科学技術出版社、商務印書館（香港））、頁58～59を参照。

るが、現時点では目睹に及ばず、今回はこれについて触れない。上記 3 帖と《秋碧堂帖本》の《黄庭經》はともに別本だが、《秋碧堂帖本》の《黄庭經》は書法の面から宋高宗でも趙孟頫でもなく、根拠のない偽作と判断せざるを得ない。

(二)、伝趙孟頫書《太上老君說常清静經》帖の肉筆本は現在、米国のフリーア・ギャラリーに所蔵されている。どの先行研究でも真跡だとしているが、40 歳以前の趙書とは風格が異なる。現時点では絶対的な証拠がないため、偽作とは断じ得ないが、疑問の残る書跡である³⁸。

(三)、現存する趙孟頫書《洛神賦》は計 3 点を確認した³⁹。そのうちの一つである《秋碧堂帖本》の《洛神賦》の款識を見ると、これは趙孟頫が張清夫（張淵）のために書いたもので、紀年は無いが、張榘（南宋・景定元年～元・泰定二年、1260～1325）ら 4 人の跋より、およそ大徳二年（1298）頃の作品だとわかる【図 1 2】⁴⁰。また、《秋碧堂帖本》の《洛神賦》と《北京故宫博物院本》は国立故宫博物院所蔵の《前後赤壁賦》冊と書風が近いため、《秋碧堂帖本》の《洛神賦》は真跡による法帖の可能性が高い。上記 3 点のうち、《黄庭經》帖は偽、《太上老君說常清静經》帖は疑問の残る書跡、《洛神賦》帖は真という考察結果となった。

³⁸本作の真偽についてはすでに考察した。拙文「伝趙孟頫書常清静經の真偽について」『書芸術研究』第 1 号（筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2008）、頁 29～44 を参照。

³⁹同前掲注 37、王連起主編『故宫博物院蔵文物珍品大系 元代書法』、頁 97～99、頁 132～135 と大阪市立美術館編『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（読売新聞社、2003）、頁 40～43 を参照。

⁴⁰学古斎は張榘（1260～1325）の書斎である。また、この題跋は元代の大徳年間（1297～1307）初期における、一群の文人の交友関係を知るための資料にもなる。また、張淵、張榘は趙孟頫が亡くなる一年前の至治元年（1321）書《趙孟頫為隆教禪師寺石室長老疏》にもその名が見られる。図版は許洪流、劉遠山主編『趙孟頫為隆教禪師寺石室長老疏』（浙江人民美術出版社、2003）を参照。

乾隆帝御製《三希堂法帖》や梁清標《秋碧堂法帖》は、従来、清初屈指の名法帖だとされてきたが、所収されている趙孟頫書法の法帖はすべてが真跡によるものではないと判断できる。それに対し、《宝雪齋趙帖》はそれほど有名ではないが、その価値は決して他作に劣らず、《宝雪齋趙帖》を見直す余地は充分にある。

小 結

以上、論題が多岐にわたったので、要約を兼ねて結びたい。

考察の結果、《宝雪齋趙帖》に収められた5帖の肉筆本は、4点が乾隆帝までに、1点が遅くとも宣統帝の時までに清内府に収蔵されていたことが明らかに、王壮弘氏の言うような民間の偽作ではないと考える。

《宝雪齋趙帖》に所収された5帖は、4点は真跡による可能性が非常に高く、書齋名の宝雪の由来とも考えられる。宝雪齋主人は故意に他人の跋を割愛し、趙孟頫及び孫趙麟の作品のみ選別して上石したと思われる。当時、張伯英氏は趙孟頫法帖の作品選別を批判しているが、これは妥当とは言えない。

現存する真跡の《禊帖源流》、《閒居賦》、《嵇叔夜与山巨源絶交書》の肉筆本を法帖にしたものは《宝雪齋趙帖》のみである。《襄陽歌》帖と《勉学賦并序》帖はこれまでの研究にはない新しい作品であり、そうした面からも資料的価値が高い。

本論は、従来の趙孟頫書法研究において等閑視されてきた《宝雪齋趙帖》が、実は信頼できる趙孟頫の墨跡が反映されていることを論証したものであり、趙孟頫書法法帖史における同法帖独自の価値を明らかにし、肉筆書法の真偽編年を鑑別する際の新しい視角を提起している。

《禊帖源流》帖の編年については、34歳頃から37歳頃まで、《閒居賦》帖

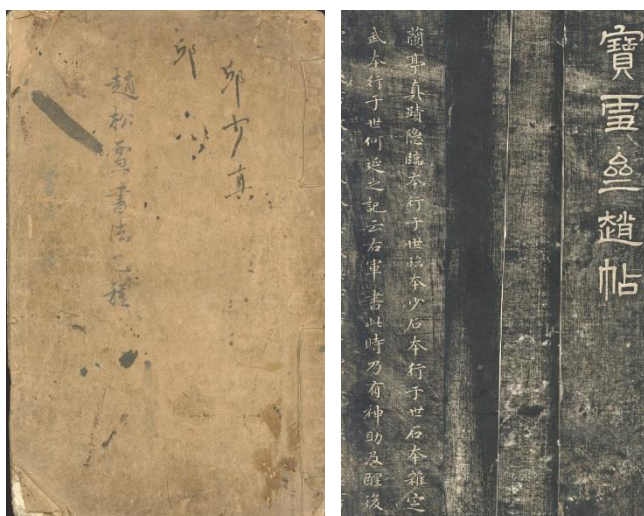
は50歳から54歳、《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖は66歳、《勉学賦并序》帖は68歳、《襄陽歌》帖は真跡ではない可能性があるという考察結果となった。

《宝雪斎趙帖》中の「玄」字の欠筆は、康熙帝以降に避諱したためだと考えられ、これは、《宝雪斎趙帖》の成立時代が康熙五十七年（1718）である有力な裏づけとなる。

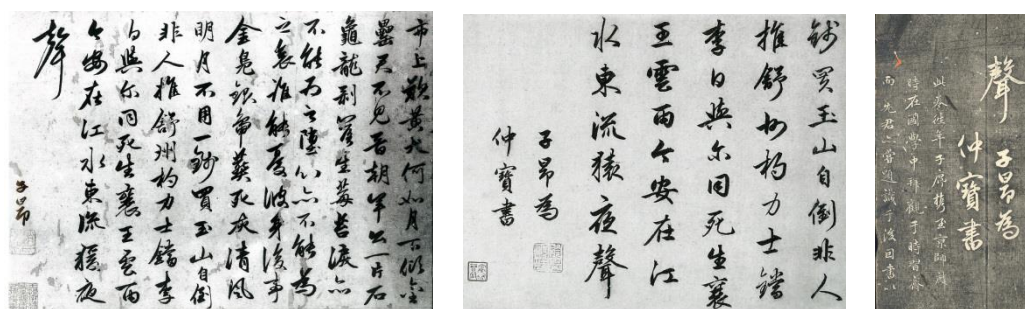
《宝雪斎趙帖》及び所収5点の法帖の現状をまとめると【図13】のようになる。

瑞応律院はどのような場所で、宝雪斎主人とはいかなる人物で、そしてどのようにしてこの5点の作品を手に入れ、刻手は誰だったのかも興味深い。現時点では明らかにできないが、今後もそれらの解明に努めたい。

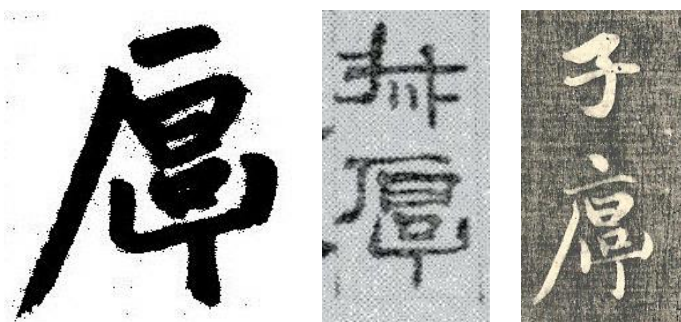
【图1】《宝雪斋赵帖》の封面と冒頭



【图2】左：《北京故宫本》、中：②《香港中文大学文物馆本》右：《宝雪斋赵帖》
《襄陽歌》帖の款記



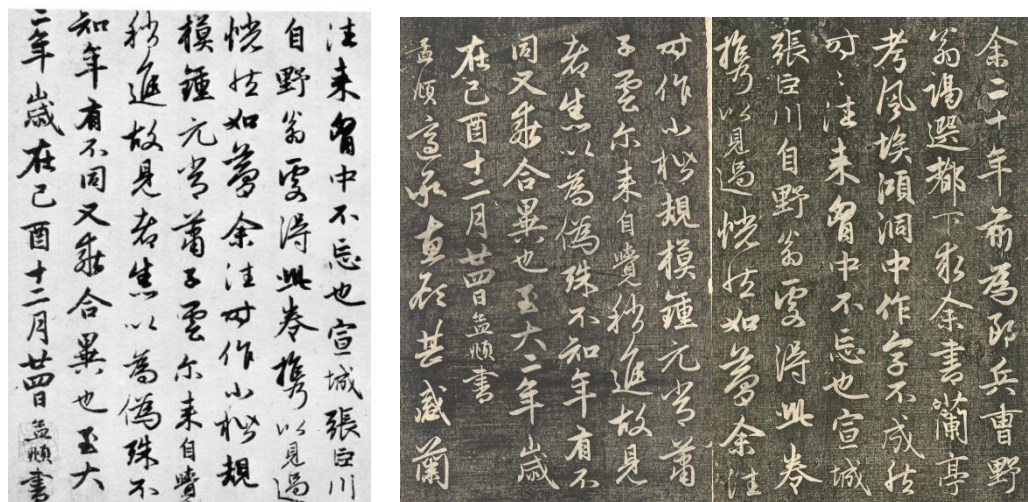
【图3】左：《杭州福神觀記》、中：吳叡《隸書九歌》跋、右：《宝雪斋赵帖》
《襄陽歌》帖、趙麟跋



【図4】左：《北京故宫本》、中：《宝雪斋赵帖》《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖、
右：《三希堂法帖本》



【図5】《禊帖源流》肉筆本（左）と《宝雪斋赵帖》《禊帖源流》帖の趙孟頫款記（一）



【図6】《禊帖源流》帖の章法 【図7】《賀捷表》と《禊帖源流》帖の「亭」



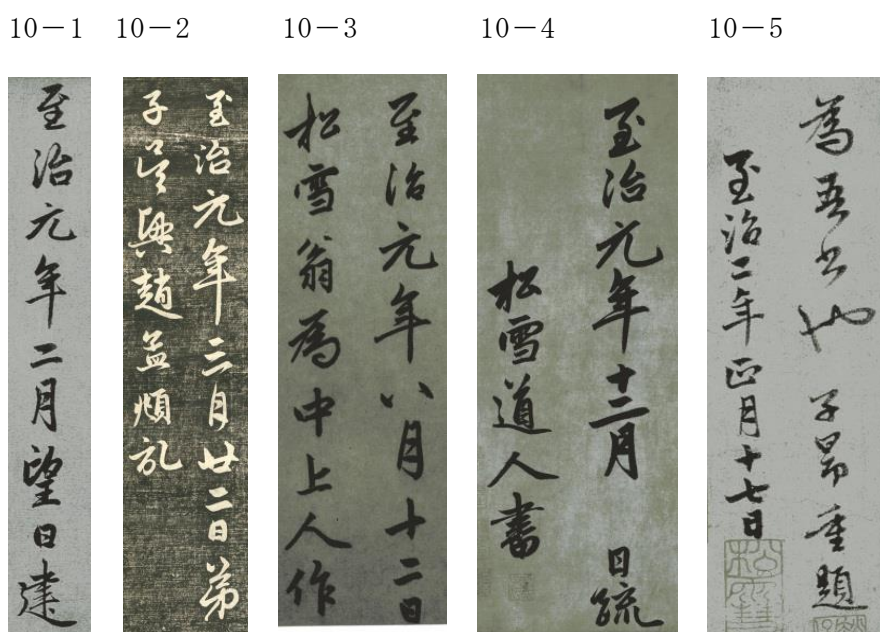
【図 8】《禊帖源流》肉筆本と《禊帖源流》帖の字形比較



【図 9】《禊帖源流》肉筆本と《禊帖源流》帖の字形比較



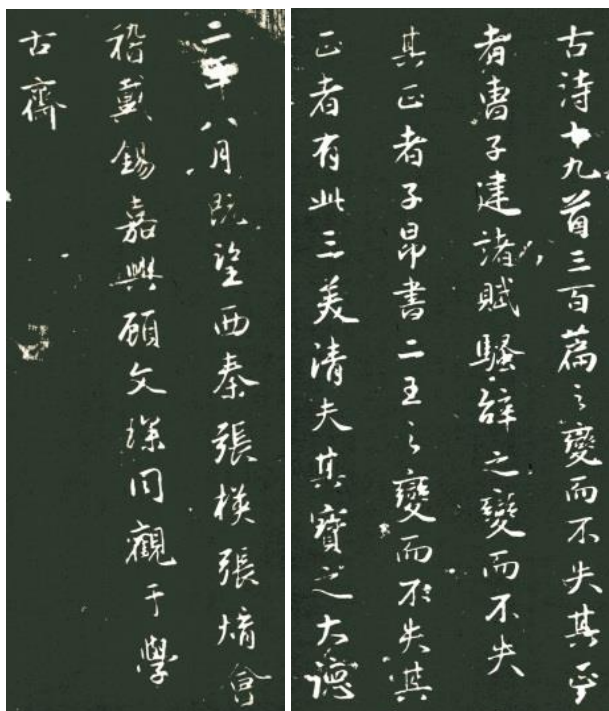
【図 10】至治元年、二年の趙孟頫款記の比較



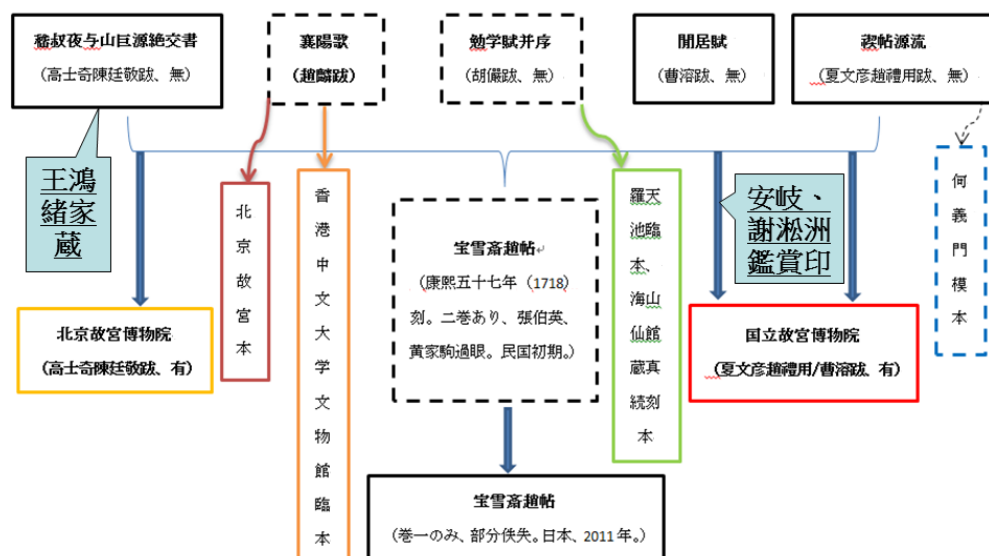
【図 11】《宝雪齋趙帖》《閒居賦》帖の「玄」字の末点が欠けている



【図 1 2】《秋碧堂帖本》《洛神賦》の張模等 4 人の跋








【図 1 3】《宝雪斎趙帖》所収 5 点の法帖の現状



【表 1】3 種類の《勉学賦并序》伝本



字数	全 1821 字	全 1912 字	全 1363 字
No.	中華大蔵経本	趙帖本	伝羅天池臨写本
1	今人負学道	今人学道	今人学道
2	蓋由生死之念	由死生之念	由死生之念
3	故作而為賦	故作斯賦	故作斯賦
4	不容佗大	不容他大	不容他大
5	此宗之無諾	此宗而無諾	此宗而無諾
6	包八萬劫	包萬劫	包萬劫
* 7	隱一千如之	隱三千之	隱一千如之
8	粥肝心而忍厥	粥心而罔及	粥心而罔及
9	五熱炙身	五熱炙心	五熱炙心
*10	身世両志於	身世相於	身世相忘於

【表 2】《宝雪斎趙帖》《襄陽歌》帖独特な用筆と字形

沒、漢		兒		籬	
鷓、鷓		問		醉	
鸚、鵲		峴			
金	 右：《亡女帖》	翁			

【表3】《宝雪斋赵帖》《勉学赋并序》帖と《伝羅天池臨写本》の落款









番号	年代	作品名	趙、頰
1	1312(59歳)	十一札一呉門帖	 
2	1319(66歳)	十一札一俗塵帖	 
3	1319(66歳)	十一札一南還帖	 
4	1319(66歳)	十一札一丹藥帖	 
5	1319(66歳)	十一札一醉夢帖	 
6	1319(66歳)	十一札一両書帖	 
7	1319(66歳)	十一札一還山帖	 
8	1320(67歳)	十一札一山上帖	 
9	1320(67歳)	十一札一入城帖	 
10	1320(67歳)	十一札一塵事帖	 
11	1321(68歳)	《勉学赋并序》帖	 

12	1321 (68 歲)	《伝羅天池臨写本》	
13	1322 (69 歲)	十一札一瘡痕帖	

【表4】趙孟頫書《閒居賦》の可能な制作年代

	疇/禱/壽	也/他	于/乎/呼	シヽニヨウ	長/張
前後赤壁賦 (1301)					
三清殿記 (1303)					
三門記 (1303-5)					
洛神賦(約 1303)					
閒居賦(無 紀年)					
周易繫辭 (1305)					
宝雲寺記 (1307)					
張総管墓誌 銘(1308)					
妙巖寺記 (1309)					

【表5】趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》の用筆と字形

人		延、廷	 	人	
各		通、道	 	各	

図版出典

【図1】、【図2】右、【図3】右、【図4】中、【図5】右、【図6】、【図8】、
右、【図9】右、【図10-2】、【図11】右

…剪装本。出版社、出版年不詳。個人蔵。

【図2】左：《北京故宫本》、中：《香港中文大学文物館本》

…『中国碑帖与書法国際研討会論文集』（香港中文大学文物館、2011）、頁
280、281 を参照。

【図3】左：《杭州福神觀記》、中：吳叡《隸書九歌》跋

…王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大觀』上（上海人民美術出版社、1995）、頁
231。徐邦達『古書畫鑑定概論』（文物出版社、1981）図版五を参照。

【図4】左：《北京故宫本》、右：《三希堂法帖本》

…王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』（上海科學技術出版
社、商務印書館（香港）、2001）、頁125。張順芝、林為民、高觀鎖編『三
希堂法帖』卷3（北京日報出版社、1984）、頁1370 を参照。

【図5】左：《禊帖源流肉筆本》

…黃惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮寶齋出版社、2002）、
頁88 を参照。

【図7】左：鍾繇《賀捷表》

…『中国法書選 11 魏晉唐小楷集』（二玄社、1990）、頁11 を参照。

【図8】、【図9】左：《台北故宫本》

…同前掲【図5】、黃惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁80
～88 を参照。

【図10-1】

…同前掲【図3】左、王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大觀』上、頁271 を参

照。

【図 1 0 - 3】

…上海書画出版社編『趙孟頫画集』（上海書画出版社、1995）、頁 121 を参照。

【図 1 0 - 4】

…許洪流、劉遠山主編『趙孟頫為隆教禪師寺石室長老疏』（浙江人民美術出版社、2003）、頁 12 を参照。

【図 1 0 - 5】

…同前掲【図 5】、黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁 71 を参照。

【図 1 1 - 左】

…黄惇主編『中国書法全集 元代 趙孟頫二』44（榮宝齋出版社、2002）、頁 425 を参照。

【図 1 2】

…賀保銀編『秋碧堂法書』（河北美術出版社、1984）、頁 217～218 を参照。

【図 1 3】

…筆者作成

終 章

序

本論は主に五つの章節より構成するものである。これらを通して序章で提起した、(一)：趙孟頫の書法の年代的变化は、どのように時期区分され、どのような背景のもとにその変化が起こったか、(二)：趙孟頫の書法には、遺品の書体や形式、文書としての性格にかかわらず、共通した年代的变化が認められるか否か。また、なぜそのような変化が生じたのか、(三)：趙孟頫の書法の年代的变化には幾つかの分期が認められるが、その中に最も大きな画期があるとは考えられないか、以上の3点に注目して考察を進める。以下ではまず研究成果について章単位で整理し、更に中国書法史における趙孟頫書法の意義について私見を述べていきたいと思う。最後は、本研究後に考えるべき分期論の妥当性と限界、今後の課題をいくつか取り上げ、結論に導きたい。

第一節 各章の研究成果の整理

一、趙孟頫書法の年代的变化にみる時期区分とその背景

本論では、碑文書法の楷書から小楷書法、行草書への章草体混用、四書体混用、異なる性格を有する遺品4種を書体別に検討した。その結果、それぞれの分期の年代が一定でないことがわかった（碑文書法：6期、小楷書法：3期、行草書への章草体混用：3期、四書体混用：4期）。その背景には：

1. 遺品の数量は多く、書体別で分析した場合、制作年代が継続したものにはならず、時期区分も一定しなかった。
2. 各遺品はその性格や表現が多様で、書法的表現にも年代的な変化が見られた。
3. 年齢や書写経験を重ねたことにより、随時、新たな養分、新たな表現手法を取り入れようとしたのが作品から看取できる。

更に細かく説明すると、第一章では趙孟頫の碑文書法 188 点を整理し、書風の変化をおよそ 6 種類に帰納した。これらの変化の一部は趙孟頫が各時期に学んだ書の影響、或いは独自の書表現の発現に関連すると思われる。一例を挙げると、《鮮于府君墓誌銘》の書法は鍾繇に由来し、《空相寺碑》は褚遂良より来ていることは一目瞭然である。しかし、立碑文化が隆盛だった元代、50 歳から 52 歳まで過ごした南方で開花した《二稿》は、趙孟頫独自の碑文書法の確立を意味し、その後に制作された碑文書法のほとんどはこの二稿をもとに制作されたものと言える¹⁾。趙孟頫の碑文書法の各時期における書風成立の背景については、《淳化閣帖》、《集字聖教序》、唐人の楷書書法の影響のほか、同時代の書人の影響を受けた可能性も考えに入れるべきである。鮮于樞と趙孟頫の交友関係なくしては、趙孟頫が李邕《岳麓寺碑》を過眼することもなく、李邕の碑文書法の受容も考えられない。また、趙孟頫と鮮于樞書法の類似性から見れば、お互いに直接的または間接的に影響しあったことも十分に考えられるが、これまでの研究はこの点について関心が浅く、趙孟頫の 50 歳頃、あるいは晩年の書法は李邕書法の影響が大きいという見方は、本格的な検討がされないまま、単に宋濂の三分期説か董其昌や陳繼儒の

¹⁾ 2 点ほど例外的書法が見られる。本論では、《靈隱大川濟禪師塔銘》稿は智永《真草千字文》の受容であり、《光福寺重建塔記》稿は四書体混用における再展開期の書表現の影響を受けた作品とした。

言説を踏襲する傾向が一般的であったことを指摘した。

付節では文献学的見地からの具体的な検証によって、《二稿》の《玄妙觀重修三門記》稿は大徳七年（1303）から大徳九年（1305）にかけて、およそ50歳～52歳の間に制作されたものと考えられ、この二年間に絞れることを明らかにした。このように裏付けのある具体的な編年は、目鑑のみで推測された過去の研究成果から一歩前進できたと思う。また、字形を比較することにより、《二稿》と《麓山寺碑》、《鉄仏寺碑》の異同を検証し、董其昌と陳繼儒の説が必ずしも正しいとは言えないことも指摘した。

第二章では王羲之《快雪時晴帖》後の《趙跋》を基準作、《道生神章經》を準基準作として、趙孟頫の小楷書法の真偽、編年、分期を再整理した。本章では、趙孟頫50歳以降の小楷7点を中心に検証を進めたが、これまで真跡とされてきた作品、または真偽二説ある遺品も真跡とするには難があり、後人による偽作の可能性が高いことを提起した。また、趙孟頫の小楷書法に共通する特徴を基にして3期に時期区分した。第1期では鍾繇書法の受容が明らかであるが、第2期は鍾繇書法の受容が薄れ、唐人書法の縦長の結体、転折、圭角が見られるようになった点が特徴的である。第3期に至って独自の風格が確立された。第3期を書風確立の時期としたのは、結体や用筆の多くが50歳～52歳の間に確立された碑文書法に見られる特徴と近似しているからである。

第三章では、趙孟頫における行草書への章草体混用を中心に検討した。この類の書風は3期に分けられる。章草の用筆や結体を行草書書法に投入した第1期では、《眠食帖》や《淳化閣帖》の受容が最も大きな要因ではないかと思われる。その後、「雑体書」書法は一時期潜伏したように見えるが、55歳以降に再び顕著になる。一つの作品に一文字のみ章草体を使用しており、こうした手法によって作品の古意を高めようとしたのは、南宋時代の書法を踏

襲したのではないかと考察した。張孝祥の作品にも同様の手法が確認できることから、このような作品を過眼し、自作に反映させた可能性もあることを指摘した。このような書表現は、趙孟頫が60歳以降にしたためた、中峰明本和尚宛ての尺牘のみに集中している。あくまで推測だが、中峰明本だけにこの書法を披露したのは、二人の間に書学上の切磋琢磨があったからではないかと思われる。

第四章では、趙孟頫30歳代以降の四書体混用を4期に整理した。55歳の《李衍墨竹図》巻末の趙孟頫の跋文を概観し、4種類の書体を意図的に混用する作意的な書表現を第3期とした。このような書風が生まれた要因や背景は行草書への章草体混用の書風に近く、南宋の伝《王維伏生授經図》巻末にある呉説跋文の書表現から影響を受けたものと思われる。しかし、晩年の第4期、66歳以降になると、1千文字以上の長編作品を揮毫する際、それまで一つしか入れなかった章草体を多数用いるようになる。行草書、楷書、章草体4種類の書体を混用する手法は、元代以前の書法史上には見られない、趙孟頫独自の表現手法であることをここで指摘した。北京故宮博物院所蔵の趙孟頫書《嵇叔夜与山巨源絶交書》がその好例である。そして、筆者がこの《北京故宮本》を鑑定した結果、趙孟頫と関係する現存の遺品《嵇叔夜与山巨源絶交書》7点中で唯一の真跡で、《宝雪斎趙帖》所収の《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖のみが《北京故宮本》による拓本であることが明らかになり、その詳細を本章に記した。

本章の終わりで北京故宮博物院所蔵の《高峰和尚行状》の編年についても筆者の見解を述べた。先行研究はこの作品を壮年または60歳以降の作品だとしているが、論拠となる史料などの提示はなく、再調査の必要性を感じた。《北京故宮本》や《勉学賦并序》帖と同じ書風と表現手法が看取できる点から、最晩年の66歳以降の作品の可能性があり、本章研究の展開と意義を提示

した。

第五章では、筆者所蔵の《宝雪斎趙帖》について考察を行った。その結果、作品 5 点のうちの 4 点—《禊帖源流》帖、《勉学賦并序》帖、《閒居賦》帖、《嵇叔夜与山巨源絶交書》帖は真跡によった法帖で、残る 1 点《襄陽歌》帖は偽作の可能性のあることを提起した。このうちの一つ《勉学賦并序》帖は、現存する《勉学賦并序》墨跡本が偽作であることを証明するに足るもので、第四章で提起したように、四書体混用の書法が変遷する過程において、66 歳から 68 歳にかけて最晩年に至った趙孟頫が改めて「雑体書」書法の再展開を試みたことを証明する、重要な史料の一つになり得るものである。

二、趙孟頫の書法作品群に共通した年代的变化

過去の研究には、趙孟頫書法の横方向の繋がりについて触れたものがほとんど見られない。ここでは、作品群に共通する年代的变化について述べたい。

まず、30 代の頃の趙孟頫が、碑文書法でも小楷書法でも鍾繇書法から大きな影響を受けていたことは、本論の第一章と第二章で文献と作品両面から検証できた。それに対し、行草書への章草体混用と四書体混用の書表現は、《真草千字文》と《淳化閣帖》の影響が大きかった。また、50 歳から 52 歳頃に確立した《二稿》の碑文書法に多用した側筆の筆法は、碑文書法だけではなく、尺牘類や題跋類、詩翰類の書表現にも多く活用しており、これは年代的变化における第一の共通点である。このような線質の均一性、重量感ある用筆法は、40 代までの作品とは大きく異なる特徴とみなすことができよう。

第一章では碑文書法を中心に検討したが、全ての遺品が《二稿》のような筆法で揮毫されたのではなく、最晩年の《光福寺重建塔記》稿がその一例として挙げられる。本作にも最晩年の四書体混用の表現があり、少し抑えてい

るようにも見えるが、行書、楷書、独草体、章草体、四つの書体を混用した作品であることが改めて確認できた。前述したように、趙孟頫は最晩年に四書体混用を再度展開したわけだが、逝去前年（68歳）の作品を見ても、碑文書法にまで極力章草体を応用しようとした意図が感じられ、そうした痕跡が看取できる。最晩年の作品のほとんどに章草体の活用が見られ、「雑体書」書法が全面的に甦った感があり、これが年代的变化における第二の共通点であることを指摘した。

以上のように、年代的变化における第一、第二の共通点は、30代の頃に鍾繇書法を受けた影響、つまり擬古主義によった表現とは異なり、作品に対する趙孟頫独特の美意識の変遷に由来するのだろうと思う。この二つの共通点は誇張した表現ではなく、三国・魏から元代にかけての古典的名跡を意識的に選択し、独自の書法を作り出すために必要なエッセンスを抽出し、随時自分の書法に投入したのが看取できる。これらの作品は時系列の変遷が明確であるだけでなく、その背後には趙孟頫の美意識の推移も見られる。その結果、趙孟頫の書法は型通りの単調なものではなく、表現の幅も広く非常に多彩なものとなったのであり、その点が改めて認識できた。

三、趙孟頫書法の年代的变化における二つの画期

趙孟頫の書法を全体的に考察した結果、過去から積み重ねられた擬古主義と、それを踏まえて革新を重視した姿勢によって、書体ごとにいくつかの分期が見られることは先述したとおりである。しかし、もう一步を踏み出して考えなければならないのは、50歳～52歳の頃の碑文書法と66歳～68歳の四書体混用の確立という「古」と「新」を区切る画期的な書表現の成立時期である。これは、中国書道史上だけではなく、趙孟頫の書法を代表する書表現

でもあるため、慎重な検討が必要である。

50 歳から 52 歳に江南滞在中に確立された碑文書法は、元代においても、趙孟頫自身の書法においても極めて個性的な表現であり、後の碑文書法の書写技法の基本的法則ともなった。これは、楷書の典型だとされる唐代の書家—初唐の欧陽詢、虞世南、褚遂良三大家（または薛稷を含む四大家）や顔真卿、柳公権の楷書にも劣らない。趙孟頫が古代の名家と並び称されるほどの楷書体を確立したことは、画期的な創造だったと言える。一方、行草書への章草体混用と 60 代前半までの四書体混用の書表現を比較すると、章草の古典から南宋、周辺人物の受容によったもののようにも思えるが、趙孟頫は更にそれを強化している。文字数が多い作品に四書体混用を強調した最晩年の展開は、中国書道史では前例のない非常に重要な出来事だったと言える。なぜなら、元代以前からそれ以降、1 千文字以上の書法に四つの書体を用い、作品の中ほどに章草体①を投入した作品はほとんど確認できないからである。元人の康里巎巎や明人の文彭のように飛び抜けて傑出した作品は確認できるが、彼らの作品からは、趙孟頫のように長い間章草を臨池し、作意的でありながら自然に書風を創造できた書学的背景や、書風変遷の過程は認められない。新たな書風の誕生は、趙孟頫自身のみならず、中国書法史にとっても極めて革新的な出来事だったと言える。

四、保守的な古典主義における革新—中国書法の本質—

上述した研究成果の一から三まで振り返った今、以下のように思う。中田勇次郎氏は中国書論史における金元時代の書法史をめぐって、元人の書から

元人の書論、元人の書法三方面に亘る論考を発表している²。中田氏の論によると、元代の書法は全体的に保守的かつ伝統的な風潮下にあり、晋唐に終始する古典論が大きく巾を取っていた。その筆頭が天才的な古典作家の趙孟頫であるとして、保守の風潮が強かった要因を分析している³。一方、黄惇氏も趙孟頫の書法を考察し、「古典主義的書風因趙氏の提倡、籠罩了整个元代、继而延续至明代中期。这是书法史上的一个转折。」と中国書法史における趙孟頫書法の意味をこのように捉えている。基本的には筆者も中田氏と黄氏の言説に同意するが、趙孟頫の書法はただ単に古典主義的、天才的だとは言い切れない部分がある。古くから「臨古」、「則古」は書人独自の書を作り出す手段の一つであり、趙孟頫も丁寧に臨書を繰り返したため⁴、遺品にある字体はほぼ全て古典から見出すができる⁵。その学書の内容は本論文で提起した章草を始め、晋・唐から当代の書法まで様々である。しかし、趙孟頫が古典の筆法と結体を学んだのは形の上の話であり、最晩年に見られる四書体混用の再展開の章法、書表現へのこだわりと美意識はもはや古典から来たものではなく、自ら創造したものであろう。その背後には、長期に渡り継続して揮毫しながら漸進的に自分の書法をより豊かなものにし、更なる革新を試みた結果、古典書法の要素を基に自分の書に新たな命を注ぎ込んだ、革新的な姿勢が窺える。この書法観を実現する舞台は変革を進めた行草書への章草体混用と四書

²中田勇次郎「中国書論史（四） 金元」『中国書論大系 第七卷・元1』（二玄社、1982）、頁6～28を参照。

³同前掲注2、中田勇次郎「中国書論史（四） 金元」『中国書論大系 第七卷・元1』、頁28を参照。

⁴趙孟頫は最晩年の68歳の時に、《臨右軍樂毅帖跋》に自分の臨書観「臨帖之法、欲肆不得肆、欲謹不得謹、然與其肆也寧謹、非善書者能知也。」を書き残している。詳細は趙孟頫著、黄天美点校『松雪齋集』（西泠印社、2010）、頁314を参照。

⁵吉川蕉仙氏は王羲之と趙孟頫の書書の近似性について仔細に比較をしており、その比較資料を示している。詳細は同氏「趙孟頫は羲之を超えたのか」『中国法書ガイド 元 趙孟頫集』49（二玄社、1989）、頁24～28を参照。

体混用の再展開期に位置する、四つの書体を用いた長篇、長卷だったに違いない⁶。このような書表現は、元代はもちろんのこと、中国書法史を通して見ても同様の表現は見られない。一時期、趙孟頫と対峙していた鮮于樞は早逝したため、書史に残るほどの「鮮体」を創出することなく終わってしまった。元以降は一部の書家、例えば、元人の康里巎巎から明人の文彭などの作品のように、狂草書と章草体を混用する「雑体書」の作品が見られ、型通りの書表現から脱却しようとする試みがあつたことは確かである。こうした状況から判断するに、趙孟頫の影響は元代中末期から明代中期まで続いていたと考えるのが妥当であろう。要するに、趙孟頫の書学に対する姿勢や書表現は決して保守的、伝統的、天才的などと単純に言い表せるものではない。更に言えば、趙孟頫の書法は内面的、持続的、累積的、戦略的、意識的に古典作品と当代の書法を巧みに融合したものであり、自身の書風とその本質を全面的に革新し続けた結果、生み出された表現なのである。これこそまさに中国書法の本質を表すものだと言えよう⁷。趙孟頫以降の書家はこのような内在的な書の本質、書の変遷過程を疎かにした傾向があり、彼らが目にしたもの、学

⁶黄惇氏は趙孟頫の長篇長卷の書法表現には批判的である。黄氏は「但在這種量大而快速的書寫中、必然出現少變化和少生趣的現象。趙氏傳世的不少作品是具有這一現象的、所以其長篇的手卷、經卷書作、比起其尺牘短札來似要遜色一籌。而後世批評他過熟者，亦正是這種作品。」と述べている。詳細は同氏「從杭州到大都—趙孟頫書法評伝」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43（榮寶齋出版社、2002）、頁33を参照。筆者はこの意見には賛同しかねる。筆者は、最晩年に開花した四書体混用こそ、50歳から52歳の間に確立した碑文書法に続く、趙孟頫の一生を代表するに足る書法の結晶であり、趙孟頫の書法観を理解するために最も重要な集大成的作品群だと考える。

⁷黄惇氏は「明代董其昌一生以超越趙氏為目標、正是從趙氏本身超越宋人上得到的啓示、大凡書史上開派的一代宗師、都清楚前輩人的籠罩是開啓一代新風的最大屏障、因而注意師法文人書法本源。」と述べている。同前掲注6、黄惇「從杭州到大都—趙孟頫書法評伝」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、頁29を参照。ここで述べた「中国書法の本質」とは、黄惇氏の言説から発想を得たものである。しかし、この表現が表す内容と定義は黄惇氏が言うそれとは大きく異なると思われる。

んだものは表面的なものに過ぎない。中田氏の論によれば、張雨、饒介、楊維禎、倪雲林は趙書が流行するなか、別種の新しい境界に至ったというが、長いスパンで見ると書史に認められるような功績はなく、趙孟頫のように時代の潮流を生み出すこともなく、時代を超えて影響を及ぼすには至らなかった。この停滞感はあるいは、内陸に位置する華亭地区の地理環境と、董其昌が出現するまで趙孟頫の影響下から逃れられなかったことも影響しているのかもしれない。これについては稿を改めて論述したい。

第二節 今後の課題

本論は現存する趙孟頫の肉筆の書法作品、法帖、文献三方面から趙孟頫の書法を総合的に考察した。論考する際、いくつか新たな知見を提起するとともに、複数の問題点も提起した。以下、本論で触れた問題をまとめながら、今後の課題について述べたいと思う。

1、真偽未解明の趙孟頫遺品の扱い方

本論の序章と第一章で「集趙字碑」について少し触れた。そして韓国国立中央図書館所蔵の法帖がそれを明確に示していることを確認した。また、国立故宫博物院所蔵で、かつては趙孟頫の真跡とされ、後に趙肅書と判断された《元趙肅書母衛宜人墓誌》のような碑文書法も存在している。第一章では現存する趙孟頫の墨跡の碑文書法を考察したが、文献または法帖のみの碑文書法は真偽関係が未解明のまま課題として残されている。本課題の解明は容易ではなく、現時点では真跡とされている作品であっても、今後、鑑定に着手する必要があると思われる。

一方、同じような状況で、趙孟頫の押印がしばしば書法や絵画、法帖の上

に見られ、これについても序章と第二章、第三章で検討した。これらの作品には確かに趙孟頫の姓や字、雅号、書齋名の印があり、趙孟頫が過眼した文物と断言してよからう。落款の場合もそうである。第二章で北京故宫博物院所蔵の趙孟頫書《道德經》について考察した。この優れた作品はこれまで趙孟頫が揮毫したものとされてきたが、真跡であるならば、大都滞在中の趙孟頫が北方の書齋名を書かずに南方の書齋名を書いたのか理解できない。また、一部文献でしか確認できない作品、またはまだ出土していない作品、例えば、第二章で述べた台湾個人蔵の《四体千字文》や第三章で述べた張伯駒旧蔵の《章草千字文》のような作品である。ごく一部の人が目にしたのみの作品の真偽について疑問を持たずにいられない。これらの作品群も書風と法帖、文献三方面より厳密に検証し、真偽を明らかにする必要があると思われる。

2、分期説の妥当性と限界

趙孟頫書法の研究はもちろんのこと、中国各時代の書法作品の真偽、編年、分期研究は、「群盲象を評す」かのような作業である。これまで不詳だった歴史の一部は徐々に明らかになりつつあるが、未解決のまま懸案として残されている部分も少なくない。例えば、北宋四大家の蘇軾の《次韻秦太虚見戲耳聾詩》⁸や黄庭堅の《砥柱銘》⁹などは真偽二説がある。我々は限られた資料を元に、何百年、何千年も前の物語を語り、当時の出来事を推測しなければならず、これは容易なことではない。作品の文字数も少ない上に、これといった特徴もなく、孤本で、真偽も編年も判断しがたい作品に出会った際、我々

⁸李躍林氏は偽作としている。詳細は李躍林、「《宋蘇軾書次韻秦太虚見戲耳聾詩》辯偽」『東方芸術：書法』第8期（河北教育出版社、2009）、頁78～95。

⁹楊濟銘氏、陳昌全氏などは黄庭堅《砥柱帖》を偽作としている。その一例は陳昌全「關於《砥柱帖》真偽的筆迹學鑒定」『文物鑒定與鑒賞』第8期（時代出版傳媒股份有限公司、2010）、頁7～13を参照。

はほぼお手上げとなる。このような例も少なくない。これが未だに現代の分期説でも、無紀年作品の編年の問題が未解決のまま放置されている理由である。仮に古来引用されてきた分期説が正確だとすれば、なぜ未だに真偽の鑑定、編年ができないのだろうか。こうした場合は、より多くの資料の出現を待つ必要もあるだろうが、より多くの専門家が議論に加わるべきであり、真偽不明の作品に「伝」を付けても良いのではないかと考える。

3、用筆研究

文献の裏付けは確認しがたいが、趙孟頫が作品を揮毫する際、時には柔らかめの毛筆、時には硬めの毛筆で揮毫したことは作品から確認できることを第二章で検証した。趙孟頫も現下の書画家のように愛用の毛筆を持ち、作品それぞれの性格に配慮しつつ、それにふさわしい毛筆を選んで揮毫したはずである。趙孟頫は湖筆の名産地一呉興（現在の浙江省湖州市）で生まれ育った書画家なので、趙孟頫の用筆についても研究の視野に入れるべきであろう。この課題は研究成果を得にくいせいか、これまでほとんど注意されてこなかった分野であるが、注力する必要がある。

4、揮毫意識

第一章と第二章で趙孟頫の楷書にはしばしば行書や独草体の混用が見られることを指摘し、第四章では最晩年の碑文書法に章草体を投入している点について述べた。趙孟頫自身の書体への認識や揮毫意識が、後世の人々に受け入れられたか否か、どれほどの影響を及ぼしたのかは興味深い。なぜなら、この独自の美意識に基づいて後に創造され、書法史に革新をもたらした四書体混用の書法に深い関わりがあると思うからである。また、この趙孟頫独自の揮毫意識を認識できなかった偽作者が制作した作品を鑑定する際、揮毫意識

の有無が真贋を見極める基準の一つになり得る。今後も多くの新資料を発見し証明していく必要がある。

5、偽作者と偽作団体の体系化

明人の鄧韞は「趙魏公書世多偽筆。……。仿公書者四百餘家。」と記していることから、明時代にはすでに趙孟頫書法の贋作が氾濫していたと考えられ、劉九庵氏は偽作者を俞和、金琮、陸深、陳謙、詹僖の5人にまで絞り込んでいる。これについては本論の第一章と序章で述べた。ほかに、呉全節や趙肅、徐中行なども趙孟頫の書法に近いとされている。これらの書家の出身を【表1】にまとめた。

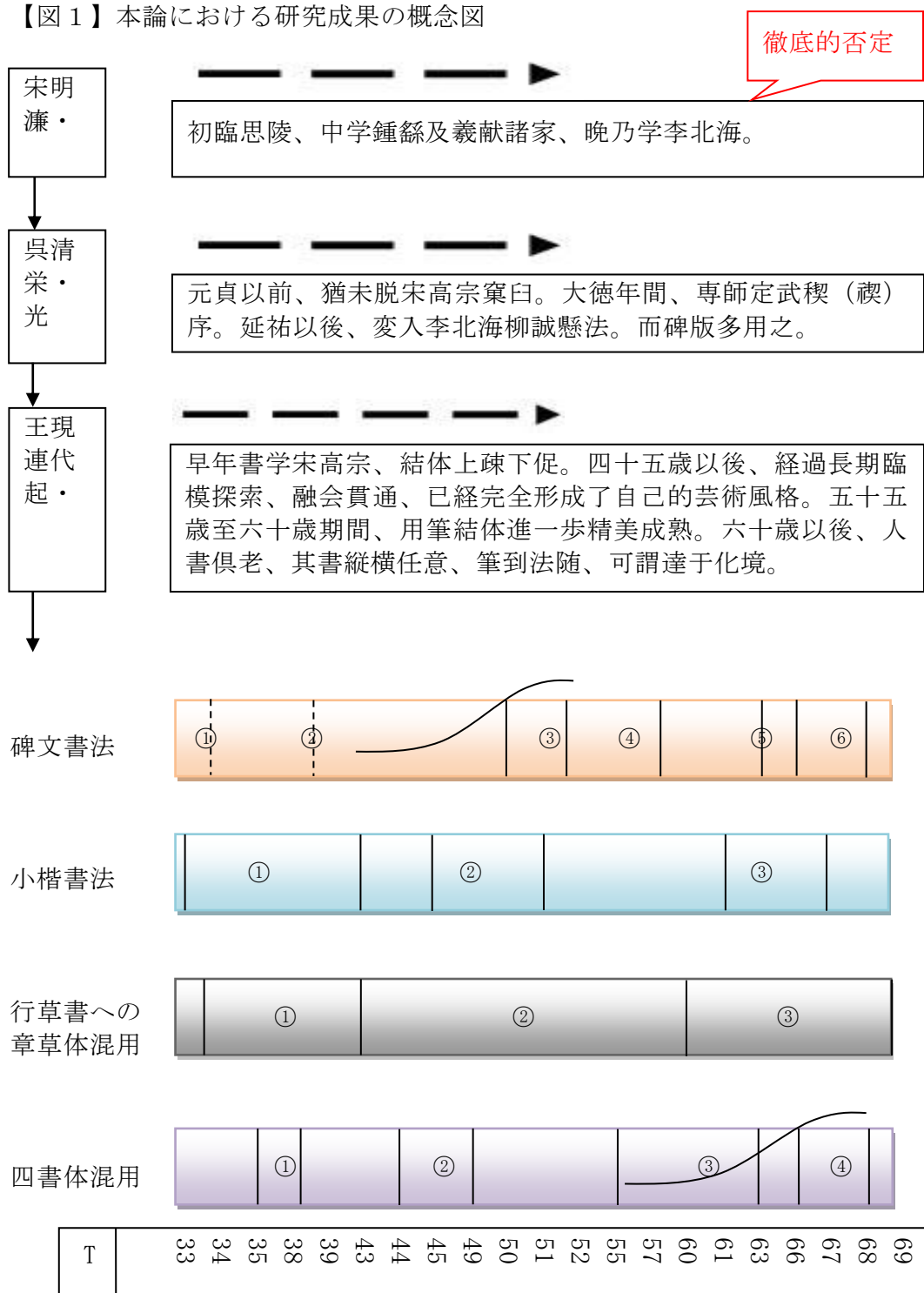
しかし、趙孟頫書法を巧みに真似て偽作を作った無名の書家については未だに解明されていない。例えば、第二章で触れた伝趙孟頫書《蘭亭修楔図》、第三章の《蜀山図歌》、《偽趙孟頫七札之一》などが挙げられる。偽作者については今後も注意すべき研究課題の一つである。《六体千字文》と《蘭亭修楔図》は、書風からこの2作に何らかの繋がりのあることがわかるが、それ以上の考察は現時点では困難を極めるため、新資料の出現が期待される。

小 結

本論は従来の三期変遷説の妥当性に着眼し、現存する遺品から、法帖（拓本）、文献資料を素材に、趙孟頫の書法を書体別（碑文書法、小楷、行草書への章草体混用、四書体混用）に分類し、真偽・編年・分期の考察から画期の位置について総合的に考察した。その結果、遺品の性格の違いによって、いくつかの分期（碑文書法：6期、小楷：3期、行草書への章草体混用：3期、四書体混用：4期）があることがわかった。作品や書風の変遷などを総括的

に見た場合、非常に重要だと思われる画期が二つある。一つ目は、《玄妙觀重修三清殿記》稿及び《玄妙觀重修三門記》稿に代表される、50歳～52歳の間に確立された碑文書法であり、本論文でその重要性を提起した。また、最晩年（66歳頃～68歳）に確立された、《嵇叔夜与山巨源絶交書》、《勉学賦并序》帖に代表される四書体混用の再展開がもう一つの重要な画期であることを提起した。この二つの画期に至るまでの背景や展開は明確にたどることができ、遺品の性格が異なるにもかかわらず、書作に用いられた技法は横方向の関連性も看取できることを指摘した。この二つの画期の内面的表現手法は異なるが、どちらも誇張した表現にはなっておらず、多重的な擬古経験を経たことと、多種類の作品の試行による独自の工夫、意図して紙面にインパクトを残した書法の背後には、書人としての趙孟頫独自の美学があることを検証した。最も重要なのは、この二つの画期は書人の独創性を強烈に示しているだけでなく、書法史を元代から古代に遡って見ても、現代に延長して見ても、時代的意義が鮮明で、画期的な書表現であることを、本論を通して明らかにできた。趙孟頫のように持続的に多元的擬古、多種類の作品制作に努めることによって構築・開拓された書表現の背後には、中国書法の本質に迫らんとする姿勢が窺え、これに学ぶことは、現代に生きる我々の書法学習にも有益だと思う。中国書法史で重要な役割を担う書人の書法を新たに意味づけることを本論の意義とし、今後の趙孟頫書法研究に新たな展開をもたらすことができるよう期待する。

【図1】本論における研究成果の概念図



・○数字は分期 ・点線は1点のみ ・波線は画期 ・Tは時間（年齢）

【表 1】伝称趙孟頫書法の偽作者

人名	生卒年	出身地	代表作品
呉全節	1269～1346	江西波陽	道教碑
俞和	1307～1382	浙江桐廬	漢汲黯伝
趙肅	不詳、14世紀に活躍	浙江湖州	元趙肅書母衛宜人墓誌
陳謙	不詳、明初に活躍	姑蘇	書雜詩
陸深	1477～1544	華亭	沛水行
金琮	1499～1501	南京	致民望札
詹僖	不詳、15世紀に活躍	浙江寧波	王彦明壽序
徐中行	1517～1578	浙江長興	行書後赤壁賦

参考文献

一、古籍法帖

- (唐) 清王琦注『李太白全集』中華書局、1977
- (宋) 周密『雲煙過眼錄』『百部叢書集成』所收、芸文印書館、1968 年
- (元) 鮮于樞『困學齋雜錄』『叢書集成簡編』所收、芸文印書館、1966 年
- (元) 趙孟頫『松雪齋文集』台灣學生書局、1970 年
- (元) 鄧文原『巴西集』『景印文淵閣四庫全書』所收、台灣商務印書館、1983 年
- (元) 虞集『道元學古錄』『國學基本叢書四百種』所收、台灣商務印書館、1968 年
- (元) 夏文彥『圖繪寶鑑』『百部叢書集成』所收、芸文印書館、1966 年
- (元) 袁桷『清容居士集』『文津閣四庫全書』所收、商務印書館、2006 年
- (元) 孔齊『至正直記』2、中華書局、1991 年
- (明) 黃潛『金華黃先生文集』『四部叢刊初編』所收、1965 年
- (明) 羅月霞主編、宋濂『宋濂全集』浙江古籍出版社、1999 年
- (明) 宋濂等撰『元史』中華書局、1976 年
- (明) 陶宗儀『書史會要』『國家圖書館藏古籍藝術類編』所收、北京圖書館出版社、2004 年
- (明) 陶宗儀『輟耕錄』『叢書集成初編』所收、商務印書館、1936 年
- (明) 張丑『清河書畫舫』『國家圖書館藏古籍藝術類編』所收、北京圖書館出版社、2004 年
- (明) 張丑『清河秘篋書畫表』劉晚榮輯『述古叢鈔』所收、劉氏藏修書屋刊、1879 年

(明) 張丑『真跡日錄』『景印文淵閣四庫全書』所收、台灣商務印書館、1983年

(明) 李日華『恬致堂集』『明代藝術家集彙刊統集』所收、國立中央圖書館、1971年

(清) 倪濤『六芸之一錄』(『景印文淵閣四庫全書』所收、台灣商務印書館、1983年

(清) 孫鑛『書畫跋跋』『國家圖書館藏古籍藝術類編』所收、北京圖書館出版社、2004年

(清) 安岐『墨緣彙觀』『國家圖書館藏古籍藝術類編』所收、北京圖書館出版社、2004年

(清) 吳榮光『辛丑消夏記』『藝術賞鑑選珍』所收、漢華文化事業、1971年

(清) 吳升『大觀錄』『藝術賞鑑選珍』所收、國立中央圖書館、1970年

(清) 阮元『石渠隨筆』『筆記統編』所收、廣文書局、1969年

(清) 卞永譽『書畫彙考』『四庫全書珍本』所收、商務印書館、1976年

(清) 王原祁『佩文齋書畫譜』北京市中國書店、1984年

(清) 錢泳『履園叢話』『筆記統編』所收、廣文書局、1969年

(清) 崇彝『選學齋書畫寓目筆記』『歷代書畫錄統編』所收、國家圖書館出版社、2010年

中華大藏經編輯局編『中華大藏經』北京中華書局、1984年

(清) 梁清標《秋碧堂帖》(銀山莊珍藏本)、個人藏

(清) (刻者不詳)《寶雪齋趙帖》、個人藏

(清) 姚士斌、姚學經輯刻《清華齋趙帖》、個人藏

(時代、刻者不詳) 趙孟頫書《頭陀寺碑》帖、個人藏

(時代、刻者不詳) 趙孟頫書《大雨賦》帖、韓國國立中央圖書館藏

(時代、刻者不詳) 趙孟頫書《豳風七月贊》帖、韓國國立中央圖書館藏

(時代、刻者不詳) 趙孟頫《臨王羲之蘭亭序》帖《趙子昂書帖》所收、韓國
國立中央圖書館藏

二、字典辭典

書譜出版社編『中国書法大辭典』書譜出版社、1984 年

俞劍華編『中国美術家人名辭典』文史哲出版社、1987 年

劉正成主編『中国書法鑑賞大辭典』大地出版社、1989 年

春名好重等編著『書道基本用語詞典』中教出版、1991 年

北川博邦『章草大字典』雄山閣、1994 年

尚學圖書・言語研究所編集『國語大辭典』新裝版、小学館、1995 年

北京・商務印書館、小学館共同編集『中日辭典』小学館、1996 年

邱樹森主編『元史辭典』山東教育出版社、2002 年

余德泉、孟成英『章草大典』中州古籍出版社、2003 年

小川環樹等編『角川新字源』改訂版、角川書店、2004 年

中西慶爾編『中国書道辭典』第 2 版、木耳社、2004 年

鄭聰明『趙孟頫字典』蕙風堂、2006 年

湖北美術出版社編『趙孟頫書法字典』湖北美術出版社、2006 年

西林昭一『中国書道文化辭典』柳原出版、2009 年

禡効鋒『趙孟頫書法字典』吉林文史出版社、2013 年

三、期刊論文

外山軍治「趙孟頫の研究」『書道全集』17、平凡社、1956 年

王方宇「記大風堂藏趙孟頫九歌書畫冊」『芸壇』105、芸壇雜誌社、
1976 年

- 姜一涵「趙孟頫書湖州妙嚴寺」『故宮季刊』10、國立故宮博物院、1976 年
- 鄭瑤錫「趙孟頫的楷書及其書法對後人的影響」『藝術家』26、藝術家雜誌社、1977 年
- 張光賓「辨趙孟頫書急就章冊為愈和臨本一兼述愈和生平及其書法」『故宮季刊』12、國立故宮博物院、1978 年
- 高居翰著、顏娟英譯「錢選與趙孟頫」『故宮季刊』12 卷 4 期、國立故宮博物院、1978 年
- 李鑄晉「趙孟頫之研究」『故宮季刊』16、國立故宮博物院、1981 年
- 西川寧「元朝の書」『定本書道全集』10、名著普及會、1981 年
- 傅申「元代前期の書法」『歐米收藏中國名蹟集』3、中央公論社、1981 年
- 王連起「傳世趙孟頫書道教碑真偽考」『文物』6、文物出版社、1983 年
- 王連起「趙孟頫為妻代筆」『紫禁城』1、紫禁城出版社、1984 年
- 王連起「趙孟頫臨跋〈蘭亭序〉考」『故宮博物院院刊』1、文物出版社、1985 年
- 王連起「趙孟頫臨跋〈蘭亭序〉考（續）」『故宮博物院院刊』2、文物出版社、1985 年
- 金鑑才「松雪道人趙孟頫」『書譜』64、書譜出版社、1985 年
- 駱恒光「趙字賞析」『書譜』64、書譜出版社、1985 年
- 張光賓「愈和書樂毅論與趙孟頫書漢汲黯傳」『國立歷史博物館館刊』2、國立歷史博物館、1986 年
- 王連起「從〈方外交疏〉看趙孟頫晚年書法藝術」『書法叢刊』1、文物出版社、1989 年
- 孫克讓「元趙孟頫致張景亮書札考」『文物』9、文物出版社、1990 年

- 王連起「鮮于樞和他的書法藝術」『文物』9、文物出版社、1990年
- 徐暢「論東漢書法的勃興」『漢碑研究』、齊魯書社、1990年
- 王連起「俞和及其行書《蘭亭記》」『書法叢刊』28、文物出版社、1991年
- 王連起「趙孟頫《天冠山詩》帖考辨」『文物』8、文物出版社、1991年
- 王連起「快雪堂法書帖考」『故宮博物院院刊』4、紫禁城出版社、1991年
- 西川寧「唐臨趙補·右軍二帖卷」『西川寧著作集』2、二玄社、1991年
- 西川寧「趙子昂の二群の尺牘」『西川寧著作集』2、二玄社、1991年
- 王連起「趙孟頫《偽書叢考》」『書法叢刊』4、文物出版社、1992年
- 李國強「趙書元版《圓覺經》刊刻經過」『文物』4、文物出版社、1992年
- 劉建華「趙孟頫書《蔚州楊氏先塋碑銘》考」『文物春秋』2、文物春秋雜誌社、1992年
- 陳耀林「收藏家梁清標」『古園』、正定古文化研究会、1993年
- 浙江省書法家協會編『趙孟頫國際書學研究会論文集』、上海書店、1994年
- 馬大東「圓活遒媚 溫妍儒雅—趙孟頫《高上大洞玉經》卷與二王書法傳統美的衰竭」『書法叢刊』3、文物出版社、1994年
- 趙志成「元代畫家趙雍的生卒年及相關問題」『文物』1、文物出版社、1994年
- 上海書畫出版社編『趙孟頫研究論文集』、上海書畫出版社、1995年
- 福田哲之「趙孟頫本『急就篇』考」『書學書道史研究』5、書學書道史學會、1995年
- 徐邦達「趙孟頫《二贊·二詩帖》」『書法叢刊』3、文物出版社、1995年
- 王連起「趙孟頫《與季宗源札》攷」『書法叢刊』3、文物出版社、1995年
- 余方德「趙孟頫的故居和別業」『歷史月刊』104、國立歷史博物館、1996年
- 蕭吟「趙孟頫的兩件墨蹟」『書法叢刊』1、文物出版社、1996年
- 王連起「再談趙孟頫書法的真偽問題」『書法』4、上海書畫出版社、1996年

胡懿勳「元代趙孟頫作「鬥茶圖」画題与画意之商榷」『国立歴史博物館学報』7、国立歴史博物館、1997年

楊立言「趙孟頫的書法成就及他的《胆巴碑》」『陝西教育学院学報』3、陝西教育學院、1997年

陳明華「從万卷堂看趙孟頫对高麗文人書画的影響」『美育』88、国立芸術教育館、1997年

沃興華「西北漢簡書法研究」『中国書法全集 秦漢簡牘帛書卷一』5、荣宝斋出版社、1997年

桜井智美「趙孟頫の活動とその背景」『東洋史研究』第56卷第4号、東洋史研究会、1998年

王耀庭「帝国的回憶」『故宮文物月刊』第16卷第6期、国立故宮博物院、1998年

单国强「趙孟頫小楷大乘妙法蓮華經卷」『清宮珍秘別藏圖錄』、倦勤齋芸術出版社、1999年

劉芳如「元趙孟頫〈調良圖〉」『故宮文物月刊』17、国立故宮博物院、1999年

王耀庭「元趙孟頫〈行書赤壁二賦〉」『故宮文物月刊』17、国立故宮博物院、1999年

新亞「名跡擷英—趙孟頫陋室銘」『書友』148、書友雜誌社、1999年

劉九庵「趙孟頫書法叢考」『劉九庵書画鑑定集』、河南美術出版社、1999年

劉九庵「書画題款的作偽与識別」『劉九庵書画鑑定集』、河南美術出版社、1999年

楊新主編『中国歷代書画鑑別文集』紫禁城出版社、2000年

章炳炎主編『趙孟頫研究』1、湖州市趙孟頫研究会、2000年

- 宮坂直樹「法帖と秋碧堂法書」『季刊書道ジャーナル』61、季刊書道ジャーナル研究所、2000 年
- 穆棣「懷素「論書帖」中張晏、趙孟頫二跋歸屬溯源」『故宮學術季刊』18、國立故宮博物院、2000 年
- 啓功「《平復帖》說並積文」『啓功叢稿』論文卷、中華書局、1999 年
- 啓功「元人謄錄《趙府君阡表》趙孟頫改削本」『啓功叢稿』題跋卷、中華書局、2000 年
- 浙江省博物館編『中国書法史学國際學術研討會論文集』西泠印社、2000 年
- 白謙慎「雜書卷冊和晚明文化生活」『書法叢刊』63、文物出版社、2000 年
- 王連起「元〈樂善堂帖〉考略」『故宮博物院院刊』5、北京故宮博物院、2001 年
- 石守謙「衝突与交融：蒙元多族士人圈中的書画芸術」『大汗的世紀 蒙元時代的多元文化与芸術』、國立故宮博物院、2001 年
- 蕭啟慶「蒙元統治与中国文化發展」『大汗的世紀 蒙元時代的多元文化与芸術』、國立故宮博物院、2001 年
- 楚默「元代書法的復興与新變」『中国書法全集 元代名家』47、榮寶齋出版社、2001 年
- 王運天「卷内卷外談—讀唐寅《黃茅渚小景卷》而想起」『上海博物館集刊』9、上海書画出版社、2002 年
- 富田淳「宋元書蹟題跋輯錄」『東京国立博物館紀要』37、東京国立博物館、2002 年
- 王連起「趙孟頫行書〈洛神賦〉真偽鑒考」『文物』8、上海書画出版社、2002 年
- 王連起「趙孟頫的名号款印与鑒定問題」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、榮寶齋出版社、2002 年

黃惇「從杭州到大都—趙孟頫書法評伝」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、榮寶齋出版社、2002 年

單國強「趙孟頫信札初編」『中国書法全集 元代 趙孟頫一』43、榮寶齋出版社、2002 年

方聞「中国の書—理論と歴史」『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』、読売新聞社、2002 年

單國霖「趙孟頫的《閣帖》情結」『上海文博論叢』5、上海辭書出版社、2003 年

李一忱「章草、今草融合模式之源流」『中国書法』4、中国書法雜誌社、2005 年

肖燕翼「明清之際的骨董商—王越石」『古書畫史論鑑定文集』紫禁城出版社、2005 年。

何傳馨「趙孟頫的側影—院藏《七札》冊觀後」『故宮文物月刊』264、國立故宮博物院、2005 年

黃惇「趙孟頫書法研究二題」『書法研究』124、上海書畫出版社、2005 年

井上充幸「姜紹書と王越石—『韻石齋筆談』に見る明末清初の芸術市場と徽州商人の活動—」『東洋史研究』第 64 卷第 4 号、東洋史研究会、2006 年

祁慶富「趙孟頫書法東伝及朝鮮松雪體書芸」『民族研究文集・國際學術交流卷』中央民族大學出版社、2006 年

王麗瑄「明代小楷之書寫風氣」『東方人文学誌』5、文津出版社有限公司、2006 年

解小青「董其昌書法觀—兼論董其昌与趙孟頫之不同」『書法』203、上海書畫出版社、2006 年

馬國莉、房樹輝「趙孟頫書《聖主本命長生祝誕碑》」『文物春秋』5、文物春秋雜誌社、2007 年

沈白「從風格和筆法中去認定一趙孟頫書法作品的是與非」『文物天地』10、文物天地雜誌社、2007 年

游國慶「宋夢英集篆十八體書碑及其相關問題」『書畫藝術學刊』3、國立台灣藝術大學書畫藝術學系、2007 年

朱萬章「從三件書法看趙孟頫書風的分期」『文物天地』10、文物天地雜誌社、2007 年

許江、馬以主編『書畫為寄—趙孟頫國際學術研討會論文集』中國美術學院出版社、2007 年

許國平「秋碧堂考略」『書法叢刊』2、文物出版社、2007 年

王連起「王連起談趙孟頫與《酒德頌》」『紫禁城』4、紫禁城出版社、2007 年

解小青「趙孟頫書法藝術」『趙孟頫法書品珍』上海書畫出版社、2007 年

侯怡利「元趙孟頫書閑居賦」『故宮文物月刊』300、國立故宮博物院、2008 年

譚志湘「元代藝術的特色」『元代藝術與元代戲曲』國家出版社、2008 年

何佺馨「快雪時晴帖」『晉唐法書名蹟』國立故宮博物院、2008 年

何佺馨「書譜」『晉唐法書名蹟』國立故宮博物院、2008 年

陳菁「元趙孟頫楷書《仇鏐墓碑銘》卷考」『上海博物館集刊』11、上海書畫出版社、2008 年

萬木春「書畫的流通」『味水軒里的閑居者：萬曆末年嘉興的書畫世界』中國美術學院出版社、2008 年

上海博物館編『書畫經典國際學術研討會論文集』上海古籍出版社、2008 年

王靜靈「幻影或實像—佺董源〈江隄晚景圖〉在張大千畫業的位置」

『故宮文物月刊』303、國立故宮博物院、2008 年

董國強「王敬銘〈仿趙孟頫雲嶠長春圖〉卷賞析」『典藏古美術』

186、典藏藝術家庭股份有限公司、2008 年

- 陳建志「趙孟頫書《太上老君說常清靜經》の真偽について」『書芸術研究』第1号、筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2008年
- 何炎泉「中國古代之高麗紙」『中華文物學會2009慶祝學會三十週年特刊』中華文物學會出版社、2009年
- 方愛龍「元・趙孟頫等蕭山県学重建大成殿記碑」『杭州師範大学学報（社会科学版）』6、杭州師範大学、2009年
- 陳妍卉「元明間の白描淵明逸致図像一（伝）趙孟頫《画淵明帰去来辞》の筆法風格及淵明形象の承継初探」『芸術欣賞』国立台湾芸術大学、2009年
- 范景中「書籍之為芸術-趙孟頫の蔵書と汲黯伝」『考古と芸術の交匯 国際学術研究会論文集』中国美術学院出版社、2009年
- 陳昕「《淳化閣帖》中の章草法帖整理研究」『図書館工作と研究』171、天津図書館学会、2010年
- 下田章平「民国期における完顔景賢の書画碑帖の収蔵について」『中国近現代文化研究』11、中国近現代文化研究会、2010年
- 陳建志「元趙孟頫書〈禊帖源流〉卷賞析」『故宮文物月刊』329、国立故宮博物院、2010年
- 李遇春「嶺南名士羅天池」『嶺南考古研究』9、中国評論學術出版社、2010年
- 王波「略論章草与今草的結合」『中国書法』10、中国書法雜誌社、2010年
- 増田知之「明代書法史再考―「法帖」というメディアの獲得とその意義」『書道文化』6、四国大学書道文化学会、2010年
- 陳韻如「趙孟頫〈鵲華秋色〉」『故宮文物月刊』339、国立故宮博物院、2011年
- 弓野隆之「阿部房次郎」『中国書画探訪 関西の収蔵家とその名品』二玄社、2011年

王禕「黃公望題跋趙孟頫書法二則—簡談趙孟頫與黃公望之間的師承關係」『故宮文物月刊』338、國立故宮博物院、2011 年

許忠陵「三希堂法帖與趙孟頫行書襄陽歌卷」『中國碑帖與書法國際研討會論文集』香港中文大學文物館、2011 年

黃浩然、王照宇「趙孟頫的“蘭亭緣”及錫博本趙臨《蘭亭帖》」『中國國家博物館館刊』100、中國國家博物館館刊編集部、2011 年

陳建志「趙孟頫書〈三清殿記〉と〈三門記〉二稿の流伝史をめぐって」『書芸術研究』第 5 号、筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2012 年

陳建志「法帖所収の趙孟頫書法の編年研究—『宝雪齋趙帖』を中心に—」『芸術学研究』第 17 号、筑波大学人間総合科学研究科、2012 年

方慧潔「怵怵有觸—乾隆皇帝與鵲華秋色図」『故宮文物月刊』355、國立故宮博物院、2012 年

陳昕「《淳化閣帖》中的章草法帖整理研究補述」『圖書館工作與研究』192、天津圖書館學會、2012 年

談晟廣「再訪鵲華秋色」『故宮文物月刊』355、國立故宮博物院、2012 年

趙華「趙孟頫論枕臥帖小考與元初書畫收藏生態」『故宮文物月刊』354、國立故宮博物院、2012 年

陳建志「趙孟頫碑文書法について—《玄妙觀三清殿記》と《玄妙觀三門記》二稿を中心に—」『書學書道史研究』22、書學書道史學會、2012 年

王連起「小楷真跡妙法蓮華經考」『灋迹—觀遠山莊珍藏法書選』Asian Art Museum、2012 年

陳建志「趙孟頫の草書の一側面について—行草書における章草体の混用表現を中心に—」『書芸術研究』第 6 号、筑波大学人間総合科学研究科書研究室、2013 年

尤世荻主編『元明書法國際學術討論會論文集』、明道大学人文学院国学研究所、2013 年

劉恒、謝有才主編『蘭亭國際書法學術研討會論文集』浙江工商大学出版社、2011 年

四、學位論文

潘仕屏『元趙孟頫書畫研究』馬來亞大学中文系學士論文、1982 年

金炳基『趙孟頫詩與書法之研究』文化大学中国文学研究所修士論文、1982 年

戴麗珠『趙孟頫文学与藝術之研究』国立台湾師範大学国文研究所博士論文、1986 年

石具成『趙孟頫書法東傳及朝鮮松雪体研究』中央民族大学博士論文、2001 年

張淑喜『趙孟頫書法藝術研究』台北市立師範学院応用語言文学研究所修士論文、2003 年

蕭毓謙『書法鑑定方法研究—以趙孟頫作品為例』台南芸術学院藝術史与藝術評論研究所修士論文、2004 年

張月慶『元代章草三家之研究』屏東師範学院視覺藝術教育学系修士論文、2004 年

陳建仁『鮮于樞書法藝術研究』国立屏東教育大学視覺藝術教育学系修士論文、2006 年

鄭怡雯『趙孟頫楷行書及其教学之研究』高雄師範大学国文教学修士論文、2006 年

吳立政『元代書法風格研究』台北市立教育大学中国語文学系修士論文、2007 年

王幼芳『趙孟頫楷書之教学研究—以《玄妙觀重修三門記》為例』国立台湾師範大学国文学系修士論文、2008 年

王浚湧『趙孟頫尺牘及其書法研究』台北市立教育大學中國語文學系碩士論文、2008 年

林榮森『章草書法研究』逢甲大學中國文學系博士論文、2010 年

五、專著圖錄

卓定謀『章草考』大慈商店、1930 年

『趙孟頫七札』北平故宮博物院、1933 年

中村丙午郎編『趙子昂書送李愿歸盤谷序』孔固亭真蹟法書刊行會、1934 年

王以堃『故宮已佚書畫聞見目』出版社不明、1953 年

陳仁濤『故宮已佚書畫目校註』東南書局、1956 年

『中華叢書 趙孟頫孝經圖卷』中華叢書委員會、1956 年

『趙松雪墨寶』廣益書局、1958 年

伏見沖敬『書の歴史』中國篇、二玄社、1960 年

西川寧・神田喜一郎監修『書跡名品叢刊 元趙子昂・蘭亭十三跋』56、二玄社、1961 年

『元趙孟頫洞庭東山圖』朵雲軒、1961 年

西川寧・神田喜一郎監修『書跡名品叢刊 仇鑄墓碑銘』3、二玄社、1962 年

北京中國書法研究社編『趙孟頫書三門記』人民美術出版社、1962 年

陳垣『史諱舉例』中華書局、1962 年

『元趙孟頫書煙江疊嶂詩』文物出版社、1962 年

西川寧・神田喜一郎監修『書跡名品叢刊 元趙子昂仇鑄墓碑銘』82、二玄社、1962 年

『太上無極混元一炁度人妙經：趙孟頫楷書真蹟』自由出版社、1963 年

蘭亭墨迹匯編編輯委員會編『元趙孟頫臨定武本蘭亭序』北京出版社、1964 年

林光澂、陳捷編『中國度量衡』台灣商務印書館股份有限公司、1967 年

国立故宮博物院編『元趙孟頫書蘇軾詩』国立故宮博物院、1968 年

王雲五主編『国学基本叢書四百種』台湾商務印書館、1968 年

伏見冲敬『書の歴史』10、二玄社、1971 年

『趙松雪書膽巴碑真蹟』漢華出版社、1971 年

藤原楚水『図解書道史』全 6 卷、1971 年～1973 年

中田勇次郎責任編集『書道芸術 張即之・趙孟頫』7、中央公論社、1972 年

『元趙文敏九歌書画冊』学海出版社、1973 年

中田勇次郎編『中国書人伝』中央公論社、1973 年

外山軍治『中国の書と人』創元社、1973 年

黄賓虹、鄧実編『美術叢書』8、芸文印書館、1975 年

『書道芸術 張即之・趙孟頫』7、中央公論社、1976 年

『趙孟頫孝經図卷』華貿出版、1977 年

国立故宮博物院編輯委員会編輯『故宮歷代法書全集』14、国立故宮博物院、1978 年

国立故宮博物院編輯委員会編輯『故宮歷代法書全集』15、国立故宮博物院、1978 年

『混元一炁經』中国子学名著集成編印基金会、1978 年

外山軍治『書道全集 元・明 I』17、平凡社、1978 年

中国書蹟名品展実行委員会編集『中国書蹟名品展』毎日新聞社・五島美術館、1978 年

陸峻嶺編『元人文集篇目分類索引』中華書局、2002 年

上海書画出版社編『歷代法書萃英 元趙孟頫書仇鏐墓碑銘』上海書画出版社、1979 年

東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録』中国書跡篇、東京美術、1980 年

- 『趙孟頫廬山草堂記』 湘江出版社、1980 年
- 『元趙孟頫書千字文』 文物出版社、1980 年
- 『元趙孟頫書統千字文』 12、文物出版社、1980 年
- 『元趙孟頫書高峰禪師行狀』 13、文物出版社、1980 年
- 陳高華編著『元代画家史料』 上海人民美術出版社、1980 年
- 『歷代碑帖法書選 六体千字文』 文物出版社、1981 年
- 中田勇次郎・傅申『欧美收藏中国法書名蹟集』 3、中央公論社、1981 年
- 王德毅等編『元人伝記資料索引』 新文豐出版公司、1982 年
- 中田勇次郎編著『中国書論大系 元 I』 7、二玄社、1982 年
- 『元趙孟頫書般若波羅密多心經』 文物出版社、1982 年
- 『元趙孟頫行書歸去來辭卷』 文物出版社、1982 年
- 『趙松雪淨土詞墨寶』 湘江出版社、1982 年
- 『趙孟頫東嶽行宮記』 湘江出版社、1982 年
- 国立故宮博物院編纂委員会編纂『故宮法書 元趙孟頫墨蹟』 16、国立故宮博物院、1982 年
- 歷代碑帖法書選編輯組編『故宮博物院藏歷代碑帖法書選』 18、文物出版社、1982 年
- 朱秀坤責任編集『趙子昂北隴耕雲書卷石刻』 安徽人民出版社出版、1983 年
- 張彥生『善本碑帖錄』 中華書局、1984 年
- 馬宗霍『書林藻鑑』 文物出版社、1984 年
- 任道斌『趙孟頫系年』 河南人民出版社、1984 年
- 鄭銀淑『項元汴之書画收藏与芸術』 文史哲出版社、1984 年
- 宇野雪村『法帖事典』 上・下、雄山閣、1984 年
- 『章草兩種：漢史游急就章、趙孟頫千字文』 時代生活雜誌社、1984 年
- 『元趙孟頫書洛神賦』 文物出版社、1984 年

王壯弘『碑帖鑑別常識』上海書畫出版社、1985 年

『天冠山詩帖』中國書店、1985 年

『張伯駒潘素書畫集』人民美術出版社、1985 年

張珩・謝稚柳・羅福頤・啓功著、今井凌雪・中村伸夫訳『書畫鑑定のてびき』
二玄社、1985 年

中田勇次郎『中田勇次郎著作集』二玄社、1985 年

林志均『帖考』華正書局、1985 年

任道斌校点『趙孟頫集』浙江古籍出版社、1986 年

戴麗珠『趙孟頫文学与芸術研究』学海出版社、1986 年

『趙孟頫小楷道德經真蹟』上海書畫出版社、1986 年

『趙孟頫書道教碑』天津市古籍書店、1986 年

楊美莉、趙鉄銘主編『中華五千年文物集刊』法書篇 8、中華五千年文物集刊
編輯委員会、1986 年

『趙文敏書琴賦真跡』天津市古籍書店、1987 年

傅申著、葛鴻禎訳、賀哈定校『海外書蹟研究』紫禁城出版社、1987 年

上海博物館編『中国書畫家印鑑款識』上・下、文物出版社、1987 年

王壯弘編『帖学挙要』上海書畫出版社、1987 年

大和文華館編『大和文華所蔵品図版目録 絵画・書跡[中国・朝鮮篇]』8、大
和文華館、1988 年

国立故宮博物院編『王雪艇先生続存文物図録』国立故宮博物院、1988 年

森素香訳『精萃図説書法論』4、西東書房、1988 年

国立故宮博物院編輯委員会編輯『淵明逸致特展図録』国立故宮博物院、1988
年

呉大澂『鐘鼎籀篆大観』華正書局、1989 年

『中国法書ガイド 趙孟頫集』49、二玄社、1989 年

大野修作等編『中国法書選 趙孟頫集』49、二玄社、1989 年

桃山草介『書聖名品選集 15 趙子昂』株式会社マール社、1989 年

中国社会科学出版社編『中国民族古文字図録』中国社会科学出版社、1990 年

徐暢『漢碑研究』齊魯書社、1990 年

北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』中州古籍出版社、1990 年

陳振濂『歴代書法欣賞』、蕙風堂、1991 年

張光賓『最美的文字』国立故宮博物院、1991 年

西川寧『西川寧著作集』2、二玄社、1991 年

李綱、趙宝琴主編『翰香館法書』山西人民出版社、1991 年

吉田良次著、吉田實編『趙子昂 人と芸術』二玄社、1991 年

澤田雅弘執筆『ビジュアル書芸術全集』8、雄山閣、1992 年

『書基本資料 中国の書の歴史』3、中教出版、1992 年

『書基本資料 漢字の書の美』9、中教出版、1992 年

『趙孟頫行書』中国書籍出版社、1992 年

顧鴻、于洁編輯『歴代名家行書字帖 趙孟頫行書習字帖』中国工人出版社、1992 年

河本鶴翠等著『書学大系 碑法帖篇 趙孟頫』13、同朋舎、1992 年

徐自強主編『北京図書館蔵北京石刻拓片目録』書目文献出版社、1994 年

『墨スペシャル 碑法帖・拓本入門』21、芸術新聞社、1994 年

陳方既、雷志雄著『中国書法美学史』河南美術出版社、1994 年

曾憲通編選『容庚選集』天津人民出版社、1994 年

『趙孟頫行書至宝』国際文化出版公司、1995 年

上海書画出版社編集『趙孟頫画集』上海書画出版社、1995 年

国立故宮博物院編纂『般若波羅蜜心經』巨龍出版社、1995 年

王連起、郭斌編『趙孟頫墨迹大觀』上・下、上海人民美術出版社、1995 年

傅申『書史与書跡—傅申書法論文集』1、国立歴史博物館、1996 年

文徵明撰集『影印明拓停雲館法帖』上・下、北京出版社、1996 年

『墨スペシャル 中国書道史の 10 人』28、芸術新聞社、1996 年

藤島達朗・野上俊静編『東方年表』平楽寺書店、1996 年

徐利明『中国書法風格史』河南美術出版社、1997 年

劉九庵『劉九庵書画鑑定集』河南美術出版社、1997 年

徐邦達『重定清故宮旧藏書画録』北京人民美術出版社、1997 年

朱家潛主編『歷代著録法書目』紫禁城出版社、1997 年

劉九庵編『宋元明清書画家伝世作品年表』上海書画出版社、1997 年

鮑賢倫『歷代草書技法通講』上海書画出版社、1998 年

『(元) 趙孟頫書樂善堂帖』北京図書館出版社、1998 年

胡海峰等編『北京大学図書館蔵金石拓本菁華』文物出版社、1998 年

劉欣耕編『歷代草書技法通講』上海書画出版社、1998 年

楊仁愷『楊仁愷書画鑑定集』河南美術出版社、1999 年

楊仁愷『国宝沈浮録：故宮散佚書画見聞考略』(増訂本)、遼寧海出版社、1999 年

熊秉明『中国書法理論体系』雄獅図書股份有限公司、1999 年

啓功『啓功叢稿』論文卷、中華書局、1999 年

西林昭一『書の文化史』上・中・下、二玄社、1999 年

大阪市立美術館編『海を渡った中国の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』読売新聞社、2000 年

王政松『清宮珍秘別蔵図録』倦勤斎芸術出版社、1999 年

『趙松雪道德經陰符經小楷』天山出版社、2000 年

『趙孟頫光福重建塔記』上海書画出版社、2000 年

陳驥龍選編『元代書札選萃 趙孟頫、管道昇』天津人民美術出版社、2000 年

『中国碑帖經典 趙孟頫光福重建塔記』10、上海書畫出版社、2000 年

『中国碑帖經典 趙孟頫真草千字文』10、上海書畫出版社、2000 年

『中国碑帖經典 趙孟頫妙嚴寺記』10、上海書畫出版社、2000 年

楊仁愷『中国書畫鑑定學稿』遼海出版社、2000 年

劉正成主編『中国書法全集 明 文徵明』50、榮寶齋出版社、2000 年

上海市松江区史志編纂委員會辦公室『趙孟頫書法』上海社會科學院出版社、2000 年

蔡宜璇主編『悅目：中國晚期書畫』石頭出版社、2001 年

『金剛經小楷』天山出版社、2001 年

吳鴻鵬編『書法入門講座 元趙孟頫楷書 趙孟頫膽巴碑入門』11、蕙風堂、2001 年

王連起主編『故宮博物院藏文物珍品大系 元代書法』上海科學技術出版社、2001 年

肖燕翼主編『故宮博物院藏文物珍品大系 明代書法』上海科學技術出版社、2001 年

石守謙主編『大汗的世紀 蒙元時代的多元文化與藝術』國立故宮博物院、2001 年

啓功主編『大觀太清樓帖 宋拓真本』合裝本、文物出版社、2001 年

臧克和、王平校訂『說文解字新訂』8、中華書局、2002 年

靜嘉堂文庫美術館編『靜嘉堂宋元叢書』靜嘉堂文庫美術館、2002 年

財團法人東洋文庫編『東洋文庫所藏中國石刻拓本目錄』財團法人東洋文庫、2002 年

中砂明德『江南 中國文雅の源流』講談社、2002 年

楊文濤主編『中国法書精萃 天下三大行書』浙江人民美術出版社、2002 年

黃惇『中國書法史 元明卷』江蘇出版社、2002 年

劉正成主編『中國法書全集 元 趙孟頫』43・44、榮寶齋出版社、2002 年

王平『畫家書法』中國美術學院出版社、2002 年

戴立強編著『中國書法家全集 鮮于樞』河北教育出版社、2003 年

上海博物館編『上海博物館藏書法積文選』上海人民美術出版社、2003 年

王建『中國古代避諱史』貴州人民出版社、2003 年

上海博物館編『淳化閣帖最善本』上海書畫出版社、2003 年

邱振中『筆法與章法』上海書畫出版社、2003 年

李鑄晉『鵲華秋色 趙孟頫的生平與畫藝』石頭出版社、2003 年

許洪流、劉遠山主編『中國法書精華 趙孟頫洛神賦』浙江人民美術出版社、2003 年

許洪流、劉遠山主編『中國法書精華 趙孟頫為隆教禪師寺石室長老疏』浙江人民美術出版社、2003 年

陳靜琪『元趙孟頫行草書之美學研究』高雄復文圖書出版社、2003 年

馬琳編『書藝珍品賞析 元代系列 趙孟頫』石頭出版股份有限公司、2004 年

周斌編『趙體唐詩字帖』上海人民美術出版社、2004 年

河內利治『書法美學の研究』汲古書院、2004 年

王乃棟編『中國書法墨跡鑑定圖典』文物出版社、2004 年

趙維江『文人情侶叢書—趙孟頫與管道升』中華書局、2004 年

李廷華『中國名畫家全集 趙孟頫』河北教育出版社、2004 年

傅申『書史與書跡—傅申書法論文集』2、國立歷史博物館、2004 年

傅申『書法鑑定兼懷素自敘帖臨床診斷』典藏藝術家庭股份有限公司、2004 年

葛鴻楨『論吳門書派』榮寶齋出版社、2005 年

徐邦達集『徐邦達集 古書畫鑑定概論』1、紫禁城出版社、2005 年

李維琨『趙孟頫與吳興畫派』山東美術出版社、2005 年

三井記念美術館編『聴氷閣旧蔵碑拓名帖撰一新町三井家一』第二刷、財団法人三井文庫・三井記念美術館、2005 年

(独) 勞悟達著、畢斐・殷凌雲・樓森華訳『禪師中峰明本の書法』中国美術学院出版社、2006 年

張伯英書、張濟和主編『張伯英碑帖論考』河北教育出版社、2006 年

劉文君編『樂善堂帖』天津古籍出版社、2006 年

郭豫斌主編『趙孟頫伝世書法賞析』北京出版社、2006 年

季琳主編『趙孟頫楷書部首一百法』浙江古籍出版社、2006 年

季琳主編『趙孟頫行書部首一百法』浙江古籍出版社、2006 年

李鑫華編『趙體楷書解析』中国書店、2006 年

施志偉編『趙孟頫楷書入門』上海交通大学出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 帝師膽巴碑』1、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 玄妙觀重修三門記』2、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 故総管張公墓志銘』3、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 烟江疊嶂図詩』4、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 嵇叔夜与山巨源絶交書』5、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 帰去来辭・出師表』6、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 洛神賦・秋興賦』7、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 續千字文・黄庭経』8、吉林文史出版社、2006 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 秋与八首(選四首)』9、吉林文史出版社、2006 年

角井博(解説)大野修作(釈文)『故宮法書選 前後赤壁賦・間居賦・尺牘 : 元』8、二玄社、2006 年

劉小晴『中国書学技法評注』上海書画出版社、2006 年

岑其編著『趙孟頫研究』西泠印社出版社、2006 年

陳云琴『松雪齋主一趙孟頫伝』浙江人民出版社、2006 年

王学仲『書学舉要』新世界出版社、2006 年

沈尹默『学書有法—沈尹默講書法』中華書局、2006 年

叶子『中国古代書画鑑定』上海人民美術出版社、2006 年

徐邦達集『徐邦達集 古書画過眼要録』5、紫禁城出版社、2006 年

東京国立博物館・朝日新聞社編『書の至宝 日本と中国』朝日新聞社、2006 年

釈有晃『元代中峰明本禪師之研究』法鼓文化、2007 年

柴培良、趙雁君主編『帰去来兮—趙孟頫書画珍品回家展特集』西泠印社、2007 年

薛海洋、陳輝編『趙孟頫吳興賦』河南美術出版社、2007 年

薛海洋編『趙孟頫閑居賦』河南美術出版社、2007 年

薛海洋編『趙孟頫前後赤壁賦』河南美術出版社、2007 年

解小青編撰『趙孟頫法書品珍』上海書画出版社、2007 年

趙孟頫書画集編輯委員会編『趙孟頫書画集』、中華書局、2007 年

鈴木洋保、弓野隆之、菅野智明編『中国書人名鑑』二玄社、2007 年

孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 朱子感与詩・心經』13、吉林文史出版社、2007 年

房弘毅書、鄒方程注釈『趙孟頫松雪齋書論』中国書店 2007 年

- 河田悌一『書の風景一書と人と中国と一』二玄社、2007 年
- 劉金庫『南画北渡—清代書画鑑蔵中心研究』石頭出版股份有限公司、2007 年
- 白立猷編『趙孟頫小楷漢汲黯伝』河南美術出版社、2008 年
- 孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 草書千字文』20、吉林文史出版社、2008 年
- 孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 光福重建塔記』21、吉林文史出版社、2008 年
- 孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 送秦少章序』22、吉林文史出版社、2008 年
- 孫宝文『趙孟頫墨跡精品選 遠遊』23、吉林文史出版社、2008 年
- 孫宝文『趙孟頫墨跡精品選 晚年歡曲・酒德頌』24、吉林文史出版社、2008 年
- 孫宝文編『趙孟頫墨跡精品選 致中峰明本尺牘十一札』25、吉林文史出版社、2008 年
- 王連起編『故宮珍藏歷代名家墨跡 元趙孟頫淮雲院記』紫禁城出版社、2008 年
- 王連起編『故宮珍藏歷代名家墨跡 趙孟頫真草千字文』紫禁城出版社、2008 年
- 王連起編『故宮珍藏歷代名家墨跡 趙孟頫淮雲院記』紫禁城出版社、2008 年
- 王連起編『故宮珍藏歷代名家墨跡 趙孟頫帝師膽巴碑』紫禁城出版社、2008 年
- 王連起編『故宮珍藏歷代名家墨跡 趙孟頫二贊二詩』紫禁城出版社、2008 年
- 白立猷、陳培站主編『鮮于樞書法精選』河南美術出版社、2008 年
- 施安昌主編『故宮博物院蔵文物珍品大系 名帖善本』香港・商務印書館、2008 年
- 西林昭一、富田淳等編集『北京故宮 書の名品展』毎日新聞社・NHK・NHK プロモーション、2008 年
- 高明一『中国書法簡明史』雄獅圖書股份有限公司、2009 年

黄啓江『泗州大聖与松雪道人—宋元社会菁英的仏教信仰与仏教文化』台湾学生書局有限公司、2009年

沃興華『中国書法史』湖南美術出版社、2009年

角井博主編『中国書道史 決定版』芸術新聞社、2009年

方波『宋元明時期崇王觀念研究』南方出版社、2009年

張国宏『趙孟頫書法芸術』上海大学出版社、2009年

『細川家の至宝：珠玉の永青文庫コレクション』NHK・NHK プロモーション、2010年

井垣清明等編著『書の総合事典』柏書房、2010年

張光賓『元四大家年表』国立台湾大学芸術史研究所、2010年

何伝馨主編『故宮法書新編 晋王羲之墨蹟』1、国立故宮博物院、2010年

上海博物館編『蘭亭』北京大学出版社、2011年

李舒『芸術巨匠 趙孟頫』河北教育出版社、2011年

Shane McCausland. *Zhao Mengfu: Calligraphy and Painting for Khubilai's China*. Hong Kong: Hong Kong University Press, 2011.

『Out of character : decoding Chinese calligraphy/瀟迹 觀遠山莊珍藏法書選』、Asian Art Museum、2012年

何伝馨主編『山水合璧 黄公望与富春山居図特展』国立故宮博物院、2011年

横田恭三『中国古代簡牘のすべて』二玄社、2012年

東京国立博物館等編集『日中国交正常化 40 周年・東京国立博物館 140 周年特別展 北京故宮博物院 200 選』朝日新聞社・NHK・NHK プロモーション、2012年

東京国立博物館等編集『日中国交正常化 40 周年・東京国立博物館 140 周年特別展 書聖王羲之』毎日新聞社・NHK・NHK プロモーション、2013年

謝 辞

本論を執筆したこの三年間、日本と台湾の多くの方々よりご指導と激励を賜りました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

財団法人日本交流協会からの二年間に渡る奨学金のご援助がなければ、博士後期課程に進学することはありませんでした。当時推薦状を書いてくださった何伝馨先生（現 国立故宫博物院副院長）、于乃明先生（現 政治大学外国語学院院长）に深く御礼申し上げます。

交換留学生時代よりお世話になっている杏林大学の小山三郎先生にも多大なるご指導をいただきました。先生の助言がなければ、日本留学はもちろん、様々な苦難を乗り越えることもできなかったろうと思います。

筑波大学大学院の岡崎昭夫教授には、副査として本論文をご精読いただき、非常に有益なご指導を賜りました。特に分期と画期の明確な定義の再検討から、簡略的でも趙孟頫の年譜、研究成果の概念図を作成せよとのご指導によって、本論は一層充実したものとなりました。

大妻女子大学文学部の松村茂樹教授には、副査としてご精読を賜りました。碑文書法と皇室や貴族、文人の関係などご指導を賜りました。本論では触れませんでした。中鋒と側筆の用筆法の視点から中国書道史における王羲之書法の重要性和趙孟頫書作の位置づけをご指摘下さったことは、大変意義深く、私にとってよい勉強になりました。

筑波大学大学院の中村伸夫教授には、指導教員としてご指導を賜り、副査として本論文をご精読いただきました。作品論における用筆と作品の関係、章節の再編成など、研究面のご指導だけでなく、作品制作時の姿勢、書作の見方についてもご教示を賜りました。

筑波大学大学院の森岡隆教授には、副指導教員としてご指導を賜りました。常に暖かく、親切なご助言を頂戴し、変体仮名の釈文についてのご指導、趙孟頫書作の図版から中国書道史に関する書物、作品集の図録までいただき、様々な面でご配慮を賜りました。

筑波大学大学院の菅野智明准教授には、主査としてご精読賜りました。検討不足の箇所をご指摘くださり、考察が行き詰った時には、学界の新しい研究発表を賜りました。本論における趙孟頫と鮮于枢の墨縁、作品の真偽鑑定に用いる基準作と準基準作、雑体書、二つの画期の波、法帖史の《宝雪斎趙帖》の位置づけなど、いつも新たな視点を与えてくださいました。先生の厳しいご指導がなければ三年間で学位を取得することは困難だったと思います。

また、国立故宮博物院書画処の先生方、学外でお世話になった先生方にも、進路相談や中国書法史の勉強を進める上で多くのご教示を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

本論全ての日本語を修正・添削してくださった遠藤寿美子先生、幾度となく手伝ってくれた書専攻の先輩・後輩の皆さん、同期の田村南海子さん、一年下の彫塑の劉治国君、韓国料理屋「辛」金様ご夫婦にも、深く御礼申し上げます。また、いつも静かに見守ってくれた家族、暖かく応援してくれた東京と台湾、韓国の親友たちにも心から感謝します。皆様のおかげで支障なく勉強することができ、日本での学生生活がより豊かなものになったと思っています。

今後も精進を続け、より精緻な考察ができるよう努めていきたいと思っています。ご指導、ご協力下さいました皆様に、改めて感謝申し上げます。

2014年3月 陳建志